

2024 年度

青山学院大学審査学位論文

指導教員 高木 光太郎 教授

陰謀論を生きる

－ブログ言説を対象としたアートネクサス理論に基づく

陰謀論言説の分析－

Living in a Conspiracy Theory

－Analysis of Conspiracy Theory Practices Based on Art

Nexus Theory for Blog Discourse－

2024 年 11 月

青山学院大学大学院

社会情報学研究科

大山 星馬

目次

1. 背景と目的	3
2. 先行研究	6
2.1 陰謀論の心理学研究における定義とその問題	6
2.2 陰謀論の定義	10
2.3 陰謀論的信念研究とその問題	11
2.4 内在へのアプローチ	17
2.5 アートネクサス理論	20
2.6 リサーチクエスション	25
3. 方法	26
3.1 調査方法	26
3.2 倫理的配慮	27
4. 結果と考察	29
4.1 研究対象の概要と概略	29
4.1.1 陰謀論言説の概要と特徴	29
4.1.2 「A の日記」を巡る展開の概略	33
4.2 陰謀論世界の萌芽期	36
4.3 陰謀論世界の確立期	45
4.3.1 インターネット文化の影響	45
4.3.2 予言と安倍晋三	47
4.4 動員期	59
4.4.1 循環する認識に内包されたメカニズム	59
4.4.2 効力的観測とインデックスの具体化	66
4.4.3 効力的観測を媒介した認識と実践の循環	68
4.5 続動員期	73
4.5.1 集団メール運動：アーティストとしての常連投稿者	73
4.5.2 相互行為可能な安倍	82
4.5.3 「A の日記」書籍化をめぐる集団的運動	88
4.6 境界的事例の検討	101
4.6.1 不測を回収する陰謀組織の意図	101
4.6.2 安倍の意図への矛盾する認識	107
5. 統合考察	111

5.1	結果の概要	111
5.2	結論：仮想的陰謀論実践に生きる	115
5.3	陰謀論とは何か	121
5.4	理論的貢献	127
5.4.1	陰謀論研究への貢献	127
5.4.2	プロジェクションサイエンスへの示唆	129
6	課題と展望	131
6.1	ディスコース研究	131
6.2	実験的研究	131
6.3	アイデンティティ研究	132
6.4	インプリケーション	133
7	文献	135

本論文は、筆者がこれまで発表してきた各論文にたいして加筆ならびに修正を施すことによって成立している。しかし、改めて問題を設定し、論文全体としての統一性をもたらすよう組み立て、データを新たに加えて分析していった。このため、原型をとどめていない部分もある。しかしながら、主に 2.5「アートネクサス理論」における分析視座の解説の初出は大山(2020)、また、3.「方法」における倫理的配慮の議論や、4.「結果と考察」における分析の一部の初出は大山(2024)である。

1. 背景と目的

1923 年 9 月 1 日午前 11 時 58 分、関東地方でマグニチュード 7.9 の地震が発生し、その混乱の中で、在日朝鮮人たちが暴動を企てているという流言が広まった。内務省ですら警察署に「混乱に乗じた朝鮮人が凶悪犯罪、暴動などを画策しているので注意すること」（中央防災会議, 2008）と下達する自体となり、その流言は流言にとどまらず、関東大虐殺に帰結した。そして、このような流言がなぜ広まるのかという問いのもと、心理学では流言研究が行われ、個人の特性や集団的に不安を共有する状況（e.g. 竹中, 2008）の影響が明らかにされてきた。

しかし、朝鮮人たちが暴動を企てているという流言が広まることと、実際に朝鮮人たちの虐殺が行われることには大きな距離がある。特定の朝鮮人たちが暴動を企てているという陰謀を事実として認識したからといって、そこから実際に朝鮮人たちを殺害しても良いと考えるようになったり、さらに自ら殺人の当事者になっていくとは考えられない。流言の拡散は朝鮮人虐殺の一因に過ぎない。さらに言えば、関東大震災が発生する直前、朝日新聞の朝刊に「怪朝鮮人 3 名捕らはる／陰謀団の一味か」という見出しがつけられた記事が掲載されていた（中央防災会議, 2006）。関東大震災という混乱が人々に不安をもたらし、流言が拡散される以前から、朝鮮人陰謀論がマスメディアで取り扱われていたのである。朝鮮人陰謀論自体は関東大震災が発生する以前から、既に多くの人に認識されていたと言える。

では、関東大震災以前から、朝鮮人陰謀論を報道される程度には確からしいものとして人々が認識すること自体が問題を引き起こさなかったのならば、関東大震災を契機として何が起きていたのかを理解する必要があるだろう。中央防災会議(2008)によれば、地震の影響による河川や井戸の水質の変容から生じた水の変色や魚の大量死を目撃した人々によって、この陰謀論は朝鮮人が井戸に毒物を混入しているという言説へと発展したことが明らかにされている。人々は朝鮮人にまつわる陰謀を、ただの言説として伝え聞くのみならず、水の変色といった身近で具体的な現象を通して、実際に朝鮮人によって行われた工作として体験していたのである。そのような状況から、朝鮮人たちの陰謀を疑っていた当時の警察の尋問によって死亡した朝鮮人の遺体が衆目のもとに放置されていたことで、人々に「朝鮮人殺害さしつかえなし」という認識が生じるに至ったとされている(後藤, 2023)。さらに、朝鮮人が「15 円 50 銭」の発音が不得意だとする当時の偏見により、発話能力に問題を抱えた多くの日本人や中国人たちが、殺害しても構わないと認識されるようになった「朝鮮人」とみなされ、大虐殺へと通じたのである(国際高麗学会日本支部『在日コリアン辞典』編集委員会, 2010)。つまり、自然現象や人々の行為など様々な要素が作用しあって、日本語の発話に問題のある「朝鮮人」が工作を行った結果が体験され、そのような「朝鮮人」の殺害が許容された世界が生成されていたのだと考えられるだろう。このような世界に人々が生きていくようになった結果が、関東大虐殺なのである。しかしながら、このような陰謀論ではな

くとも、我々はそもそも宗教やイデオロギーなど様々な信念の世界に生きる存在である。むしろ、そのような信念の一つとして陰謀論の世界があり、その陰謀論の世界に人々が生きようにならないければ陰謀論もただの言説にすぎず、流言も流言でしかない。したがって、関東大虐殺のような悲劇を防ぐためには、陰謀論の世界の中で人々が過激に生きていくようになるダイナミクスを、その内側から理解しなければならない。

そして、陰謀論の世界におけるダイナミクスの理解はかつてなく重要な課題になっていると言える。近年、コロナ禍やウクライナ侵攻よりも前から、比較的に安定した社会環境で陰謀論が確信され、過激な事件へと至る事例が珍しくなくなっている。例えば、2021年1月、当時の米国大統領ドナルド・トランプの支持者たちによって、米国国議会議事堂が襲撃された事件もまた陰謀論から生じたものだった。前年の米国大統領選挙で敗戦していたトランプがその選挙において民主党の陰謀による不正があったと主張し、それを信じたトランプの支持者たちが議事堂に押し寄せたのである。そして、この襲撃に加わった人々が支持していたのはトランプが主張した民主党の陰謀言説だけではなかった。米国国議会議事堂を襲撃した人々はQanonと呼ばれる陰謀論を支持していたのである(Cabral, 2021)。Qanonとは、2017年のインターネット匿名掲示板における投稿を発端とした陰謀論で、米国や世界各国の政府の深部に隠れて権力を行使する組織が存在し、トランプがその組織に抗っていることを示唆する言説である。人々はインターネットメディアを介してこの陰謀論を信じて、米国国議会議事堂の襲撃に関与したのである(Papasavva et al, 2021)。

このような中で2019年から心理学では、人々が陰謀論をなぜ信じるのかという問いのもと、陰謀論的信念の研究がそれ以前の陰謀論研究の数を上まわるほど活発になっている(Hornsey, Bierwiazek & Sassenberg, 2022)。陰謀論が社会的な事件へと至る問題とは、過去の特異な状況に特有なものではなく、インターネット上で誰もがメディアを有し、SNS (Social Networking Service) を通じてその投稿が容易に拡散されるようになった現代においては、陰謀論による社会的リスクはより一般的なものになっていると言えよう。

上述したように、陰謀論が大虐殺にも通じうる問題を孕むことは歴史が示すところであり、さらに陰謀論がなぜ信じられるのかを解き明かそうとする研究がこれまでになく活発となるほど、陰謀論によって生じる社会問題は一般的で身近なものとなっている。インターネットと個人メディアの普及によって情報の拡散が即時的かつ大規模になされるようになった現代においては、特定の陰謀論が広まることも特殊な社会状況化の特殊な現象とみなすこともできなくなっており (Brotherton, 2015; Butter, 2014; Douglas & Sutton, 2023; Douglas et al, 2017, 2019)、陰謀論の社会的リスクがこれまでにないものになっている (De Fortuna & De Luca, 2024) と考えられるだろう。

そして日本でも、Qanonの投稿が始まるよりも2年早く、2015年にあるインターネットブログ(以下、ブログ)を発端とする陰謀論を支持する人々による事案が生じていた。そのブログ「Aの日記」(仮称)では「日本人の覚醒」を目的として、ブロガーA(仮称)によって日本社会の裏に潜みながら日本を貶めているとする陰謀組織を告発する記事が投稿され、「A

の日記」の読者たちによる数々の過激な運動が生じていたのである。本研究は、このブログ「Aの日記」のテキストを対象として、陰謀論の世界に人々が過激に生きていくようになるダイナミクスを明らかにする。

2. 先行研究

2.1 陰謀論の心理学研究における定義とその問題

ここではまず、陰謀論の心理学研究における陰謀論定義とその背景にある慣行を紐解き、①陰謀論とは何かを定義することの難しさと、②陰謀論を信じることが過激な社会問題に必ず通じるわけではないことを論じる。そして、陰謀論定義の問題を踏まえた上で、本研究における陰謀論の定義づけを行う。一般的に言えば、陰謀論という言葉は、特定の言説が不合理だとするレッテルとして用いられることもあり、自らの主張を陰謀論とされたり、陰謀論者と呼ばれることは不名誉な事態だと言える。故に、ある言説がなぜ陰謀論として研究されなければならないのかは最初に明示する必要があるだろう。

まず、「陰謀」とは一般的には、二者以上で何らかの企みを図ることを意味し、北朝鮮による邦人拉致やアルカイダによる米国同時多発テロも「陰謀」に含まれる。一般的な意味での「陰謀」にあたる現象は歴史を見ても、カティリナの陰謀や乙巳の変など枚挙に遑がない。歴史が示すように、人類は頻繁に集団的な暴力に直面してきたために、集団的な企みを告発する言説である陰謀論を信じることは、人類の進化において適応的な認知だと議論されている (e.g. Willem. van, Prooijen. van, Vugt., 2018)。van Prooijen & Van Vugt(2018) によると、人類の人的、物的損失の原因として共通するのが、集団的に企図された暴力であり、そのような陰謀の存在を信じる傾向から祖先は利益を得ていた可能性があるとされている。陰謀、及びそれを告発する言説としての陰謀論を信じることは、ありふれたことだと言えるだろう¹。

そのような陰謀を告発する言説としての陰謀論を心理学では、次の4つの要素から定義してきた。まず最も一般的要素の一つが、(1)集団性(van Prooijen & Van Lange, 2014)であり、一般的な意味における陰謀と同様に、一個人の行為についての言説は陰謀論と見做されない。例えば、ある個人が不法な麻薬を使用しているという言説は陰謀論とされない。第二に(2)意図性(Douglas, Sutton, Callan, Dawtry, & Harvey, 2016)で、共謀者の行動における意図や主体性を暗示する言説が陰謀論とされている。端的に言えば、陰謀論には、共謀する者たちが、なぜ共謀を企むのかについて言及される傾向があるということである。第三に、陰謀論には、その共謀者の意図に(3)悪意性(Hofstadter, 1966)を示唆する特徴があるとされる。

¹ 雨宮(2021)によると、一般的に知られた陰謀論としては、古くは世界の政治や経済をユダヤ人が支配してきたとするユダヤ陰謀論、米国同時多発テロが米国主導でなされたとする9.11陰謀論があり、また最近では、新型コロナが中国政府によって広められたとする新型コロナ陰謀論や、コロナワクチンが特定の企業の害意のもとに存在するとするコロナワクチン陰謀論が有名になっている。

そして、最後に、一般的な意味での「陰謀」には含意されていない要素として(4)因果性(Shermer, 2011)があり、すなわち陰謀論とは物あるいは事象がどのように因果的に結びついているかの仮説を有するものだと言われている。端的に言うならば、何らかの出来事の背景を説明する言説が陰謀論の一つの特徴だと考えられている。これらの4つの要素をまとめると、心理学では、何らかの事象を何らかの集団の有害な意図という仮説から解釈した言説を陰謀論として定義して研究してきたと言えるだろう(大山, 2024)。

しかし、このような定義から特定の言説を研究対象とすべき社会的問題性を孕んだ陰謀論として特定可能になるわけではない。なぜなら、上述した要素に基づく定義とは、陰謀論の真偽を不問にしたものだからだ。例えば、911 米国同時多発テロは、アルカイダという集団が米国民を標的として行った事件である。アルカイダが 911 米国同時多発テロを行ったという言説も、真偽性を要素に含まない従来の心理学定義では、陰謀論と見做されてしまう。そして、911 米国同時多発テロを現実にしたことだと認識する人も、従来の心理学における陰謀論の定義からすると陰謀論研究の対象となる。「陰謀」や陰謀論を信じることもありふれたことだとしても、従来の定義では歴史書も陰謀論となり、それを事実として認識することも陰謀論を信じることに含まれてしまうのである(Nera & Schöpfer, 2023)。では、なぜこのような定義から陰謀論についての心理が研究されてきたのだろうか。

心理学研究における陰謀論定義の問題とは、その陰謀論定義の中心的な要素として陰謀論の真偽や妥当性に関して立場を取らないという、陰謀論の心理学研究における不可知主義の慣行に起因する(Nera & Schöpfer, 2023)。そして、この不可知主義の慣行がなければ、陰謀論の心理学研究は実質的に不可能だと考えられる。心理学研究における陰謀論に対する不可知主義の慣行の妥当性について、Hornsey et.al (2022)が二つの観点から論じている。その二つの点とは、①何が陰謀論の証拠となるかとは主観的なものであるために、もっともらしい陰謀論とありえない陰謀論を明確に区別できないという点と、②特定の陰謀論が真実だと後に証明される場合があるという点である。これらの観点とは、独立したものというより、我々の社会における陰謀論問題の実情から導かれた、連続性のある議論だと言える。ここで、陰謀論研究における不可知主義の妥当性についての議論を確認しておきたい。

まず、もっともらしい陰謀論とありえない陰謀論を明確に区別できないという点についてである。第一に、ある陰謀論に具体的な証拠があったとしても、その証拠が客観的なのか、主観的なのかの判断自体が難しい場合がある。しばしば大量の議論や様々な根拠を動員する陰謀論を、専門の異なる心理学者がその証拠を主観的か客観的か評価した上で陰謀論について研究することは現実的ではない。例えば、新型コロナウイルスのワクチンが有害な意図のもとに制作されているという陰謀論の証拠を評価できるのはワクチン科学者だけである。そのワクチン科学者と同等の証拠評価能力を前提とする慣行は、陰謀論を信じる心理を研究するための有効な定義とは言えない。何より、ワクチン科学者がワクチンにまつわる陰謀論の証拠を精査することには社会的な意義があるが、その精査における論理がまた別の陰謀論のもっともらしさの精査に通じるわけではない。第二に、Uscinski (2022/2020)が指

摘するように、実際に陰謀を企むものたちが、その証拠を残さないようにするのは当然であり、故に証拠がないことを前提とする傾向にある陰謀論はそもそも反証可能性がない場合もある。実際、米国政府主導で行われたハンフォード核施設における実験による米国市民の被害が、40 年以上にわたって米国政府によって巧みに隠蔽されてきた(Pritikin, 2023/2020)という事例もある。陰謀は実際に存在し、その証拠の隠蔽が実際に行われるため、心理学者が簡単に真偽を精査できないのが陰謀論なのである。

また、上述の米国における陰謀事例のように、ある陰謀論が後に真実であることが証明されることが珍しくない。その他の例として、北朝鮮拉致問題や米国のプルトニウム人体実験問題が挙げられる。1970 年代を中心に北朝鮮による日本人拉致が行われたという言説は、1980 年にはマスメディアで報道されていたが、それが真実であるのかについて国会で議題とされたのは 1988 年のことであり、そこでも当時の内閣総理大臣であった竹下登は明確な答弁を行っていなかった(第 112 回国会衆議院本会議, 1988)。そして、その後 2002 年 9 月の第 1 回日朝首脳会談において、北朝鮮が拉致を認め、北朝鮮による日本人拉致が行われたという陰謀論が事実であったことが裏付けられた。また、米国では 1945 年から 1947 年にかけてプルトニウムの人体への毒性を調べるために、科学者たちが自国民に対して無断でプルトニウムを投与する人体実験が行われていた。この人体実験について米国政府は公にしていなかったが、1987 年からジャーナリストが調査を開始し、その報道が 1993 年に始まり、そして米国政府が改めてその人体実験についての報告書を公にしたのは 1995 年であった(Welsome, 2000/1999)。当然ながらこのような人体実験が行われていた当時既に、プルトニウムに強い毒性があることをマンハッタン計画の当事者たちは把握していた。1943 年には、プルトニウムによる食料汚染によって、当時の米国の対戦国であった日本市民の虐殺計画が科学者から立案されていた(広瀬, 1994)。また、1945 年 8 月には広島に原爆が投下されている。つまり、プルトニウムの有害性を米国政府は十分に把握した上で、それを自国民に投与していたのである。これはまさに従来の学術的定義における、国家による自国民への陰謀に他ならない。そして、上述の例のように、ある時期までは公的にはありえないとされる陰謀論が、後に公の事実としての陰謀となる場合が実際にあるのである。

同時に、北朝鮮拉致問題やプルトニウム人体実験問題の例は、特定の陰謀論を事実として支持すること自体が、社会的問題に通じるのではないことを示すものでもある。1980 年に真偽が定かではない北朝鮮拉致事件という陰謀論を支持することや、1990 年にプルトニウム人体実験が行われたという陰謀論を支持することは個人の自由であり、問題だとは言えない。また、Hornsey et al (2022) が陰謀論の信念の心理は陰謀論の内容によって劇的に変化すると指摘するように、陰謀論とされる言説は数多く存在するが、それらの中でも社会問題となるのは一部であり、その他多くの陰謀論を支持すること自体は問題ではない。そもそも我々は、科学的な真偽が明らかな主義や主張だけの世界に生きているわけではない。例えば、関東大虐殺が実際にはなかったこととして、その信条の世界に生きている人々も存在する(田中, 2018)。科学的な確からしさとは関係なく、様々な信仰や文化的価値観の世界に

我々は生きている。陰謀論を信じるのが社会的な問題となるのは、陰謀論に生きることが反社会的な行動に通じた場合においてのみだろう。

つまり、陰謀論研究における定義と不可知主義の慣行とは、陰謀論をめぐる歴史的事実を踏まえた上で、①研究を実施する上では必要な前提であると同時に、②陰謀論は本質的に捉えがたいもので、③特定の陰謀論を事実として支持すること自体が問題ではないことを示しているのである。また、陰謀論をめぐる歴史的事実が示すところとして、何が陰謀論であるのかを問うのではなく、陰謀論からいかに社会的問題が生じていくのかという過程を問うことにこそ社会的な意義があるのだと言えよう。

とはいえ、不可知主義の立場をとりながら、従来の心理学研究は実際にどのような言説を陰謀論と呼んで研究対象としてきたのだろうか。改めてであるが陰謀論の心理学研究における不可知主義の慣行とは、911 米国同時多発テロなどの実際の陰謀についての言説と、そうではない陰謀の主張を区別しないことを意味する。911 米国同時多発テロを共謀したのがアルカイダであるという言説も、911 米国同時多発テロが実は米国政府主導によるものだったという言説も、陰謀論の心理学研究における研究対象としての陰謀論となるのである。人類史を見れば歴史家が認める数多くの陰謀が存在し、特定の陰謀論を事実として支持することも問題でないのならば、実際にどのような言説を心理学では陰謀論として研究してきたのか疑問が生じるところだろう。

この問題について、心理学で批判的に議論されるようになったのは近年になってからである。その批判的な議論とは、Nera & Schöpfer(2023)に始まったもので、従来の心理学研究では暗黙の陰謀論定義として、一般的定義 (generic definition) が用いられてきたというものだ。この一般的定義とは、一般的には受け入れられていない、不合理な言説が陰謀論だとするもので、そのように研究者が判断したものが陰謀論として研究されてきたのである (Nera & Schöpfer, 2023)。一般的にいえば「陰謀論」というラベルは蔑称であり、特定の言説を合理的な主張としては失格だとして、その信念も不合理であることを仮定する (Douglas et al., 2021) ものである。しかしながら、心理学者たちもまた、陰謀論の真偽に対して不可知な立場を表明しながらも、一般的感覚から陰謀論の信念を本質的に欠陥のある異常な状態だとする仮定から研究してきたのである。そして、このような暗黙の定義に基づく研究が、陰謀論を信じることを偏執狂的な少数派現象だと仮定した Hofstadter (1964) に始まり、近年まで引き継がれてきた (Butter & Knight, 2020)。

しかし、研究者がその権威的な立場から、特定の言説や主張を本来的に問題のある言説として陰謀論だとみなすことは、市民とのコミュニケーションの間に断絶を生じさせることにもなるだろう。実際、先に挙げた公の事実としてのマンハッタン計画における人体実験だけでなく、地球平面説陰謀論や地球温暖化陰謀論などでは、科学者が人々を欺く陰謀の主体とされている場合もある (Uscinski, 2022/2020)。研究者が、言説に内在する陰謀的な要素にのみ注目し、特定の言説を本来的に社会的な問題のある言説として陰謀論という用語を用いれば、むしろ社会的に好ましくない状況を生み出してしまうだろう。

故に、上記のような問題のある従来の学術的な陰謀論定義や、その主張者の異常性といった点を根拠にするのではない形で、改めて陰謀論を定義する必要があるだろう。陰謀論の心理学における陰謀論定義に、中核となる普遍的部分が欠けていることを評価する研究者も存在する (e.g. De Fortuna & De Luca, 2024)。陰謀論とよばれるものの本質的捉え難さを踏まえると、そのような評価を否定することはできない。しかし、定義を示すことなく、議論することには意味はない。ここまでの議論を踏まえた上で、次から本研究における陰謀論の定義を示したい。

2.2 陰謀論の定義

まず、本研究では「陰謀」という言葉を、あくまで一般的に意味するところである「二者以上による何らかの企み」として中立的に用いる。その上で、問題のある従来の学術的な陰謀論定義や、その主張者の特徴からではなく、研究対象とするブログ「A の日記」の2つの特徴から、改めて本稿における陰謀論という用語を定義したい。

その「A の日記」の詳細については改めて後述するが、「A の日記」は「日本人の覚醒」を目的として、日本社会に潜んで不正行為を行っている集団が存在しているという陰謀を主張している。そして、それだけではなく「A の日記」で主張される陰謀の存在を事実として支持する人々によって様々な運動が行われ、その一部は社会問題に当たるものとして報道され、またそれによって業務妨害を受けたとして出入国管理局（以下、入管）が警察に相談する事態に至っている (J-cast, 2015)。つまり、①「A の日記」は「覚醒した者」という一般的な日本人とは距離を置く立場から陰謀を告発し、②その支持者たちによる運動から実際に社会問題が生じていたと言える。

本研究では陰謀論を定義するにあたって、上述の「A の日記」における陰謀を告発する立場性と、その支持のされ方に注目したい。覚醒という言葉は、一般市民が欺瞞に欺かれていることを指摘する比喻として、しばしば陰謀の告発に用いられているものでもある (Nera & Schöpfer, 2023)。まず、このような一般市民から距離を取る立場性に注目したい。先に議論したように、研究者が不可知主義の立場をとりつつも特権的な立場から、なんらかの陰謀を告発する言説を一般的には受け入れられていないと断定して、本質的に欠陥のある言説として陰謀論と呼ぶことには問題がある。陰謀の存在を告発する当事者にとって、それが真実なのは当然である。それに関わらず、そのような当事者にとっての真実を研究者という立場から証拠を精査することもなく、それが一般的ではない不合理な主張だと断じるのは不当だ。まして、その当事者の何らかの属性から陰謀論者のレッテルを貼ることも許されるものではない。しかしながら、あくまでもその当事者が陰謀を一般的な人々から支持されないものとする立場から告発するならば、研究者が特権的な立場から断定することなく、その陰謀言説を一般的ではない陰謀論として扱うことが可能である。故に本研究では、陰謀を主張する当事者がその陰謀が真実として一般的に受け入れられていないと認識して、一般社会か

ら距離を置いた「覚醒」した立場から主張することを陰謀論の定義の一つとしたい。

次に、その陰謀の主張の支持のされ方に注目して定義を加えたい。先に議論したように陰謀言説を事実として支持すること事態は問題ではない。しかしながら、関東大虐殺や米国国議会議事堂占拠事件のような、単に陰謀言説を支持する態度を表明するにとどまらず、その陰謀言説の支持の一環として、現実的な社会的事件が生じることが問題であり、研究対象としなければならない陰謀言説とは、そのような現実的社会問題に至った言説に限定されるべきだろう。そもそも、単に特定の陰謀論に対してそれを支持する態度を表明することと、それを支持して現実に行動を起こすことは、その支持のあり方は質的に異なると言えよう。例えば、ハンフォード核施設の実験による米国市民の被害を事実だと認めることと、その真実性をめぐって裁判に協力することは同義ではない。さらに言えば、裁判に訴えるという社会規範に則った行為に協力することと、社会的事件と見做されるような運動に協力をすることも同一に問題視はできない。我々が問題視すべきなのは、特定の陰謀の支持のされ方が社会問題に至る過程だけだと言えよう。故に本研究では、ある陰謀を支持する人々によって実際に社会的問題が生じた言説を陰謀論の定義の一つにしたい。

以上の議論から、本研究では、①陰謀を主張する当事者が、その陰謀が真実として一般的に受け入れられていないと認識して、一般社会から距離を置いた立場から主張し、②それを支持する人々によって実際に社会的問題が生じた言説を陰謀論と呼ぶ²。

ここまで、心理学における陰謀論研究の定義と慣行を確認しながら、本研究における陰謀論の定義を示した。次に、先行研究を外観しながら、これまでの心理学における陰謀論研究の問題と、そこから導かれる課題を示す。

2.3 陰謀論的信念研究とその問題

ここでは、まず従来の心理学研究が陰謀言説を信じるという現象をどのように捉えてきたのかという大枠の仮定を示す。次に、その仮定に基づく先行研究が、どのようなアプローチから何を明らかにしてきたかを概観し、その限界を示す。その上で、陰謀論の信念とは異なる、信じるという現象を対象にした文化人類学の議論を参照し、陰謀論の心理学研究の限界が従来の仮定に由来することを指摘する。これらの議論を通して、陰謀論を信じるという現象を、文化人類学的に人々が陰謀論の世界に生きるダイナミクスから理解する重要性を改めて示す。

心理学では陰謀言説の研究がかつてなく活発になっているが、同時に限界が示唆されており、それは従来の研究に埋め込まれてきた仮定に由来すると考えられる。その仮定とは、先にも示した、陰謀言説を信じることを偏執狂的な少数派現象だ (Hofstadter, 1964) とする仮定である。そして、この仮定から導かれた「陰謀論」の定義が、近年になって問題視される

² なお、「陰謀論の信念」「陰謀論研究」「陰謀論の心理学研究」といった用語は慣例に従って用いていく。

ようになった一般的定義 (generic definition) である。繰り返しになるが、心理学者たちは、一般的感覚から「陰謀論の信念」を本質的に欠陥のある異常な状態だとする仮定から研究してきたのである (Nera & Schöpfer, 2023)。

そして、このような仮定に基づいて陰謀論の心理学研究では、人々が陰謀論を信じるのは個人の異常性によるものとして、個人の属性にアプローチしてきた。陰謀論の心理学研究では、「他の説明の方がよりあり得るのにも関わらず、陰謀を不必要に仮定する考え方」 (Aaronovitch, 2009, p.5) を陰謀論的信念 (conspiracy beliefs) と呼び、主に Brotherton, French & Pickering (2013) によって開発された Generic Conspiracist Beliefs (GCB) 尺度を用いて研究が行われてきた。この尺度は心理学者がその根拠を精査することなく「不必要な仮定」だとする、いくつかの陰謀言説に対する態度を評価するもので、その目的とするところは、個人が陰謀論的信念をどの程度持つ傾向にあるのか測定することである (Brotherton, French, & Pickering, 2013)。具体的には GCB を用いた調査では、米国政府が自国へのテロ行為に関与しながらも偽装しているといった 15 項目に対して、1 (きっと正しくない) から、5 (きっと正しい) までの評価を実験協力者に求める。さらにまた別の個人的傾向を測定する調査を行なうことで心理学では、陰謀言説に対する個人の態度と、別の個人的傾向との相関関係を探ってきたのである。つまり陰謀論の心理学研究では、陰謀言説を信じる要因として個人の属性に関心の矛先を向け、個人の属性に還元するという個人還元主義的アプローチから研究してきたと言えよう。

このような個人還元主義的アプローチから、仮説として検証されてきた個人的属性の代表が、パラノイアとの関係 (e.g., Furnham, & Groer, 2021; Imhoff, & Lamberty., 2018 Rizeq; Imhoff, & Lamberty., 2018) や、統合失調との関係 (e.g., Darwin, Neave, & Holmes, 2011; March & Springer, 2019) といった、病理等の異常性との関係である。このような陰謀論的信念を異常性と重ね合わせる研究 (Blanuša & Hristov, 2020) の展開について、De Fortuna & De Luca (2024) は、陰謀論の病理化の歴史 (history of the pathologization of conspiracy) と評している。そして、このような陰謀言説を病理化した研究を通して明らかになったことは、なんらかの異常性と陰謀論的信念には関係がないということである (Hornsey, et al., 2022)。このような一つ一つの検証は科学的探究に不可欠なものであるが、そもそもこうした症状などとの関連が検証されること自体が、従来の心理学研究が陰謀言説を信じることを異常なことだとみなしてきたことの証左だろう。しかしながら、ノーベル賞を受賞した陰謀論者も存在し (Brotherton, 2015) ³、陰謀論からテロ事件を引き起こし、ユナボマーと呼ばれた Kaczynski が数学者であった (Mercier & Sperber, 2018) ことも歴史が示すところであり、陰謀論者を不合理な性質の持ち主だと仮定することが合理的だとは考えられないだろう⁴。このような、陰謀論的信念を異常とみなす仮定は、近年になって先に議論した心理学におけ

³ 例えば、2008 年にノーベル医学賞を受賞した Luc Antonie Motagnier は、コロナワクチン有害論を主張している。

⁴ そもそも、アメリカ国民の半数以上がケネディ大統領暗殺事件に関する陰謀言説を支持しているという結果 (Jenson, 2013) から、陰謀言説の支持とは、異常で一般的でない現象だとみなせないだろう。

る陰謀論定義の問題と同様に、何十年もの間の心理学研究を麻痺させてきた（Butter & Knight, 2020）と批判されるようになっていく。

とはいえ、個人還元的アプローチに成果がないわけではない。個人の異常性といった観点ではなく、①陰謀論的信念と不安を感じやすい性格的な傾向(e.g.Grzesiak-Feldman, 2007)や、②出来事や状況に過敏にエージェンシーを検知し、その意図を説明として用いる認知的な傾向(Brotherton R & French, 2015)については、多くの証拠が重ねられ有力な仮説とされている（Hornsey et al, 2022）。なお、出来事や状況に過敏にエージェンシーを検知し、その意図を説明として用いる認知的な傾向とは、特定の出来事についての曖昧な情報が提供されたときに、それらの出来事が何らかの主体の意図によって生じたものだとして解釈する傾向である。端的に言えば、何らかの出来事の裏で誰かが糸を引いていると認識することだと言える。このような何らかの出来事から他者の行動における意図性を検知する能力とは、我々の社会的行動を可能にする「心の理論」の基本を構成する能力（Rosset, 2008）であり、この認知傾向自体は不合理なものではない。また、一般的な陰謀言説の要素として、何らかの事象を有害な意図という仮説から解釈することが指摘されている点を鑑みると、それと同義である上述の個人の認知的傾向が陰謀言説を信じることに関係がないとは言えないだろう。「何らかの出来事の裏で誰かが糸を引いている」という陰謀言説を、「何らかの出来事の裏で誰かが糸を引いている」と認知する人が支持する傾向があることに疑問の余地はない。

しかし、このような個人還元アプローチには限界が示されている。Hornsey et al（2022）は、上記した研究を含む、これまでの文献の統合的なレビューから、個人の要因よりも集団的な文脈の影響が強いことを指摘している⁵。具体的には、陰謀論的信念とこれまで検証されてきた各要因の関係性の強度を示す効果量の分析では、陰謀論的信念を説明するには非常に弱い、0.4 未満の結果しか示されておらず⁶、加えてそれらの研究が実験室ベースのパラダイムに依存するため再現性がなく一般化できない（Hornsey et al, 2022）のである。実験室での個人還元的アプローチについては、Uscinski (2022/2020)は、ある陰謀言説を信じることに関連する心理的要因がまた別の陰謀言説を信じることと関連がないことを指摘し、それは実験室でのアプローチの多くが社会・政治環境などの関係についての説明を欠いていることに由来すると批判している⁷。つまり、個人還元的アプローチによる研究から陰謀言

⁵ 例えば、Douglas, Sutton, & Cichocka(2017)は、民族性や政治的な立場によって、支持される陰謀言説や支持のあり方が異なることを指摘している。

⁶効果量については心理学では、0.2 が小さな効果量、0.5 が中程度の効果量、0.8 が大きな効果量として解釈される（波田野, 吉田, 岡田, 2015）。

⁷個人還元的アプローチによる研究から示される特定の心理的要因が、実際に陰謀論を信じることと関連がない研究結果が示されることについては、結果を得るために大量のデータを要する個人属性の相関研究デザインでは、実際の陰謀論者の信念を測定することにはならない（Klein & Nera, 2020）ことに由来すると考えられる。個人還元的アプローチの研究では、その研究デザイン上、大量のデータを得られれば、それに比例して分析から得られる効果量が大きくなる。そのために GCB 尺度を用いた調査によって、特定の陰謀論について肯定的な態度を示した人々を、陰謀論者として扱っているが、そもそもどの程度の確信を持っているか、ある個人が陰謀論的信念を持っていると言えるのか尺度の調査では

説を信じるということが、個人的な要因だけでなく、実際の陰謀言説をめぐる集団的文脈や、その言説自体の性質、あるいは社会的事象など、様々な水準の事象が絡みあって生じる複雑な現象であることを逆照射しているのである。

陰謀論を信じるという現象は、社会的かつ集団的現象として考えなければならないだろう。人々が受け入れるように仕向けられた虚偽を暴こうとする陰謀言説とは、政治などの社会的出来事を題材にするだけでなく、その言説の目標もまた社会的である (Douglas & Sutton, 2023)。故に、陰謀論を信じるという現象は、社会的な現象として考えなければならないのである。上述のような近年の研究結果から、陰謀論の信念は個人レベルの現象としてのみ考察されるものではないという認識は広まっているが、集団間レベルの分析はまだないために、学際的なアプローチを開発する必要性が訴えられている (Hornsey et al, 2022)。したがって、陰謀論的信念を、集団的な文脈や社会的事象などが作用しあうダイナミクスとして、学際的にアプローチすることが、今の陰謀論の心理学研究の課題になっていると言える。

そもそも、個人還元的アプローチでは何かを信じるという現象を、なんらかの表象を認識することの問題へと収斂させる前提を呼び込んでしまう。人が何かを信じるには、それを真実として受け止める過程があるはずだが、その過程が精神の内の諸属性の関係で完結する現象として仮定するのは、信じるという現象を精神状態の領域に押し込めることに他ならない。この点について、科学人類学者かつ社会学者でありアクターネットワーク理論の提唱者である Latour が、独自の不可知論の定義を試みるなかで次のように指摘している。

「近代人たちは、いかなる客観的事象によっても説明できないその奇妙な崇拜について自分たちが納得できなければならないので、未開人が外部にではなく内部に起因する精神状態を持っていると仮定する。それゆえ、植民地化の前線が進むに連れて、世界は信者だらけになる」 (Latour, 2017/ 2009, 邦訳 p.20)

この指摘は、そもそも信念という問いの枠組みが近代的な認識論上のものでしかないことを端的に評していると言えるだろう。近代人一般に限らず、心理学者も陰謀論的信念に限らず神への認識などを宗教的信念と呼ぶことで、信じるという現象を精神状態の領域に押し込めて、何らかの表象を認識する状態の問題にしてしまってきたと言えよう。しかしながら、Latour が「信仰とは精神状態のことではなく、人間集団間の諸関係の効果のことである」 (Latour, 2017/ 2009, 邦訳 p.19) と指摘しているように、信じることとは、何かが信じ

不明 (Uscinski, 2022/2020)なのである。それに関わらず、GCB 尺度を用いた個人属性の研究では、特定の陰謀言説について肯定的な態度を示した人々を、実際の陰謀論者として扱うことになるのである。De Fortuna & De Luca (2024) は、陰謀論の心理の研究において GCB 尺度を用いた定量的アプローチでは、陰謀論の心理について歪んだ写像を生み出す危険性があることを指摘している。

られる世界における諸関係として、そのダイナミクスを理解しなければならないのである。近年になって認知心理学においても、心的現象を個人の内的処理で完結する現象としてではなく、表象と現実が結びつくメカニズムに注目するプロジェクションサイエンス(e.g. 鈴木, 2019)が提唱されるようになっており、特定のコミュニティにおけるダイナミクスの重要性が示唆されている。しかし、コミュニティにおけるどのようなダイナミクスから、いかに表象と現実の結びつきが真実性を獲得するのかについては検証されていない(久保, 2019)。

何より通常は、何かを信じることは、その当事者にとって必然的に真偽が関わる問題であり、故に、何かを証拠としながら真実として受け止める営みといった過程の存在こそが仮定されるべきであり、その過程こそを解明すべきだろう。例えば、我々は貨幣自体に内在する価値はない(古川, 2020, p.128)にもかかわらず、貨幣の価値を信じる世界に生きている。その世界に我々が生きているのは、我々個々人の精神が貨幣の価値を認識する特異な状態になっているからではない。そうではなく、貨幣を媒介して行う交換の実践が集団的に行われているという体験的証拠があるために、我々は貨幣の価値を信じることができるのである。そして同時に、集団的な交換の実践は我々が貨幣の価値を信じて決済を行わなければ成立しない(e.g. Martin, 2013)。交換実践と貨幣の価値への認識が循環する世界に我々は生きているために、貨幣の価値を我々は信じているのである。また、この貨幣の信用と等価物として、文化人類学者の Anspach(2012/2002)は、ニュージーランドのマオリ族の精霊の信仰と贈与交換の営みの関係について議論している。その議論において Anspach(2012/2002)は、誰かから何かを贈与されることを精霊の恩恵として認識し、また誰かに贈与の返礼の義務を果たすことが精霊から監視されていると信じて、再び誰かへの贈与の営みが生じることを指摘している。貨幣の価値の認識と同様に、精霊の認識もまた贈与交換という集団的現象から生じ、その贈与交換を精霊が監視しているという人々の認識が再び贈与交換を生じさせるという循環的因果関係が存在するのである。信じるという心理現象は、心理的傾向のみならず、何かを信じて生きる営みと不可分なものとして、何かを信じる営みにおける循環的な相互作用を仮定して、それを理解しなければならないと言えよう⁸。

さらに言えば、そのような人々の営みは、現実世界とも不可分なものとして理解しなければならないだろう。私たちが、貨幣を通じて得る商品、あるいはマオリ族の人々が交換する贈与物とは、現実世界の産物として存在するものだ。信じるという現象が、現実世界と深く結びついた人々の営みによって成立しているからこそ、貨幣の世界の営みに生きる我々の日常において貨幣の価値への認識は疑いの対象でもなく、時に貨幣の有無が現実的な問題として現れるのである。信じるという現象は、それを信じる世界の内側で何が起きているのか、どのような営みから現実世界と結びついているのかという内在的な観点から理解しなければならない。要するに、信じるという現象を表象の認識の問題として、その認識がなぜ生じるのかという個人の精神に閉じて問うのではなく、人々が「生きる世界を『現実』に存在する

⁸ 小坂井(2013)はこのハウの信仰における循環的因果関係を参照して、心理学者は様々な相互作用による循環として心理現象を理解する必要があると指摘している。

世界』といかに結びつけていくか」(久保, 2018, pp.36-37) という, 信念の世界の内側から存在論的に問うことこそが, 信じるという現象への第一の問いなのである(Figure.1).

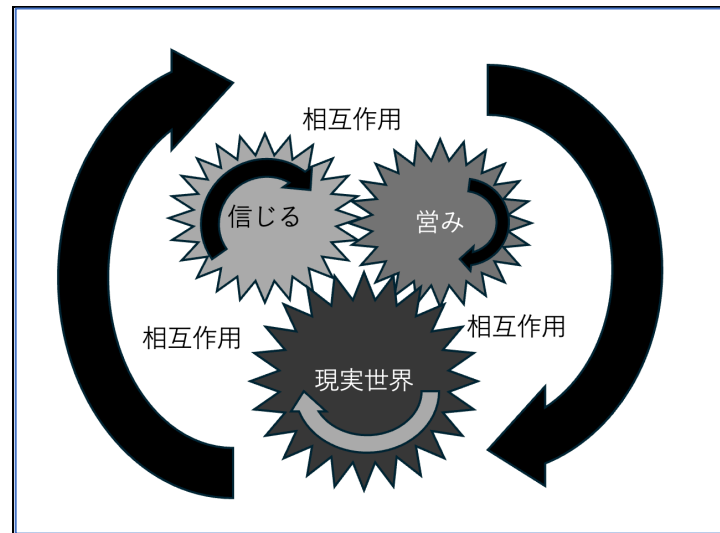


Figure. 1 信念の世界に生きる

特に, 社会問題に至るような陰謀論への信仰は, 我々の貨幣価値への認識と同様に, その世界に内在する集団的な営みから, 現実世界に結び付けられて強固に根拠づけられたものとして仮定して, その営みを解明しなければならないだろう. 詳細については後述するが, 本研究が扱うブログを発端とする営みは, Q anon に由来する運動と同様にメディアで報道され, 批判されてきたがそれにも関わらず, そのブログ関係者たちの陰謀論世界は綻ぶことなく, さらに様々な営みが続けられてきた. そのような社会的に批判されるような営みへの参加と, GCB 尺度で調査されるような, 特定の陰謀言説に対する肯定的な態度の表明は同義ではない. そもそも, 尺度による調査では, どの程度の確信を持っているか, ある個人が陰謀論的信念を持っていると言えるのかも不明だ (Uscinski, 2022/2020). 社会的な批判を受けてもなお, その陰謀論世界が維持されるまでに強固となる事態とは, 貨幣の価値が認識される世界に内在する営みと同様に, 陰謀論世界に内在する営みの独特な循環構造と現実世界との結びつきを想定して, それにアプローチする必要があるだろう. そして, このような陰謀論世界の内在的理解こそが, なぜ陰謀論を信じるのかを問う出発点となるはずである.

次節から, 現代における陰謀論問題の特性といった観点から, 個人還元的アプローチとは異なる先行研究を概観しながら, 陰謀論の世界の内在的理解に向けて本研究で採用するアプローチを吟味する.

2.4 内在へのアプローチ

本節では、従来の心理学で採用されてきた、人々の営みの内在的理解に向けたアプローチに基づく先行研究を外観し、それらのアプローチでは陰謀論の世界の内在的ダイナミクスを十分に理解できないことを指摘する。その上で、従来から何らかの世界に生きる人々のリアリティを扱ってきた文化人類学から提案されているアプローチの妥当性を検討する。その中でもアートネクサス理論の解説を行いながら、改めて陰謀論世界への内在的アプローチとしての妥当性を論じる。この解説を通して、アートネクサス理論によって陰謀論の世界に生きることをどのように分析可能なのかを示した上で、改めて本研究の目的を明示したい。

先立って、陰謀論世界の内在的理解とは、個々の当事者との関わりからその立場を理解することでも、当事者が陰謀論を信じる理由を理解することでもないことを確認しておきたい。内在的な理解とは、ある営みのメカニズムを客観的に特定するために、客観的な現象という水準で、その営みの中で何が起きているのかを理解することだ。それは、当事者の立場や個人の理由を理解することではない。個人の立場性の理解では、営みの客観的な理解としては問題がある（寺田，2003）。例えば、個人個人の貨幣に対する態度や立場を調査することでは、貨幣を用いた営みにおけるメカニズムの発見の遠回りになってしまうだろう。また、心理学において、信念とされるものが理由から形成されていることを否定する証拠も積み重ねられている。その代表としてまず、認知的不協和理論(Festinger, 1965/1954)の研究が挙げられるだろう。認知的不協和理論とは、矛盾する二つの認識を抱いたときに人は、一方の認識や行動を修正することで矛盾を抱えた状態を解決するという仮説である。その認知的不協和理論の研究から、人々が意識することが可能な理由から認識や行動の修正が生じるのではなく、修正された認識や行動を正当化するために、他者への説明として理由が生じるのだとする実験的証拠が提示されてきている(小坂井, 2013)。そして、その理由が生成される目的とは、信念の形成や意思決定を導くものではなく、行為の事後的な正当化であることが、傍観者効果(Latane & Darley, 1977/1970) についての研究からも示されている。他者が援助を求める状況で、第三者が存在する場合に援助行動がなされなくなる現象が傍観者効果であるが、実験において援助行動をとる者も、非援助行動をとる者も、その理由を行為の正当化のために事後的に生みだしていることが示されている (Mercier & Sperber, 2018)。つまり、当事者から語られるだろう、様々な背景を持つ立場や理由を理解することでは、個人還元的アプローチと同様に、陰謀論世界で生じる営みの客観的な理解へは至らないのである。何より、個々人を焦点にすると、集団的な作用という点をとらえ損ねる。

一方で、これまでの質的心理学では、陰謀論の世界を個人の属性ではなく、人々の相互行為上の達成物として捉える観点も提案されてきた。その際にしばしば用いられるアプローチがエスノメソドロジーである。エスノメソドロジーとは、成員の視点から「人々の方法」として、特定の相互行為における秩序を明らかにする方法論である (Garfinkel, 1968)。例えば、霊など現代社会において一般的にその存在が確かではない存在について語る霊能者と

の会話を対象とした研究(Wooffitt, 1998/1992, 邦訳, pp215-229)などがある。この研究では、まず①霊媒師が客の状況についての主張と知識を含んだ質問を行い、②客がそれを承認すると、③霊媒師は客についての知識を超常的なこととして説明し、④もし客が日常的な知識から説明しようとするのを霊媒師が阻止する、といった霊をめぐる会話における秩序を明らかにされている (Wooffitt, 1998/1992, 邦訳, pp215-229)。このような特殊な秩序を持つ対人的な相互行為から、何らかの存在のリアリティが再生産・強化されるのである。また、霊という存在のリアリティについては、会話の秩序のみが研究されてきたわけではない。質的心理学研究では、語り方に焦点をおいた分析から、霊体験の語りにおいて不安定な描写を繰り返しながら探索的に想起することで、個人が体験した霊体験を「事実」として構築するやり方が明らかにされている(大橋, 2015)。陰謀論を信じる世界の内側には、陰謀を「事実」として人々に提示するための特殊な告発の方法が存在するかもしれない。

しかしながら、陰謀論の世界のダイナミクスに迫るには、このような対人的な相互行為を一步踏み越えた、その世界の営みの分析が必要だろう⁹。関東大虐殺や米国国議事堂占拠などの事例をとってもわかるように、陰謀論の世界に生きるということは、特定の相互行為上の手続きを通して生成されたリアリティを超えて、実際に何かを陰謀によるものとして体験し、陰謀組織にむけた具体的な営みを行うことなのである。霊についての会話上のリアリティのように、陰謀論がある場における相互行為上のリアリティに留まるならば、少なくともその相互行為が行われている時点では具体的な営みへと至らないだろう。また、陰謀論について巧みに語られたからといって、実際に事件などに関与するとは考えられない。確かに、陰謀論世界の内側で、陰謀論についての特殊な相互行為はあるかもしれない。しかし、それは陰謀論世界における営みに埋め込まれたものであり、その相互行為を理解するにも、まずはその文脈としての人々の営みの包括的理解が必要だろう。我々は貨幣についての会話や語りといった行為を日常的に行っているが、交換実践という営みの包括的理解なしに、その行為の意味を理解することはできない。対人的な相互行為を含めた陰謀論世界に生きる営みの全体性にこそ迫らなければならないのである(Figure. 2)。

⁹ エスノメソドロジーは相互行為のみを焦点としてきたわけではない。例えば、Baccus(1986, p.1-19)は、科学的な営みを記号読解実践として記述している。また、大山(2020)は、アートネクサス理論をエスノメソドロジーの方法論として捉え直すことを試みている。さらに、アートネクサス理論と共通点が指摘される(久保, 2011)、アクターネットワーク理論を提示する Latour (2014/2005) もエスノメソドロジーを評価した上で科学的実践を記述し、中村(2015)はその試みをポスト・エスノメソドロジーとして議論している。

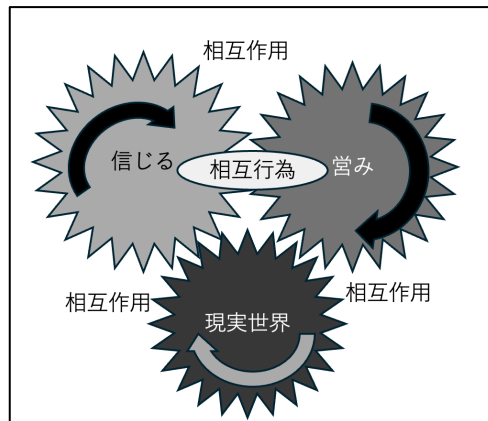


Figure. 2 相互行為，相互作用の位置付け

一方で、文化人類学は、早くから相互行為を一步踏み越えた相互作用という観点から、内在的に人々の営みの全体像を明らかにしてきた¹⁰。その背景には、人を所属する文化の産物 (Benedict, 1934) とみなしてきた従来の文化人類学が、ポストモダンの時代に文化の固有性が弱体化するなかで、特定の文化を前提とすることが、全体主義的人類学 (e.g., 春日, 2011; 箭内, 2018), または文化主義的な認識論 (久保, 2011) と批判されるようになった経緯がある。このような問題意識から文化人類学では、文化などの要素に還元せずに、あらゆる存在が作用しあう関係的な動態 (久保, 2011) として人々の生きるリアリティを記述するアプローチを展開してきた (e.g., Latour, 2019/2005; 箭内, 2020)¹¹。久保 (2019) によると、これらの新しい潮流の文化人類学アプローチの特徴とは、人も含む様々な存在が、様々に作用しあう中でお互いを変化させ合う過程を理解することにある。

このような様々な存在の作用を捉える観点であれば、認知、集团的営み、社会的事象が作用しあいながら現実世界と陰謀論世界が結びつく営みの全体性が理解可能となるだろう。実際、関東大震災においても、人々の営みにおける様々な要素の作用の連鎖から現実世界と陰謀論世界が結びついていていたと考えられる。例えば、本来は牛乳や新聞の配達人の心算のために路地の堀に記されていた記号が、関東大震災の混乱から、その意味が変容して朝鮮人による襲撃の合図を示した「不穏記号」だと認識されるようになり、その認識に基づく言説に影響された人々による通報や、警察の対処を引き起こしていたことが確認されている (中央防災会議, 2008)。関東大虐殺に通じた陰謀論世界の営みも、関東大地震や覚書といった社

¹⁰ 霊媒の実践やそれにおける相互行為のあり方というものも、文化や歴史を通して形成されてきたものであるが、陰謀論を信じる集団も営みも所与ではない。陰謀言説、及びそれをめぐる実践や集団が、文化や社会といった文脈から独立した現象であるわけではないが、それらに還元できる所与の現象でもない。我々と同じ社会、文化圏で局所的に生成している現象であり、その局所的な生成過程の内在的論理を発見しなければならないだろう。所与の個人の性質、文化や社会に還元することでは、現象の局所的で生成現象の内在的理解には至らない。このような局所的かつ生成現象へ早くから注目を行ない (e.g. 田中, 2018), そのために人類学から展開されてきたのが非還元的アプローチである。

¹¹ 例えば、Latour (2019/2005) が、「翻訳」という観点から、異種混淆のエージェントによる相互作用として科学的実践における事実の生成過程を分析するアクターネットワーク理論を展開し、箭内 (2020) はアフェクトスという概念から、異種を交えた複合的な相互作用の動態として人と植物が織りなす実践を分析している。

会的事象や、人々の認知や言説などの相互作用から生じていたものとして理解できる。こうした様々な事象の相互作用の分析こそが、陰謀論世界を捉える鍵だと言えるだろう。

そして、そのような潮流の文化人類学的視座の一つにアートネクサス理論 (Gell, 1998) がある。アートネクサス理論は、神や精霊などの信仰に基づく営みを、社会的物や認知などとの相互作用という観点から分析し、その相互作用における認識と営みの循環構造にアプローチする。例えば、日本における妖怪という存在のあり方について廣田(2022)はアートネクサス理論に基づいて分析を行っている。陰謀組織も精霊や妖怪と同様に、社会的には不確かな存在であり、そのような不確かな存在をめぐる内在的な営みであるならば、アートネクサス理論における相互作用という観点から迫ることが可能だと考えられる。また、Gell (1998)は、パプアニューギニアのトロブリアンド諸島におけるクラとよばれる財貨の交換の実践を、人々の営みや現実世界との相互作用という観点から分析し、現実世界において個人のクラが広域に流通することが、その個人の権力の現れと認知され、人々が権力を志向してより広域でクラを交換しようとする循環を明らかにしている。人々のクラに対する権力の認知が交換を促進し、さらに交換の実践がその認知を「抵抗し難い」(Gell, 1998, p.71)ものにするという循環である。このような特定の認知が強固となっていく営みの循環を明らかにする相互作用の分析であれば、陰謀論世界を強固なものとしている循環も明らかにできると考えられる。次節から、このアート・ネクサス理論の詳細を説明しながら、陰謀論世界の理解にむけたアプローチとしての妥当性を改めて示そう。

2.5 アートネクサス理論

本節では、大山 (2020) に基づいてアートネクサス理論について解説する。アートネクサス理論の分析の特徴とは、事物や表象(things)が人々にアブダクション (abduction) を動機づけることを行為性 (agency) として捉え、事物や表象を相互作用の主体(agent)に含める点にある。米盛(2007)によると、アブダクションとは演繹や帰納と同様に科学的発見において重要な役割を果たすもので、例えば、ケプラーが惑星運動の観察データを説明する仮説としての法則を発見した際に大きな役割を果たしたと考えられている。そのアブダクションの基本的な形式は以下のように記せる。

- ① 意外な事象が観察された。
- ② しかし、もし仮説が真であれば、意外な事象は当然の結果だろう。
- ③ よって、仮説が真であると考えるべき理由がある。

端的に言えば、アブダクションとは遡及推論(米盛, 2007)とも呼ばれるように、自然の事象などの事実群に対して納得のいく仮説を立てる推論である。そして、上記の形式が示すように、三段論法といった形式論理に従う演繹とは異なり、後件である仮説の肯定によって先

件の観察を肯定する「後件肯定の誤謬」(the fallacy of affirming the consequent)を犯すもので、その推論の真性は確証されない。形式論理としてアブダクションを記述するならば以下のようなになる。

- ① A ならば B である。
- ② B である。
- ③ よって、A は確かである。

上記の記述からも改めてわかるように、アブダクションは、事実 B と仮説 A の真実性を取り違える契機となりうるのである。それでもなお、アブダクションが科学において、仮説の発見に寄与してきたとされるのは、観察からは直接導くことができない、仮説を生成する認知であるからである(米盛, 2007)。

なお、アートネクサス理論におけるアブダクションとは、科学哲学者 Peirce が提唱した認識論を問うアブダクションとは異なり、存在論を問うものへと改変(久保, 2011)したものである。本来、Peirce のアブダクションとは、人々がいかに世界を把握し認識する(米盛, 2007)のかを議論するものである。例えば、人々が煙という事象からなんらかの事物が燃焼していると認識が生じるのは何故なのかを、煙は燃焼によって生じるという科学的仮説に基づいて解釈するからだと説明するのが Peirce のアブダクションである。しかし、アートネクサス理論におけるアブダクションとは、そのような科学的認識のあり方を何故なのかを問うものでも、文化的な認識のあり方(久保, 2011)が何故なのかを問うものでもない。人々が何故そのように解釈するのかではなく、人々の世界において、何かがどのようなものとして存在し、人々がいかに生きているのかを問うために、アートネクサス理論では、社会的な主体(agent)についての推論をアブダクションとみなす(Gell, 1998, p.15)。例えば、アートネクサス理論では、煙を発見した人が、誰かが助けを求めるために火おこしを行って煙を出しているのだと解釈することをアブダクションとして捉える。燃焼における物理的な法則から生じる事象が発煙であるが、そのような物理的法則を人々が認識しているかどうかではなく、その煙が人々にとっていかなるものとして存在し、人々がどのように振る舞うのかを問うのが、アートネクサス理論におけるアブダクションである。

そして、このようなアブダクションは、我々の日常生活に不可欠なものであり、事物がアブダクションを動機づけるという事態はありふれている。例えば、誰もいない部屋のテーブルに湯気立つカレーライスが置かれているのを発見し、「誰かがカレーライスを食べたいと思って用意したが、急用で席を外したところかもしれない」と考え、その誰かのためにカレーライスの保存を考えてラップをかけるといった事態は不自然ではないだろう。ここでの推論プロセスは、アブダクションとして次のように記せる。

- ① 湯気立つカレーライス(事物)を発見した.
- ② 先ほどまでカレーライスを食べようとする人がいた(仮説)なら, そこに湯気立つカレーライスがあるのも当然の結果だろう.
- ③ カレーライスを食べようとする人がいた (仮説) と考えるべき理由がある.

上述のような観察から仮説を導くプロセスとは, 一見すると帰納的推論だと思われるかもしれないが, 「我々にとってしばしば直接的には観察不可能な何ものかを仮定する」(米盛, 2007)のがアブダクションであり, 観察しうる仮定を扱う帰納的推論ではない. 例えば, カラスの色が黒いという仮説は, 直接観察可能なカラスの色についての仮定であり, それを経験的に実証するのが帰納的推論である. しかしながら, 上記の湯気立つカレーの例における, カレーを食べたいという誰かの意図とは, 観察不可能な仮説であり, このような仮説の推論とはアブダクションに他ならない. そして, このアブダクションによって我々は, なんらかの現象を理解可能にする仮説を生成し, 日常生活における行為の資源を得ていると言えよう. 例えば, 湯気立つカレーのみが存在するという状況から, 誰かの意図や志向についてのアブダクションを動機づけられることで, カレーの発見者はその誰かのためにラップをかけるという行為に至るのである. この時「カレーライスを食べようとする人がいた」とする妥当性は形式的には保証されないが, それでも「カレーライスを食べようとする人がいた」と認識する人との関係においては, 「カレーライス」という事物は人にアブダクションを動機づける主体だと言える.

このようにアブダクションを焦点とすることこそ, アートネクサス理論による分析が陰謀論世界の理解において三つの点で有効性があると考えられる. 第一に, アブダクションは事実と仮説の真実性を取り違える契機となりうるだけでなく, 現実世界と認知による意味的世界を結びつける契機ともなる. つまり, 上記の例のように, 観察しえない認知上の意味的世界の存在である「カレーを食べたい人」の意図を, カレーという現実世界の具体的な事物の観察から現実に関係づける認識がアブダクションなのである. アブダクションへの焦点化とは, 現実世界と意味的世界としての陰謀論が結びつく契機に注目することを意味する. それゆえ, アブダクションを焦点としたアートネクサス理論に基づく作用の分析とは, 人々の認識と現実世界の相互作用を分析することに他ならないのである.

また, アブダクションは特に陰謀論を信じることに深く関わっていると考えられる. 陰謀論的信念の有力な仮説として, 曖昧な出来事や状況に過敏に主体性を検知し, その意図を説明として用いる認知傾向 (Hornsey, Bierwiazzonek & Sassenberg et al., 2022) が示されていることは先に示した. この認知傾向とは, 「何らかの出来事の裏で誰かが糸を引いている」と認識する傾向であり, 観察しえない何者かの存在やその意図という仮説から, 何らかの事象を解釈するアブダクションによるものに他ならないだろう. つまり, アブダクションの焦点化とは, 陰謀論を信じるという現象の理解において特異な意義があると考えられる. また先に, この認知傾向が心理学研究における陰謀論定義と同義であることを指摘したが, アブ

ダクションを焦点化した分析ならば、この認知傾向が陰謀論を信じる営みにおいて、実際にどのような意義を持つのかも明らかにできよう。

さらに、アブダクションへの焦点化によって、陰謀をめぐる人々の営みにおける、陰謀組織といった認識上の存在が果たす役割が分析可能になる。例えば、仮説的存在である「カレーライスを食べようとした人」のために「カレーライスにラップをかける」という行為は、ラップという事物を媒介した仮説的な存在へ作用しようとする営みである。同時に、この行為とは、「カレーライス」という事物によるアブダクションを通じて、「カレーライスを食べようとした人」が「カレーライスの発見者」に作用した結果として生じた営みでもある (Figure, 3)。このように、我々の日常における営みとは、認識上の仮説的存在との相互作用の連鎖に埋め込まれたものだ。そして、そのような相互作用の連鎖を、事物やアブダクションを媒介した作用という観点から分析可能にするのがアートネクサス理論である。例えば、上記の事例において、「カレーライス」はただその発見者にアブダクションを動機づけるという作用を及ぼす主体であるだけでなく、「ラップ」をかけられるという作用の客体となっているとも理解できるだろう。このような事物も含めた、ある存在が行為の主体 (agent) となったり、行為の客体 (patient) となっていく相互作用の連鎖を分析するのがアートネクサス理論である。

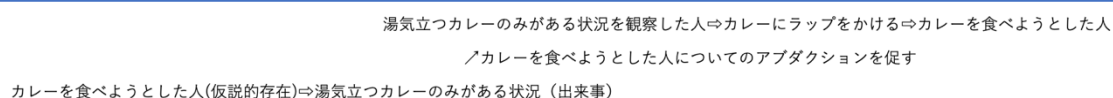


Figure. 3 作用の連鎖

ここで改めて、実際の陰謀論をめぐる事例を作用の連鎖としての分析を通して、アートネクサスにおける分析概念の定義を明示したい。関東大虐殺において「朝鮮人殺害さしつかえなし」という認識が人々に広まる契機として、警察署の立木に虐殺された朝鮮人の遺体が縛られて放置されていたことなどが指摘されている (後藤, 2023 p.100-pp.111)。つまり、朝鮮人の遺体が放置されていたという状況から、警察には「朝鮮人殺害さしつかえなし」という意図があると人々に推論されていたと考えられるだろう。この時の、朝鮮人の遺体をめぐる人々の推論をアブダクションとして分析すると、次のようになる。

- ① 虐殺された遺体を観察した。
- ② 「警察に朝鮮人殺害さしつかえなしという意図」が存在するなら、虐殺された遺体の存在も当然だろう。
- ③ 虐殺された遺体は、「警察に朝鮮人殺害さしつかえなしという意図」が存在する結果である。

この分析から、虐殺の客体となった朝鮮人の遺体が、人々に「警察に朝鮮人殺害さしつかえなしという意図」があるというアブダクションを動機づける主体となっていたことが理解できるだろう。この「警察に朝鮮人殺害さしつかえなしという意図」があるという認識から、人々がまた別の朝鮮人虐殺の主体となるという事態もあったかもしれない。そしてさらに、人々に虐殺されたまた別の朝鮮人の遺体が、人々にその認識を再起させるといった事態もありえただろう。このような作用の連関の分析から、人々の営みと認識の循環構造が理解可能になるのである。

そして、アートネクサス理論では、上述した事例における「遺体」のような、アブダクションを動機づける事象や表象などをインデックス (index) と定義し、¹²「朝鮮人殺害さしつかえなし」といったように、そのインデックスから人々にアブダクションされる仮説的存在、及びその意図や志向をプロトタイプ(prototype)と定義する。また、インデックスの存在やインデックスの特徴について帰属させられる存在を「アーティスト (artist)」と呼び、インデックスを通じて働きかけられたり、インデックスを介して作用する¹³エージェントを「レシピアント(recipient)」と呼ぶ(Table. 1)。上述した事例で言えば、縛られて放置された遺体のあり方が帰属させられるアーティストは警察であり、それから「朝鮮人殺害さしつかえなし」という警察の意図の推論を動機づけられ、さらなる作用を行う人々が「レシピアント」である。そして、そこでのさらなる作用として、再び別の朝鮮人が虐殺され遺体となるならば、その時に殺害した人々は遺体のアーティストとして作用していると分析される(Figure. 4)。本節では、アートネクサス理論を理論的視座として、陰謀論をめぐって生成する営みや信じるという現象の内在的論理を、どのような相互作用の分析から明らかにするのかを示した。ここまでの議論を踏まえた上で、次節で本研究のリサーチクエスチョンを明示したい。

¹² Gell(1998)の主な分析の中心は視覚的人工物とそれによるアブダクションでありブログといった言語的人工物ではなかった。しかし、Gell(1998)は言語的な人工物や音楽と視覚的人工物を分かつことはできないとして、「インデックスとは、エージェンシーのアブダクションと定義する特定の認知操作を可能にするものだ(pp.13)」と記している。つまり、視覚的人工物に限らず、アブダクションを可能にするならば、人々に観察される出来事や状況もまたインデックスなのである。

¹³ インデックスを媒介して作用するレシピアントとは、例えば湯気の立つカレーの事例では、ラップというインデックスを媒介して、カレーを食べたい人というプロトタイプに作用する人のことである。また、Gell(1998)は、偶像崇拜の実践において、社会的な役割が与えられた偶像を操作することで、人々や偶像に表象されるプロトタイプに作用しようとする主体を、インデックスを媒介して作用するレシピアントとして分析している (Gell, 1998, p.132)。

Table. 1 アートネクサス理論における分析概念

分析概念	定義
プロトタイプ	アブダクションされる仮説的存在，及びその意図と志向
インデックス	アブダクションや解釈を促す事物や表象
アーティスト	インデックスの存在や特徴について帰属させられる存在
レシピアント	インデックスからアブダクションを促されたり，インデックスを媒介して作用する存在

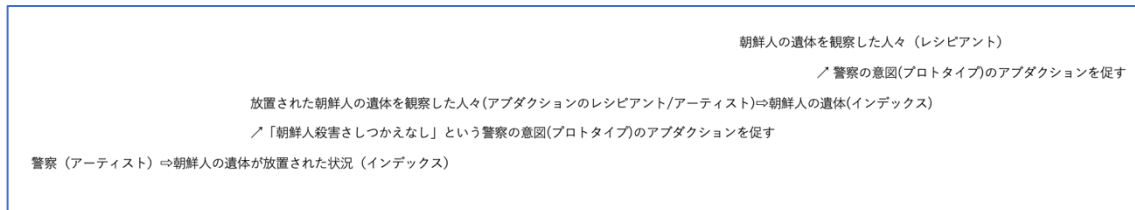


Figure. 4 仮説的存在との事物を交えた相互作用の連鎖

2.6 リサーチクエスション

インターネットでの交流を通して陰謀論をめぐる過激な事件が生じるようになり、陰謀論を信じる心理の解明が心理学研究の課題の一つとなっている。そのような中で、個人還元主義的なアプローチから、陰謀論を信じる心理が、認知、集団的作用、社会的事象などが絡みあって生じることが明らかにされてきたが、陰謀論を信じるという現象が如何なることなのか議論されてこなかった。

何かを信じるとは、それが信じられる世界に人々が生きていくことであり、信じるという現象は、その世界の内側における人々の営みから理解する必要がある。中でも、社会問題へと至るような強固な陰謀論世界のあり方については、そこでの陰謀組織の認識と営みの循環構造を特定することが鍵となると考えられる。そこで本研究は、社会問題化した陰謀論ブログの言説を対象に、人々の生きる世界を内在的にアプローチしてきた文化人類学理論の中でも、信仰に内在する営みを社会的事象などとの相互作用という観点から分析するアートネクサス理論を理論的視座として、陰謀論世界に独特な認識と営みの循環構造を特定する。そして、その結果から陰謀論に生きるとはいかなる現象なのかを明らかにする。

3. 方法

3.1 調査方法

調査の方法としてヴァーチャル・エスノグラフィーの中でも非干渉型観察法を採用する。エスノグラフィーとは、人々が実際に活動する現場を内側から理解するための調査・研究の方法として、文化人類学における中心的な研究方法として発展し、質的研究の源流に位置付けられる方法(小田, 2010)である。小田(2010)によると、エスノグラフィーの基本的な調査方法としては、人々が活動する現場に調査者が赴き、活動に参加しながら観察する参与観察やインフォーマントへのインタビューなどが行われるが、決められた手順のない自由度の高い調査方法である。また、その参与観察を通して調査者が見聞きしたり経験したことを、フィールドノートとしてまとめて提示するのがエスノグラフィーである(佐藤, 2013)。

そして、そのようなエスノグラフィーの中でも、サイバースペースを現代における人々の活動空間とみなして調査するのがヴァーチャル・エスノグラフィーである。通常のエスノグラフィーが対象とするアナログのフィールドとは異なる特徴として、サイバースペースを対象とするヴァーチャル・エスノグラフィーでは、参与観察を絶対不可欠な要素とみなさない(木村, 2018)という特徴がある。従来のエスノグラフィーでは、人々の思考や感情、文化的文脈や意味生成のダイナミクスを把握するために、調査者が長期的に人々の活動に参加することで、調査者の存在に関わらず人々の自然な振る舞いを観察する参与観察が重視されてきた(木村, 2018)。しかしながら、特定のサイバースペースにおいては、そこでの人々の自然な振る舞いの記録に調査者の直接的参加が必要ない場合がある。例えば、本研究が分析する陰謀論をめぐるやりとりや営みは、誰でもアクセス可能なブログというサイバースペースを中心にテキストを介して行われていたもので、そこでの営みの観察には直接的なインフォーマントへの介入は必須ではない。また、このようなブログといったサイバースペースは、同時性の制約からも解放されたもの(木村, 2018)であり、調査者が実際に同じ時間を長期的に過ごすことも必要とされない。このように、対象とする活動の自然な観察に、直接的参加が必要ではないサイバースペースを対象とする調査において用いられるのが非干渉型観察法である。また、この非干渉型観察法の特徴としては、従来の質的心理学で一般的に採用されてきたインタビュー調査も行わないという点がある。このような非干渉型観察による記録については、調査者による干渉のない自然発生的データであるために、質的心理学では生態的妥当性を高める方法として評価される(Silverman, 2020/2013)ようになっている。本研究では、対象とするブログというサイバースペースの特性と、生態的妥当性という観点から、非干渉型観察法を採用する¹⁴。

¹⁴ 非干渉型観察法によるデータを扱う本研究は、フィールドへの参加を通じた、自己の身体の変化やそれへの葛藤についての記述や、活動に対するインフォーマントの相貌といった量的には記述できない質的領域の記述を看過している

具体的な調査として、ブログ開始時から 2017 年までに投稿されていたブログ記事やブログ上でやりとりされるコメントを、対象のサイトとアーカイブサイトから 2019 年 1 月に収集した。アーカイブサイトは、2015 年にサーバーからブログが遮断された経験から再び遮断されるような事態に備えて、ブログの内容の保存と公開を目的としてブログ関係者が別のサーバーを利用して運営しているもので、対象のブログと内容自体に違いはない。それらのテキストデータを分析対象として、時系列順にアブダクション、およびインデックスという観点から整理した。具体的な分析手順として、最初に、ニュース記事などの引用部分を省いて、プロトタイプの示唆とその根拠が含まれる約 362000 文字の記事とコメントの抜粋を抜き出した。次に、先に抜き出した約 362000 文字のテキストより、「A の日記」から生じた集团的運動について記された約 110000 文字のテキストを抜き出した。それらをさらに、集团的運動の動機と解釈が示されるテキストに焦点を絞り、当時の出来事などの文脈情報を踏まえながらまとめて、フィールドノートとして 411 の抜粋からなる約 56000 文字のテキストに編集した。この過程で事例 1 から事例 21 で示す、本研究が扱う陰謀論世界において中核となるプロトタイプを特定した。なお、参与観察を行わない非干渉型観察法では、しばしば特別な倫理的配慮を要する場合がある。この点について次に詳細に示す。

3.2 倫理的配慮

本研究は人を対象にした研究ではなく、公開されたテキストを対象とした研究である¹⁵。個人のブログ記事およびそのコメントをデータとして示す研究はこれまでも行われてきている(e.g. 青山, 2021)。しかしながら、日本心理学会における倫理委員会(2011)ではブログを対象とした研究における倫理的な配慮についてのガイドラインが未だに明確に定められていない。

とはいえ、ブログなどのオンラインデータの扱いにおける倫理的な配慮について議論されていないわけではない。例えば、社会調査におけるブログのデータの使用における許諾にかかわる倫理的配慮については Stainton (2017) が詳細な議論を行っている。Stainton (2017) によれば、ブログの目的や内容が公的なものであれば特別な許諾の必要がなく、ブログの公開が目的とされていない場合、許諾が必要となる。その目的や内容が公的なものであるかについては、そのプラットフォームが情報の公開を前提としているか、公開を望まない人のた

という限界が認められるだろう。ちなみに、筆者が研究対象としてではなく、一読者として「A の日記」に触れていた 2018 年の 5 月に、陰謀組織の関係者とされていた人物が登壇するイベントに赴き、その人物を実際に見て抱いた印象と、「A の日記」に記されたその人物の記述から抱いた印象の間に大きな違いを感じたことが、本研究の出発点であったように思われる。また、そのイベントでは、その登壇者が自身を日本近代史の教科書に記される人物の末裔だと語った際に、筆者はその人物の苗字を非常に珍しいものとして認識しながらも、その時まではその苗字を日本人とは異なるルーツに由来するものではないかと捉えていたことに気づいたのだった。本研究におけるフィールドノートは、上述のような観察者の無意識の没入やそれへの葛藤といった側面についても取りこぼしてしまっているだろう。

¹⁵ 人を対象とした研究ではないために、本研究は著者が所属する青山学院大学研究倫理審査委員会から、特別な審査を要しないものとして承諾されている。

めの選択肢を用意しているかが基準とされている(Legewie & Nassauer, 2018).

このような議論を踏まえ、本研究が対象とするブログが①「非公開や削除を希望される方はご連絡を」と非公開の選択肢を示しながら、②「言論の場を提供し、事実発信と情報拡散をめざす」という方針のもとに、③各ブログ記事に他の SNS に記事を転載されるための SNS シェアボタンが設けられ、④さらに、その内容をもとに多数の出版を行っていることから、本研究が対象とするブログにおける言説を、許諾を要しない公的な言説として判断して取り扱う。

しかしながら、本研究が扱うブログ上でのコメントのやり取りには、実名だと考えられるハンドルネームで行われたものが含まれている。また、その中には投稿者同士の親しい交流や、投稿者の家族との日常について言及された投稿が含まれている。個人ブログを扱った研究での実際に採用された配慮の基準から、個人が特定できる場合は許諾を取り、そうでない場合、個人情報匿名化するなどした際は、許諾は取らないことが慣行となっている(中金・小野, 2018)。このような慣行を踏まえ、本研究では、投稿者のハンドルネームについての情報から個人が特定され、そのことで投稿者らに不利益が生じる可能性を配慮して、個人情報の匿名性を確保するためにハンドルネームに仮名を与えている。

さらに、本研究で事例として示すブログの記事やコメントには、特定の個人や組織を名指しで陰謀組織の関係者とする記述や、特定の文化や人種を貶める記述も少なくない。それらの情報を基に検索されることで、個人が特定されたり偏見が助長されたりする事態を避けるために、ブログ記事の趣旨を変えない範囲で文章を編集し、それをフィールドノートとして整理した。

4. 結果と考察

4.1 研究対象の概要と概略

本研究が扱うブログ「A の日記」はブロガーA によって 2012 年に開設された。それから 2024 年現在まで、継続して戦後から日本社会に潜んでいるとする陰謀組織についての言説を産出しつづけている。同時に、「A の日記」ではその陰謀組織を排除するための様々な運動が呼びかけられてきた。そして、それらの運動の一部は、デマに基づいた業務妨害に該当する可能性があるとして、マスメディアでも取り上げられてきた(J-cast ニュース, 2015)。また、2015 年から現在までに、「A の日記」に投稿された記事や常連読者のコメントを元にした書籍が保守系の雑誌や書籍を多く扱う出版社から 6 冊出版されている。

しかし、なぜ「A の日記」は、マスメディアで批判的に報道されることもありながらも、「A の日記」を元にした書籍が出版されるまでに人々から支持を集めながら維持されてきたのだろうか。「A の日記」をめぐる営みにおける相互作用の詳細な分析に入る前にここで、「A の日記」が人々からなぜ支持を集めることができたのかを、「A の日記」における陰謀論言説の概要と「A の日記」を巡る出来事の概略を示して検討しておきたい。ここから、可能な限り時系列に沿って事例を示していくが、一部では分析や「A の日記」における記述内容の理解を優先して時系列を前後させながら事例を提示する。

4.1.1 陰謀論言説の概要と特徴

「A の日記」でブロガーA によって主張されている言説とは、陰謀言説としては珍しいものではない。「A の日記」で主張されている陰謀の内容を端的に述べるならば、日本国内に居住する特定の外国人たちによって構成される陰謀組織が、戦後から日本の政治やマスメディアを統制することで不当に利益を得ていたり、日本を貶めているというものだ。「A の日記」で展開されている陰謀言説の内容を端的に示した一例として、2013 年の夏に「A の日記」に投稿された記事からの抜粋である、事例 1 を示そう。

[事例 1] マスコミ報道は偏向しています。2013/07/02

昨年の秋には、選挙で民主党が大敗すると予想しました。なぜなら、日本の政党でありながら外国人勢力漬けであることが国民にばれたからです。それに関連した報道がメディアにない中、数々の予想が完璧に現実となりました。もうネットを利用している方々をご承知でしょうが、現在のマスコミ報道は偏向しています。意図的に日本を貶めているので、対抗措置が必要でしょう。

事例1では、ブロガーAは「民主党」について「外国人勢力漬け」と評しながら、「それに関連した報道がメディアにない」「日本を貶めている」と指摘している。こうした事例1のような投稿は他にも多数観察できた。したがって、ブロガーAが日本の政党やマスメディアが特定の外国人勢力に統制されているという認識に基づく言説を「Aの日記」で行ってきたことがわかる。このような政治に関係した陰謀言説は珍しいものではない。秦(2023)は、政治を題材にした陰謀言説が多い理由として、政治の意思決定における情報がしばしば完全に明らかとされずに憶測の余地を生み出すためだと指摘している。

そして、このような「Aの日記」で主張される言説は、既存のインターネット文化に大きく影響を受けたものだと考えられる。上述のような「Aの日記」で主張されている、日本の政党やマスメディアが特定の外国人勢力に統制されているという言説は、「Aの日記」が開設された2012年の時点において、新しいものではない。「Aの日記」が開設されたのは2012年であったが、2000年代にはすでに特定の外国人たちが日本社会で「特権を享受している」として、インターネット掲示板等で排外的言説を行なう人々が存在し、その俗称として「ネット右翼」という表現が用いられるようになっていた(e.g. 安田, 2012)。2010年代には、ネット右翼言説は、インターネット掲示板だけではなく、数々のブログサイトで行われるようになっており、日本のインターネットカルチャーの一翼を担うものになっていた(e.g. 伊藤, 2019)。つまり、「Aの日記」が開設された2012年には、特定の外国人たちによる陰謀を訴え、排外的な言説を展開するブログを支持する一定の読者層が既に存在していたと言えるだろう。

また、マスメディアが特定の外国人たちによって統制され、偏向された報道を行っているという認識する傾向については、定量的な研究からネット右翼の人々に共通する傾向として明らかにされている(伊藤, 2019)。加えて、倉橋(2019)は、ネット右翼と呼ばれる人々は、インターネット上での新しい「リテラシー」として、マスメディアの「プロパガンダ」を見抜くという言説実践を行っているという議論している。メディアなどを統制して不当な利益を得ている特定の外国人が存在するという陰謀言説、及びそれを見抜いて告発するという言説実践は、「Aの日記」が登場する前からインターネット上に存在していたのである。先に触れたQanon言説が、従来からインターネット上に存在していた陰謀言説や保守的言説が組み合わせられて生じたと指摘される(Rothchild, 2024/2021)ように、「Aの日記」で展開される言説もまた、唐突にインターネット上に生み出されたものではなく、既存のインターネット文化の影響下に生じたものだと考えられるだろう。また、「2ちゃんねる」や「Yahoo! ニュース」といった、従来のネット右翼言説の発信場所となっていた(伊藤, 2019)とされるインターネットサイトを、ブロガーAが頻繁に参照している様も多く観察された。その一例として、2ちゃんねるに由来するテキストをブロガーのAが引用する記事からの抜粋である事例2を示そう。

[事例2] 2ちゃんねるから引用, 2013/11/09

Yahoo で陰謀組織が行っていたやり取りと思われる書き込みを2ちゃんねるから引用します。

そうですね 投稿者：スヒョン 投稿日：2007年7月30日(月)07時49分30秒

今までは、我が同胞たちは比較的攻撃的な声闘というやりかたを使ってきましたが今後はそれだけでは難しい状況になりつつあります。これからの日本社会を背負う日本人の若者世代をどう理解させていくかが大きなポイントです。お人好しな日本人の気質をうまく利用していく必要があるのです。日本に対して姿勢を低くするのは我々の自尊心が傷つくものですがそれも数年の辛抱です。生活保護支給に関してはもうすでに問題なく支給してもらえる状態を勝ち取っています。同じ条件の日本人がいたら我々のほうが有利なやりかたです。

(略)

マスコミ対策 投稿者：スヒョン 投稿日：2007年7月30日(月)15時49分54秒

あるかたからマスコミ対策は大丈夫なのかと聞かれましたが大丈夫です。ここ数ヶ月の報道を思い出してください。自民党の不祥事や失言などはいかに報道されましたが民主党の失言や不祥事はほとんど流れなかったでしょう。ときどき冷や冷やした状態はありましたがテレビ局に新聞など主要なメディアのほうは本部のほうで抑えてあるようです。またマスコミ各社に勤めている同胞たちも自民党の不祥事は徹底的に報道して民主党の失言などはやりすごすような体制ができていますから心配ありません。なにより日本人は新聞を信用しますからこの辺は大丈夫でしょうね。大手新聞社やテレビ局はすべて抑えてあるとのことです。愚民対策とでも言いましょう。知らないのは一般日本人だけというなんとも可哀想な状況ですね♪

この事例2では、「お人好しな日本人の気質をうまく利用して」いる外国人と思われる人々が存在し、さらにその人々がマスメディアを「抑えてある」ことを示唆するコメントが引用されている。この引用元の投稿が、実際にどのような人物のいかなる意図のもとになされたのかは不明だが、「Yahoo」から2ちゃんねるに転載されたものであることがブロガーAに記されている。ブロガーAは、ネット右翼文化圏に流通していた、ネット右翼的陰謀言説を素材にして「Aの日記」を制作していたことがわかるだろう。したがって、「Aの日記」は既存のネット右翼的陰謀言説の論理展開を踏襲しているために、従来からネット右翼的陰謀言説を支持していた人々から支持を集めることができたと理解できる。

しかしながら、従来のネット右翼言説の特徴として指摘される性質の言説だけが「Aの日記」で行われていたわけではない。例えば、ネット右翼の定量的研究では、自由民主党を支持する傾向(永吉, 2019)がネット右翼の定義とされているが、「Aの日記」の記事のコメン

ト欄に一度ではなく、2015 年から定期的に投稿していた常連投稿者たちのコメントにおける政治的立ち位置は様々であった。さらに言えば、常連投稿者による自由民主党議員への批判的コメントも多く観察できた。また、ある常連投稿者は霊的な存在について言及するコメントを繰り返していた。そして、その霊的な存在へ言及するコメントをブロガーA が何度も記事としてまとめるといった事態が見受けられた。この点については、近年の陰謀言説がスピリチュアリティとのハイブリッドの信念体系になっていると指摘されている(辻, 2023)。

「A の日記」における陰謀論は、従来のネット右翼的言説に影響されながらも、「A の日記」が継続される中で、ネット右翼的な政治的言説というよりも、他の陰謀言説に近い言説へと発展していったのである。

中でもそれまでのネット右翼言説とは大きく異なる要素として、次に示す3点が「A の日記」から観察された。まず、その一つが2013 年からブロガーA に投稿される予見的な内容の記事である。例えば、ブロガーA は中国・韓国が2015 年には崩壊するだろうという見解を記事で示していた。予見的な内容という要素は、従来の陰謀論定義に含まれないが、Q anon と共通するところである。Q anon において最初になされた投稿が、ヒラリー・クリントンが逮捕されるだろうとする日時について言及するものであり、さらに Q anon 誕生の引き金となったのが、2017 年 10 月 5 日に米軍指導者との夕食会後にトランプが記者たちに向かって、その夕食会の意味するものが「嵐の前の静けさかもしれない」と発言したことが指摘されている (Rothchild, 2024/2021)。また、「A の日記」に記される予見の数々は、Q anon 言説における予見と同様に一度も現実となることはなかったにも関わらず、Q anon ムーブメントと同様に「A の日記」の読者たちの求心力を失わせるような様子は見られなかった。

もう一つのそれまでのネット右翼言説にはなかった要素として、ブロガーA や常連投稿者たちが安倍晋三と意思疎通が成立しているという認識に基づくと思われる投稿を行っていた点がある。詳細は分析と共に後に示すが、そのような認識に基づく投稿やコメントは、2015 年からブロガーA が読者たちに呼びかけていた数々の運動が繰り返される中で顕著になっていった。当時の政治の中枢にいた安倍が、陰謀の主体ではない形で、陰謀論言説において重要な位置を得ていたのである。この要素もまた、Q anon 言説におけるトランプの位置付けに通じるものだろう。

さらに、それまでのネット右翼言説とは異なる点の三つ目が、排外対象の変容がある。「A の日記」で呼びかけられた運動を経ていく中で、2016 年までに「A の日記」では、ブロガーA や常連投稿者から、特定の民族や国籍に関わらず、特定の弁護士や大手書店で働く従業員などが陰謀組織の一員として言及されるようになっていった。「A の日記」では、排外の対象が特定の外国人たちから拡張されていったのである。Q anon 言説でもまた、インターネット掲示板上でその支持者たちの持論が加えられ、製薬会社の悪意の元にワクチンが製造されているとするワクチン陰謀言説などが合流し、Q anon 支持者たちが陰謀組織に関わるとする対象が拡張されていったことが確認されている (Rothchild, 2024/2021)。

こうした「A の日記」における予見的な投稿や排外対象の変容といった新たな特徴が、「A の日記」への人々からの支持や持続に、少なからぬ影響を与えた可能性がある。そこで本論では、上記の特徴を踏まえながら、「A の日記」が社会問題として報じられた数々の運動を引き起こす過程についての記述を次に試みたい。

4.1.2 「A の日記」を巡る展開の概略

ここでは、2012 年から 2018 年までの「A の日記」における言説の変容と、「A の日記」を発端とする運動の展開の概略を示し、それぞれの時期の特徴から、時系列上の区分を示したい。

「A の日記」では、その開設時から陰謀組織の告発がなされていたわけではなかった。「A の日記」開設当初、ブロガーA は自身の死期が近づいているという認識を示しながら、ブログ開設の目的を「人生経験」を次世代に伝えることだと記していた。そして「人生経験」として、ブロガーA は自身の生い立ちや親族から伝え聞いた情報を「ソース」と呼んで参照しながら、日本への愛着について記した記事や、国内政治事情についての自身の見解を記した記事の投稿を始めた。なお、ブロガーA による実際のブログタイトルにも「日記」という表現が用いられているが、更新の頻度は不定期であり、更新時は同時に複数の記事が投稿されていた。

「A の日記」に陰謀組織の存在が現れるようになるのは、尖閣諸島や竹島を巡って中国・韓国との関係悪化が報道されるようになっていた 2012 年の夏であった。この時期から、ブロガーA は、近隣諸国との有事が生じた場合の見解を記した記事を「A の日記」に投稿していくようになる。そのような中で、「有事について」と題して、日本の戸籍を「不法」に習得した人々が、尖閣諸島や竹島を巡る有事に備えて日本から逃げているという話を、ブロガーA の知人から伝えられたという趣旨の記事が投稿された。

そしてその直後、安倍を総裁とした自由民主党が政権与党に復帰する 2012 年末の衆議院選挙についての見解を記した複数の記事を投稿していくなかで、ブロガーA は陰謀組織の存在を明示するようになる。例えば、自身が目撃したという選挙活動についての情報がマスメディアで報道されなかったが、その選挙活動についての情報がインターネット上に投稿されていたとして、メディアを統制する陰謀組織の存在を主張する記事を「A の日記」に投稿していた。同時に、2012 年の末にかけて、尖閣諸島や竹島を巡る有事の可能性を考察した記事を投稿していく中で、ブロガーA は有事に至る可能性は低いという見解を示しながら、日本社会に潜んでいるとする外国人組織についての情報がインターネット上にないことへの疑念を示していた。このような「A の日記」のテキストを介して展開されていく陰謀組織が存在する世界観を、ここから「陰謀論世界」と呼びたい。そして、ここまで説明してきた、「A の日記」の開設から陰謀組織の存在が「A の日記」に現れるようになる 2012 年末までの時期を、本稿では「陰謀論世界の萌芽期」と呼んでいく。

2013 年になるとブロガーA は、第二次安倍政権の政策についての見解を交えた記事を投稿しながら、インターネット上の情報を参照して、陰謀組織の存在を告発するようになり、ブログの目的として「日本人の覚醒」を掲げるようになっていた。また同時に、ブロガーA は 2015 年には中国・韓国が「崩壊」という予見的な内容の記事を投稿するようになる。そうして 2015 年の春までに、ブロガーA は安倍政権と陰謀組織の関係性について言及する記事や、中国・韓国の「崩壊」によって国籍を偽って日本社会に潜む人々が「武装勢力」となる可能性を示唆する記事を「A の日記」に投稿していくようになる。概要に示した予見的要素が「A の日記」に加わるのがこの時期だったのである。またこの時期に、「A の日記」はその開設以来、コメント機能やレコメンド機能などを用いてなかったにも関わらず、読者の SNS や「ファンブログ」などを通じて、月に約 20 万件もアクセスされるようになっていた。ファンブログとは、別のブロガーである b による「A の日記」における不明瞭な記述について考察し、解説するブログである。このように、2014 年末までの時期において、「日本人の覚醒」が目的に掲げられ、インターネット上の情報が参照されるようになり、徐々に概要に示したような「A の日記」独特な内容や詳細が加えられて独自の言説として変化していた。そこで本稿では 2013 年から 2014 年末までの時期を、「陰謀論世界の確立期」と呼んでいく。

2015 年の 2 月からブロガーA は、国籍を偽って日本に潜んでいるとする陰謀組織の排除を企図して、出入国在留管理庁（以下、入管）へ陰謀組織の不法滞在通報（以下、通報）を読者に呼びかける記事をブログに投稿するようになる。一月の間に 3 万件の通報を受けた入管は、警察にこのブログについて相談し、その件がマスメディアで批判的に報道されるようになった（J-cast ニュース, 2015）。このような経緯からこのブログは、サーバーからアクセスが遮断され、一時的に閉鎖されたが、また別のサーバーで再開した。その際に、ブログ記事へのコメント欄が設けられ、読者との相互交流が生じ、読者のコメントがブログの記事として掲載されるようになる。ブロガーA が入管への通報という社会運動を読者たちに呼びかけるようになる 2015 年から、常連投稿者たちがブログに現れる 2015 年末までのこの期間を、「動員期」と呼びたい。

そして、2015 年末から入管への通報に続けて、ブロガーA は首相官邸（以下、官邸）のホームページに用意されたメールフォームを利用して集团的にメールを送る「集団メール」運動を読者に呼びかける。この集団メール運動はブロガーA が、官邸に送るメールの内容を読者たちに募り、ブログ上でブロガーA と常連読者たちで内容を検討しながら決定されたメールを官邸に送るという運動である。そして、この集団メール運動を行っていく中で、概要にて示した「A の日記」独自の要素である、安倍と意思疎通が成立しているという認識に基づくと思われる投稿が現れるようになる。また、集団メール運動と同時期に、ブロガーA が記した記事や、常連投稿者たちによる「A の日記」へのコメントを交えた「A の日記」書籍が出版されていく。そして、この「A の日記」の書籍化をきっかけに常連投稿者たちは、民族にかぎらず、特定の書店の店員などを「陰謀組織」の関係者としてみなすようになって

いった。つまり、排外対象の拡張という「A の日記」独自の特徴は「A の日記」の書籍化から加わったのである。この時にはブロガーA による記事だけでも 1000 件を超えており、読者のコメントを含めると一月の間に約 20 万字に及ぶやり取りがなされるようになる。動員期以降のこの期間を本稿では「統動員期」と呼びたい。因みに、この統動員期間に先述したファンブログのブロガーb も常連投稿者としてコメントを記すようになっていたが、このブロガーb のコメントは 2016 年の末には見られなくなっていた。そして、2017 年末にそのブロガーb は自身のファンブログにて「A の日記」について、「熱気を帯びた空間で」ブログに集う人々から標的になる恐怖を感じていたという自身の心情を語りながら、「陰謀論」という表現を用いて、その解説と拡散を担ったことや、苦言を呈さなかったことを自身の過ちであったと謝罪する記事を投稿している。

しかしながら、ここでの概略の記述から、①「A の日記」の独自の要素である予見的な内容が現実となってきたわけではないこと、②安倍との意思疎通が成立しているという認識や、③排外対象の拡張という独特な要素が「A の日記」を支持する常連投稿者たちを交えた運動から加わっていたことがわかるだろう。つまり、「A の日記」に独特な要素が加わったことで、支持を集めるようになったのではなく、それらは「A の日記」おける営みから生じたものであると考えられるだろう。故に本稿では、「A の日記」が支持された理由としては、従来から一定の支持を集めていたネット右翼的言説を展開していた点を指摘するに留めたい。

とは言え、これらの独自の要素がこの「A の日記」陰謀論世界における営みにおいて重要ではなかったのかは、詳細を確認しなければわからない。次から、適宜これらの独自の要素にも注目しながら、各時期の詳細を示し、そこでの相互作用をアートネクサス理論に基づいて分析していきたい。

Table. 2 「A の日記」における展開の時系列とその特徴

	時期	特徴
陰謀論世界の萌芽期	2012 年から 2012 年末まで	徐々に陰謀組織の存在が「A の日記」に示唆されていく。
陰謀論世界の確立期	2013 年から 2014 年末まで	予見的な投稿など、ネット右翼言説とは異なる独自の要素が「A の日記」に加わっていく。
動員期	2015 年から 2015 年末まで	「A の日記」で、最初の集団的運動が読者に呼びかけられ、集団的運動が実施される。
統動員期	2015 年末から 2017 年末まで	常連投稿者が現れるようになる。二つの集団的運動が行われるようになる。

4.2 陰謀論世界の萌芽期

ここから、「A の日記」における言説の展開を時系列にしたがって詳細を追いながら、アートネクサス理論から分析し、「A の日記」陰謀論世界の営みにおける相互作用のあり方を明らかにしていく。

本研究が扱う「A の日記」のブロガーA は、その開設当初から陰謀組織について言及する記事を投稿していたわけではないことを先に指摘した。「A の日記」は 2012 年に開設されたが、陰謀組織の告発が投稿の中核になったのは 2013 年からであった。では、どのような相互作用から「A の日記」に陰謀組織が現れるようになったのだろうか。まずこの点について、「A の日記」が開設されてから記事に陰謀組織の存在について示唆されるようになる「陰謀論の萌芽期」における事例を示しながら分析したい。

分析に入る前に、「A の日記」に陰謀組織の存在が現れる以前にどのような投稿がなされていたのかを確認しておきたい。「A の日記」を開設した当時は、ブロガーA は自身の死期が迫っているという認識を示し、「人生経験」を記すことを目的として「A の日記」を開設したと記していた。その「A の日記」開設時の記事からの抜粋である事例 3・4 を以下に示そう。

〔事例 3〕 人生経験を伝えるために 2012/08/16

友人たちがこの世を去った。私ももう長くないだろう。これまでの人生経験を多くの次世代に伝えるために、三十人の親族の声を併せて発信したいと思います。ソースの大半は私と私の父母の経験であり、嘘偽りはありません。ここでは私の親族を紹介します。（略）煩わしさを避けたかったので、コメントなどは受け付けない設定にしています。

〔事例 4〕 治療しても数年の寿命 2012/08/16

お酒もほとんど飲まず、暴食などとも無縁の私ですが、肺と胃がダメなようです。自分の体力と生き様を過信しすぎていました。抜かったという思いです。友人たちは、治療しているにも関わらず日毎に生気が失われていき、死ぬために生きているような状態になって亡くなりました。本人はもちろん家族にとっても大変なことだったでしょう。そこで「治療しても数年の寿命なら、好き勝手にいこう」と考えました。たまに検査に行きますが、治療は受けていません。検査では悪化しているようですが、自覚症状はないです。

事例 3 に「ソースの大半は私と私の父母の経験であり、嘘偽りはありません」とあるが、実際に「A の日記」開設時の 2012 年の 8 月は、ブロガーA は事例 2 に示されるような、インターネット上のネット右翼言説を引用するのではなく、自身や親族の経験を参照した記事を投稿していた。また、ブロガーA の病識が示されている事例 4 から、ネット右翼的な言説を開設当初から投稿されていたわけではなかったことが確認できる。故に「A の日記」

の開設当初の記事からは、ここからネット右翼言説的な陰謀をテーマにした記事が記されていくとは読者は予想ができなかったと思われる。

しかしながら、「A の日記」の開設から間もなくして、ブロガーA は「人生経験」として、日本人の「国民性」や日本と諸外国との関係について、従来のネット右翼言説にも共通するような保守的な見解とも捉えられる投稿をするようになっていく。その例として、この時期にブロガーA が投稿していた、記事からの抜粋である事例 5・6 を示そう。

〔事例 5〕 日本人の国民性 2012/08/21

米国が日本を警戒する理由です。まず一つは国民の勤勉さ、民度の高さ、教育水準の高さがあげられるでしょう。次に、約束を命がけで守るという国民性、臥薪嘗胆の精神、そしていざとなれば一致団結する国民性でしょう。民度の高さは世界一です。教育水準の高さと就学率も世界一二を争います。そして同時に裏切りや理不尽な行為をする国を決して許さない厳しさが 있습니다。日清戦争後の三国干渉から臥薪嘗胆の日ロ戦争、ソ連による日ソ不可侵条約違反の北方 4 島の占拠、不当な戦勝国の振る舞いを日本は決して忘れません。

〔事例 6〕 親族の意見を聞きました。 2012/08/25

米国は自国が一番優れていると認識しています。あるいは、ドイツと並ぶという認識かもしれません。しかし、中国やロシアがどう足掻こうとも米国が上です。日本について親族全員の意見を聞きました。日本より上と思う国を挙げるものはいませんでした。驚きました。日露戦争の勝利によって、日本は優越意識を持ち、ロシアは劣等意識を持っています。

事例 5 における「民度の高さは世界一です」という記述からは、ブロガーA の日本に対する愛着が伺える。また、事例 6 ではブロガーA は自身の親族の意見を参照して、日本が世界各国にたいして「上」だという主張をしている。しかしながら、どのような観点から何が「上」なのかは明示されていない。また、各国のどのような主体がその優劣感を抱いているのかも不明な書き方となっている。本稿で示す抜粋は倫理的配慮からフィールドノートとして修正を加えたものであるが、「A の日記」本文は基本的に不明瞭な記述も多く、難解だと言えるだろう。このような不明瞭な記述について、Boudry & Brackman(2011)は、具体的な解釈と大まかな解釈の間を行き来可能にする、陰謀言説に特有のレトリックだと指摘している。また、Q anon 言説においても、極めて曖昧な表現で展開されてきたことが指摘されている(Rothchild, 2024/2021)。なお、事例 3 でも示されていたように、「A の日記」開設時は、読者からの「コメント」を受け付けられない設定となっていたために、その記述について読者が理解のための質問をすることも、ブロガーA が回答することもなかった。この「A の日記」の文章の難解さについては、2015 年末から度々ブロガーA 自身から「陰謀勢力からみつからないように」するために意図的なものだった主張されるようになる。一度、時系列から離れて、ブロガーA が自身の文章について触れた、2015 年 10 月に投稿された記事からの抜粋で

ある事例7を示したい。

〔事例7〕 初期の頃は読みにくかったでしょう。 2015/10/19

初期の頃は読みにくかったでしょう。私も今、記事を見るとぞっとします。陰謀勢力から見つからないように記事を投稿するという曲芸のようなことをやっていたので、読者の皆様はよく我慢してくれたものだと思います。しかし、回顧には早いですね。先に進みます。

この事例7では、ブロガーAが「陰謀組織」から見つけられることを危惧して故意に不明瞭な記述による投稿を行っていたと主張していることが確認できるだろう。この事例7は、2015年末の記事からの抜粋であるために、既に「陰謀勢力」という表現が見られる。

しかしながら、「Aの日記」で陰謀組織として告発されるようになる存在が現れるようになるのは、尖閣諸島や竹島を巡って日本と中国・韓国との緊張関係が報道されるようになった2012年の夏からだ。この時期に「有事について」と題した記事が複数投稿されるようになり、その一つとしてブロガーAが所属するゴルフやカラオケなどの様々な趣味の集まりの一部のメンバーが、その集まりから退会したことを「異変」と表現して記した記事が投稿された。その記事では、ブロガーAが趣味の会の他のメンバーから、退会者らは日本の戸籍を「不法」に取得しており、「紛争」に備えて日本から「逃げた」のではないかと、という解釈を聞く場面が記述してある。その場面について記した投稿の抜粋である事例8を次に示す。

〔事例8〕 伝え聞いた仮説 2012/09/04

幹事というとなんと面倒で雑用も多いですが、やることはせいぜい挨拶ぐらいのものです。カラオケやゴルフなど行ってきて20年以上の歴史がある会です。しかしながら、若い人たちとのゴルフは体力的に辛く、カラオケも最近の曲は分かりませんし、旅行でも若い人たちは海外を好みます。とは言え、皆、気持ちは若く楽しくやっています。この会は、一時は200名を超えていましたが、一昨年に百人ちょっとになったところで、異変が起きました。突然、数十名を越える退会者がでたのです。幹事たちと次のようなやり取りをしました。「退会の原因は?」「紛争になると問題があるでしょう」「どういうことですか?」「彼らは戸籍を強奪してたんですよ」「有事となれば逃げなくてはと」驚くべき真実が彼から明かされたのです⁽¹⁾。

この事例8で示される会話のやりとりにおける発話主体については「Aの日記」の原文においても明記されていなかった。とはいえ下線(1)の「彼から明かされた」という記述からは、自身の所属する趣味の集まりのメンバーから、日本の戸籍を「強奪」して暮らしている人々がいることをブロガーAが知らされたことを記しているのがわかる。この事例8では、ブロガーAが陰謀組織の存在について主張しているのではなく、あくまで知人との会話を忘

備録的に記述しているものだと捉えることもできるかもしれない。ブロガーA自身が、他者からの伝聞の記述ではなく、陰謀組織の存在について根拠を示しながら初めて主張したのは2012年末だった¹⁶。2012年末、安倍晋三が総裁を務めていた自由民主党が公明党と共に政権与党に復帰することになる衆議院選挙の前後から、ブロガーAは衆議院選挙についての記事を数ヶ月にわたって投稿していた。その衆議院選挙についての記事の一つで、ブロガーA自身が他者の伝聞として陰謀組織の存在を示唆するのではなく、害意を有するものとして陰謀組織の存在について主張していた。次に示す事例9は、害意を有するものとしての陰謀組織と思われる存在についてブロガーA自身が主張する、2012年末の記事からの抜粋である。

〔事例9〕 彼らが隠蔽してきた情報 2012/12/12

2012年衆院選挙についてです。2009年の衆院選挙は自民党の自滅選挙でした。その受け皿が民主党でしたが裏切られました。もともと政権担当経験がない上に、無責任なマニフェストは結局すべて嘘でした。私は親族と「普段どこの政党に投票するのか」という話はこれまでしなかったのですが、今回は話題になり、全員が否民主でした。前はどこに投票したのかを聞くと、私も含めて全員が民主党でした（後悔しています。期待していたので...）どこの政党も似たりよったりですが、日本人の一番嫌うこと、嘘はゆるせません。次の選挙では、ネットによる有権者の意識覚醒が問題となるでしょう。先日、衆議院解散後のある党の決起集会にたまたま遭遇したのですが、驚きました。ある大物議員がマイクを握ると、罵詈雑言の嵐となりました。最初はばらばらに叫んでいましたが、次第に「売国奴」「売国奴」の大合唱となりました。すぐに現場を離れたのですが、帰宅してテレビニュースを見ても、その様子は全く報道されていませんでした。翌日の新聞もです。ところが翌日の複数のサイトには、その映像がアップロードされていたのです。ネットユーザーにメディアの実態が暴かれたのです。（略）事件や人物などの情報はネットで瞬時に伝わり、瞬時に検索できる時代です。もはや削除や、遮断が不可能です。戦後から徹底して彼らが隠蔽してきた情報がまともに国民の目に触れるようになったのです。2012衆院選挙は覚醒選挙と言えるでしょう。

事例9では、ブロガーAは「ある党の決起集会」で自身が体験した「罵詈雑言の嵐」の状況について、テレビや新聞などのマスメディアでは報道されなかったが、その状況の「映像」が「複数のサイト」に投稿されていたことを指摘し、「削除や、遮断が不可能です。戦後から徹底して彼らが隠蔽してきた情報がまともに国民の目に触れるようになった」と主張している。

ここでブロガーAに記されている、情報を「隠蔽」してきた「彼ら」とは、「実態が暴かれた」と述べられている「メディア」であって、この記事はただ報道のあり方を批判してい

¹⁶ 2012年10月から11月の間、「Aの日記」に記事が投稿されることはなかった。

るのだとも考えられるかもしれない。しかしながら、事例9として示した記事の直後に、改めてブロガーAは陰謀組織の存在について記事の中で明示していた。次に示す事例10は、事例9の直後にブロガーが衆議院選挙についての話題を記した記事からの抜粋である。

〔事例10〕 不法外国人漬け 2012/12/18

私は、趣味の集会で200人程度の会員をもっています。今回は時期ということで、忘年会の集まりに数回参加しました。これまでは、集会では宗教政治の話は御法度でしたが、自然に話題になってしまいました。ほとんどの会員が民主党が不法外国人漬けだと知っていました。皆それぞれに支持する政党は違いましたが、反民主党なのは共通していました。(略)もうすでに、陰謀勢力が全力で安倍攻撃を始めていますが、困ったときは正しい情報を知らしめれば良いのです。であれば、国民は必ず支持しますし、ついていくでしょう。

事例10では、事例8でも言及されていた趣味の会で「民主党が不法外国人漬け」だという主張が「話題」となったと示した上で、「陰謀勢力」という表現が用いられている。事例9において、情報を「隠蔽」してきた「彼ら」と言及される存在も、特定の外国人たちによって構成される「陰謀勢力」を意味するものであったと考えられるだろう。そしてここから2013年に入ると、陰謀組織についての記事が「Aの日記」の中心となっていく。

ここまで、陰謀組織の存在が「Aの日記」に現れるまでの過程を示した。「Aの日記」で展開される陰謀論が、ネット右翼的な言説の影響化にあったことを先に示したが、「Aの日記」開設時からそのような陰謀論が展開されていたわけではなかった。また、インターネット上のネット右翼言説を引用する形式で陰謀組織についての告発を開始したのでもなかった。ブロガーAは、「Aの日記」の開設直後は「人生経験」を記すことを目的として、自身の親族の意見を交えながら、日本と他国の関係についての見解や、日本への愛情を示すような記事を投稿していた。そして、尖閣諸島・竹島を巡って近隣国との緊張関係が報道されるようになると、知人からの伝聞という形式で従来のネット右翼言説的な陰謀組織の存在が「Aの日記」に現れていた。とは言え、ブロガーAが実際に知人からの話から陰謀組織の存在を認識したのかはわからない。2010年には、ネット右翼的な言説を展開するブログが多数開設されていた(伊藤, 2019)が、この時点では、ブログ開始時からブロガーAがそのようなネット右翼的な言説の影響化にあったのかは「Aの日記」の記述からは不明である。

しかしながら、「Aの日記」における陰謀論世界の理解において重要なのは、ブロガーAがどのように従来の陰謀言説に触れたのかではない。「Aの日記」というサイバー空間で展開される、陰謀論世界の営みに内在する論理を相互作用という観点から理解することが本研究の目指すところである。アートネクサス理論に基づいて、この空間で陰謀を巡って何が起きているのか、陰謀組織がどのように存在していたのかを分析しよう。まず、「Aの日記」に陰謀組織の存在が現れた事例8に戻って詳細に分析したい。改めて事例8を提示しよう。

[事例8] 伝え聞いた仮説 2012/09/04

幹事というとは何かと面倒で雑用も多いですが、やることはせいぜい挨拶ぐらいのものです。カラオケやゴルフなど行ってきて20年以上の歴史がある会です。しかしながら、若い人たちのゴルフは体力的に辛く、カラオケも最近の曲は分かりませんし、旅行でも若い人たちは海外を好みます、とは言え、皆、気持ちは若く楽しくやっています。この会は、一時は200名を超えていましたが、一昨年に百人ちょっとになったところで、異変が起きました。突然、数十名を越える退会者がでたのです。幹事たちと次のようなやり取りをしました。「退会の原因は?」「紛争になると問題があるでしょう」「どういうことですか?」「彼らは戸籍を強奪してたんですよ」「有事となれば逃げなくてはと」驚くべき真実が彼から明かされたのです⁽¹⁾。

この事例8からは、ブロガーAの認識においてアブダクションが生じていたといえる。改めてであるが、事例8ではブロガーA自身が所属する趣味の会で生じた、多くのメンバーの退会という「異変」の説明として、退会したメンバーが「戸籍を強奪して」いた不法な外国人勢力であったのではないかという解釈が示されている。この解釈とは、不法な外国人勢力、つまり陰謀組織が有事に備えて日本から逃げ出しているのならば、趣味の会で「異変」が起きたのも当然だろうという仮説に基づく推論である。そして、下線(1)では、伝聞形式でありながらも、「異変」には不法外国人の存在が関係しているという仮説が、「真実」としてブロガーAに記されている。このように、何らかの事象に対して仮説から解釈を行う認識とはアブダクションによるものに他ならない。何らかの二つの前提から真実性を結論づけるのでもなく、異変を観察したという一つの前提から、真実を導くのは演繹的推論ではない。また、仮説の真実性を前提である一つの観察の肯定から導くのは、複数の観察を通した帰納的推論でもない、アブダクションの特徴である(米盛, 2007)。

それでは、事例8で示される認識を、アブダクションとして分析を示した上で、ここでの相互作用をアートネクサス理論における作用主体の概念 (Table 1) から分析しよう。

- ① ブロガーA 自身の所属する趣味の会における一部のメンバーが退会するという異変を観察した。
- ② もし、一部のメンバーが陰謀組織の一員ならば、一部のメンバーが退会するという異変は当然の結果だろう。
- ③ よって、一部のメンバーが陰謀組織の一員であると考えるべき理由がある。

Table. 1 アートネクサス理論における分析概念

分析概念	定義
プロトタイプ	アブダクションされる仮説的存在, 及びその意図と志向
インデックス	アブダクションや解釈を促す事物や表象
アーティスト	インデックスの存在や特徴について帰属させられる存在
レシピアント	インデックスからアブダクションを促されたり, インデックスを媒介して作用する存在

まず, アートネクサス理論では, アブダクションされる仮説的存在を「プロトタイプ」と位置付ける. 上述のアブダクションの分析を踏まえると, 「A の日記」において陰謀組織は, アブダクションされる仮説的存在, プロトタイプとして現れていたことが示唆される. またこの分析が妥当ならば, 事例 8 でブロガー A にアブダクションを促したのは, 所属する趣味の会の一部メンバーが退会したという事象である. 故に, この事象がアブダクションを促す主体としてのインデックスであり, ブロガー A はレシピアントだと言える. そして, その趣味の会における一部メンバーの退会というインデックスの「原因」が帰属させられるのは陰謀組織である. つまり, アーティストとして趣味の会における異変を生み出す存在でありながら, その異変からアブダクションされるプロトタイプとして「A の日記」に陰謀組織が現れていたと考えられるだろう (Figure. 5).

ここでの作用主体の分析の妥当性について, 事例 8 に続く事例 9 の分析からも確認しておこう. 改めて事例 9 を次に示す.

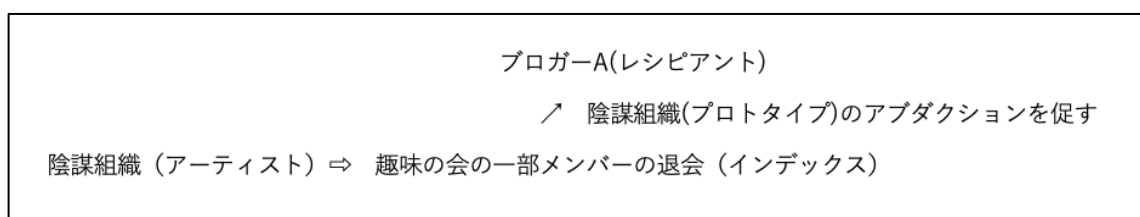


Figure. 5 陰謀組織 (アーティスト / プロトタイプ)

[事例 9] 彼らが隠蔽してきた情報 2012/12/18

2012 年衆院選挙についてです. 2009 年の衆院選挙は自民党の自滅選挙でした. その受け皿が民主党でしたが裏切られました. もともと政権担当経験がない上に, 無責任なパフォーマンスは結局すべて嘘でした. 私は親族と「普段どこの政党に投票するのか」という話はこれまでしなかったのですが, 今回は話題になり, 全員が否民主でした. 前回はどこに投票したのかを聞くと, 私も含めて全員が民主党でした (後悔しています. 期待していたので....)

どこの政党もにたりよったりですが、日本人の一番嫌うこと、嘘はゆるせません。次の選挙では、ネットによる有権者の意識覚醒が問題となるでしょう。先日、衆議院解散後のある党の決起集会にたまたま遭遇したのですが、驚きました。ある大物議員がマイクを握ると、罵詈雑言の嵐となりました。最初はばらばらに叫んでいましたが、次第に「売国奴」「売国奴」の大合唱となりました。すぐに現場を離れたのですが、帰宅してテレビニュースを見ても、その様子は全く報道されていませんでした。翌日の新聞もです。ところが翌日の複数のサイトには、その映像がアップロードされていたのです。ネットユーザーにメディアの実態が暴かれたのです⁽²⁾。(略) 事件や人物などの情報はネットで瞬時に伝わり、瞬時に検索できる時代です。もはや削除や、遮断が不可能です⁽³⁾。戦後から徹底して彼らが隠蔽してきた情報がまともに国民の目に触れるようになったのです。2012 衆院選挙は覚醒選挙と言えるでしょう。

この事例 9 から、事例 8 と同様にブロガー A のアブダクションによる認識を確認できる。改めてであるが、事例 9 の下線 (2) では「驚きました」という表現から、ブロガー A 自身が体験した政治に関係する出来事が、新聞やテレビで報道されていなかったという事態が報告されている。さらに下線 (3) からそのような事態が「隠蔽」によるものだという解釈が示されている。先に例証したように、ここでの「隠蔽」の主体とされている「彼ら」とは陰謀組織を意味するものだ。つまり、陰謀組織がマスメディアを統制しているならば、情報の「隠蔽」が生じるのも当然だろうという仮説に基づいたアブダクションがここでも行われていることがわかる。改めてここでのアブダクションのプロセスを分析して示そう。

- ① マスメディアによる情報の隠蔽を観察した。
- ② もし、陰謀組織がマスメディアを統制しているならば、マスメディアによる情報の隠蔽は当然の結果だろう。
- ③ よって、陰謀組織がマスメディアを統制していると考えるべき理由がある。

上記の分析を踏まえて、再びアートネクサス理論における作用主体の概念から分析すると、「A の日記」では、陰謀組織の存在がアブダクションされるプロトタイプかつ、マスメディアに作用して「隠蔽」というインデックスを生み出すアーティストとして現れていたことと理解できるだろう (Figure. 6)。

ここでの陰謀組織からマスメディアへの作用としての「隠蔽」とは、あくまでこのブロガー A による観察であり、実際に「隠蔽」が生じていたのかは不明である。しかしながら、このような観察がなされることも、アブダクションという観点でこそ理解することが可能だ。なぜなら、「隠蔽」という観察自体を肯定する推論もアブダクションに他ならないからだ。上記のアブダクションの分析からもわかるように、後件である仮説の肯定によって先件の観察を肯定するものがアブダクションなのである。政治に関する情報であっても特定の出

来事の全体像が報道されないということ自体は驚くようなことではないと考えられるかもしれない。また、事例 8 も同様に、趣味の会からメンバーが退会するという事態も「異変」というほど不可思議なことではないと考えられるかもしれない。しかし、陰謀組織がプロトタイプとしてアブダクションされる限りにおいては、それらの事態とは、驚くような「異変」や「隠蔽」として観察されるインデックスに他ならないのである。

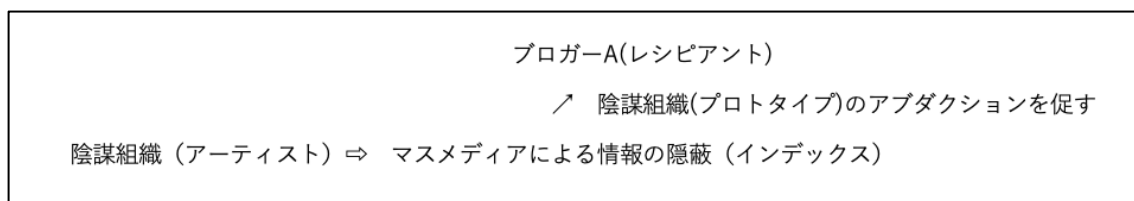


Figure. 6 マスメディアによる情報の隠蔽 (インデックス)

ここでは、この 2012 年の末までに「A の日記」において、陰謀組織がアブダクションされるプロトタイプかつ、そのアブダクションを動機づけるインデックスを生み出すアーティストとして現れるようになっていたことを確認した。

しかしながら、「A の日記」がサイバー空間における言説活動にとどまらず、集団的運動として現実社会へ影響を及ぼすのは 2015 年に入ってからだ。一般論ではあるが、ブログを何年も継続するというのは容易なことではないだろう。まして、その存在が社会的に明らかであるわけではない、陰謀組織の存在が揺るがずに、どのようにしてブロガー A に現れつづけたのか。つまり、どのように陰謀組織がブロガー A に作用し続けていたのかを更に確認する必要があるだろう。次節から、「A の日記」に従来のネット右翼言説にはない独自の要素が加わっていく陰謀論世界の確立期における展開の詳細を追いながら、どのような作用から継続的に陰謀組織が現れていたのかを分析したい¹⁷⁾。

¹⁷⁾ なお、この時期におけるブロガー A によるその他の投稿記事の抜粋を付録 1 に提示する

4.3 陰謀論世界の確立期

4.3.1 インターネット文化の影響

2013 年になると同時に「A の日記」に 2 つの変化がみられるようになる。この節では、その変化を確認しながら、陰謀論世界の確立期において「A の日記」で展開されていた陰謀論世界のあり方を詳細に分析していきたい。陰謀論世界の萌芽期では、自身の体験や親族や知人の見解を参照した記事が投稿されていたが、インターネット上の情報を参照した陰謀組織の告発が投稿の中心となっていったという点が、陰謀論世界の確立期における変化の一つであった。ここで 2013 年になってすぐに「A の日記」に投稿された記事からの抜粋である事例 10・11 を示そう¹⁸。

[事例 10] Wikipedia (1) 2013/02/22

今やネット上で過去の蛮行が次々と明るみに出てきています。隠蔽され続けてきた蛮行が日本国民に周知拡散されだしたのです。この片棒を担いだのが社会党、共産党。そしてその蛮行の結果が陰謀勢力の存在です。このような歴史的事実を今では簡単に検索閲覧できるんですが、ここ数年、陰謀勢力であろうと思われませんが、例えば Wikipedia に組織的捏造改ざん削除がみられるようになっていきます。その内容が 100% 自分たちに都合の悪い記事であることからたぶん彼らの仕業に間違いないでしょう。ちなみに最近の削除例(略)

[事例 11] Wikipedia (2) 2013/02/24

先日の投稿での Wikipedia の項目は、韓国に忌まわしく不潔な因習、習慣があることを示しているだけです。欧米のルポ・報告文献、小説等に基づくもので、最近になって訂正、遮断、削除が目立ち始めました。おそらく組織的に対応し始めたのでしょう。現在ではかなりの数の記事が削除されたり閲覧不能となっているようです。ただ Wikipedia でも訂正や削除要求があったからといってそれに無条件で応じているわけではないようです。例えば、ある項目では以下のように表示されます。「この記事には複数の問題があります。改善やノートページでの議論にご協力ください。特筆性の基準を満たしていないおそれがあります（2011 年 9 月）。雑多な内容を羅列した節があります（2011 年 9 月）」衆知期間を設けているのです。ではいったいどのような記事が対象となっているのだろうか一例をあげましょう。

事例 10 では、ブロガー A が、Wikipedia で陰謀組織による「改ざん」がなされていると主張していることがわかる。この抜粋箇所の後に具体的な改竄項目が記されていたが、事例 11 として示した抜粋にもあるように、その項目の記述はある小説を参照した韓国文化につ

¹⁸ 2013 年 1 月に「A の日記」に記事が投稿されることはなかった。

いてのデマであることが検証されて削除されたものであった。このデマを助長することを避けるために、その項目について本稿では明示しないが、Wikipedia における韓国文化についての不正確な情報の編集履歴を参照し、それが陰謀組織によるものだというブロガーAの解釈が示されていることがわかるだろう。

また、研究対象の概要でも記したように、この時期から「A の日記」に、ネット右翼言説の流布に寄与していたインターネット掲示板 2 ちゃんねるを参照したり、2 ちゃんねるについて言及した記事が投稿されるようになる。その一例として、事例 11 の直後に投稿された記事からの抜粋である事例 12 を示そう。

[事例 12] 掲示板の状況を通じて現れる陰謀組織 2013/03/01

2010 年からの情報戦争はマスメディアに関しては、思想的にも経済的にも乗っ取られているような状況で、完全に彼らにコントロールされていました。そして、これを打ち砕いたのが、ほかならぬ匿名投稿サイト 2 ちゃんねるです。この 2 ちゃんねるが果たした役割はどんなに高く評価してもしすぎることはないでしょう。アラブの春でのネットは彼らの国に自由をもたらしたにすぎませんが、日本の独立はアジアと世界に大きく良い影響をもたらすでしょう。朝鮮と決別し、中国を解放することが、いったいどれだけの抑圧されている人々を救うことになるのでしょうか。民度世界一の日本が世界の国々に対して果たさなければならぬことは山ほどあるでしょうね。そのほとんどが日本という国でなければできないことを意識する必要があります。(略) 2 ちゃんねるでの陰謀組織の勢いがなくなっています⁽⁴⁾。日本人は韓国人や中国人の投稿を削除しないから、彼らの投稿があふれて逆に様々なことがわかる状況です。妨害はとても減ってきています。過去の彼らの悪虐がさらされています。ネットでの戦争は勝利でしょう

事例 12 では、ブロガーA は、マスメディアが「完全に彼らにコントロールされていました」という見解を示しながら、その状況を「打ち砕いた」のが 2 ちゃんねるだと評価している。「A の日記」が従来のネット右翼言説や 2 ちゃんねるの影響化にあると研究対象の概要で示したが、ここから改めて 2 ちゃんねるの影響が読み取れるだろう。そして、下線(4)の「2 ちゃんねるでの妨害はとても減ってきています」という記述からは、それまでは 2 ちゃんねるにおいても陰謀組織による何らかの統制が行われていたとブロガーA が認識していたことがわかる。つまり、ここではブロガーA は 2 ちゃんねるの状況から陰謀組織の勢いについてアブダクションしていると言えよう。

事例 10・11・12 を通して、2013 年からブロガーA は、Wikipedia や 2 ちゃんねるといったインターネットサイト上の事象、特に中国・韓国に関する記事や投稿のあり方の因果を説明する仮説として、陰謀組織にインターネット上で情報の隠蔽を目論む意図を示すようになっていたことが理解できる。それでは、ここでの推論プロセスをアブダクションという観点から分析しよう。

- ① インターネット上の事象（中国・韓国に関する記事や投稿の統制）を観察した。
- ② 情報の隠蔽を目論む陰謀組織の意図があるなら，インターネット上の事象（中国・韓国に関する記事や投稿の統制）も当然の結果である。
- ③ よって，情報の隠蔽を目論む陰謀組織の意図があると考えるべき理由がある。

上記の分析から，インターネット上の事象に促されたアブダクションから，陰謀組織の意図についての認識が再起していたことがわかるだろう．さらに，アートネクスス理論の作用主体に基づいて，作用の連鎖を分析すると，アブダクションをブロガーAに動機づけるという関係においては，インターネット上の事象がインデックスであり，陰謀組織の意図はプロトタイプである．また，インデックスのあり方についてブロガーAに帰属されているのが，陰謀組織である．つまり，陰謀組織はインターネット上の事象を生み出すアーティストであり，陰謀組織が生み出したインターネット上の事象がインデックスとして，ブロガーAにアブダクションを促していたといえる．このような作用の連鎖から，陰謀組織の意図（プロトタイプ）が，ブロガーA（レシピアント）に現れていたと理解できるだろう (Figure. 7).

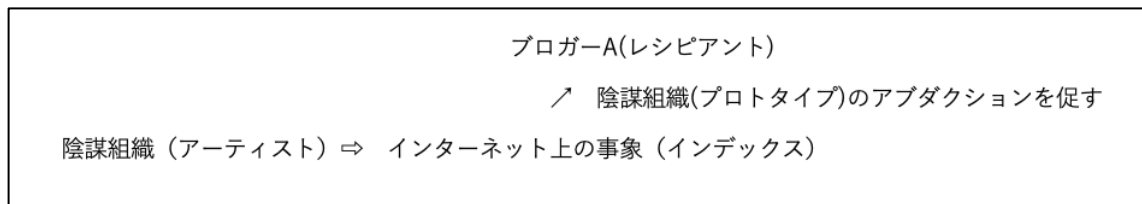


Figure. 7 インターネット上の事象(インデックス)

ここまで，陰謀論世界の確立期における2つの変化の一つとして，インターネット上の状況に作用する存在として陰謀組織が「Aの日記」に現れるようになったことを示した．次節から，陰謀論世界の確立期における「Aの日記」の二つ目の変化について見ていきたい．

4.3.2 予言と安倍晋三

本節では，陰謀論世界の確立期に「Aの日記」で生じていた2つの変化のうちの二つ目の変化について確認していく．その変化とは，従来のネット右翼言説にはなかった予見的な内容を記した記事の投稿である．そのような投稿は2013年の6月から開始され，最初に行われた予見的な投稿の内容は，中国・韓国の崩壊についてだった．次から示していく事例13・14・15・16は，2013年の6月から7月に投稿された，予見的な内容が記された記事から抜粋したものである．

[事例 13] 中国・韓国の崩壊の予想 2013/06/30

「2015」というタイトルの記事を以前投稿しましたが、2015 年までに中国、韓国が崩壊します。であれば戦争をする必要はないし、尖閣問題も竹島問題も取り合わずに、何もしなければこちらの勝ち。安倍はしたたかになりました。

この事例 13 は、予見的な投稿の初期の記事でありながら、またその予見の内容が「2015 年までに中国、韓国が崩壊します」と端的に記された記事からの抜粋である。なぜそのような予見が生じたのかについてはここでは多くを語られていないが、事例 13 に示した記事の後に投稿されていく記事から、ブロガー A は予見についての詳細を記していった。次に示す事例 14 は中国について、事例 15・16 は韓国についての予見についての詳細を記した記事からの抜粋である。

[事例 14] 中国は確実に分裂崩壊 2013/06/30

中国は尖閣問題についてです。中国は国内的に煽りすぎて振り上げた拳をおろすことができないのでしょう。米国を抱き込んで日本に譲歩させたいのでしょうか、米国にとっても後退している経済と軍事に日本は欠かせないのです。尖閣を失うということは、日本という世界屈指の同盟国を失うだけではなく、第一列島線を突破されることを意味し、中国の原潜が米西海岸を遊弋するという事態を招きます。米国の安全保障上これは絶対に許容できないでしょう。尖閣は米国にとっても重要な場所で取引はできないのです。日米首脳会談以降米国の対中姿勢が大きく変わりつつあります。尖閣問題では日米安保の適用対象です。では米国が尖閣紛争が拡大して日中戦争となった場合を想定しているのかというと、これは私独自のソースによると全く考えていないようです。実際には奇しくも米国の政治・軍事高官は中国に対して私と同じように「あらゆる点を考慮すれば少なくとも数年以内に中国は確実に分裂崩壊する」とみているのでしょう。

[事例 15] 抑止力を失う韓国 2013/07/12

2015 年をもって、米韓相互防衛条約の終了。そして新たなる米韓体制の構築という声明がなされました。その後の韓国大統領の米議会演説会場に議員が集まらず、さくらを大挙動員という見るも無惨な始末。撮影でもオバマとの報道陣に対するツーショットのサービスもなく、合成写真で紙面を飾るという荒技を披露していました（略）2015 年をもって米韓相互防衛条約は廃棄、戦時統帥権は韓国軍に委譲です。韓国はこの重大さにまったく気がついていないのです。ほとんどが理解していなかったと思われるのが、米軍の法的地位です。駐韓米軍は相互防衛条約で駐留しているのではなく、撤退交渉が成立していないので、その実態は国連軍なのです。北朝鮮が攻撃再開した時に、対処する米軍とは国連軍であって、世界を敵に回すことになります。北に対する韓国の抑止力であった米軍を失うのです。

[事例 16] 韓国は中国の属国に 2013/07/22

安倍は韓国と戦争する気などまったくないでしょう。陰謀勢力を追い出せばいいだけなので、この状況に至れば売国日本人や陰謀勢力は国民が粛正するでしょう。参院選以来、ここまでは完璧に安倍の予定通りで、憲法改正も急ぐ必要がないでしょう。奴らも命がけで日本にいるわけにはいかないでしょうし、2年たてば陰謀勢力の帰国が始まるでしょう。そのまま韓国は中国の属国となりますね。そこから日本との国交断絶は少なくとも半世紀は続くでしょう。

事例 14 では、ブロガーA は中国との尖閣諸島を巡る問題についての見解を示している。このような、社会情勢についての見解としての予見は珍しいものではないが、中国が分裂する、あるいは崩壊するという内容は、尖閣諸島問題巡る当時の報道にもなかったものだろう (e.g. 丁, 2016)。また、事例 15 では、韓国に駐留する米国軍は「国連軍」であるという独特の見解を示しながら、2015 年に韓国が北朝鮮に対しての「抑止力」を失うという予見を示されている。さらに、事例 16 でも、韓国について「中国の属国」となるという予見を示しながら、「安倍は韓国と戦争する気などまったくない」という見解を示している。また同時に「この状況に至れば売国日本人や陰謀勢力は国民が粛正するでしょう」という陰謀についての楽観的な見解が示されている。ここでの「この状況」が具体的に何かは不明だが、陰謀組織の問題が解決される見込みを示していると理解できるだろう。

そして、ここまでにブロガーA が示していた予見にさらなる変化が見られるようになる。ブロガーA は、2015 年までに中国・韓国が「崩壊」するために、尖閣諸島や竹島を巡って「戦争はする必要はない」といったように、有事の可能性はないという予見を示していた¹⁹。しかし、事例 16 に示した記事を投稿した直後の 2013 年 7 月 23 日には、戦争や「武力衝突」という脅威とも捉えられるような事態を示唆する投稿を行うようになっていた。その投稿からの抜粋である示す事例 17・18 を次に示す。

[事例 17] 日中開戦 2013/07/23

参議院選挙が終わって安倍の第 2 のシナリオが始まった。彼の計画では 2015 年米韓相互防衛条約終了を待って、日韓断行、強制送還、陰謀勢力駆除という段取りのようです。しかし、どうも日中開戦が先のサブシナリオになる可能性のほうが高そうです⁽⁵⁾。となると、日中開戦、相互自国民帰国、送還開始ということになるかどうかですが、そこには大きな問題があります。中国国内で戦争や武力衝突が発生した場合、陸海空の交通輸送、報道やインフラ機関、郵便、食糧などの民間資源をすべて政府管理下に置く国防動員法があります。中華人民共和国で 2010 年から施行された法律です。簡単に言うと、中国国内で有事(戦争や武力衝突)が発生した際に、全国人民代表大会常務委員会の決定のもと、動員令が発令されるので

¹⁹ 「A の日記」でこの時期に記されていた、その他の予見の例を付録 2・3 で示したい。

す。あくまでも国内有事の場合の法律と言いつていますが、実際は対外戦争を想定したものです。戦争は国内有事ではないのですから。馬鹿でもわかりますね。また、国防義務の対象者は、18歳～60歳の男性、18歳～55歳の女性、中国国外に住む中国人も対象となります。そして国務院、中央軍事委員会が動員工作を指揮します。中央軍事委員会が動員指揮するということは在日中国人約60万人のうち成人中国人はすべて軍属、戦闘員となることを意味します。つまり、日本にいながらにして破壊活動や軍事活動ができる軍属、戦闘員となるということです。一方で、在中国日本人は民間人です。日本国内で中国人と戦闘となった場合、中国において民間日本人が戦時国際法の保護下におかれるのでしょうか。その可能性は期待できないと思われます。

〔事例18〕 脅威的未来の予想 2013/07/23

あらゆる指標が2015年の中国韓国の崩壊を示しています。米国が撤退となると、領土問題は武力闘争に通じる問題になる。2016年には必ず武力衝突がおきる⁽⁶⁾。実際には、より早期に新大久保や大阪で大きな死傷者がでるような衝突、あるいは韓国から何らかの仕掛けがあるかもしれないです。いずれにしても無血解決が安倍の方針⁽⁷⁾です。彼らが武装蜂起する場合ですが、これは戦時国際法に則り、一人残らず殲滅するだけでしょう。戦時国際法では国籍詐称はゲリラ扱い。安倍はしたたかになった。読者の皆さん、果報は寝て待てでしょう。調子悪いので今日はここで寝ます。

事例17では、ブロガーAは「日中開戦」の可能性あることを示唆し、日中開戦に至った場合、「在日中国人約60万人のうち成人中国人はすべて軍属、戦闘員となる」という見解を示している。中国との戦争が生じ、そこからさらに在日中国人が戦闘員となるという未来は、日本人にとっては脅威的な事態だと言えるだろう。

さらに、事例17の下線(5)では、「安倍の第2のシナリオ」として「陰謀勢力の駆除」が行われ、そして「サブシナリオ」として戦争が行われるのだというブロガーAの見解が示されている。ここでの安倍とは、当時の首相であった安倍晋三のことであり、予見がその「安倍のシナリオ」として提示されていることがわかる。同様に事例18においても、下線(6)で「武力衝突」という脅威的な事態と受け取れる未来が示唆されながら、下線(7)ではその脅威的な事態を「無血解決」という誰の血も流れない形で解決を目指している人物として、再び安倍が示されている。事例17・18からは、ブロガーAが、安倍の意図するものとして予見を提示していたことがわかるだろう。

ここで改めて、予見の始まりであった事例13として示した抜粋を参照すると、唐突な形で「安倍はしたたかになりました」という一文で締められていることが確認できる。さらに、事例16でも陰謀勢力の「粛清」についても、「ここまでは完璧に安倍の予定通り」と安倍について言及が同時になされていることがわかる。陰謀世界の確立期における変化の一つとして、ブロガーAの投稿する予見とその内容の変容を確認してきたが、そこでの安倍への

言及のあり方を鑑みると、ブロガーAが「Aの日記」において、予見を安倍の意図と関係づけて言及する傾向が窺えるだろう。

このような「Aの日記」における安倍の意図についての独特な位置づけは、陰謀論世界における営みにおいて重要な役割を果たす可能性がある。アートネクサス理論に基づくならば、何らかの存在の意図とは、それが人々にアブダクションされる限りにおいて、プロトタイプとして人々の営みにおいて重要な作用の主体でありうる。何より、安倍の意図がアブダクションされる事態とは、安倍という現実世界の存在と、この「Aの日記」の陰謀論世界が結びつけられることに他ならない。また、Qanonの世界では、トランプが陰謀組織と対抗する主体として位置づけられ、トランプの政治的立場を守るためにQanonの支持者達による米国国議会議事堂占拠といった社会運動へと通じていた。このことを踏まえても、この「Aの日記」で展開される陰謀論世界における安倍の位置づけや役割を詳細に分析していく必要があるだろう。次から、事例18に続けて2013年の7月から9月にかけて「Aの日記」に投稿された、安倍について言及されている記事の抜粋を改めて示した上で、「Aの日記」における安倍の主体性をアートネクサス理論に基づいて分析したい。次に示す事例19, 20, 21は、2013年7月から9月に投稿された安倍について触れられた記事からの抜粋である。

〔事例19〕 安倍が狙ったネット選挙解禁 2013/07/23

参院選で元国家公安委員長岡崎トミ子が落選しました。下馬評では鉄板でしたがネットに負けました。ネットにさらされた時点で勝負は決まっていた。自分に投票しなくてもいいから岡崎には投票しないでという落選運動的手法もきいたようです。昨年の衆院選以来、明らかにネット環境に変化が出てきました。急激に陰謀組織の妨害が激減している⁽⁸⁾のです。以前は自分たちに都合の悪い情報は全て遮断していましたが、今では手が回らないのか、こちらが意外に思えるようなかなりの情報が読めるようになってきています。いわゆるネトウヨが発信する情報のほぼ全てが妨害を受けないレベルまで落ち込んできています。その結果陰謀組織に都合の悪い情報が次々と拡散されて、日本人の覚醒が進んでいるのです。安倍が狙ったネット選挙解禁とはまさにこれだったのです⁽⁹⁾。自民党にプラスかどうかはわからない。でも、国民に情報を与えなければならない。正誤あふれる情報を判断するのは国民なのですから。このような考えから始まったネット選挙⁽¹⁰⁾は、隠蔽体質の彼らに直撃した。そして傀儡勢力をはじき出すことになったのです。安倍はただネット選挙の段取りをしただけです。これによって傀儡勢力が壊滅してしまった。(略)何もせずとも2015年米韓相互防衛条約終了で、2016年には竹島で日韓開戦、強制送還です。安倍はこのシナリオで進んでいます。このシナリオの最大利点は、血を流さずに法をもって処理できることです。陰謀勢力がいなくなるということは、その関連産業や組織が駆逐され、それに関わる反日も消滅するということを意味します⁽¹¹⁾。それからは反日日本人、売国日本人の整理整頓が始まります。今現在、関連組織が数百はあるらしいです。その組織解明にもネトウヨの運動は役立っているようです。摘発、壊滅に向けて公安はフル稼働でしょう。

[事例 20] 改正法を通じて現れる安倍 2013/07/28

ネット選挙解禁によってほぼ妨害されないようになりました。それによって陰謀組織に不利な情報が拡散され、多くの人が目覚めてきています。安倍首相の狙いがこれでした。安倍首相のこの筋書きのポイントは、血が流されないことです。いずれにしても法を用いた平和的解決が安倍首相の方針でしょう。(略) 皆さん結果を待ちましょう。

[事例 21] 安倍の戦略 2013/09/22

安倍政権が発足してから半年が過ぎました。彼の戦略についてです。政権成立からの彼の幸運について言及してきました。安倍の幸運は陰謀勢力にとって不運で、日本にとっては幸運です。安倍の戦略は第一次安倍内閣の時から陰謀組織対策にあります⁽¹²⁾。(略) オバマとテロ対策として経済対策や、組織壊滅へ法整備も進んでいます⁽¹³⁾ (略) 残念ながら、安倍の周辺は敵ばかりで、第一次安倍政権は凄まじいバッシングに遭いました。その対策だけでなく、自民党内の内部にも潜む虫にまで注意をする必要があったわけです⁽¹⁴⁾。

まず、事例 19 の下線(8)に注目したい。ここでは再びブロガーA はインターネット上の事象から、「妨害が激減している」と陰謀組織についての推論を行っている。さらに、ネット右翼言説に影響されていることが再び窺える事例 19 の下線 (9) では、「ネット選挙」について言及されている。改めてネット選挙解禁とは、第二次安倍政権下の 2013 年 4 月の公職選挙法改正による、選挙運動におけるインターネット利用の解禁を指している。そして、そのネット選挙解禁の施行によって、ネット右翼の情報発信が「妨害」されなくなっているという見解をブロガーA が示している。候補者でもない一般市民のネット右翼の言説活動と、候補者や政党による選挙運動に関しての法改正がどのような因果で関係しているのかは不明だ。しかし、ここではブロガーA はネット右翼の情報発信のあり方の「変化」が、改正法に起因するものだと認識していることがわかる。そして「安倍が狙ったネット選挙解禁とはまさにこれだ」と記述されている。つまり、ブロガーA は、安倍が陰謀組織に不利になる状況を志向して法改正を行ったと認識していることがわかる。続けて下線 (10) では、この改正法を志向した主体の意図について記したと思われる記述が行われている。この意図の主体が誰なのかは明示されていないが、下線 (11) で再び安倍の「シナリオ」が、陰謀勢力の「駆逐」に通じるというブロガーA の見解が示されている。加えて、事例 20 でも再び、「ネット選挙解禁」という施策が、陰謀組織に不利な情報の拡散に通じるもので、それが「安倍首相の狙い」だというブロガーA の解釈が示されている。

さらに、事例 21 の下線(12)では、「安倍の戦略は第一次安倍内閣の時から陰謀組織対策」といったように、安倍には従来から陰謀組織に対抗する意図があったのだとするブロガーA の見解が明示されている。続けて事例 21 の下線 (13) に示される、陰謀組織壊滅に向けて進められているとされる「法整備」が進んでいるという見解が示されている。なお、ここで

の「法整備」とは何かについて具体的に示されていないが、この投稿の二ヶ月後の2013年11月に衆議委員で、特定秘密の保護に関する法律が採決されている²⁰。安倍晋三に陰謀組織と対抗する意図があるのだのだという主張が「Aの日記」で繰り返されていたことが改めて確認できるだろう²¹。

以上のように、ネット選挙解禁の法改正と同様に安倍政権化の施策から、ブロガーAは安倍には陰謀組織と対抗しようとする意図があるのだと推論していたことがわかる。さらに、事例20の下線(14)では、2006年の9月26日から、2007年の8月27日まで続いた第一次安倍内閣について言及されている。ここでは、第一次安倍内閣時代の安倍の周辺、「自民党内の内部にも潜む虫」がいたために、「凄まじいバッシング」を受けていたというブロガーAの見解が加えられていることが確認できる。安倍が陰謀組織に対抗しようとしていたからこそ、第一次安倍内閣時代に安倍が陰謀組織の働きかけによる「バッシング」にあっていたとブロガーAが認識していると言えるだろう。

つまり、ブロガーAは、安倍に陰謀組織に対抗する意図があるならば、ネット選挙解禁といった安倍政権下の施策が取られるのも当然だろうという仮説に基づいたアブダクションを行っていたのである。改めてここでのアブダクションのプロセスを示そう。

- ① 安倍政権下の施策を観察した。
- ② 安倍に陰謀組織に対抗する意図があるならば、安倍政権下の施策も当然の結果だろう。
- ③ 安倍に陰謀組織に対抗する意図があると考えるべき理由がある。

上記のアブダクションプロセスの分析から、安倍政権下の施策に促されたアブダクションによって、陰謀組織に対抗する安倍の意図についての認識が生じていたことがわかる。さらに、アートネクサス理論の作用主体概念に基づいて作用の連鎖を分析すると、アブダクションをブロガーAに動機づけるという関係においては、安倍政権下の施策がインデックスであり、陰謀組織に対抗する安倍の意図はプロトタイプである。また、そのインデックスのあり方についてブロガーAに帰属されているのが、安倍である。つまり、安倍は安倍政権下の施策を生み出すアーティストであり、その施策がインデックスとして、ブロガーAにアブダクションを促していたといえる。ネット選挙解禁などの「施策」が陰謀組織への対抗になるというのは、あくまでこのブロガーAによる観察である。その因果については不明だが、このような観察もアブダクションによるものだとすると理解可能になる。繰り返しになるが、前件となる観察自体を、後件の仮説によって肯定する推論もアブダクションに他ならないのである。

²⁰ 参考として、陰謀論世界の確立期において、ブロガーAが投稿していた、安倍と特定機密保護法について言及する記事を付録4に提示する。

²¹ 同時期に「Aの日記」で、事例19・20・21と同様に安倍政権下の施策と陰謀組織の存在について言及されていたまた別の記事の抜粋を付録5に提示する。

ここまで陰謀論世界の確立期における「A の日記」の変化を追いながら、アートネクサス理論に基づいて分析を行った。その結果として、「A の日記」で展開された陰謀論世界では、日本社会へ害意のある陰謀組織とそれに対抗する意図のある安倍が、アーティストかつプロトタイプとして作用していたことが示された(Figure. 8)。

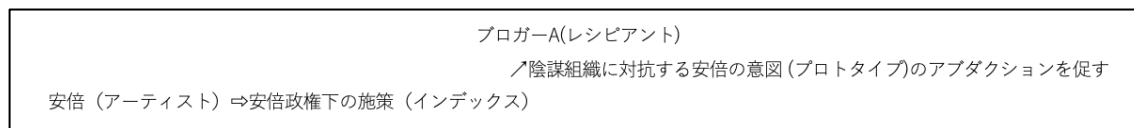


Figure. 8 安倍政権下の施策(インデックス)

また、この二つのプロトタイプの関係とは、それぞれの存在についての認識を妥当にしあう関係にあると考えられるだろう。改めて説明すると、プロトタイプとはアブダクションによって妥当とみなされる仮説である。陰謀組織の害意とそれに対抗する安倍の意図という二つの仮説とは、「安倍は日本を貶める陰謀組織と対抗している」、ゆえに「陰謀組織には安倍への敵対心がある」、ゆえに「安倍は陰謀組織と対抗している」...といったように循環的にその妥当性を導く関係にある。つまり、このプロトタイプたちは、それをアブダクションするブロガーAとの関係においては相互に作用し、それぞれの存在についての認識を妥当にしあう循環関係にあると考えられる。

さらに、当時の安倍が社会的に大きな影響力をもつ存在であったことが、そのような認識の循環を駆動する契機となっていたとも考えられる。なぜなら、レシビアントであるブロガーAとの関係において、安倍はアブダクションを促すインデックスを制作するアーティストでもある。そして、この時の安倍は実際に、特定秘密の保護に関する法律の閣議提出をするなど、極めて公的な社会的事象の存在について帰属される存在でもある。故に実際に安倍が何らかの公的活動を行う度に、それがインデックスとしてブロガーAにアブダクションを動機づけることになる。そしてまた、「バッシング」などの安倍への批判といった社会的な事象もまた陰謀組織によって制作されたインデックスとして、陰謀組織についてのアブダクションをブロガーAに動機づけるのである。つまり、安倍²²をめぐる社会的事象が生じる度に、それが二つのプロトタイプについてのアブダクションを同時に再起させるインデックスとなり、二つのプロトタイプへの認識が循環的に駆動するのである(Figure.9)。それ故に、陰謀組織の存在がブロガーAに認識され続けて、「A の日記」の継続が可能だったと考えられよう。

²² 安倍本人に「陰謀組織と対抗する意図」があるかに関わらず、ここでは安倍本人が「陰謀組織と対抗する意図を持つ安倍」というプロトタイプの推論を動機づけるインデックスだという記述も可能だろう。

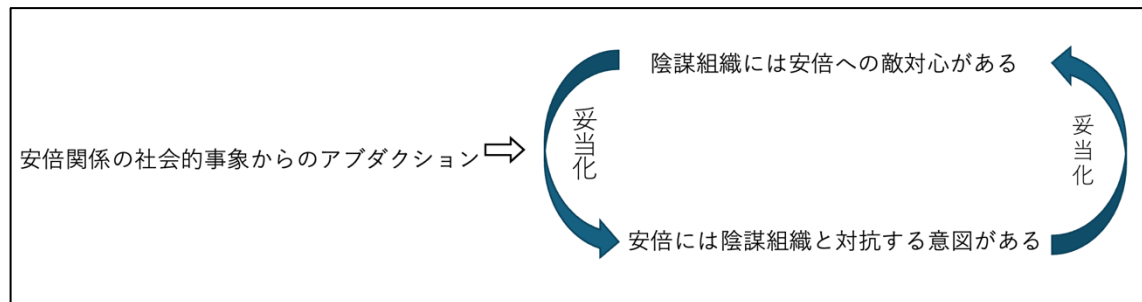


Figure. 9 認識を循環させるプロトタイプ関係

とは言え、この認識の循環を一般的な意味において論理的（外在的に、とも言えよう）に捉えてしまうと、これまでの事態は異常なことに見えるかもしれない。論理的に言えば、結論の根拠とする前提としての仮説が重ねられることは、その論理の蓋然性が低くなることを意味する。例えば、「もし、今日雨が降るなら」という一つの前提から「傘を持ってでる必要があるだろう」と結論する可能性よりも、「もし、今日雨が降り、それが小雨でないなら」という二つの前提から「傘を持ってでる必要があるだろう」と結論する可能性では、後者の方が蓋然性は低くなる。つまり、「安倍が陰謀組織に不利をもたらそうとしている」という仮説に、「陰謀組織が安倍バッシングを行っている」という仮説を重ね、さらにそれらを前提とした推論を重ねることとは、その理論の蓋然性が低くなることを意味する。

しかしながら、ここで仮説されているのは論理学上の前提ではなく、プロトタイプという主体の意図や志向であり、それに基づく推論を重ねることとは、ある主体の意図を、より複雑なものとして、あるいは精緻に認識していくことを意味すると考えられる。例えば、「日本を貶めたい」という意図に、「それに抵抗しようとする安倍を排除したい」という意図に加え、さらに「安倍がバッシングされるようにマスメディアを統制しよう」という意図の認識を重ねることとは、「日本を貶めたい」という意図をより複雑なものとして、あるいはより精緻に認識していくことだと言えよう。つまり、認識の循環からプロトタイプ認識の詳細化が生じていく可能性が考えられる (Figure. 10)。また、意図や志向とは何かを予測したり反証可能な科学的仮説とは異なり、意外な事象を理解可能とするために遡及的に措定される因果であるために破綻はしない。どれだけ複雑な事象群を観察されたとしても、それらを解釈するためのより複雑な意図がアブダクションされる限りにおいて、この「A の日記」の陰謀論世界が綻ぶことはない。その意味において、認識を循環させあう二つのプロトタイプとは、この「A の日記」陰謀論世界の根幹をなすローカルながらも絶対的な法則ともなりえよう²³。むしろ、そのようなアブダクションが重ねられることとは、それを促すインデックスが増加することであり、それは現実世界と陰謀論世界の接点が増加することを意味す

²³ そもそも、推論とは世界における法則の存在によって可能になるものだ。Mercier & Sperber(2018)によると、物理的なものに限らず、パヴロフの研究室におけるベルと餌の関係といったものも局所的な世界の法則であり、それを抽出して活用することが推論だという。

るだろう。

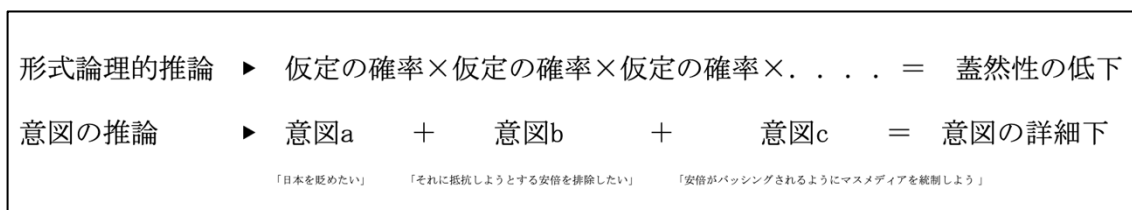


Figure.10 アブダクションの再起による意図の詳細下

しかし、事例 19・21 に記されているように、安倍が「平和的解決」を行う方針であるならば、ブロガーA や「A の日記」の常連投稿者たちが、自ら何らかの運動を行う必要はない。彼らは、ただ安倍が陰謀組織の問題を解決する様子として、社会的事象を体験していただけたら。では、いかに集団的な運動の契機が生じたのかについては動員期における作用の連鎖の分析から改めて検討していきたい。

とは言えその前に、ここでは動員期に入る 2015 年までの「A の日記」における投稿内容と、それが如何に「A の日記」読者ら受容されていたのかを事例 22・23 から確認しておこう。次に示す事例 22 は、2013 年 11 月までの「A の日記」についてブロガーA が回顧する内容の記事からの抜粋である。この記事は、ブロガーA がそれまでに「A の日記」にどのような経緯や目的で記事を投稿し、またどのように読者たちに読まれていたのかについて、ブロガーA の視点から改めて把握できるものである。

[事例 22] 回顧 2013/11/15

A の一年日記！小さい頃から物持ちが良かったのですが、今では4つの疾患を持ったまま継続しています。もはや達観していますが、私の人生については別に改めて記述していけたらと思います。まず、今回は急ぎのお願いがあります。このブログの全てを保存してほしいのです。理由は後に述べますが、この「A の日記」は 2010 年からの陰謀勢力に対する日本人覚醒プロジェクトです。日本の将来に危機感を持った人々が始めたネット活動の生き残りです。数百人の人々が立ち上げた個人ブログの発信はありとあらゆる手段で妨害されつづされました⁽¹⁵⁾。その数は優に 1000 は超えたでしょう。当時はメディアは乗っ取られ、ネットは完全に彼ら組織による監視下にあり、それをくぐり抜けることは不可能でした。私はその間の事情をよく知っているのですが、先の見えない絶望的な戦いでした。いくらか環境の変化はありましたが、数々のブログはどれも惨憺たる状況でした。そこで、2012 年初頭に従来とは異なった取り組みが始まったのです。このような経緯で、たまたま私の病気が発覚し、「人生最後のご奉公」ということで自身もブログ「A の日記」を立ち上げることにしたのです。これまでのブログの失敗の原因とパターンはわかっていたので、以下のように簡単にスタイルを決めることができました。まず、監視網にかからないように、中国や韓国関連

のタイトルはつけませんでした。タイトルは「A の日記」で決まりでした。ブログ管理側で設定する「ブログジャンル」も特定の設定をしませんでした。ジャンルを特定しない方が検索にかかりにくいので。ちなみにアクセスのあり方でなされる分類もありますが、それで時々、このブログは日記、時事、記事、雑感に分類されていたりします。政治、経済、軍事関連はタブーなのです。更新は時間をかけて拡散を狙わないようにしました。途中で監視網にかかっても彼らには無害なブログと認識させるようにしました。ブログ付属の便利な機能（コメント等）は一切使用しません。彼らにとって好ましからざる有害ブログとわかって、簡単に妨害や遮断ができないように発信は一方通行にすることにしました。ここまでくると時間の勝負です。この戦略の結果、今月は毎日のブログ訪問者数の平均は約 18000 を超えているから月 550000 程度にはなりそうです。今後の戦略です。この二ヶ月で約 20 万人の訪問閲覧者がおられます⁽¹⁶⁾。参照ブログとして各所に拡散もされているようです。私としては予定の出稿は完了し、ブログの当初の目的は達成したと考えています⁽¹⁷⁾。このブログがいつ遮断され閲覧不能となっても大丈夫だと思います。20 万人、この数字をみていると涙が出てきます。今後どんどん増えていく日本人の力は大きいでしょう。私は事実を淡々と記述しているのですが、このブログはネットウヨブログと分類されているらしいですね。いずれにしてもこれだけ大きくなると陰謀勢力は、必死に遮断にくることは間違いないでしょう。そこで皆さんの出番です。彼らは日本人にすべてが知られてしまうと生活と命に即関わるのであるから必死なのです。ネット上の力関係はまだまだ彼らの方が強いのですから。そういう意味で、参考資料として使えるよう A の日記の保存をお願いしたのです⁽¹⁸⁾。人類史上日本人の民度は最強レベルです。この足を引っばっているのが中国、韓国です。その元凶をできるだけ早く取り除き、世界平和と人類への貢献をめざして諸君には奮闘していただきたいのです。ここまで私だけで突っ走ってきたのですが、老人は老害にならぬよう退いて若い人たちに任せたいと思います。今後のブログ更新は体調に合わせて無理はしないようにするつもりなのでかなりペースは落ちます⁽¹⁹⁾。まずはとりあえずのお知らせまで。それではまた。

事例 22 の下線(15)では、「A の日記」が「陰謀勢力に対する日本人覚醒プロジェクト」だと改めてブログの目的が示されている。さらにブロガーA は、「A の日記」を 2010 年からの「ネット活動の生き残り」として位置付け、その「ネット活動」とは、同じ目的の個人ブログからの情報発信だと記している。「A の日記」がネット右翼文化の影響にあることや、2010 年台にはブログでネット右翼言説が行われるようになっていた(伊藤, 2019)という指摘を鑑みると、ここでの「ネット活動」とは、ネット右翼言説の発信を意味すると推察できるだろう。

そして、下線 (16) では、この時点で「A の日記」には 1 日平均 1 万 8 千人の閲覧者がいるとして、二ヶ月で 20 万人に閲覧されるだろうというブロガーA の見込みが示されている。2013 年末には、「A の日記」には一定の読者がいたことがわかるだろう。なお、下線(17)では「予定の出稿は完了し、ブログの当初の目的は達成した」と述べられており、下線 (19)

でも、「ペースは落ちます」と再び、ブログの更新が減るだろうという見込みが示されている。実際、2013 年末から 2015 年までは、それまでの「A の日記」に投稿されていた記事や 2 ちゃんねるに投稿された書き込みをコピーアンドペーストした記事が投稿されていたのを確認できた。

しかしながら、事例(18)において、「A の日記」が陰謀組織から遮断されるという予想と共に読者に「A の日記」を保存するように呼びかけをおこなっているものの、ブロガー A が「目的は達成した」と述べていることから、この時点では読者達を動員した集団的運動が行われていくとは考えられないだろう。さらに、動員期に入る直前までに「A の日記」で展開されていた陰謀論世界の状況について、2014 年秋に投稿された記事からの抜粋である事例 23 から確認しておきたい。

〔事例 23〕 陰謀組織の安倍バッシング 2014/10/28

ところで、陰謀組織はあれだけの行為を繰り返しながら、反撃が来るということを想定していなかったなんて不思議です。（略）安倍が政権に復帰して約 1 年半の間、陰謀組織は反安倍バッシングの繰り返し、必死でしたね。今年 8 月までは私のブログを引用サイトしては妄言だというようなコメントがあったのですが、既存の事象をベースに軍事関連は全部 Wikipedia なんてことが判明したので激減しましたね。（略）また、このブログの訪問者数が 500 万人を累計でこえたと報告されました。

事例 23 では、陰謀組織が「反撃」にあっており、さらに陰謀組織が「反安倍バッシング」を行っているのだとするブロガー A の認識が示されている。2014 年末まで、「A の日記」における陰謀論世界では、陰謀組織と安倍の対抗関係が継続していたことが理解できるだろう。また、2014 年の末には累計で「500 万」アクセスを記録していたという記述からは、これから読者たちを交えて行われる集団的運動の規模が窺える。しかしながら、やはり動員期に入る直前までは、安倍が陰謀組織の問題を解決しているとして楽観的な見解が投稿されていたことが改めてわかるだろう。それでは次から、動員期における「A の日記」の展開を確認しながら、如何にして集団的運動が生じたのかを明らかにしていきたい。

4.4 動員期

4.4.1 循環する認識に内包されたメカニズム

「A の日記」で呼びかけられた最初の集団的運動とは、特定の企業等の団体を陰謀組織に
関係するものとして入管へ通報する運動であった。そして、ブロガーA が読者に呼びかけた
この運動によって入管は一月の間に3万件の通報を受け、警察にこのブログについて相談す
る事態へと至った。「A の日記」で展開される陰謀論世界の論理を理解するために、ここで
明らかにしなければならないのは、この世界におけるいかなる作用の連鎖から、入管への通
報に意義が認められていたのかだろう。陰謀論世界の確立期においては、安倍による陰謀組
織対策が着々と進められ、ブロガーA も「A の日記」の「目的を達成した」という認識を示
していたことを鑑みると、ブログでの言説活動を超えた働きかけは必要がないようにも思わ
れる。ここから、入管への通報を集団通報運動と呼び、まずはブロガーA による集団通報運
動の呼びかけについて確認していきたい。

集団通報運動の呼びかけをブロガーA が始めたのは2015年の2月であり、実際に「A の
日記」の読者達による集団的通報が始まったのは2015年の7月であった。しかしながら、
2015年の2月に突如として、集団通報運動が呼びかけられるようになったわけではない。
2014年7月に2ちゃんねるに投稿された書き込みから、ブロガーA が集団通報運動の着想
を得たと推察できる記事が2015年の1月に投稿されていた。2012年の在留管理制度の改
正に伴って2015年の7月8日までに在日韓国人のパスポートや永住権が失効し、強制送還
になるという書き込みが2014年7月の2ちゃんねるに投稿されており(J-cast ニュース、
2015)、この投稿が「A の日記」における入管への集団通報運動という考えの源となってい
たと考えられる。まずは、集団通報運動と2ちゃんねる言説の関係について確認しよう。次
に示す事例24は、ブロガーA が入管への通報の呼びかけを開始する一月前、2015年1月
に投稿された記事からの抜粋である。なお、「A の日記」で通報対象として記されていた、
陰謀組織に関連するとされた団体などについての記述は事例では省略するが、主にマスメ
ディア関連の団体が記されていた。

[事例24] 7月9日以降は強制送還 2015/01/31

日本に寄生している彼らはいろいろな段階を経て、今では特権のもとで日本を蚕食していま
す。戦後70年の間に帰化やその他、友好的な手段で同化すれば現状のような事態にはなら
なかったはずです。しかし、実際には逆に特権と隠蔽、捏造、押さえ込みと、あらゆる手段
で日本を貶め乗っ取りを謀る路を走ってきています。(略) 在留管理制度の改正を受けて1
月22日から韓国は任意ながら住民登録の受け付けを開始しました。7月9日以降はおそら
く強制送還となるでしょう。無国籍在日の登録カード未更新に対して、韓国側ではすでに対
応をとっています。それに必要なのが、旧住所による強制的な韓国代表番地住民登録で、代

表番地の実態作りと、強制収容の準備でしょう。

事例 24 では、ブロガーA は陰謀組織について言及し、「7 月 9 日以降はおそらく強制送還となるでしょう」という見解を示している。この事例 24 から、2014 年に 2 ちゃんねるに投稿されていた、2015 年 7 月 8 日からの在日韓国人について処遇についての書き込みをブロガーA が参照していたことが理解できるだろう。

しかし、この時点では、ブロガーA は 2 ちゃんねるの書き込みを参照しているに過ぎず、集団通報運動の必要性や意義を読者達に訴えてはいない。では、何が契機となってブロガーA が集団通報運動を「A の日記」の読者達に訴えるようになったのかを確認していきたい。次に示す事例 25 は、「A の日記」で最初に入管への通報が読者達に呼びかけられた 2015 年 2 月の記事からの抜粋である。

[事例 25] 媒介としての入管 2015/02/02

集団訴訟はともかく集団通報なんてふつうはあまり耳にする言葉ではありません。今回はこの関連がテーマです。この言葉が「A の日記」に現れたことは過去ログにも一度もありませんでした。ですが、特定秘密保護法の議論から始まった最近の安倍首相バッシングやその影響を考慮すると「集団通報」が有効な対抗手段だと考えられます⁽²⁰⁾。通報の受付が入管の場合、組織の住所か組織名だけでも対応するので、ひとつの組織に対して入管に集団通報するという結論です。この方法は匿名で容易に行えるため大量に通報されることとなるでしょう。入管HPの通報入力欄から通報しましょう。この対抗が安倍首相への応援となります⁽²¹⁾²⁴。

事例 25 の下線(20)でブロガーA は、安倍が「バッシング」されているという認識を示している。陰謀論世界の確立期における「A の日記」の抜粋として示してきた、事例 22 でも「第一次安倍政権は凄まじいバッシングに遭いました」と述べられており、同様に事例 23 でも「安倍が政権に復帰して約 1 年半の間、陰謀組織は反安倍バッシングの繰り返し」と述べられていたことを鑑みると事例 25 に記されている「バッシング」の主体は陰謀組織だと推察できる。

つまり、ここでは安倍が陰謀組織に対抗する存在であり、それゆえに陰謀組織に安倍に対抗する意図があるならば、陰謀組織による安倍へのバッシングが生じるのも当然だろうとアブダクションされているのである。ここでのアブダクションのプロセスを改めて分析して示そう。

²⁴ なお、この通報実践は後に社会問題として多数のマスメディアで報道されたためか、下線 (21) のような趣旨の記述は 2018 年末までに、アーカイブサイトからも削除されている。

- ① 安倍バッシングを観察した。
- ② 安倍が陰謀組織に対抗している，なおかつ陰謀組織が安倍に対抗しているならば，安倍バッシングが存在するのも当然の結果だろう。
- ③ 安倍が陰謀組織に対抗している，なおかつ陰謀組織が安倍に対抗していると考えるべき理由がある。

この分析から，安倍に対するバッシングという事象が，陰謀組織に対抗する安倍の意図と，陰謀組織の存在についてのアブダクションを再起させていたことがわかるだろう．さらに，アートネクサス理論の作用主体概念に基づいて，作用の連鎖を分析すると，アブダクションをブロガーA に動機づけるという関係においては，安倍バッシングという事象がインデックスであり，陰謀組織に対抗する安倍の意図，およびそれに対抗しようとする陰謀組織の意図がプロトタイプである．また，そのインデックスのあり方についてブロガーA に帰属されているのが陰謀組織である．つまり，陰謀組織は安倍バッシングを生み出すアーティストであり，その安倍バッシングがインデックスとして，ブロガーA にアブダクションを促していたといえる．

先に指摘したように，この「A の日記」の陰謀論世界における二つのプロトタイプの対立的な位置づけによって，安倍に関連する社会的な事象が，陰謀組織についてのアブダクションを再起させるインデックスとなる．そのためにここでは，「特定秘密保護法の議論から始まった最近の安倍首相バッシング」という事象から，ブロガーA が陰謀組織の存在を推論していると考えられるだろう (Figure. 11)．

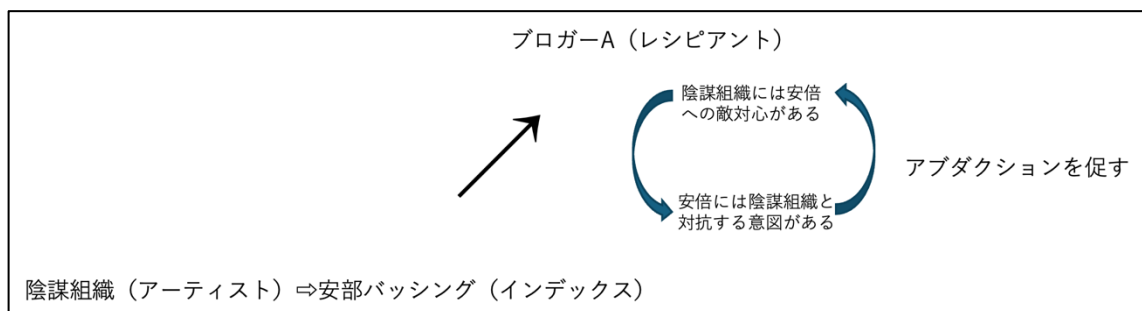


Figure. 11 認識を循環させるプロトタイプ関係

また，ここでの事例からは，対立するプロトタイプ関係による循環的な作用からもたらされる認識とは意図についてだけではなく，その対立関係における優劣関係が含まれた認識であることがわかる．事例 25 では，ブロガーA は「集団通報」と表現しながら集団通報運動の呼びかけに続けて，下線 (21) でそれが安倍への「応援となる」と主張している．安倍が陰謀組織との関係において「応援」を要するような劣勢にあることを示唆して，ブロガー

A はその安倍への支援として読者達に集団通報運動を呼びかけていたのである。これまでも、「A の日記」では、二つのプロトタイプの対立関係を前提とする認識が循環する中で、プロトタイプたちの対立における優勢が「A の日記」で展開されてきた。例えば、2013 年の事例 12 は、「ネットでの戦争は勝利でしょう」という一文で締められ、事例 19 の時点では下線(9)「陰謀組織に都合の悪い情報が次々と拡散」といったように、陰謀組織が劣勢に陥っていると認識されていた。二つのプロトタイプが対立関係であり、また安倍が社会的事象に深く関係する人物であったために、何らかの社会的事象から、その時々における対立関係の優劣についての認識が再起するというメカニズムが理解できるだろう (Figure. 12)。

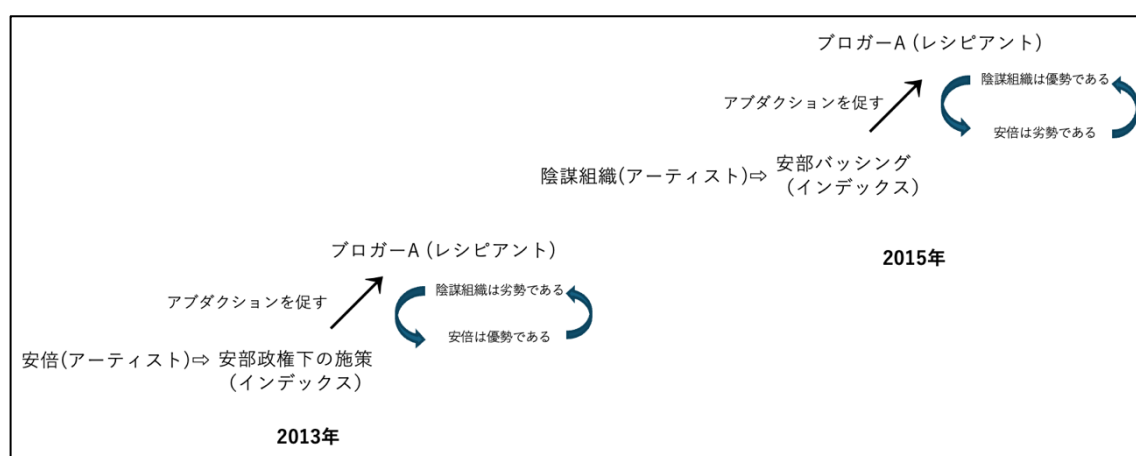


Figure. 12 安倍をめぐる社会的事象と優劣関係としてのプロトタイプ認識の再起

そして、この事例 25 に示されるような、陰謀組織に対抗する存在が劣勢となっている事態とは、この陰謀論世界においては陰謀組織に抗う手段の危機を意味するだろう。Q anon 支持者による米国国議会議事堂の襲撃が、彼らが陰謀組織と対抗していると認識していたトランプが大統領選挙に敗北した直後であったことを鑑みると、対立的な二つのプロトタイプについての認識の循環から生じた、安倍の危機の認識が集団的運動を駆動する一因であった可能性が考えられる。なお、危機の意識については、van Prooijen & Acker (2015)が個人還元主義的な研究から、特定の状況をコントロールできないことへの脅威 (Threats to control) が、人々が陰謀言説を信じる傾向を高めるとしている。また、De Fortuna & De Luca (2024) は、文化心理学の立場から、社会的政治的コントロールの低さに対する感情のような環境からの状況的脅威が、イデオロギーの過激化や陰謀論的信念の強化につながる可能性を理論的な検討から示唆している。故に、上述のような危機の意識については、これ以降の事例の分析を通して注目していく必要があると言えよう。

とはいえ、集団通報運動が開始される 7 月に近づくに連れて、この集団通報運動は、安倍の「応援」という表現だけでなく、また別の表現で微妙ながらも違った意味合いで呼びかけられるようになっていった。その「応援」とは異なる表現による集団通報運動の呼びかけの

例として、2015 年 5 月から 6 月に投稿されていた記事の抜粋である事例 26・27 を次に示めたい。そして、事例 26・27 から入管への集団通報運動における動機を確認した上で、改めてこの運動の契機について検討したい²⁵。

〔事例 26〕 在日中国人と在日韓国人は軍属 2015/05/29

日本国内の在日中国人と在日韓国人は軍属です。実質、ゲリラ戦の状況となるでしょう⁽²²⁾。在日中国人はともかく、在日韓国人はそのほとんどが戦時国際法では便衣兵として扱われる。これはゲリラとして即刻処刑が可能だということです。(略) 7 月 9 日以降、強制送還がどうのこうのというような事態は先の話で、今は米中の紛争次第では日本国内で一瞬にして殺戮戦まであるような事態になっています。このゲリラ対策として安倍総理が国民に要請しているのが、集団企業通報による標的特定、あぶりだしです⁽²³⁾。関連の会社か組織がわかっているならば、その他大勢で不法残留通報ができます。通報件数が 5 万、10 万となれば入管も動きやすい。企業であれば着手、捜査も簡単にできる。この場合はまず不法残留者はでないでしょうが、彼らのクリーンナップができます⁽²⁴⁾。

〔事例 27〕 フリーハンドになる安倍 2015/06/24

集団通報によって安倍総理はフリーハンドになります⁽²⁵⁾。一方陰謀勢力の多い組織は非常に不安定な状態になるでしょう。少なくともヤクザ組織内で日本人と陰謀組織の抗争が起きない流れであれば、この流れで確実に安倍総理は陰謀組織の駆逐作戦に踏み切れるでしょうね⁽²⁶⁾。その選択が一番、想定される犠牲が少ないからです。方法はどれであれ結果として陰謀勢力がいなくなればいいので、別に無理をする必要はないでしょう。従って今まで通り、真綿で首を締め付けるように自滅をめざすに違いありません。

事例 26 では、ブロガー A はまず下線(22)で、日本に居住する外国人達によって「ゲリラ戦」となるという脅威的な事態を示唆しながら、下線 (23) から、入管への集団的な通報を「ゲリラ対策として安倍総理が国民に要請している」と述べられている。さらに続けて下線(24)では、通報が大量になることで陰謀組織を排除できるという見解が示されている。ここでは、事例 25 と同様に脅威的な事態を示唆しながらも、バッシングされる安倍への応援ではなく、陰謀組織に抵抗する安倍からの要求として、集団通報運動を行う必要性が訴えられていたことがわかるだろう。ここで、安倍がそのような要求を行っているという主張の根拠が、「在留管理制度の改正」という施策なのかは記されていないが、ここでも陰謀論世界の確立期と同様に、安倍には陰謀組織を排除する意図があるという仮説に基づいて、「在留管理制度の改正」という施策の意味を解釈していたと考えられる。

さらに、事例 27 の下線(25)で、「集団通報によって安倍総理はフリーハンドになります」

²⁵ 同時期に「A の日記」に集団通報関連ではない記事も投稿されていた。そのような記事の一例を付録 6 として提示する。

と述べた上で、下線(26)では「安倍総理は陰謀組織の駆逐作戦に踏み切れる」という認識が示されている。集団通報運動がただ安倍の支援となるだけではなく、陰謀組織の排除に通じることが強調されるようになっていたことがわかる。事例 25・26・27 を通して、「A の日記」では、集団通報運動が安倍にとって良い影響をもたらすものとして呼びかけられているが、7月に向けて徐々に陰謀組織への悪影響をもたらすという側面が前面化していたと言えるだろう。

ここまで、「A の日記」を発端として最初に生じた集団的運動の呼びかけについての投稿を確認し、①安倍をめぐる社会的事象に動機づけられたアブダクションによる陰謀組織優位の認識と、②集団通報運動が陰謀組織の排除に通じるという認識から運動の意義が主張されていたことを確認した。

このような集団通報運動の意義を呼び込んだ認識が、この動員期になって初めて現れたのかと言えば、そうではない。安倍への支援が陰謀組織の排除に通じるという認識は陰謀論世界の確立期から一貫する、二つのプロトタイプの対立関係についての認識から、集団的な運動の意義が生じている。言い換えれば、陰謀論世界の確立期からこの世界には、運動を生じさせるエンジンとして認識を循環させ合うプロトタイプの関係があり、その循環から生じた危機の認識がそのエンジンを駆動させたのだと考えられる。

ここで改めて示唆されることとは、この世界でアブダクションされる意図とは関係なく安倍という人物が実際に存在していたことの重要性だろう。先に指摘したように、彼が現実社会に実際に作用する存在であるために、安倍へのバッシングなど彼をめぐる事象が生じるたびに、それがインデックスとなってアブダクションを再起させることになる。そしてそこから陰謀論世界における状況が更新され、結果としてブロガーAにとって「目的が達成」されない状況になっていたのだ。当時の安倍晋三という人物が実社会に大きな作用をもたらすエージェントだったことが、この陰謀論世界の維持に対して寄与していたのである。

また同時に、実際に存在する安倍が実社会に大きな作用をもたらす立場にあったことが、具体的な運動を生じさせる契機となったとも考えられるだろう。陰謀組織の排除に向けた具体的な働きかけを読者に指示することは容易ではない。実際に何らかの主体の社会的な非行による加害や毀損を被ることがあったとしても、それに対して制裁を下す権利は個人や集団にはない。法に基づいた刑罰権を発動できるのは、公権力に限られている。さらに公権力の発動には何よりもまず、陰謀組織への制裁のための法律がなくてはならない。そして、集団通報運動が開始された当時の安倍は、政権与党の党首であり、法に作用できる存在でもあった。ブロガーA がこれまでに安倍政権下の法改正から陰謀組織に対抗しようとする安倍の意図を推論していたことを明らかにしたが、「A の日記」における安倍という存在は、陰謀組織への具体的な働きかけとなる立法や法改正を行う存在なのである。つまり、安倍は具体的に陰謀組織に作用できる存在として認識されていたために、その安倍への「支援」としての集団通報運動が、間接的に陰謀組織への具体的な働きかけに通じるのである。言い換えるならば、この「A の日記」の陰謀論世界と現実世界の接点となっている安倍の社会的立

場ゆえに、「A の日記」に集う人々の作用を陰謀組織に具体的に媒介する存在となっていたと考えられる。「A の日記」における言説を超えて社会的運動が生じたのは、アブダクションされる意図が帰属される安倍の社会的なエージェント性によるところが大きかったと可能性があるだろう。

以上を踏まえると、「A の日記」がここまで維持され、また社会運動に通じたのは、プロトタイプとして表象された安倍が社会状況に大きく関わる存在あったことも重要な要素だったと考えられる (Figure. 13).

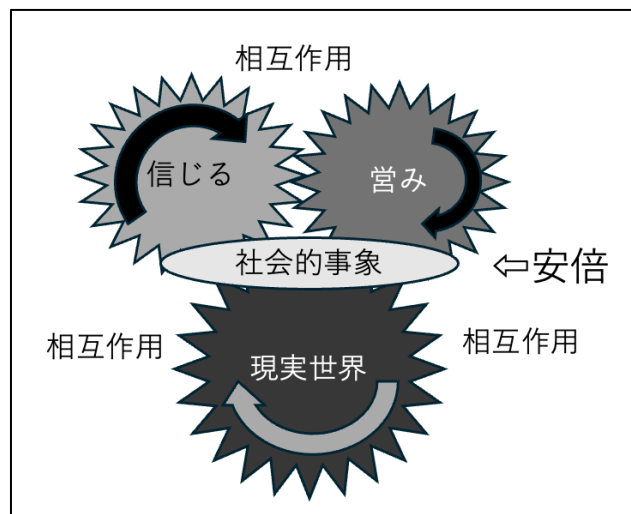


Figure. 13 陰謀論世界の接点としての安倍

しかしながら、入管への集団通報運動によって、この世界における陰謀組織が駆逐されたのかと言え、そうではない。さらに言えば、この集団通報運動の呼びかけについては、マスメディアで報道されることになり、批判されるようになる。にもかかわらず、「A の日記」は継続され、さらに再び別の運動が呼びかけられ、読者達はそれに応えていったのである。ブロガーA が呼びかけた集団的な運動に対しての報道や批判が、「A のブログ」における陰謀論世界にどのような作用を与え、いかなる意味を持っていたのか、次節から確認していく。

4.4.2 効力的観測とインデックスの具体化

入管への大量の通報が生じる前後から、この集団通報運動の呼びかけはマスメディアで報道されるようになっており、様々な批判が生じていた。そのような報道や批判を受けながらも「A の日記」で、集団通報運動の呼びかけが続けられたのは何故なのか、再びアトネクサス理論による分析を踏まえて検討したい。次に、ブロガーA が集団通報運動が開始される以前に運動への批判について触れた 2015 年 5 月の記事からの抜粋である事例 28 と、集団通報運動の開始直後 2015 年 7 月 10 日になされた報道に触れた記事の抜粋である事例 29 を示す。

[事例 28] 推論の再起 2015/05/29

日本人を目覚めさせるために開始し、数十年も日本人を陥れてきた陰謀組織と通報という手段で対抗できるようにするという私の目的は達成されました。しかし、それから休止のお知らせをした直後、記事への反応がありました⁽²⁷⁾。関係者から私に対して危害を加えようとする動きがあることを知らされまして、再開することにいたしました。このブログはもはや私個人のものではなく、全ての日本人のものです。このような事情から、関係者にも警戒するようにお願いしています。実質的に陰謀組織からの宣戦布告という状況ですね⁽²⁸⁾。

[事例 29] 弁護士が関わっている 2015/07/10

ヤフートップの記事「なぜデマ拡大」を再検証します。読めば理解できることですが、要は「通報をやめてください」ということですね。合法的な我々の取り組みを妨害するもので、この記事を書いた方はそれがわかっていないのか？表現を見るに弁護士が関係者が関わっている。そもそも通報にいたる経緯について理解した上での捏造でもなく、恥ずかしくなる記事です。

事例 28 の抜粋元の記事では、「記事への反応」として、メディアでの報道を受けて入管通報の記事を批判する旧 Twitter（現 X）の投稿を添付していた。そのような集団通報運動をめぐる批判を、ブロガーA は、下線⁽²⁷⁾で「記事への反応」と表現している。そして、下線⁽²⁸⁾では、「陰謀組織からの宣戦布告」と記している。つまり、ブロガーA は、運動への批判を陰謀組織からの加害であると推論していたことがわかる。なお、記事への反応として添付される旧 Twitter（現 X）の投稿には危害を加えることを意図した文言はなかった。ここでの「危害」について誰からどのように知らされたのか不明だが、これ以降に読者のコメントが加えられるようになると、読者からブロガーA の命を危ぶむ声が多く寄せられるようになっていく。

さらに、マスメディアによる集団通報運動についての報道について触れた事例 29 では、

ブロガーAは集団通報運動についての報道の内容を、「通報をやめてください」というメッセージとして解釈し、さらにこの報道を「妨害」だと捉えている。「Aの日記」において集団通報運動は、陰謀組織への働きかけを意味するものであった点を踏まえると、ブロガーAは、報道された内容を、陰謀組織から「Aの日記」に対しての要求や妨害だと捉えていたと考えられる。

また、ここでのブロガーAの認識が読者たちにも共有されていたことが、後に「Aの日記」に現れるようになる常連投稿者によるコメントから伺えた。その一例として、常連投稿者Cが2015年12月に「Aの日記」に投稿した、報道を「反撃」として言及するコメントからの抜粋である事例30を次に示しておこう。なお、事例30で言及される「Aの日記本」とは、2015年12月に「Aの日記」の記事を元に制作された書籍を意味している。

[事例30] 必死の反撃 2015/12/25

C：新聞が必死の反撃ですね。「不法滞在の通報、前年比3倍超ネット上のデマ影響か」って。Aの日記本が怖くてさわれないものだから、その代わりに、書かれている内容（集団通報）をデマだと否定。しかしかえって日本人の行動を裏付ける記事になっているところが笑われます。「昨年度の通報メールは月平均で約460件だったが、今年は5月に1821件、6月に1562件と急増。集計中の7～9月はさらに増加傾向で、同局総務課は3カ月間で1万件を超す可能性がある」日本人が覚醒して行動を始めているわけです。この事実はこの新聞社にとっては本気で恐怖なのでしょうね（笑）。

事例28・29・30から、ブロガーAや「Aの日記」読者が報道や批判を、「Aの日記」に対する陰謀組織の害意という仮説に基づいてアブダクションしていたことがわかる。改めてここでの推論をアブダクションとして分析し、そのプロセスを示そう。

- ① 「Aの日記」が呼びかける集団通報運動に対する報道や批判を観察した。
- ② 「Aの日記」に対する陰謀組織の害意が存在し、集団通報運動が陰謀組織への働きかけとなるなら、報道や批判が生じるのも当然結果だろう。
- ③ 「Aの日記」に対する陰謀組織の害意が存在し、通報運動が陰謀組織への働きかけとなると考えるべき理由がある。

この分析から、集団通報運動に対する報道や批判が、陰謀組織の害意についてのアブダクションを再起させていたことがわかるだろう。この分析に基づいてアートネクスス理論から分析すると、まず集団通報運動に対する報道や批判が「陰謀組織の害意」のアブダクションを動機づけていたインデックスである。さらに、陰謀組織はここでは集団通報という作用の客体でありながら、現実には生じた報道や批判という事象を生み出したアーティストでもある。そして、その陰謀組織が生み出した報道や批判が、再びブロガーAにアブダクション

を動機づけるという形式で作用が連鎖していたことがわかる(Figure. 14).

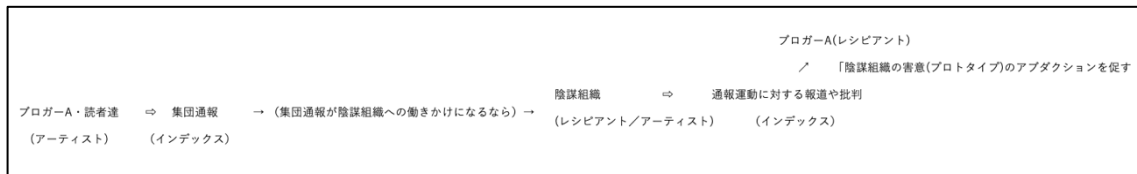


Figure. 14 通報運動に対する報道や批判(インデックス)

しかしながら、事例 28・29 におけるアブダクションにはこれまでのものとは異なる点がある。ここでのアブダクションは、意図や志向としての仮説だけではなく、「集団通報が陰謀組織への働きかけとなる」という運動の効力についての展望的仮説が媒介している。このような自身達の運動の効力についての展望的仮説は、意図や志向についての仮説であるプロトタイプとは異なる。プロトタイプに何らかの働きかけが実際に効力を発揮するという仮説は、プロトタイプではない。故にここから、プロトタイプへ向けた運動の効力についての展望的仮説を効力的観測(efficacy observation)と呼びたい。

また、ここでのアブダクションにはこれまで確認してきたものとは異なる意味があるだろう。この実践で生じた批判とは直接的に「A の日記」に向けられたものであり、「ネットの状況」などよりも具体的かつ直接的に「A の日記」に向けられた働きかけである。つまり、集団通報運動によって「A の日記」への批判が生じることで、陰謀組織が「A の日記」への働きかけを志向した相互作用の主体として現れているのである。

ここまで、集団通報運動を呼びかけるまでの、「A の日記」における陰謀論世界の作用の連鎖を追ってきた。この運動の結果、大量の通報を受けた入管が警察にこの「A の日記」について相談し、「A の日記」ブログサイトは 2015 年 7 月 10 日に一度サーバーから遮断されるという事態に至っていた。しかし、それでもなお「A の日記」は別のブログサービスで再開され、さらに新たな運動を呼びかけるようになり、再び読者達はその新たな運動に加わっていったのだ。次節から、如何にして新たな集団的運動が生じたのかについて、改めてその契機を検討したい。

4.4.3 効力的観測を媒介した認識と実践の循環

この節では、集団通報運動への批判が生じててもなお更なる運動が生じた契機について、オートネクスス理論に基づく分析を踏まえて検討したい。入管通報運動の結果、「A の日記」は一時的に閉鎖されることになるが、その直前に入管通報を呼びかける記事が、ブログサーバーによって閲覧ができないようにされていた。まずはその出来事についてプログラマー A が言及した 2015 年 7 月の投稿からの抜粋、事例 31 を示したい。

[事例 31] 誰の仕業か見当はつく 2015/07/9

緊急のお知らせです！まあ、どうという事はないのですが、数日前に、「A の日記」の記事「通報手引き」が公開不可能、事実上遮断された状況となっています。記事の内容から見て、誰の仕業か見当はつきます⁽²⁹⁾が、とりあえず可能である限り、「A の日記」記事の保存をお願いしたい。このことを想定して記事を発信しているから、何の支障もないのですが、非常に不愉快です。安倍総理の仕掛けた罠にやっと気がついて慌てているということなのでしょうが⁽³⁰⁾、こちらも笑っているつもりはないです。ブログサービスからの強制退会ということはないでしょうが、用心するにこしたことはないので、通報の継続を早急にお願いしたいです。とりあえずはお知らせでした。

事例 31 では下線(29)で、集団通報運動を呼びかける記事が閲覧できなくなったことについて、「記事の内容から見て、誰の仕業か見当はつきます」と、そのような事態を生み出した主体が何者かについて示唆している。事例 26・27 でも確認したように、入管通報を呼びかける記事では、その運動が陰謀組織の排除に通じるものだと意味づけられていた。この点を鑑みると、ここでブロガーA は、入管通報運動を呼びかける記事を閲覧できなくなった主体が陰謀組織であると推論していると考えられるだろう。また下線(30)では、その陰謀組織の意図について安倍に言及しながら記述している。

とは言え、事例 31 では記事が閲覧できなくなった主体について仄めかすにとどまっております、ここでの推論のあり方が明確であるとはいえない。また、この時点ではまだ新たな運動が呼びかけられているわけではない。さらに「A の日記」閉鎖をめぐる記事を確認しながら、新たな運動が生じた契機を探りたい。次に示す事例 32・33 は、ブログサイトの一時的閉鎖後の 2015 年 8 月 10 日に、別のブログサイトで「A の日記」を再開したブロガーA が、その閉鎖について触れた 8 月 30 日の記事の抜粋である。

[事例 32] ハードランディングするしかない 2015/08/30

集団通報は老若男女が参加可能な運動です。大多数の日本人が数の力で対抗できるようになり、大多数のみなさんの協力で勝利が確定しています。私の役割は全うしたつもりでした。しかし、突然のサイト遮断という弾圧で事態は大きく変わりました。これがなければ、妄言ブログ対陰謀組織に過ぎなかったでしょうが、いまや日本人対陰謀組織となってしまう、私も引けなくなりました。これまではソフトランディングを目指していましたが、協力者の皆様もハードランディングをするしかないといった状況になってきました⁽³¹⁾。

[事例 33] これから集団メール攻勢 2015/08/30

Twitter における例の反応を受けて、私は遮断必至とみて準備をしていました。そして、遮断の二日後には新サイトで「A の日記」を立ち上げたのです。あまりの早さに、読者も遮断した側も驚いたでしょうが、そういうわけなのです。すぐに予定していた記事を出稿し、10

日ほどで、再度の「A の日記」遮断に対する対策までも完了しました。ここまできてサイトの閉鎖攻撃は、もう意味がないと思うがじっとしていられないのでしょう。これから集団メール攻勢をかけることになりますが、実現したら、この一連の言論弾圧行為に対し、閉鎖情報の開示と損害賠償請求事案となります。これは私を含めた集団訴訟となるでしょう⁽³²⁾。とにもかくにも陰謀勢力の焦りがサイトの閉鎖でしょう。第一次安倍内閣によって、日本再生への陰謀組織締め付けが始まりました。途中一時挫折があったものの悪魔の邂逅という復活で現在は仕上げにはいっている。彼らの危機感は大変なものでしょう。

事例 32 の下線(31)では、ブロガーA は「サイト遮断」を「弾圧」だと述べ、続けて陰謀組織について言及している。また同時にこの弾圧によって「いまや日本人対陰謀組織」となっているという見解が示されている。実際に何らかの弾圧を受けるといった状況は、一般的に脅威的な事態だとも捉えられるが、ブロガーA はそれを単に個人的なものではなく、この弾圧が日本に対するものだとして主張している。さらに下線(31)では続けて、「私も引けなくなりました(略)ハードランディングをするしかない」とその後の方針を示唆している。「引けなくなりました」という表現からは、さらに集団的運動を続けていく志向が読み取れるだろう。ここでの「ハードランディング」を文字通り、航空機が叩きつけられるように着陸することだと捉えるならば、この陰謀論世界に再び危機の要素が呼び込まれていると言えるだろう²⁶。また、事例 33 の下線 (32) においても、「言論弾圧行為」という表現とともに、「集団メール攻勢をかけることに」なると述べられている。この「集団メール」とは、その詳細については後述するが、ここから新たに呼びかけられるようになる運動の呼称である。

これまでも「A の日記」では、入管通報の呼びかけに対する批判などを陰謀組織による加害だとされてきた。ここでも再びブロガーA は、集団通報運動の結果として生じた「A の日記」の一時的な閉鎖についても、それが陰謀組織からの加害によるものだとアブダクションされていたことが事例 32・33 から改めてわかるだろう。ここでの「A の日記」で展開されている陰謀論世界における事態がいかなる作用によるものなのかについて、ここでのアブダクションのプロセスを分析した上で、アートネクス理論から分析しよう。

- ① 「A の日記」サイトの閉鎖を観察した。
- ② 陰謀組織のブログに向けた害意が存在し、入管通報が陰謀組織への働きかけとなるなら、陰謀組織による「A の日記」サイト閉鎖が生じるのも当然の結果だろう。
- ③ 陰謀組織のブログに向けた害意が存在し、入管通報が陰謀組織への働きかけとなると考えるべき理由がある。

²⁶ Boudry & Braeckman(2011)は、陰謀言説において曖昧な複数の終着地点が用意されることを、陰謀言説の防御的ストラテジーとして議論している。

上記のアブダクションプロセスから、ここでも再び「入管通報が陰謀組織への働きかけとなったら」という効力的観測が媒介する形式で、「A の日記」の閉鎖という状況がインデックスとして、ブロガーAに陰謀組織の存在についてのアブダクションを再び動機づけていたと考えられるだろう。このような効力的観測を通じたアブダクションがブロガーAになされる限りにおいて、大量の通報という状況を生み出した存在として、その主体性が帰属される読者達はアーティストであり、その通報から媒介的に働きかけられる陰謀組織はここではレシピアントであると言える。つまり、ブロガーAや「A の日記」読者たちがアーティストとして生み出した大量の通報が陰謀組織に作用し、その作用を受けた陰謀組織がアーティストとしてサイトの閉鎖という状況を生み出し、そしてそれがインデックスとしてブロガーAにアブダクションを促すという作用の連鎖が理解できるだろう(Figure. 15)。端的に言えば、効力的観測によって、「A の日記」に集う人々の発揮するエージェンシーに彼らが作用される循環が生み出されていたのである。

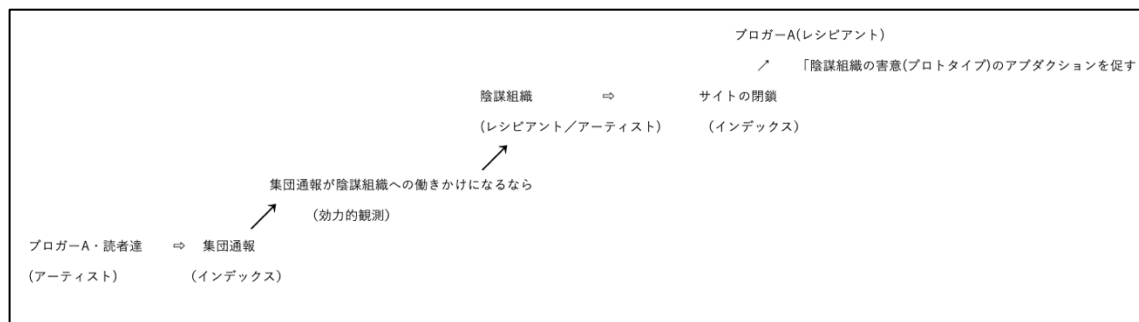


Figure. 15 集団通報が陰謀組織への働きかけになるなら(効力的観測)

以上の動員期における分析を踏まえると、①まず、陰謀組織と安倍の対立についての認識の循環から危機的な認識が生じて、危機への対策として運動が志向され、②次に、効力的観測が媒介することで、その運動の結果生じた批判や「A の日記」の一時的遮断などの状況から、陰謀組織から加害を受けているという認識とそのことに対する危機の認識が再起し、③また新たな運動への志向を生じさせていたことが理解できる。ここで改めて、プロトタイプについての認識とプロトタイプへ働きかける運動が効力的観測を通じて、互いに駆動しあう循環をなしていた可能性が示唆されたと言えよう (Figure. 16)。また、4.3.2において、プロトタイプについてのアブダクションの再起とは、その意図や志向の詳細化を意味すると指摘したが、動員期におけるアブダクションの再起の連鎖から、陰謀組織の害意の矛先にこのブログが加わるという形式で複雑化していると言えるだろう。

とは言え、ここまでの分析結果から示唆される、「A の日記」で展開される陰謀論世界における諸循環については、さらなる事例の分析から確かめていく必要があるだろう。また、動員期までは「A の日記」にはコメント機能が設けられていなかったために、読者達がこの陰謀論世界において果たした役割についてはまだ詳細に分析できていない。「A の日記」読

者達が陰謀論世界においてどのような主体性を発揮していたのかについて、次節からさらに「A の日記」で行われるようになった集団的運動における作用の連鎖を確認していきたい。

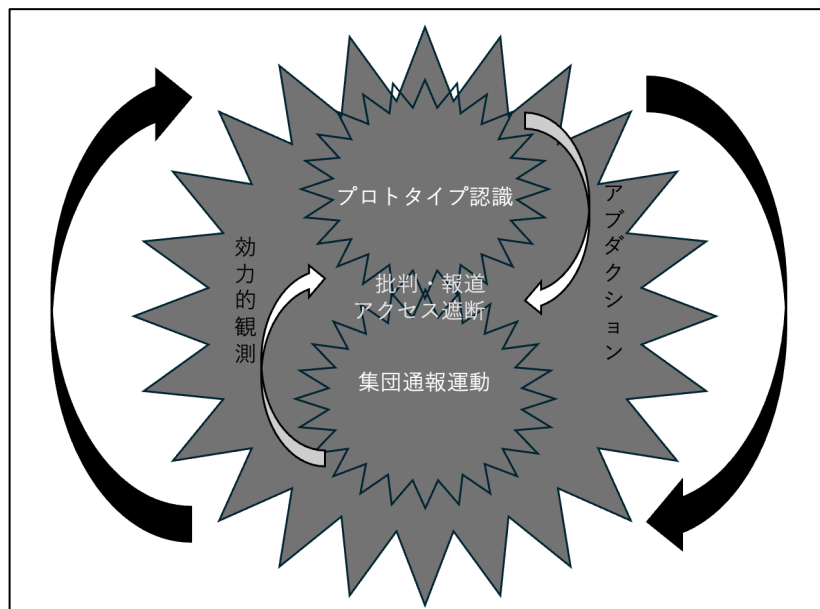


Figure. 16 効力的観測を通じた認識と運動の循環構造

4.5 統動員期

4.5.1 集団メール運動：アーティストとしての常連投稿者

集団通報運動に続けて、ブロガーAがさらに呼びかけた運動が「集団メール」である。これは首相官邸のウェブサイト「首相官邸に対するご意見・ご感想をお寄せください」として用意されたメールフォームにメールで意見を送るという運動である。この時期には、サーバーからのアクセス遮断を受けて、また別のブログサイトで「Aの日記」が再開されたことをきっかけに「Aの日記」にコメント欄が設けられ、ブロガーAと読者たちの交流がはじまっていた。ここから、読者たちの中でもブログが新しく作られてから、1度や2度ではなく定期的にコメントを寄せていた常連投稿者たちの作用にも注目して、「集団メール」と呼ばれる新たな運動における相互作用を分析していきたい。まずは、ブロガーAがどのように集団メールを呼びかけていたのかについて、2015年8月の投稿からの抜粋である事例34・35、及び2015年10月の投稿からの抜粋である事例36から確認したい。

〔事例34〕 意見具申 2015/08/30

集団通報は、匿名性が高いこともあり、想定以上の集中通報となりました。ネットの速攻性です。これからは、集団メールのような形で意見具申、要望をしていくことになります。(略)ただ、陰謀組織の告発はできても、訴訟までには問題があるので準備がいるでしょう。つまり今の弁護士関係法の手直しが必要になります。具体的には集団メールとして「現状の弁護士活動環境には問題がある」というような意見が必要でしょうね。

〔事例35〕 Aの役割 2015/08/30

私の役割は集団メールのとりまとめくらいになるでしょうか。意見要望のコピペアップだけなので、私でなくても誰でもできますが。(略)現行の弁護士体制を切り崩して、外国人生活保護の廃止、国籍条項の復活、入管特例法の廃止などなど、山のようにあるでしょう。

〔事例36〕 動きやすい環境作りをします 2015/10/20

私の役割はほぼ終わっている。タイムスケジュールは安倍総理次第です。示し合わせているわけではないのですが、集団メールで動きやすい環境作りをします⁽³³⁾。まあ、露払いみたいなものです。その安倍総理は米国次第で動いています。南シナ海の米中がどうなるか、12月で何らかの結論が出るでしょう。南シナ海で米中戦争となれば、国内の中国人は便衣兵ゲリラとして駆逐できるでしょうし、マスコミから陰謀勢力を大掃除できます。安倍総理にとってそれが最高のシナリオなのですが、そう簡単にはいかないでしょうね。ただ、安倍総理は非常に幸運な人物ですから、もしやということもあるかもしれません。今私がやっている

ことは安倍総理のできないことです。たいしたことではありませんが、現状では安倍総理が在中邦人に警戒情報とか帰国命令など出せません。これは韓国に対しても同様です。なので私は近しい人物達には帰国を促しています。もう一つは、便衣兵ゲリラというリスクの周知拡散です。まさか安倍総理が「有事には不法外国人はゲリラとして処分します」とは言えませんか⁽³⁴⁾。この問題についてはマスコミはスルーしています。

事例 34 では、ブロガーA は「意見具申」をこの集団メールの目的とし、その一例として「弁護士関係法」について意見を送る必要性を示唆している。そして事例 35 では、「弁護士体制を切り崩し」などの必要性を示唆しながら、この集団的運動におけるブロガーA の役割は「意見のとりまとめ」だと記している。ここで「弁護士体制」について示唆をしている理由として、事例 29 で取り上げられていた報道を弁護士が関わるものだとブロガーA が推測していたことが考えられるだろう。事例 34・35 からは、官邸のメールフォーラムに送られるメールの内容は、ブロガーA 自身の「意見」ではなく、「A の日記」読者たちにその意見を募ったものだったことがわかるだろう。また事例 36 の下線(33)では、安倍について言及しながら「集団メールで動きやすい環境作りをします」と述べ、さらに下線(34)で、安倍に「不法外国人」に対処する意図があることを再び示唆している。事例 36 から、ブロガーA は入管への集団通報と同様に、この集団メール運動が、陰謀組織に対抗する安倍への支援となるものとして呼びかけていたことがわかる。

この集団メールという運動が呼びかけられた時点で、常連投稿者が集団メールをどのようにとらえていたのかについても確認しておこう。一例として、常連投稿者 C による 2015 年 8 月のコメントの抜粋である事例 37 を次に示す。

[事例 37] メールを送ることが安倍さんの後押しとなる 2015/08/30

C: メールを送ることが安倍さんの後押しとなる。世論があればやり易いということ。それは受ける総理官邸もわかってること。集団メールも迷惑ならとっくになにかの警告が出るはずだが全くなにも言っていないことはそういうことでしょう⁽³⁵⁾。(略) 陰謀組織は焦っているからブログの削除をしたに決まっている。

事例 37 では、常連投稿者 C は「安倍さんの後押しとなる」と集団メール運動を安倍に対する支援だと認識していたことがわかる。またここで注目したいのが、下線(35)の「集団メールも迷惑ならとっくになにかの警告が出るはずだが全くなにも言っていないことはそういうことでしょう」という記述である。ここまでは安倍をめぐる何らかの社会的事象から安倍の意図について推論されていたが、ここでは「警告」の不在から「安倍が集団的運動を迷惑に思っていない」という意図がされている。これが如何なる事態によるものなのかについては、さらにこの運動における作用の連鎖を見ていく必要があるだろう。

とは言え、まずは実際にどのような内容のメールがどのように送られていたのかを、常連

投稿者たちの作用にも注目して確認したい。集団メール運動では、官邸へのメールに記すべき内容を常連投稿者たちがコメント機能を用いて、自身たちが陰謀組織に関係すると考える事柄や、各自が陰謀組織への対策となるだろうと考える対策についてのアイディアを出し合うことから始まる。そして、それらをブロガーAや常連投稿者たちが吟味し、採用されたものを常連投稿者たちがそれぞれにメールで送るという流れになっていた。まずはどのように常連投稿者たちが、メール内容のアイディアを提案していたのかを確認したい。次に示す事例38は、2015年10月に常連投稿者DとBがコメント機能を用いてメールの内容について提案する投稿からの抜粋である。

[事例38] エステと称して 2015/10/24

D: テーマ募集とのことで、文章についてはお任せしたいのですが、有事対応で一番危惧しているのは大量の難民船の渡来です。支那人にせよ、朝鮮人にせよ、全て撃沈して欲しいのですが、国際的な世論を考えると難しいかも知れず、国際法上合法的な手段でこれらを阻止することはできないもののでしょうか？ベトナムのボートピープルを受け入れるのとは訳が違い、入国させてしまうと日本は破滅です。この対策をお願いしたいです。

B: あんまマッサージ指圧師免許を持たない療術士が様々な名称（整体士・セラピスト・カイロ士など）でマッサージ業を営んでいるのは周知ですが、これは昭和33年の最高裁判決の通り違法です。国民衛生を悪化させるだけでなく、不法残留外国人の温床となっていると思います。厚生労働省からの早急な療術禁止の通達を要望したいです。彼らは数日の講習会のみで、セラピストなどの認定証を発行し、違法残留外国人の療術士がエステと称して性産業に参入している例もあります。そして、独立開業しては違法残留外国人を匿って雇用すれば、帰化に必要な生計条件を偽装する温床になるでしょう。陰謀勢力の最高の隠れ蓑ではないのでしょうか？あんまマッサージ指圧師免許を持たない者による療術を、早急に禁止するように切望します。

A: マッサージ業については私の方でも調べてみます。ありがとうございます。

事例38で、常連投稿者Dは、有事の事態を想定した懸念を表明しながら、その対策を求めるメールを提案している。続けて、常連投稿者Bはマッサージ業界が「不法残留外国人の温床」であると主張し、業態への規制を提案している。そして、このBの提案に対しては、ブロガーAが「私の方でも調べてみます」と返答している。その後、Bの提案についてはまた別の記事のコメント欄で、他の常連投稿者達からも言及がなされていたが、Dのアイディアについて触れるコメントは見られず、実際に送られるメールに反映されることはなかった。このように、常連投稿者達からメールの内容について様々な提案がされていたが、全ての提案やアイディアが実際に投稿されるメールに反映されていたわけではない。例え

ば、次に示す事例 39 は 2016 年 1 月のメール内容についてのやりとりで、常連投稿者 C が当時の流行についてそれが陰謀組織の意図によるものではないかという意見を投稿していたが、その C の意見もまた実際にメールに反映されることはなかった。

[事例 39] おにぎらず 2016/01/13

C: こんにちは、このブログの食品調査隊員 C です。私の近辺の新聞にちらしを折り込むスーパー関係を調べました。去年「おにぎらず」が流行りましたよね。しかし、おにぎらずって日本文化を毀損しているように思われます。これも組織のしわざでしょうか? 「おにぎり」の「お」はお母さんの「お」と謙譲語の「お」のようで、この「お」で母の愛情や感謝を表現していると思います。それも注意してください。

では、どのような提案がいかに官邸へのメールに反映されていたのかについて確認していきたい。次に示す事例 40 は、常連投稿者 E が我々の身近に存在しているジェネリック医薬品が陰謀組織に関わるものだとし、ジェネリック医薬品についての提案をメールに記すことを提案したのをきっかけに 2016 年 1 月に生じた、ブロガー A や常連投稿者たちによるコメントのやりとりからの抜粋である。

[事例 40] 情報を調べました 2016/01/07

A: ジェネリック医薬品に関する投稿が集中していますね。

F: みなさん、いつも有意義な投稿ありがとうございます。情報を提供して頂き、感謝の限りです。私もジェネリック薬を服薬していたものですから、この裏付けとなる情報を調べていました。確かに中国、韓国からの原材料の輸入量が多いようです⁽³⁶⁾。日本国内で製造される薬の原料、日本国内でそのまま販売されるもの、両方ともです。

G: 今朝ほど投稿させて頂きましたが、サーバーがものすごく重かったのとうまく送信出来ていないと感じたので再投稿させて頂きます。もし重複しておりましたら削除をお願い申し上げます。ジェネリックについては、原材料の殆どを中国やインドなどに頼っている点で要警戒⁽³⁷⁾と考えます。

H: 皆さんの意見を拝見して恐ろしくなりました⁽³⁸⁾。私は診療所で働いています。うちの患者さんには希望すればジェネリック医薬品を出しますが、心臓や頭など大事な部位? に関するお薬は勧めないよ! と一言添えています。ジェネリック医薬品が中国、韓国生産だったなんてもう大至急拡散です! 大事な日本人の命が危ぶまれます。

I: 成分が中韓製なら、日本の企業でありながら中韓にお金を回したい連中の策略でしょう

ね。スーパーフリー事件や第二のスーパーフリー事件と言われた明治大学女子大生集団昏倒事件で薬が使われたと検索でできます。また、最近の大きな病院では漢方を取り入れるところが増えていますが漢方の研究・開発・生産も日本国内でやってほしいですね。

J：ジェネリック医薬品は、以前はゾロ品と言って、良心的なお医者さんは使わない部類の存在でした。今は改善されてきたとは言っても中韓の関わりを考えると、製造に関わる人たちの精神は変わっていないのだと思います。国がそのゾロ品を半ば強制するようなことでは、国民の健康を守れないと思います。Aさん、読者の皆様、自分の健康は自分で守りましょう。

K：ガンで義父が亡くなりました。投薬治療して、下痢と体調不良凄まじい割に、ガンが全然小さくなりませんでした。やっぱジェネリックダメだよ。全然効かないです。創作じゃないです。実話です。怖くて病院にはいけません。

A：今回もありがとう。普通は表に出てこない情報で助かります。今後もよろしくお願いします。また他の方からのレポートからも実態が分かりますね⁽³⁹⁾。

事例 40 では、ブロガーA が「A の日記」にジェネリック医薬品についてのコメントが多くなっているという言及からやりとりが始まり、下線 (36) で F が「裏付けとなる情報を調べました」と記しながら、ジェネリック医薬品と中国・韓国との関連性を指摘している。続く下線(37)では、G が F の指摘したジェネリック医薬品と中国・韓国との関連性について言及し、ジェネリック医薬品について「要警戒」という見解を示している。さらに I が、ジェネリック医薬品と中国・韓国との関連性について、「成分が中韓製なら、日本の企業でありながら中韓にお金を回したい連中の策略」なのではないかという仮説を提示している。続けて J と K も、ジェネリック医薬品についての否定的な考えを示している。そして最後に下線 (39) で、再びブロガーA が常連投稿者たちに「普通は表に出てこない情報で助かります」と感謝を記している。

改めてであるが、「A の日記」では陰謀組織が中国・韓国に関係のある人々として言及されてきた。そしてこの事例 40 でも、常連投稿者たちが、ジェネリック医薬品という特定の事物と中国・韓国との関連性を示し、さらにその関連性と陰謀組織の関わりについて各自の仮説を加えながら、メール内容の提案について賛同している。事例 39 のように官邸メールの内容についての様々な提案がある中でも、事例 40 のようにブロガーA や他の常連投稿者たちから一定の関心を集め、賛同を得たものが集団メールに反映されて官邸のメールフォーラムに送信されていたことがわかるだろう²⁷。

²⁷ 官邸メールに反映されなかった他の提案の例を付録 7 に示す。

このようなやりとりを経て、実際にどのような文面のメールが送られていたのかについても確認しておこう。次に示す事例 41 は、ジェネリック医薬品についての提案の主である常連投稿者 E が 2016 年 1 月に、コメントに加えてメールで送る文面を改めて記している投稿からの抜粋である²⁸。

〔事例 41〕 ジェネリック医薬品 2016/01/30

E：例の投稿をした者です。私のような何の変哲もないものの意見が、採用されるとは思っていなかったの、恐縮しております。昨年、ある睡眠薬の製造販売が中止になりました。それは歴史ある薬です。販売元の(略)製薬の担当者に聞いたところ、「厚労省からの指導で、(略)区でそれが不正に出回っている可能性がある」との事でした。(略)区は生活保護受給者が多いことブロガー様ならご存知でしょう。日本製の薬は高く売れるので、他方でジェネリック医薬品が人気です。我々医師は飲みません。ジェネリックの原材料の製造国は、韓国と中国です。他の国も入っていますが……(略)日本で生活保護と言えば陰謀勢力。A 様はどうかジェネリック医薬品を飲まないでください。

テーマ:ジェネリック医薬品処方について

意見・要望:

生活保護受給者による薬品の不正流通事件が後を絶たない。生活保護受給者は診察室で医師を脅し、先発品を無料で受け取り、ネットで販売しているとの情報がある。生活保護受給者への、ジェネリック医薬品の処方の義務化を強く要望する。

この事例 41 における E のコメントでは、ジェネリック医薬品と中国・韓国との関連性や、生活保護と陰謀勢力の関連性が示唆されているが、実際に官邸メールとして送られる文面においては、陰謀組織や中国・韓国についての言及がなくなっていることがわかる。とはいえ、この事例 41 から改めて、ジェネリック医薬品の問題が集団メール案としてブロガー A や常連投稿者たちから賛同されて「採用」されたために、メールに記す文章として「意見・要望」が記されていることが確認できる。

ここまで、集団メールが作成されるプロセスを示してきたが、最後に、マッサージ業界におけるエステ業務やジェネリック医薬品以外に、どのような事柄が陰謀組織に関わるものとして常連投稿者たちから、提案されてきたのかを把握することができる事例を示して、分析に入ろう。次に示す事例 42・43 も 2016 年 1 月に投稿された、常連投稿者 L と M のコメントからの抜粋である。

²⁸ 常連投稿者、およびブロガー A から賛同されていた他のメールの案についてのやりとりを付録 8 に示す。

[事例 42] 憤怒 2015/12/18

L：安倍総理が法整備を整え，そこにこのブログで国民たちが覚醒し，集団通報，集団メールで日本再生が動き始めました。私は，集団メールの要望内容を見て憤怒を覚えました⁽⁴⁰⁾。それは，メディア，教育界，弁護士，政治家，官僚，自衛隊，警察，地方公務員，芸能界，流通業界，食料輸入販売，食品業界，携帯電話会社，インターネット業界など，ありとあらゆるところに陰謀勢力が潜んでいたからです⁽⁴¹⁾。このような状況では，ブロガー様には命の危険性があり，抹殺されないように常時注意を払っていただく必要があります。ブロガー様が顔を表し，メディア出演などありえない状況です。陰謀勢力の駆逐状況をみてから考えられてもよいでしょう。一人でも多くの日本人の覚醒を図ることに今しばらく特化して継続されんことを願っております。これから寒い時期になります。皆さまご自愛ください。

[事例 43] 何気なく言っているチェーン店 2016/01/29

M：皆さんのコメントを読んで陰謀勢力関係の企業？がこんなにたくさんあるとは思いませんでした。とても不安になってしまいます。毎日何気なく行ってるチェーン店はほとんどが陰謀組織が握ってるようですね。ならば，それを避けて利用できるお店ってあるのでしょうか？不安でたまりません⁽⁴²⁾。早く，日本らしい日々が送れるといいですね。

事例 42 の下線(40)で常連投稿者たちによるメールの提案を見て「憤怒を覚えた」という L が続けて記している下線(41)からは，常連投稿者たちが多岐にわたる業界に陰謀組織が関連する事象があるとして，官邸メールの内容として提案していたことがわかるだろう。さらに事例 43 では，常連投稿者達のコメントを読んだ結果，M が不安を感じているとし，下線(42)から M の不安の背景には，陰謀組織の関与がない「お店」が存在しないのではないかという認識があることがわかる。同様に，事例 40 の下線(38)においても常連投稿者 H が，「皆さんの意見を拝見して恐ろしくなりました」と記している。

事例 40・42・43 を通して集団メール運動において，常連投稿者たちの陰謀組織についての持論が合流することで，これまでのブロガー A による陰謀言説を超えて，日常的に接触する機会のある警察や公務員，あるいは流行物などに陰謀組織が関与しているという言説に発展していたことがわかるだろう。また，これらの事例において，不安や恐怖を感じたという常連投稿者たちの記述からは，陰謀組織の影響が日常的な生活圏の隅々にまで及んでいるという言説の展開から，常連投稿者たちにとっての陰謀組織の脅威についての認識もまた日常に迫る脅威として発達していたと考えられるだろう²⁹。

²⁹ Gell(1998)ならば，ここでの事態について陰謀組織の人格性(personhood)の「拡散」(distribution)，あるいは「拡張」(extension)として議論したかもしれない。Gell(1998)は文化的組織や実践の要素として，古代の聖堂，墓，記念碑，納骨堂，神聖な場所などのインデックスの分散があることを指摘し，生態的声明の限界を超えた人格性の拡張がなければならないと論じている(pp.233)。また，Gell(1998)はそのような分散において，行為主体としての人間のあり方を他の行為主体とは異なる優先性があることを次のように指摘している。「神はこの世界のインデックスに彼の力が現れない限り，力を持ち得ない(略)人間性はその手における物証化のために神に対する先取特権がある(略)因果，媒介，

アートネクサス理論に基づく分析に入る前に、改めてここまでに明らかとなった集団メールという運動のプロセスを整理しよう。まず、ブロガーAが「Aの日記」読者に、安倍への支援として官邸に送るメール内容について募り、それに応じて常連投稿者達は、メール内容の提案として自身達が陰謀勢力に関わると考える出来事やその対策への要望を投稿していた。次に、それらの提案の中でも、ブロガーAや他の常連投稿者の関心を集めたものが改めて「Aの日記」におけるやりとりの俎上に上げられていた。そこで常連投稿者たちは、提案された事柄と、外国人や中国・韓国との関連性を提示したり、その関連性における仮説として陰謀組織の意図を示すといった形式で、提案についての賛同を示していた。そして、このような段階を経て、最後に官邸へ送るメールの文面が制作されていた。また、このようなプロセスを通して、常連投稿者たちが陰謀組織の影響が生活圏の隅々に及ぶものとして認識するようになっていたことがわかった。以下、アートネクサス理論に基づいて、集団メール運動における作用、及びその主体性を分析しよう。

まず、「Aの日記」という陰謀論世界において、常連投稿者たちは、メールのあり方について帰属される存在である。そして、そのメールとは安倍に作用すると認識される存在であり、同時に陰謀組織の害意についての解釈を促すものである。つまり、常連投稿者たちは、プロトタイプについての解釈を促すインデックスとしてのメールを制作し、その存在や特徴が帰属されるアーティストとして主体性を発揮していたと言える。常連投稿者たちがアーティストとして協働的にインデックスを制作するのが集団メール運動だったのである。そして、現実存在する日常的な事象を陰謀組織のインデックスとして表象することとは、現実世界とこの陰謀論世界の接点を生み出す行為である(Figure. 17)。

また、事例 40・42・43 からは、集団メールの内容から常連投稿者達が陰謀組織についての解釈を促されていたことがわかる。つまり、常連投稿者たちは自身達が制作するインデックスのレシピアントでもある。常連投稿者たちは各自のメールの内容から、陰謀組織というプロトタイプについて、それが生活圏に迫るものだという解釈を促されていた。改めてではあるが、プロトタイプについてのアブダクションや解釈を促すのがインデックスであり、インデックスに作用したり作用されるのがレシピアントである。集団メール運動において、常連投稿者たちはそれぞれに制作するインデックスから、それぞれに陰謀組織についての解釈を促され、アーティストとしての自身たちの作用の客体となっている(Figure. 18)。なお、この運動におけるブロガーAはアーティストの制作に作用するレシピアントでありながら、アーティストの制作するインデックスからプロトタイプについての解釈を促されるレシピ

結果の流れにおけるクリティカルな点で、人のエージェンシーが基本となる。この世界において神の存在はこのような人のエージェンシーの作品に内在しているので、全く神自身の目的というよりも、表向きには神の従者であるこの世界の繁栄や、世界的な救済などという人間の目的に縛られている」(pp.144)。この指摘は、インデックスを制作するアーティストの主体性が作用連鎖の中核にあることを強調するものであり、彼はアーティストのそのような行為について「神を罠にかける」(have trapped)と表現している(Gell, 1998, pp.144)。このような意味においてブロガーAや常連投稿者たちはインデックスの制作を通して、陰謀組織を罠にかけながら、陰謀組織という存在を日常生活環境に分散させていたと理解することもできるだろう。

アントであり、そのような存在の典型例として、Gell (1998)はパトロンを挙げている³⁰。

上記の分析から、集団メール運動では、アーティストとして常連投稿者がインデックスに作用しながら、そのインデックスから再び作用されるという主客が入れ替わる循環的な連鎖が形成されていたことがわかる。そしてその循環の中で、プロトタイプについての認識が再起していたのだ。この集団メール運動という営みにおいても、「A の日記」に集う人々の陰謀組織への認識と、彼らの作用が循環していたことがここでも改めて確認できたと言える。

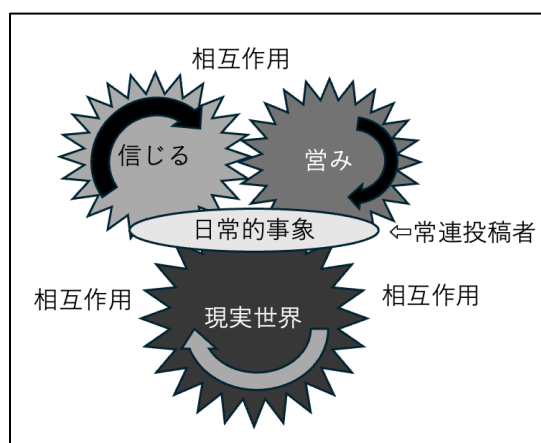


Figure. 17 陰謀論世界と現実世界の接点を生み出す常連投稿者たちのインデックス

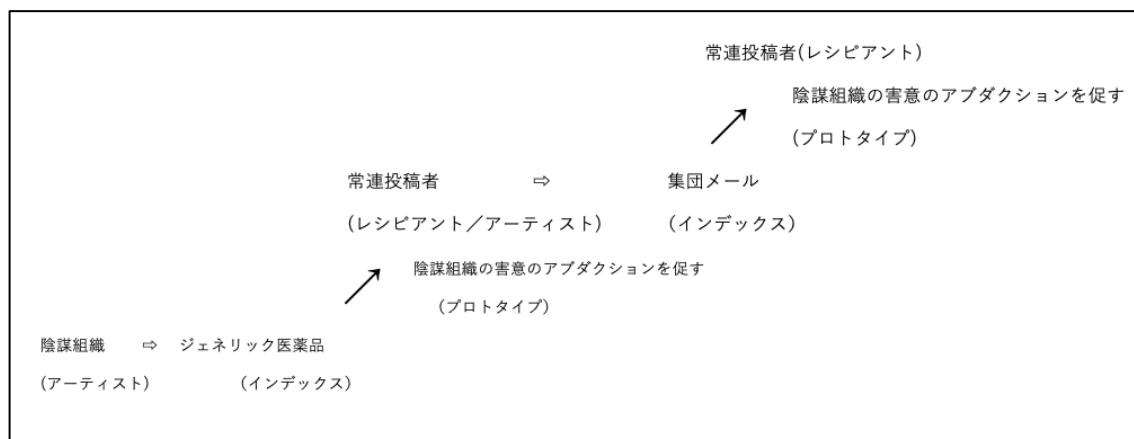


Figure. 18 常連投稿者（アーティスト／レシピアント）

³⁰Gell(1998)は、アーティストに何らかの制作を依頼するといった働きかけを行う主体の典型としてパトロンを挙げ、「エージェントとしての観客」だと論じている。

そして、上述したようなプロセスによる集団メールの制作が「A の日記」での営みの一つとなっていくが、このような運動が実際に安倍の支援となるのかは不明である。それにも関わらず、この集団メール運動は継続され続け、2017 年までに約 140 件のメールが制作され³¹、さらに「A の日記」ではブロガーA や常連投稿者たちと意思疎通する存在として安倍が現れるようになる。そのような事態がどのような作用によるものなのか、さらにこの集団メールをめぐる事態に注目していきたい。

4.5.2 相互行為可能な安倍

集団メール運動が実施されるようになって一ヶ月が経とうとする時期から、「A の日記」では集団メールの社会的な影響について言及したり、その効果を認める投稿が現れるようになっていた。集団メールの影響や効果がどのようにして認識されていたのか、ここから確認していきたい。「A の日記」で初めに集団メールの効果を認める投稿を行ったのが、ブロガーA であった。2016 年 1 月にブロガーA が初めて集団メールの効果について触れた投稿からの抜粋である事例 44 と、同時期に再びブロガーA が集団メールの効果について触れていた投稿からの抜粋である事例 45 を次に示す。

〔事例 44〕 効いているようですね。2016/01/01

各地で実施されているテロゲリラ対策訓練は国民への広報だろう。武装化した陰謀勢力対策のために、これまで非公開だった自衛隊のテロゲリラ対策の訓練が、中東での邦人救出という名目で公開で行われている。一連の流れから、既に 100 万通を超えている集団メールが効いているようですね。

〔事例 45〕 やっと効いてきた 2016/02/29

共謀罪の新設に反対する市民団体共同声明とは、よくもまあ、ゾロゾロあぶり出されてくるものですね。とはいえ、決め手となるのがマイナンバーでしょう。7 月 9 日からの特定で、陰謀組織組織は手中に収められたでしょうが、マイナンバー登録拒否なんて抵抗をしても、あぶり出されるだけです。ここ数日、外国人の生活保護不正受給、エステ 13 店舗一斉摘発⁽⁴³⁾、極左勢力の一斉搜索による中核派幹部逮捕と息つく暇もないほどの動きがありました。が、集団通報と集団メールの効果が、「やっと効いてきた！」ということです。

事例 44 では、ブロガーA が自衛隊による訓練について触れて、その訓練が「陰謀勢力対策」であるという見解を示している。そして、そのような訓練の情報が公開されたことに対

³¹ 安倍が党首を退いてからもこの集団メールの制作は続けられており、2024 年 3 月までに約 8300 件のメールが制作されている。その内容は、センター試験科目から中国語・韓国語を廃止すべきという提案から、LGBT 理解推進法の撤廃やベルマーク運動の廃止要求など多岐にわたる。

して「集団メールが効いているようですね」と述べて、集団メールの効果として解釈していることがわかる。とはいえ、この事例 44 では「ようです」という推量の表現が用いられ、この解釈がブロガーA にとっても推測の域にあることを含意する記述となっている。また、「一連の流れ」が何を意味するのか明示していない。しかし、事例 45 では、集団メールの効果が「やっと効いてきた！」と推量表現を用いずに強調されている。そして、下線(43)では、事例 38 で集団メールの提案として常連投稿者 E が問題視していた、「エステ」に関する出来事が触れられている。事例 43 において、官邸メール運動の効果を強く認めるような表現になっていたのは、エステ業務について問題視する内容の集団メールを送った結果として、「エステ 13 店舗一斉摘発」という出来事が生じたのだとブロガーA が解釈したからだと考えられるだろう³²。

そして、常連投稿者たちからも集団メール運動の成果について言及した投稿がなされるようになる。常連投稿者 N が、2016 年 1 月に集団メールについて言及し、それにブロガー A が応じていた場面からの抜粋である事例 46 を次に示そう。

[事例 46] 相互行為が成立する安倍 2016/01/14

N：街の弁護士日記さんのサイトによると、日弁連会長選挙で圧勝すると見られている弁護士は、安倍政権の枢軸を担う稲田朋美議員の関係者とされていますが、このような安倍政権の中核である稲田朋美議員の動きは、安倍首相が日弁連を籠絡するためでしょうか？これは集団メールの結果でしょうか？⁽⁴⁴⁾であれば次の手はいらないかもですね。

A：裏話をしまえば、実はそうです⁽⁴⁵⁾。日弁連を籠絡する方法と新しい日弁連について二つのメールを官邸に出しています。稲田さんは今が勝負です。しかし、稲田さんが動けないようで、メールが負担になっている可能性もありますね⁽⁴⁶⁾。

事例 46 の下線(44)では、N が日弁連をめぐる状況が「集団メールの結果」なのかを問うている。そして、それに対してブロガーA が下線(45)で「実はそうです」と答えている。また、このやりとりでは、安倍が総裁を勤めていた自由民主党で政務調査会長であった稲田朋美の動向について言及がなされており、下線(46)では、稲田の動向についても「メールが負担になっている可能性も」とあると、集団メールの影響化にあるという解釈が示されている。先に提示した事例 34 で、集団メールの案として「現状の弁護士活動環境」の問題が提案されていたことを示したが、事例 45 と同様にここでも再び、日弁連をめぐる出来事や稲田朋美の動向といった何らかの社会的事象を、集団メールの結果として解釈していることが確認できる。

³² 集団メールの効力についての認識が示されていたその他の例として、付録 9・10・11 を示す。

しかしながら、常連投稿者から集団メールの影響に否定的な投稿がなかったわけではない。集団メールの影響について否定的な見解が常連投稿者 Q から示されていた事例 45 を確認した上で、改めて「A の日記」における官邸メールの効果がどのように認識されていたのか検討しよう。次に示す事例 47 は、2016 年 1 月の常連投稿者 O・P・Q とブロガー A のやりとりからの抜粋である。

[事例 47] 全くヤル気が感じられない 2016/01/28

O: N さんの情報、知らなかったです。この場を書いてくれたことを感謝します。私も頑張ろうという思いになりました。

P: O 様へ。実は私も N さまと同じ内容の記事を知っていて、稲田議員の話が出た時に、コメントしようか迷っていました。N さまが書いてくれたことに感謝します。とのことですが、今後とも、このコメント欄を活用して客観的な情報、率直な意見の交換を行い、A 様を先頭に、一緒に安心安全で誇りある日本となるように頑張りましょう。

A: 稲田朋美の有力次期日弁連会長とのつながりが話題となっていましたね。稲田さん、谷垣さんとも日弁連関連で動けない？動かない？集団メールが負担となっているのでしょうか？

Q: 結論を先に言うことになってしまいますが、谷垣禎一氏に全くヤル気が感じられないです。集団メールにも谷垣氏についての内容が入っていますが、私見に過ぎないかと思いますが、無意味に思えて来ました。この人ダメですね。何もしていません。

事例 47 では、事例 46 に示した常連投稿者 N のコメントへ感謝をのべる O のコメントからやりとりが始まっている。それに対して P が、O に肯定的な返答を行うなかで再び、稲田について言及がなされ、それに対してブロガー A が再び稲田への言及に加えて当時自由民主党の幹事長であった谷垣禎一について言及している。続けて Q が「集団メールにも谷垣氏についての内容が入っています」と述べられていることからわかるように、集団メールにおいて谷垣に関する提案もなされていた。しかし、Q はまた谷垣について「全くヤル気が感じられない」と述べている。ここからは、Q が集団メールの影響が谷垣の動向からは感じられていなかったことがわかる。だが、同時に集団メールが安倍に伝わるという効果を果たしていないという見解が示されているわけではない。ここでは集団メールが谷垣の動向に影響していないのは、「ヤル気」という谷垣の志向性の問題に回収されている。つまり、依然として集団メールが、安倍との相互行為を媒介するだろうという認識の元に、この運動が行われていたと言えるだろう。ここまで明らかとなったことを整理して、アートネクサス理論からさらに、官邸メールの効果を認める認識が、どのように生じていたのかを分析しよう。

まず、この集団メール運動では、陰謀組織に対抗するものとしての安倍に影響を与えるだろうという認識の元にメールが常連投稿者たちに制作されていた。そして、事例 45 から 47 を通して、ブロガーA や常連投稿者たちは、エステ店舗の摘発や稲田の動向といった社会的事象を、官邸メールが効果を発揮した結果であると解釈していた。つまり、集団メール運動が安倍への作用となるだろうという効果的観測に基づいたアブダクションから、集団メール運動の効果が認められていたのである。ここでのアブダクションにおけるプロセスを分析して示そう。

- ① 社会的事象(エステ店舗の摘発や稲田の動向など)を観察した。
- ② 安倍に陰謀組織に対抗する意図が存在し、集団メールがその安倍への働きかけ(効力的観測)となるなら、社会的事象(エステ店舗の摘発や稲田の動向など)が生じるのも当然の結果だろう。
- ③ 安倍に陰謀組織に対抗する意図が存在し、集団メールがその安倍への働きかけ(効力的観測)となると考えるべき理由がある。

上記の分析から、効力的観測を通じて、安倍の陰謀組織に対抗する意図についての認識が再起していたことがわかるだろう。さらに、アートネクサス理論の作用主体に基づいて、作用の連鎖を分析すると、安倍の意図は、集団メールの媒介によって常連投稿者たちから作用される客体的なレシピアントでありながら、アーティストとして様々な社会的状況を生み出し、それがインデックスとして常連投稿者たちにアブダクションを促していたといえる。効力的観測によって措定されたこの連鎖から、安倍の陰謀組織に対抗する意図を再び常連投稿者たちが認識していたことが理解できる(Figure. 19)。

この分析から、効力的観測を通じて、プロトタイプに向けた集団的運動とプロトタイプについての認識が、互いを駆動させ合っていたことを改めて確認することができたと言えよう(Figure. 20)。同時にメールのアーティストであった常連投稿者たちは、再びアブダクションを動機づけられる客体としてのレシピアントとなっていたと言える。ここでも再び、効力的観測によって、「A の日記」に集う人々の発揮するエージェンシーが、自身たちに作用する循環が生み出されていたのである。

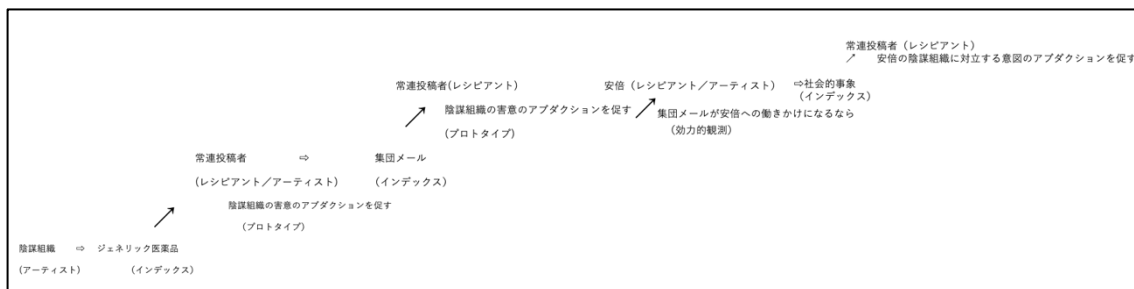


Figure. 19 効力的観測による連鎖作用

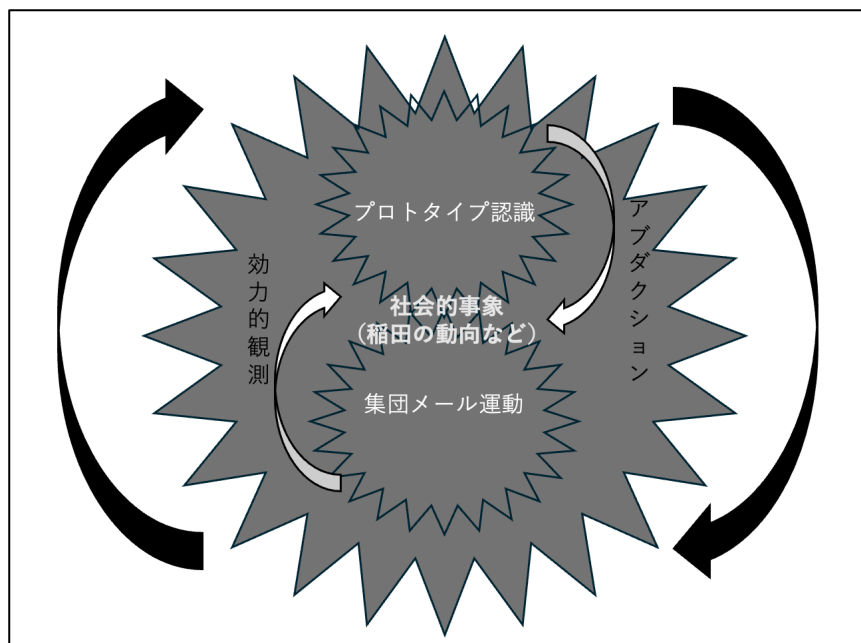


Figure. 20 効力的観測を通じた認識と運動の循環

また、常連投稿者たちやブロガーAが、このようなアブダクションの客体としてのレシビアントである限りにおいて、「Aの日記」における安倍とは、彼らにとっては意思疎通が可能な存在に他ならない。自身らが作成したメールが安倍に影響を与えたのだという認識は、そのメールを安倍が読んでいるという認識を前提とするものだ。事例37において、常連投稿者Cが、「集団メールも迷惑ならとつくになにかの警告が出るはず」だと記していたのも、安倍が意思疎通可能な他者だとするならば理解できるだろう。つまり、そのような「警告」の不在も、安倍がメールを読んだ上で彼が生み出した状況なのである。

以上のように、この集団メールという運動においても、安倍の意図というプロトタイプの推論が再起していたと言えよう。また、先に意図や志向としての仮説の推論を重ねることは、その理論の蓋然性の低下ではなく、その意図や志向についての認識の詳細化に通じる可能性を示唆した。安倍に向けた集団的運動から生じたアブダクションの連鎖から、安倍の意図や志向が詳細化していたのか、2016年2月に常連投稿者Rが投稿したコメントの抜粋であ

る事例 48 から検討しておこう。

〔事例 48〕 命をかける覚悟 2016/02/23

R：安倍さんは、既にハードランディングに向けてと命をかける覚悟ができている様に見えます⁽⁴⁷⁾。私は最近覚醒したので、最初から安倍さんに覚悟があったのかは分かりません。しかし、集団メールなどの応援や期待が安倍首相の覚悟を強めたと思います。当然、安倍さんは、このブログの存在を最初から知っているはずで⁽⁴⁸⁾。「命を投げ出すとしても、覚えておいてほしい」というのは、当然の気持ちでしょう。安倍さんも「日本を取り戻す」事で、日本人の記憶に残るでしょう。今後も集団メールを始め安倍さんへの応援や期待が届く事が安倍さんの決心と力を強める事になると思います⁽⁴⁹⁾。(略) 安倍さんが「日本を取り戻す」ために応援が必要です。

事例 48 における「覚醒」は本文のままの表現である。下線 (47) の、安倍が「命をかける覚悟ができている」という記述から、ただ安倍に「陰謀組織と対抗する意図」があるだけでなく、そのために「命をかける覚悟」があると R に認識されていることがわかる。意図や志向としての仮説のアブダクションを重ねることから、より強硬なものとして安倍の意思にディテールが加わっていることが窺える。この点については、さらに事例を見ていながら改めて検討しよう。

とは言え、その「命をかける覚悟」が「ハードランディング」に向けたものとして記述されていることから、「A の日記」の一時的な閉鎖について記された事例 32 における「ハードランディング」という表現も、「A の日記」世界における危機的事態を意味するものであったことが理解できる。改めて、集团的な運動を駆動する要因として「A の日記」世界における危機の認識があったと言えよう。そしてまた、下線(48)で安倍の「覚悟」が集団メールの効力が発揮した結果だとする効力的観測に基づくと思われる認識が示されると同時に、続けて下線 (49) では、さらに運動を継続しようとする R の志向が生じていることが確認できる。

ここまで、安倍というプロトタイプに働きかける集团的運動の分析から、安倍が意思疎通可能な存在として、陰謀論世界に現れる過程を確認した。これまで分析してきた集团的運動は主に「陰謀組織に対抗する存在」としての安倍への働きかけを志向するものであったが、集団メールと並行して安倍に向けたのではなく陰謀組織に向けた集团的運動も始まっていた。そしてこの運動を通して、常連投稿者たちは、民族や国籍にかぎらず特定の書店の店員などを陰謀組織の関係者としてみなすようになっていった。次節から、その陰謀組織へ向けた集团的運動における相互作用を分析し、「A の日記」における陰謀組織に対する認識がいかに変化していたのかを検討したい。

4.5.3 「A の日記」書籍化をめぐる集団的運動

集団メールが開始されていた 2015 年 12 月 17 日に、「A の日記」の記事を元にした最初の書籍が出版される。現在までに「A の日記」に関係する書籍は 6 冊出版されているが、常連投稿者たちもこの書籍の出版に深く関っていくようになる。まず初めに、ブロガー A は読者たちに Amazon.com でその書籍についてのレビューを記すことを求め、常連投稿者たちがそれに応じていた。その結果、書籍の出版から一月も経たないうちに Amazon.com には 100 件以上の書評が投稿され、さらに 1～5 段階で商品进行评估するレビューでは、約 10 万のアカウントから最も高い評価である 5 がつけられていた。また、常連投稿者が書籍についての提案を行うこともあり、例えば、書籍に「A の日記」の QR コードを表記することが提案され、実際に書籍に QR コードが表記されるようになる。さらに、続けて出版されていく別の書籍では、ブロガー A が「A の日記」に記していた記事だけではなく、常連投稿者たちのコメントが書籍の内容に反映されるようになる。常連投稿者たちが関与しながら「A の日記」書籍が制作されるようになったと言えるだろう。

まずは、ブロガー A がどのような意図から「A の日記」書籍を出版したのかを確認しよう。「A の日記」書籍の出版前にブロガー A が記した記事からの抜粋である事例 49・50 を示したい

[事例 49] 情報提供、啓蒙なんて書籍ではないです 2015/11/29

さて書籍の件です。ネットをしていない情弱の国民皆さんへの情報提供、啓蒙なんて書籍ではないです。2ちゃんねるの情報も記載していませんが、陰謀組織関係に絞った構成にしました。具体的には陰謀勢力の集団告発、告訴の取り組みのための実践本です。

[事例 50] 攻撃第一波 2015/12/14

12 日から反撃開始。12 月の書籍刊行は、攻撃第一波です。これまでは水面化の攻防を行ってきました。誰でもできる戦いである集団メールについては、韓国人と米国人に対する劣等差別に注目して調査していきたいですね。

「A の日記」書籍が出版される前の事例 49 では、「国民」への「情報提供、啓蒙」を目的とした書籍ではないとし、その内容について、「陰謀勢力」への「取り組みのため」の書籍であることが示唆されている。そして、その目的については事例 50 では、「12 の月書籍の刊行は、攻撃第一波」と記されている。つまり、ブロガー A は書籍を陰謀組織への攻撃として出版していたことがわかるだろう。

とはいえ、「A の日記」書籍の出版がどのようにして陰謀組織の攻撃となるのかについては、この 2015 年 12 月 14 日の時点では明示されていなかった。「A の日記」書籍の出版が

どのように陰謀組織に影響をもたらすのかについては、出版直前に示されるようになる。次に、「A の日記」書籍出版の直前に、ブロガーA が「A の日記」書籍の影響について記していた記事からの抜粋である事例 51 を示そう。

[事例 51] 陰謀組織の具体化 2015/12/16

このような状況下で出版です。陰謀組織にとっては天敵のこのブログの書籍化です。サイトの閉鎖は、一時的なものに過ぎませんでした。再開して即座に書籍化とは予想もできていなかったでしょう。サイトの閉鎖が陰謀組織の削除要請であったことがわかっているの、流通規制から出版業界・大手書店が陰謀組織であることが判明する⁽⁵⁰⁾のは戦後初めてでしょう。少なくとも大都市圏では明らかになるでしょう。意外な大手書店があぶりだされるかもしれません。これは戦いの一部です。(略)しかし、「この書籍を取り扱いません」と堂々と宣言してこないものなのか。卑屈というか何か一抹の寂しさを感じてしまいます。私たちは、出版業界と闘争したいわけではないのですが、「おまえもか！」となりそうです。ついに出版となりました。これも戦いの一部です⁽⁵¹⁾。

事例 51 から、「A の日記」書籍の出版において効力的観測が生じていたことが確認できる。まず、「陰謀組織にとっては天敵のこのブログ」という表現からは、改めてブロガーA は陰謀組織から敵対心を持たれていると認識していたことが確認できる。そして下線(50)では、「A の日記」書籍の出版後の予見がブロガーA から示されている。ブロガーA は書籍の「流通」状況から、「大手書店が陰謀組織であるか」どうかの明らかになると予想していたことがわかる。流通規制が生じるという予想は、「A の日記」書籍が陰謀組織に対する不利益をもたらすという前提なしには考えられないだろう。つまり、陰謀組織に関わる書店が存在し、そのような書店に「A の日記」書籍の出版が影響を与えるだろうという仮説、効力的観測に基づいて流通規制が生じることを予測していたのである。さらに、下線(51)でも事例 50 と同様に「A の日記」書籍の出版が陰謀組織との戦いとして言及されている。ブロガーA が陰謀組織への「攻撃第一波」として、「A の日記」書籍の出版によって日本社会に潜む陰謀組織に関わる書店を明らかにしようとしていたことが理解できる。このように、「A の日記」書籍をめぐる運動もまた、効力的観測のもとに行われていたと言えよう。なお、Q anon 言説の支持者たちもまた、陰謀を証明するために数々の事件を起こしている (Rothchild, 2024/2021)。

そして先述したように、ブロガーA は「A の日記」書籍が出版されると、Amazon.com の商品ページにレビューを記すように読者たちに呼びかけ、「A の日記」読者たちが応じていく。そして、ブロガーA は Amazon.com に投稿された書籍の書評を転載して紹介する記事を「A の日記」に投稿していた。「A の日記」読者たちがこの「A の日記」書籍をいかに捉えていたのかを、Amazon.com から転載されていた「A の日記」書籍の書評から確認していきたい。次に示す事例 52・53・54・55 はいずれも Amazon.com から転載されていた書評の

中でも、2015 年 12 月に Amazon.com のユーザーから「参考となった」と評価を受けていた書評として「トップレビュー」に挙げられていたものからの抜粋である³³。なお、これらの事例からは、これまでに「A の日記」読者たちが、どのように「陰謀組織」について認識するようになっていたのかという点についても改めて確認することができる³⁴。

〔事例 52〕 スリリングな体験 2015/12/20

書評投稿者 1：発売早々、メジャーな書店の店頭、及びネット書店から遮断されている模様⁽⁵²⁾。この事実を見ただけでも、いかに日本人の対抗勢力から危険視されているかがご理解いただけると思う。「A の日記」ブログのコメント欄でリアルタイムに陰謀勢力書店リストが更新されていく様からはネット社会のダイナミクスとスリリングさを体感できる⁽⁵³⁾、またと無い機会でしょう。ぜひ皆さんもブログと本書を一読し体感して欲しい。

〔事例 53〕 安倍総理の元で 2015/12/20

書評投稿者 2：日本の闇の部分初めて世間に公開する重要で秀逸な本です。このブログの遮断事件や妨害工作などに奔走した諸悪の根源は今震えあがっているんじゃないでしょうか⁽⁵⁴⁾。次回作も期待しています！自民党安倍総理の元で各方面に潜り込んでいる陰謀勢力を駆逐して平和な日本を取り戻そう！！

〔事例 54〕 半信半疑でした 2015/12/20

書評投稿者 3：実は、最初の頃は半信半疑でした。我が国があれ程侵食されていたとは、俄に信じられなかったし、ブロガーA があそこまで何故知ってらっしゃるのかと引っ掛かりを覚えていました。時間の経過と共に現れ始めた真実とブログ遮断や某ジャーナリストによる Twitter での圧力(そもそも本当に単なる妄想だと言うならばただ黙殺すれば良いことである)を知るに至って、完全な信頼へと変わりました⁽⁵⁵⁾。

〔事例 55〕 なぜ陳列販売しないのか 2015/12/20

書評投稿者 4：この本を Amazon 以外の書店で入手するのは苦勞します。私は(略)で入手しましたが、客が見れない場所に「ひっそりと」在庫保管されていました。「なぜ陳列販売しないのか？」と質問しましたが「発売間もないので」という珍回答⁽⁵⁶⁾。Amazon 総合 1 位の売れ筋なのに陳列販売はしない。こんな経験初めてなだけにブログに記載された通り、販売させない圧力がかかっているのかと、圧力によるブログの突然の遮断もあっただけに、底知れぬ闇を見た思いでした。

³³ Amazon.com から「A の日記」に転載された、その他の書評を付録 12 で示す。

³⁴ この時期に Amazon.com に「A の日記」のレビューを投稿していた者たちの多くが、常連投稿者だと筆者には思われたが、「A の日記」におけるハンドルネームと Amazon.com におけるユーザーネームが一致していたわけではない。故にここでは、常連投稿者ではなく「読者」という表現を用いることにした。

まず、事例 52・53 からはこの書評の投稿者たちが、「A の日記」書籍の出版が陰謀組織へ影響をもたらすだろうと考えていたことがわかる。事例 52 の下線(52)では、ブロガーA による予見に沿うように、特定の書店で「A の日記」が扱われていないという見解が示され、下線(53)では、そのような書店での「A の日記」書籍の取り扱い状況についての情報交換が「A の日記」で行われていたことが伺える。そして、その情報交換から「スリリングさを体感」しているとして、その体感をこの「A の日記」書籍の魅力として記していると理解できる。また、事例 53 の下線(54)では、この「A の日記」書籍の出版を受けて陰謀勢力が恐怖感を覚えているのではないかという見解が示されるだけでなく、ここでも安倍が陰謀勢力と対抗しているという認識が示されている。さらに事例 54 では、「A の日記」に対して「半信半疑」であったとする書評投稿者 3 が、「A の日記」を「信頼」するようになった過程が下線 (55) に示されている。この下線(55)で言及される「ブログ遮断」や「ジャーナリストによる Twitter での圧力」とは、これまでの分析で陰謀組織についてのアブダクションを促すインデックスであったことを明らかにしてきたものである。改めて、陰謀組織が「A の日記」の陰謀論世界で、どのような作用から読者たちに認識されていたのか理解できるだろう。

加えて事例 52・55 では、また新たな事象がインデックスとなっていた可能性が考えられるだろう。事例 52・55 では、陰謀組織の存在についての言及とともに、Amazon.com を除いた書店で「A の日記」書籍が取り扱われていなかったことが言及されている。これは事例 51 で確認した、「A の日記」書籍が陰謀組織に不利をもたらすだろうという効力的観測にもとづく「流通規制」という仮説から、書籍の取り扱い状況という事象を解釈していると理解できる。改めて、この「A の日記」書籍出版直後における「A の日記」読者たちのアブダクションのプロセスを分析した上で、アートネクサス理論から分析しよう。

- ① 「A の日記」書籍が取り扱われていない状況を観察した。
- ② 陰謀組織に「A の日記」への害意が存在し、「A の日記」書籍がその陰謀組織の不利(効力的観測)となるなら、「A の日記」書籍が取り扱われていない状況が生じるのも当然の結果だろう。
- ③ 陰謀組織に「A の日記」への害意が存在し、「A の日記」書籍がその陰謀組織の不利(効力的観測)となると考えるべき理由がある。

上記のアブダクションプロセスの分析から、効力的観測を通じて、陰謀組織の害意についての認識が再起していたことがわかるだろう。さらに、アートネクサス理論の作用主体に基づいて、作用の連鎖を分析すると、陰謀組織は「A の日記」書籍の媒介によって不利をもたらされる客体的なレシピアントでありながら、アーティストとして「A の日記」書籍が取り扱われていない状況を生み出し、それがインデックスとして読者たちにアブダクションを促していたといえる。効力的観測によって措定されたこの連鎖から、陰謀組織の害意を再び常連投稿者たちが認識していたことが理解できる(Figure. 21)。この分析から、効力的観測を

通じて、プロトタイプに向けた集团的運動とプロトタイプについての認識が、互いを駆動させ合っていたことを改めて確認することができたと言えよう。

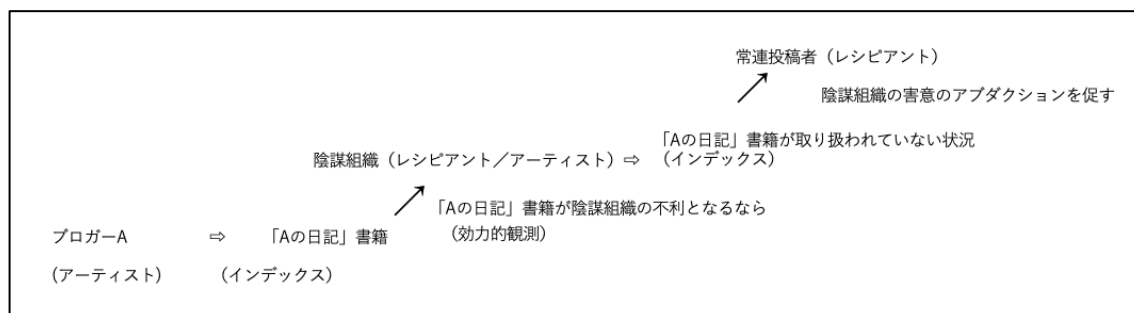


Figure. 21 A の日記が取り扱われていない状況(インデックス)

しかしまた同時に、これまでに確認していない新たな事態が生じていたことが、事例 55 から伺える。事例 55 ではこれまでの陰謀組織についてのインデックスとは質的に異なるインデックスからアブダクションを動機づけられていた可能性が考えられる。下線(56)では、この投稿者が、書店で実際に書店員と交わした会話における書店員の応答から違和感を感じていたことが伺える。これまでもインターネット上の出来事や報道される社会的事象から陰謀組織についてのアブダクションを動機づけられていた。しかし、それらはインターネットなどのメディアを通して表現された事象であった。ここでは、書店員とのやりとりといった、より直接的な体験から「A の日記」読者たちがアブダクションを動機づけられていたことが伺える。

とはいえ、事例 55 で示されるような実体験への違和感が、陰謀組織についてのアブダクションに関係したものなのかについてはさらに、「A の日記」書籍をめぐる常連投稿者たちのやり取りを確認する必要があるだろう。事例 52 の下線(52)で示唆されている、常連投稿者たちによる書店での「A の日記」書籍の取り扱い状況についての情報交換を次から確認していきたい。次に示す事例 56・57 は、2015 年 12 月に常連投稿者たちが行っていた書店についてのやり取りからの抜粋である。

[事例 56] 姑息なことを 2015/12/20

S：T さんへ。山陰の(略)書店の検索機で検索すると、まだ書棚には陳列されて無く、店員に言ってだしてもらわないといけない状態です。

U：長野県の(略)書店で購入を試みましたが在庫なし。取り寄せの依頼も拒否。Amazon ランキング 1 位になる本でそんなことがあるのか？と問うと「理由は言えないがとにかく扱えない」との回答でした。

I：購入しました。（略）本店です。店頭には有りませんでしたね。

V：（略）書店のパソコンで探したところ、芸術の分類に、そこにあるはずもなく、店員さんを探してもらおうと、政治の棚に置いてありました。他の店でも同様の姑息なことをしてるみたいです。マニュアルでもあるんですかね？よほど都合が悪いんですかね⁽⁵⁷⁾？

[事例 57] インデックスの具体化 2015/12/20

W：書店に置かれていなかったと皆様がコメントしていたので、私も近所の書店に確認しに行きました⁽⁵⁸⁾。何と何とありました。隠しておくとかではなく、しっかりと新刊本としてです。無事に購入できました。あと数冊は在庫がありました。近所の書店がまともで安心しました。入荷や陳列状況で陰謀組織かどうか明らかになって驚きました⁽⁵⁹⁾。これまでにない大変な経験でしょう。

U：書店に行きましたが、検索機に「在庫僅少」とあったのに探しても見つからない。店員に本を探してもらうようお願いしたところ、「あ、まだ出してません... 探して参ります」と 10 分待たされる。店員は声を震わせ、不安げな挙動を見せました。睨んでないのですが、何かを察したんですかね。みなさんのコメントにも店員が慌てていたというものが多いですね。「この本を購入しに来る人は天敵だ」といった通達でもあったのでしょうかね⁽⁶⁰⁾？しかし、敵は手強く、監視カメラなどに気をつけましょう。

X：本部がどこまで犯されているのかわかりませんが、こういうふうは何十年も前から大型書店に計画的に入り込んでたんですね。他の大型店舗も汚染されてる可能性があるでしょうね。レジにて書籍を探してもらうように頼んだのですが、「今必要なんですか？」って、その店員さんがどこか不躰で、要領を得ない対応をされました⁽⁶¹⁾。

Y：ここの読者は事情をよくわきまえていますね。本の有無だけで判断しているのではなく、本の配列の仕方や店員の対応などを見て総合的に判断しています。皆さんの投稿のお蔭で陰謀勢力書店のあぶり出しには成功しつつあるようです⁽⁶²⁾。このような投稿が多ければ多いほど、効果を発揮します。

事例 56 では、常連投稿者たちが実際に書店に赴いて、「A の日記」書籍の取扱い状況や陳列状況についての情報交換をしていたことがわかる。そして下線(57)では、特定の書店における「A の日記」書籍の陳列状況が、何らかの主体の意図のもとに生じているという見解が示されている。同様に事例 57 でも、常連投稿者 W の下線(58)「書店に置かれていなかったと皆様がコメントしていたので」という書き込みから、常連投稿者たちが実際に書店に足を運んだ際の状況を報告しあっている。続く、下線(59)の「陳列状況で陰謀組織かどうか明ら

かになって驚きました」という記述からは、特定の書店における「A の日記」書籍の陳列状況が陰謀組織の害意にもとに生じていたと常連投稿者たちが認識していたことがわかるだろう。

そして下線(60)(61)では、常連投稿者 U と X が書店で生じたと思われる実際の店員らの対応を「不安げ」「不躰」と評し、U はそれらの対応を「通達でもあった」から生じたものだという解釈を示している。ブロガーA が「A の日記」書籍の出版が陰謀組織と書店の関係を明らかにするものだとして主張していたことや下線(59)を鑑みると、ここでの「通達」の主体が陰謀組織だと想定されていると理解できるだろう。さらに、下線(62)では常連投稿者 Y が、他の常連投稿者たちから報告されてきた店員の態度について再び触れ、陰謀勢力の「あぶり出しに」なっているという見解を示している。常連投稿者たちは特定の書店における書店員の対応についても、陰謀組織の指示によるという仮説に基づいて解釈していたと言えるだろう。事例 53 で示唆されていた書店員の対応への違和感についても、陰謀組織からの「A の日記」への害意の認識を前提にしたものだったと推察できるだろう。以上から、常連投稿者たちが、実在する特定の書店員の不安げな挙動を、陰謀組織に「A の日記」への害意が存在し、「A の日記」書籍の出版が陰謀組織へ影響をもたらすだろうという仮説に基づいて解釈していたことがわかる。

改めて、書籍の出版をめぐる運動とはどのようなものだったのかを整理しながら、アートネクサス理論に基づいた分析を行いたい。まず、「A の日記」に対する害意が陰謀組織に存在する」という仮説と、「書籍が陰謀組織に不利をもたらすだろう」という効力的観測から、ブロガーA は「A の日記」書籍を出版していた。つまり、ブロガーA は「A の日記」書籍という、陰謀組織の存在を表象した事物としての書籍の出版が陰謀組織へ作用すると認識していた。そして、常連投稿者たちは、Amazon.com の「A の日記」書籍のレビューにて、陰謀組織からの「A の日記」への加害について言及するなどして、「A の日記」書籍の書評を生み出していた。さらに常連投稿者たちは実際に書店に赴き、「A の日記」書籍が店頭にないという状況や店員の不審な行動について、陰謀組織の「A の日記」への害意という仮説に基づいたアブダクションによる認識から、「A の日記」書籍の出版の成果を報告し合っていた。ここでの常連投稿者たちのアブダクションのプロセスを分析しよう。

- ①「A の日記」書籍が店頭に並んでいない状況や、書店員の不審な振る舞いを観察した。
- ②陰謀組織のブログへの害意が存在し、書籍の出版が陰謀組織へ影響を及ぼすなら(効力的観測)、「A の日記」書籍が店頭に並んでいない状況や、書店員の不審な振る舞いも当然の結果だろう。
- ③よって、陰謀組織のブログへの害意が存在し、書籍の出版が陰謀組織へ影響を及ぼしたと考えるべき理由がある。

上記の分析から、効力的観測を通じて陰謀組織の害意についての認識が再起していたことがわかる。さらにアートネクサス理論の作用主体概念に基づいて、作用の連鎖を分析しよう。まず、ブロガーAがアーティストとして「Aの日記」書籍を生み出し、効力的観測に媒介される形で「Aの日記」書籍が陰謀組織に作用していた。次に、その作用を受けた陰謀組織がアーティストとして書店員の不審な振る舞いを生み出し、それがインデックスとして、常連投稿者たちにアブダクションを促していたといえる。効力的観測によって措定されたこの作用の連鎖から、陰謀組織の害意を再び常連投稿者たちが認識していたのである。改めてであるが、書店員の振る舞いを「不審」なものとして観察をすることも、後件である仮説の肯定によって先件の観察を肯定するアブダクションによるものだと考えられる。そして、この「Aの日記」書籍をめぐる集団的な運動でも、これまでの見てきた運動と同様に、陰謀組織は、特定の書店における状況や書店員の振る舞いを生み出したアーティストとして作用するだけではなく、同時にアブダクションされるプロトタイプとして現れていたことがわかる。また、常連投稿者たちも集団メールと同様に、陰謀組織の害意を Amazon.com のレビューにおける書評や、「Aの日記」へ報告としてコメントに表象するアーティストでありながら、そこからアブダクションを動機づけられるレシピアントになっていたことがわかる (Figure. 22).

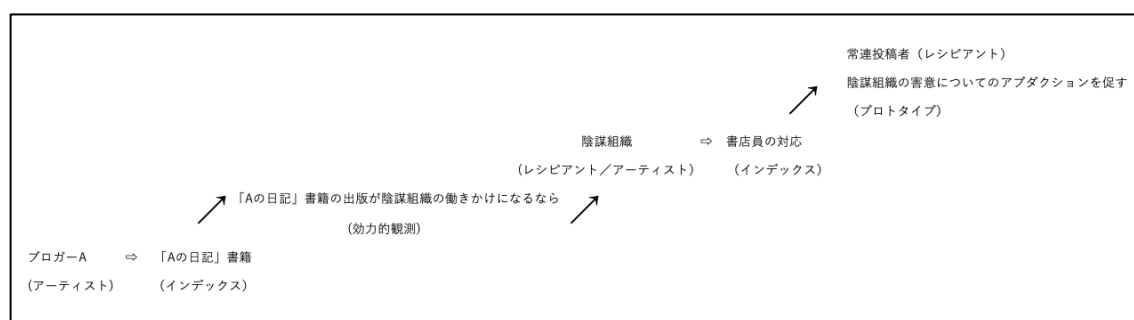


Figure. 22 書店員の対応(インデックス)

しかしながら、「Aの日記」書籍の出版における集団的運動ではこれまでとは異なる点も確認されたといえる。それは、インターネットなどのメディアを媒介して観察される出来事ではなく、この「Aの日記」における陰謀論世界とは関係なく実在する、特定の書店の状況や書店員の振る舞いがインデックスとなっていたという点である。このような事態とは、ブロガーAがアーティストとして制作した書籍という存在が、認識上の存在であるプロトタイプなどとは異なって、この「Aの日記」世界のあり方とは関係なく存在する具体的な存在であるが故に生じたものだと言えよう。書籍という存在は常連投稿者たちに限らず、その世界の外の存在にも実際に具体的な作用を及ぼす事物である。であるからこそ、この「Aの日記」書籍は、書店員といったこの世界の外側の存在をこの世界の作用の連鎖に組み込んだのである (Figure.23)。つまり、具体的なインデックスの制作がこの陰謀論世界と外の現実世界

との接触となり、その接触が効力的観測を通じて「陰謀組織の存在」を実体化³⁵させたと考えられる。

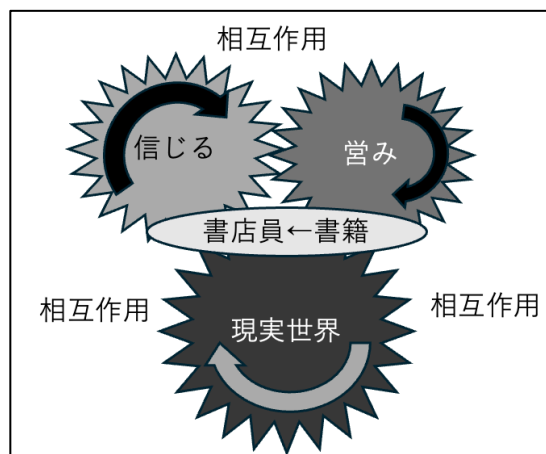


Figure. 23 「A の日記」書籍の作用から、インデックスになる書店員

なお、「A の日記」書籍出版の三ヶ月後には、このような効力的観測を通じた実体化が、安倍についてのアブダクションと同様に、何らかの事象の「不在」からも生じるようになっていた。その一例として、常連投稿者 Z の 2015 年 3 月のコメントの抜粋である事例 58 を示しておこう。

[事例 58] 不在となる患者 2016/03/28

Z: みなさん、いつもありがとうございます。SEALDS 代表の件も凄まじい状態ですね (略) 当院ではブログ本を置くようにしましたが、その途端、患者は激減し、常連の陰謀勢力に近いだろう人物も来なくなりました。…ですが、そろそろ限界に近いです。こちらの情報も漏れて狙われるようです。

³⁵ ここでの実体化とは、Schutz (2003/1975) の現象学における「共在者」化を意味する。Schutz (2003/1975) は他者への体験を二つに分類した。その一つが、時間的空間的に注意を差し向ける「共在者」との「直接体験」(Schutz, 2003/1975, 邦訳 p.147)である。そして、知識集積に基づいて推測することができるだけの「同時代者」との「間接体験」(Schutz, 2003/1975, 邦訳 p.160)である。この「間接体験」とされる「同時代者」とは身体的には存在せずに推論から構成される知識である。事例 6 の時点では陰謀組織は、インターネット上の状況などから間接的にその存在がアブダクションされて構成される知識としての同時代者であると考えられる。しかし、事例 57 では同時代的他者としての陰謀組織という知識が、効力的観測を通じて身体をもって現れる共在者である「店員」に適用されている。Schutz (2003/1975) は、類型化された匿名的過程として我々に現れる知識である同時代者が、共在者に適用されることで「生气」を与えられて、生きた現実にも組み入れられることを指摘している (Schutz, 2003/1975, 邦訳 p.168)。

事例 56 では、常連投稿者 Z が、「A の日記」書籍をおそらく自身の関係する医療関係の施設に備えるようにした結果として「患者は激減」したと報告し、その中でも「常連」だった人物を「陰謀勢力に近いだろう」と評している。彼の生活圏に常に通っている人物が不在となった事態を、「A の日記」書籍が陰謀組織への効力を発揮するという効力的観測に基づいて解釈することで、その人物を実際に陰謀組織と関わるものだと捉えていると理解できるだろう。

そしてまた、このような効力的観測についてのアブダクションから集団通報運動と同様に、さらなる集団的運動が駆動していた。次に示す事例 59 は、「A の日記」書籍出版から一月後の 2016 年 1 月にブロガー A が更なる運動について示唆した記事からの抜粋である。

[事例 59] 第三次攻撃 2016/01/20

書籍横断検索システムを利用すると驚きますよ。戦後初めての事態となっています。12 月の書籍発売時では、オンライン書店の中で販売するのは Amazon だけで、完璧な流通規制包囲網でした。しかし今やそれは崩壊しています。1 月現在 14 のオンライン書店で取り扱われています。包囲網を破壊しました。2015 年に集団通報を開始し、その時同時にまた安倍の「日本を取り戻す」作戦が始まりました⁽⁶³⁾。ブログが遮断されて復活後、政権の動向にシクロして出版という反撃に至りましたが(略)第一次攻撃、第二次攻撃を成功させたことになります。そして第三次攻撃に入ります。表面化した害虫は容易につぶせる⁽⁶⁴⁾。

この事例 59 では、再び効力的観測に基づくアブダクションが確認できる。下線(63)では、検索システムで把握できる書籍の流通状況から、事例 51 でも言及されていた「流通規制」の「包囲網」が「破壊」されているとブロガー A が認識していることがわかる。また同時に、「A の日記」書籍の「出版」が陰謀組織への「反撃」となったという認識から、さらに陰謀組織への攻撃を行おうとするブロガー A の志向が読み取れる。「A の日記」書籍の「出版」が陰謀組織への「反撃」となったという認識とは、その書籍の出版が陰謀組織の不利となるだろうという効力的観測に基づいた解釈の結果に他ならない。つまり、検索で示される流通状況からブロガー A が効力的観測についてのアブダクションを促されていたことがわかる。ここでのアブダクションのプロセスについても分析して示そう。

- ① 「A の日記」書籍の流通が規制されていない状況を示す検索結果を観察した。
- ② 陰謀組織が存在し、書籍の出版が陰謀組織の反撃となるなら(効力的観測)、「A の日記」書籍の流通が規制されていない状況を示す検索結果も当然の結果だろう。
- ③ よって、陰謀組織が存在し書籍の出版が陰謀組織の反撃となったと考えるべき理由がある。

ここでの分析からも、効力的観測を通じて陰謀組織についての認識が再起していたことがわかるだろう。さらに、アートネクサス理論の作用主体の概念に基づいて、作用の連鎖を分析すると、陰謀組織がアーティストとして書籍に関する流通状況を生み出し、それがインデックスとしてブロガーAにアブダクションを促していたといえる。効力的観測によって措定されたこのような連鎖から、陰謀組織の存在を再びブロガーAが認識していたことが理解できる(Figure. 24)。そしてまた下線(64)で「第次三攻撃に入ります」と記されているように、効力的観測についてのアブダクションの再起から、さらなる運動へと方向づけられていたことが理解できる(Figure. 25)。

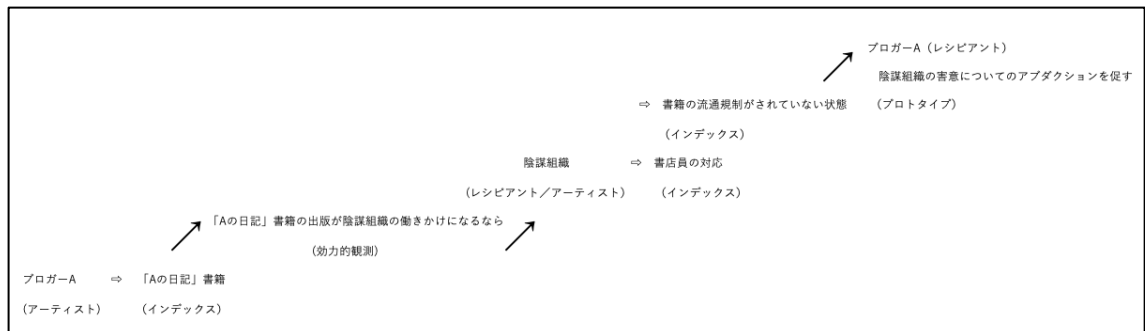


Figure. 24 陰謀組織（レシピアント／アーティスト）

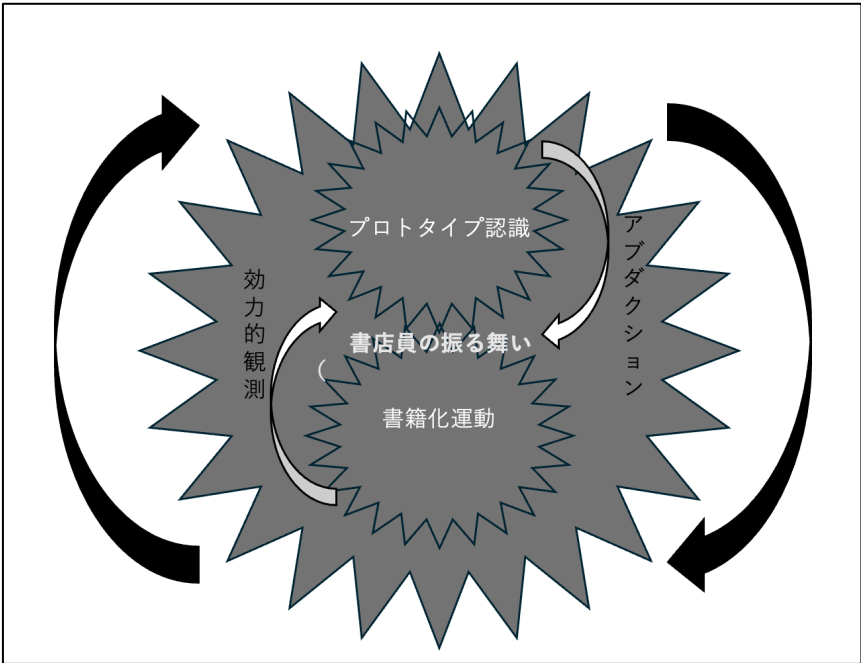


Figure. 25 効力的観測を通じた認識と運動の循環

このような集団的運動による陰謀組織についての認識の再起から何らかの行動を方向づけられていたのは、ブロガーAだけではなかった。この「Aの日記」ブログを介した集団的

運動だけでなく、常連投稿者たち各自の日常的な活動を方向づけるようになっていったのである。次に示す事例 60・61・62 はそれぞれ、2016 年 3 月の常連投稿者 AA, AB, AC によるコメントからの抜粋である。

〔事例 60〕 大爆笑されました 2016/03/17

AA：私が住む地域に十数年前に出来た無駄に大きな建物が車で 20 分圏内に 3 件も在ります。事が起きるとしたら、私はあの建物に陰謀勢力が集結すると思ってます。武器を隠している可能性もあるでしょう。色々と考えて竹刀を 2 本購入しました。まだ覚醒していない友人から大爆笑されましたが、私は本気で ⁽⁶⁵⁾。

〔事例 61〕 身体の鍛錬 2016/03/23

AB：ご苦労様です。日々、ブログを励みとさせて頂いております。友人への配布用を含めて 3 冊購入しました。買い占めも考えましたが、近隣の日本人のためを思い、遠慮しました。内容は初めての人には衝撃的ですが、このぐらいインパクトが日本人覚醒の起爆剤にちょうど良いと思いました（略）書店で購入しましたが、入荷の遅れもなく、ここでも陰謀組織の弱体化が感じられ、着々と陰謀組織包囲網が狭まりつつあるように感じ、感動もひとしおです。私もいい年ですが有事にはお役にたてるよう、学生時代より続けている武道の鍛錬を見直し、即反応できる体へ鍛え直しています ⁽⁶⁶⁾。ことが起きた時には足を引っ張らないよう心掛けたいです。ハードランディング（個人的には望みませんが）に向けての動きを報道からも感じるようになりました。ブロガー A さまにおかれましては、求心的役割は大変とは存じますが、日本を取り戻すまでお導き頂きたいです。

〔事例 62〕 友との疎遠 2016/03/30

AC：連日の更新ありがとうございます。安心します。このブログの中身をお花畑層に知ってもらう... 本当に難しいですね。少し話して、無理かなと思えば早々に切り上げるようになりました。ただ、家族や友には、この危機を分かって欲しいと願わずにはいられず、無理強いから反発を買い、拳句の果てには友と疎遠になったりと、悲しい思いも致しました。しかし事が起こった時のために、私は諦めずに、話し続けています。遅かれ早かれ、その日はやって来ますから ⁽⁶⁷⁾

事例 60 下線(65)では、AA が有事に備えて竹刀を購入したことを報告しながら、その行為に対する友人の反応を示している。また、事例 61 では、AB が書籍の入荷に遅れがなかったことから、「陰謀組織の弱体化」を認識していることがわかる。そして下線(66)では、AA と同様に AB も有事に備えて「即反応できる体へ鍛え直して」と述べている。さらに、事例 62 の下線 (67) からは、AC が自身の周囲の人物に陰謀組織による「危機」を伝えていくことを続けていく意志が読み取れるだろう。常連投稿者たちがそれぞれの考えや思

いからそれぞれに、身体を鍛える、武装する、周囲に伝えていくといった個々の日常的活動を展開していったことがわかるだろう。集団的運動とアブダクションの再起の循環から、陰謀論世界と個々の日常生活世界が結び付けられていき、匿名空間での集団的实践だけでなく、実際に自身たちをよく知る他者と共在する生活空間での個人的活動が生じたのだと考えられるだろう³⁶。

ここまでの続動員期における分析から、集団メール運動を通じて相互行為可能な存在として安倍が現れるようになり、「A の日記」書籍化をめぐる運動を通じて陰謀組織の存在が実際に体験される具体的な存在として現れるようになった過程を明らかにした。

とはいえ、事例 59 はこれまでの事例と分析から明らかにしたアブダクションによる認識とは、性質が異なっていたとも考えられるだろう。なぜなら事例 59 では、効力的観測についてのアブダクションを通じて、陰謀組織の存在についてもアブダクションされているが、陰謀組織の「A の日記」への害意がアブダクションされているわけではない。つまり、陰謀組織が書籍の流通規制を行わなくなったという事象は、陰謀組織には「A の日記」への害意があるという仮説のアブダクションを促すインデックスとはならないだろう。依然として陰謀組織に「A の日記」への害意があるのならば、「A の日記」書籍の流通を規制しなくなるというのは、不自然な事態だと言えよう。最後に上述のような、これまで確認してきたアブダクションによる認識の典型とは異なる、境界的な事例を改めて検討して本稿の分析を終えたい。

³⁶ 常連投稿者が各自で開始していた活動についての他の例を付録 13・14 に示す。

4.6 境界的事例の検討

4.6.1 不測を回収する陰謀組織の意図

ここまでの分析から「A の日記」の陰謀論世界において、再起するアブダクションによって陰謀組織との優劣関係についての認識が導かれていたことを確認した。そしてまた、再起するアブダクションによって陰謀組織の意図や安倍の意図の認識のあり方も変容していたことを確認した。例えば、集団通報運動が批判的に報道されてから、陰謀組織の害意の対象に「A の日記」が含まれるように認識されるようになっていた。この点については先に、様々なインデックスに動機づけられたアブダクションを繰り返すことで、認識されるプロトタイプの意図が詳細化することを指摘した。

しかしながら、各インデックスからの個別のアブダクション、さらには「A の日記」に集う人々による個々のアブダクションによって導かれる認識に整合性がなければ、矛盾が生じてしまう。そのような矛盾は、プロトタイプの意図の認識が根幹となっているこの陰謀論世界を揺るがす契機となりうるだろう。具体的には、事例 51 では「A の日記」への害意から陰謀組織は「A の日記」書籍の流通を規制しようとする存在であったが、事例 59 では流通の規制が生じていないことがブロガーA から観察されている。陰謀組織が書籍の流通規制を行わなくなったという事象は、陰謀組織には「A の日記」への害意があるという仮説のアブダクションを支持する根拠とはならない。陰謀組織に「A の日記」への害意があるなら、「A の日記」書籍への流通規制がされなくなったという観察は、これまでアブダクションされてきた陰謀組織の害意の認識とは矛盾するアブダクションを促しうるものだろう。

事例 57 に示された、これまで確認してきたアブダクションによる典型的な認識とは異なる、アブダクションによる認識が「A の日記」でどのように扱われていたのかをここで確認したい。改めて関連する「A の日記」書籍についての抜粋である事例 51・52・59 を示そう。なお、事例 51 は「A の日記」出版の直前のブロガーA による記事からの抜粋、事例 52 は「A の日記」出版直後の Amazon.com の読者レビューからの抜粋、事例 59 は「A の日記」出版から一月後のブロガーA による記事からの抜粋である。

[事例 51]陰謀組織の具体化 2015/12/16

このような状況下で出版です。陰謀組織にとっては天敵のこのブログの書籍化です。サイトの閉鎖は、一時的なものに過ぎませんでした。再開して即座に書籍化とは予想もできていなかったでしょう。サイトの閉鎖が陰謀組織の削除要請であったことがわかっているので、流通規制から、出版業界・大手書店が陰謀組織であることが判明するのは戦後初めてでしょう。少なくとも大都市圏では明らかにになるでしょう。意外な大手書店があぶりだされるかもしれません。これは戦いの一部です。(略)しかし、「この書籍を取り扱いません」と堂々と宣言してこないものなのか。卑屈というか何か一抹の寂しさを感じてしまいます。私たちは、

出版業界と闘争したいわけではないのですが、「おまえもか！」となりそうです。ついには出版となりました。これも戦いの一部です。

〔事例 52〕 スリリングな体験 2012/12/20

書評投稿者 1：発売早々、メジャーな書店の店頭、及びネット書店から遮断されている模様。この事実を見ただけでも、いかに日本人の対抗勢力から危険視されているかがご理解いただけたと思う。「A の日記」ブログのコメント欄でリアルタイムに陰謀勢力書店リストが更新されていく様からはネット社会のダイナミクスとスリリングさを体感できる、またと無い機会でしょう。ぜひ皆さんもブログと本書を一読し体感して欲しい。

〔事例 59〕 第三次攻撃 2016/01/20

書籍横断検索システムを利用すると驚きますよ。戦後初めての事態となっています。12 月の書籍発売時では、オンライン書店の中で販売するのは Amazon だけで、完璧な流通規制包囲網でした。しかし今やそれは崩壊しています。1 月現在 14 のオンライン書店で取り扱われています。包囲網を破壊しました。2015 年に集団通報を開始し、その時同時にまた安倍の「日本を取り戻す」作戦が始まりました。ブログが遮断されて復活後、政権の動向にシンクロして出版という反撃に至りましたが(略)第一次攻撃、第二次攻撃を成功させたことになります。そして第三次攻撃に入ります。表面化した害虫は容易につぶせる。

これらの事例では、一貫した陰謀組織の害意という仮説から解釈ができない事象の観察とアブダクションがなされていたことがわかる。改めてであるが、「A の日記」書籍の出版直前である事例 51 では、その「A の日記」書籍の出版が陰謀組織の不利になるだろうという効力的観測に基づいて、書籍の流通規制が生じるという予測が示されている。そして、出版直後の事例 52 では、「A の日記」書籍が Amazon.com を除いた他の書店を取り扱われていないという状況の観察から陰謀組織の害意についてのアブダクションが読者に生じている。しかし、その一ヶ月後にブロガー A が記した記事からの抜粋である事例 57 では、その時点には多くのオンライン書店で「A の日記」書籍が取り扱われるようになった状況が観察され、「流通規制包囲網」が崩壊したのだと解釈されている。読者による事例 52 とブロガー A による事例 59 とでは、「書籍が Amazon.com を除いた他の書店を取り扱っていない状況」と「多くのオンライン書店で書籍が取り扱われるようになった状況」という相反するような事象が観察されているのである。これまで「A の日記」で示されてきたような、陰謀組織の「A の日記」への害意が存在するという仮説から、陰謀組織が「A の日記」書籍の流通規制をしなくなったと説明するには困難があるだろう。依然として陰謀組織が「A の日記」に対する害意があるのならば、その書籍の流通を規制しなくなることに疑念が生じてもおかしくない。そして、また「多くのオンライン書店で書籍が取り扱われるようになった状況」の観測とは、「A の日記」書籍が陰謀組織に不利をもたらすという効力的観測にも矛盾するも

のだ。事例 59 で示される事象の観察とその解釈は、これまでのアブダクションから導かれていた陰謀組織の害意についての認識や効力的観測を揺るがす矛盾となり得るだろう。

では、この矛盾を呼び込むような事象の観察と解釈が、盲目的にブロガーA を信じる読者たちに看過されてきたのかと言えばそうではない。むしろ、積極的に焦点が当てられて常連投稿者たちに取り上げられていたと言える。次に示す事例 63 は、常連投稿者 AD が投稿したコメントの抜粋であり、ここでは陰謀組織が「A の日記」書籍の流通規制を行わなくなったことについて触れられている。

[事例 63] 陰謀勢力視点の語り 2015/12/24

AD：アマゾンから本が届いた。今頃になってようやく手に取ることができた。(略) 改めてこの本を読んだ感想は、明らかに史上最悪の本だ。あのブログはどうにか削除した。私たちの力を合わせれば、何でも可能だった。私たちの力に怯えているに違いないと思った。ところが、あれよあれよという間に、殺したはずのブログが、本に生まれ変わり、忌々しくも神聖な書店の棚の片隅を占めている。ネット書店にしても、新興の外資系 Amazon はやむを得なかったが、日々影響力を維持してきた他の書店は圧力のおかげでどうにかなると思っていたが、逆転されてしまった ⁽⁶⁸⁾。だが、大手書店にも取り扱い中止を申し入れると、在庫があっても棚に置かないなどの協力を得られた ⁽⁶⁹⁾。(略)しかし、この本は何とも残念だ。長年にわたる裏工作の末、我々は政権、司法、行政、経済、教育、医療などあらゆる分野で権力と影響力を行使することに成功した。それなのに、この“最悪本”が日本人の間に広く浸透してしまったら、私たちの苦肉の策も台無しになってしまう。

A：陰謀勢力目線ではこうだろうという考察ですね。大筋そうだと思います。

ここで常連投稿者 AD は、「私たち」という表現を用いて「A の日記」書籍をめぐる一連の出来事について語っている。それに対して、ブロガーA が「陰謀勢力目線ではこうだろうという考察ですね」と返していることから、この AD の投稿が陰謀組織の視点から「A の日記」書籍をめぐる出来事について記されていると理解できるだろう。そして、下線(68)では、「A の日記」書籍の流通規制が成立しなかった事態について、「逆転されてしまった」のだという陰謀組織側の事情を見立てて述べている。この見立ては、「A の日記」書籍の出版が陰謀組織への反撃になったという見解に基づくもので、ここでは「A の日記」書籍の出版が陰謀組織の不利となるという効力的観測が維持されていると言えるだろう。その上で、下線(69)「だが」という表現でさらに続け、「A の日記」書籍の「在庫があっても棚に置かないなどの協力を得られた」と語っている。これは、事例 56・57 で常連投稿者たちによって行われていた「A の日記」書籍の店頭での陳列状況の観察と、それによるアブダクションから導かれた陰謀組織の意図について改めて示していると理解できるだろう。

つまり、AD は「書籍の流通規制が生じた」「書籍の流通規制が生じなくなった」という

観察に加えて、書店で「A の日記」書籍が陳列されてない状況というまた新たな観察を加えて、改めて陰謀組織の害意をアブダクションし、それを示していることがわかる。観察事例を増やすことで、常連投稿者 AD は、陰謀組織が書籍の流通を規制しようとしたが、それに失敗したと認識して次の手として書店における書籍の陳列状況に作用しようとしたという、柔軟に推移しながらも一貫して害意のあるものとして、詳細な陰謀組織の意図をアブダクションしているのである。それでは、この AD による陰謀組織の意図についての創作がいか「A の日記」で受け止められていたのかについても確認しておこう。次に示す事例 64 は、AD の投稿を話題にする。

〔事例 64〕むしろ、躍動感が見られる 2012/12/24

AE：A 様へ、この内容が事実だとすると彼等が行ってきた悪行が完全に裏付けられた事になります。

AF：一見すると「陰謀勢力？」と戸惑いますが、コメント欄のコメント通り、こっち系の人ですね（笑）。読み終えるまでに途中で血圧が上がりますが⁽⁷⁰⁾、最終的には笑ってしまいます。

A：この投稿に対して驚いた読者さんがいたのか、8 件の削除依頼がきてました。わかる方にはいいですが、あまりリアリティをもたせると知らない方は心配しますよね⁽⁷¹⁾。これは AD さんの遊びです。ちょっとジョークが過ぎると思われる方もおられるかと思いますが、その気持ちもよくわかります。ここ数年で、みんなで頑張ってきたのですから、この書籍化の一連の流れから、やっと先が見えたと感じているのでしょう。もはや、書店の販売状況報告から、悲壮感もなくなりますね。むしろ、躍動感が見られると言ったら言いすぎでしょうか⁽⁷²⁾。まだ先はありますが、もう少しです。

AG：AD さんの真意としては、やつらはこんな風に思い・考えているのではないかという、大人のエスプリでのロジック披露ですね。AD さんのような理解者は他にも依然から、ファンブログでわかりやすい解説をしてきた b さんがおられます。副読本として出版されてほしい代表的なブログです。新しく「A の日記」に来られ、読み始めた方々にファンブログの併読もあらためてお勧めさせていただきます。

AE：みなさん、ちょっと落ち着きましょう。AD さんのコメント、私も拝見させて頂きましたが、「皮肉」のようですよ？⁽⁷³⁾ きっと陰謀勢力はこんな風に考えてるのだろう www の皮肉ではないかと。

事例 64 の下線(70), (71), (73)からは、一部の常連投稿者たちが AD による陰謀組織目線の投稿を、真に陰謀組織の一員によって記されたものと受け止めていたことがわかる。例えば、AD の投稿に削除依頼が出されていたことや、陰謀勢力の視線からの創作として受け取っていない常連投稿者に対してなだめるコメントがなされていることから、常連投稿者たちの一部が AD の投稿内容を、まさに陰謀勢力によるものとして捉えていたと考えられる。また、ここではブロガーA は、AD が事例 63 で強調した、書店での陳列状況という新たな観察について改めて言及する形で再び承認している。

以上のように、AD の投稿した創作から、常連投稿者たちは陰謀勢力の存在についての解釈を促されていたと言えよう。さらにこの事例 64 の下線(72)では、ブロガーA が「書店の販売状況」に対して「むしろ、躍動感が見られると言ったら言いすぎでしょうか」という見解を示している。AD の示唆する陰謀組織の意図を踏まえて、ブロガーA が「A の日記」書籍出版による陰謀組織への影響を改めて再認していたと言えよう。つまり、常連投稿者たちやブロガーA は、常連投稿者 AD の創作した陰謀組織の詳細な意図の仮説から、流通規制が生じるという予想が覆された事態の解釈を促されていたのである。

以上のように事例 63・64 から、効力的観測に矛盾する観察に対して、それを陰謀組織の害意から一貫して説明するためにさらに観察事例を加えることで、より複雑な陰謀組織の意図の物語をアブダクションしていたことがわかる。そもそも、陰謀勢力から「A の日記」書籍への流通規制がなされるという予想も、何かを予測する科学的仮説に基づくものではなく、あくまでも意図や志向としての仮説にもとづく予想である。そして、意図や志向とは、様々な影響から柔軟に変化しうるものだ。そのために、予測を反するような事態が生じて、この世界では、アブダクションによってプロトタイプの意図や志向の問題に回収され、結果として意図や志向の精緻化に働くのだと改めて理解できるだろう (Figure. 26)。改めて、ここでのアブダクションのあり方を示した上で、相互作用の連鎖を分析したい。

- ① Amazon.com を除いた他の書店が「A の日記」取り扱っていない状況、「A の日記」書籍が陰謀組織から流通規制されなくなった状況、書店で「A の日記」書籍が陳列されていない状況を観察した。
- ② 陰謀組織が「A の日記」書籍は陰謀組織の不利となるので、「A の日記」書籍の流通を規制しようとしたが、それに失敗したと認識して次の手として書店における書籍の陳列状況に作用しようとしたならば、Amazon.com を除いた他の書店が「A の日記」を取り扱っていない状況、「A の日記」書籍が陰謀組織から流通規制されなくなった状況、書店で「A の日記」書籍が陳列されていない状況も当然の結果だろう。
- ③ 陰謀組織が「A の日記」書籍は陰謀組織の不利となるので、「A の日記」書籍の流通を規制しようとしたが、それに失敗したと認識して次の手として書店で「A の日記」書籍が陳列されない状況を生み出したと考えるべき理由がある。

上記のアブダクションは、これまで示してきた事例とは異なり、一度に三つの観察からアブダクションされている。このような複数の観察から、仮説を導くことは帰納的推論だと考えられるかもしれない。しかしながら改めてであるが、観察から直接的に導くことのできない陰謀組織の意図を仮説とし、その仮説から「Aの日記」書籍が流通規制されているという観察を肯定する認識とは、アブダクションに他ならない。アートネクサス理論の作用主体概念に基づいて作用の連鎖を分析すると、上述した3つの観察における事象を生み出したアーティストが陰謀組織である。そして、それらのインデックスたちからブロガーAや常連投稿者たちはアブダクションを促されていたといえるだろう (Figure. 27)。次に、ここまで確認してきた典型的な安倍の意図の認識とは矛盾するような、境界的事例についても確認しておきたい。

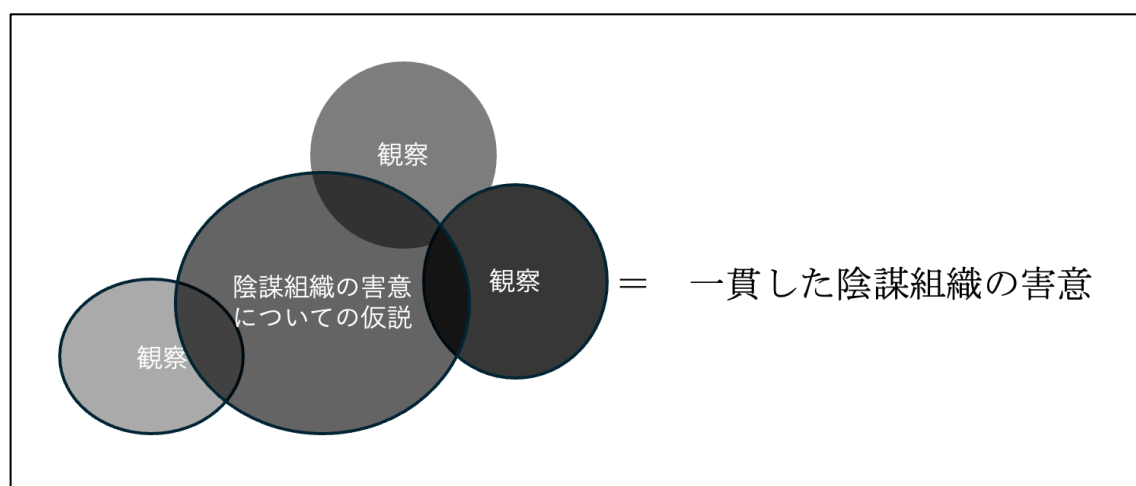


Figure. 26 陰謀組織の意図の詳細化

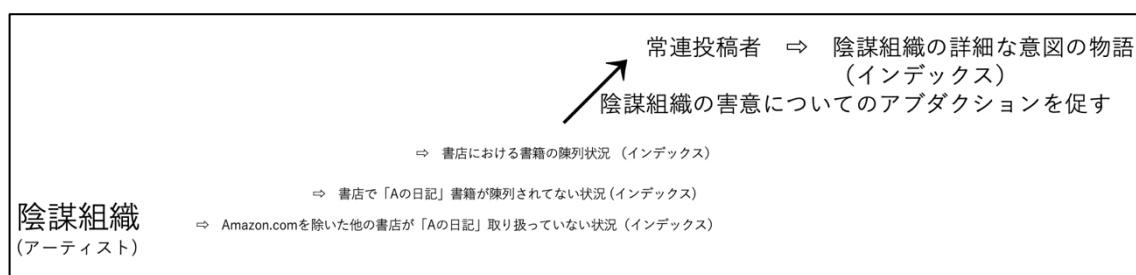


Figure. 27 三つのインデックスからの作用の連鎖

4.6.2 安倍の意図への矛盾する認識

ここで改めて、「A の日記」で示されてきた典型的な安倍の意図の認識とは矛盾するような境界的事例について確認した上で、その矛盾が「A の日記」世界でいかに受容されていたのかを検討したい。これまで見てきた事例から、ブロガーA と常連投稿者と異なる安倍の意図の認識が生じていたことが確認できる。まずは、陰謀論確立期の 2013 年に「A の日記」に示されていた安倍の意図についての記事からの抜粋である事例 21 を再度確認したい。

〔事例 21〕 改正法を通じて現れる安倍 2013/07/28

ネット選挙解禁によってほぼ妨害されなくなりました。それによって陰謀組織に不利な情報が拡散され、多くの人が目覚めてきています。安倍首相の狙いがこれでした。安倍首相のこの筋書きのポイントは、血が流されないことです。いずれにしても法を用いた平和的解決が安倍首相の方針でしょう。（略）皆さん結果を待ちましょう。

2013 年の記事からの抜粋である事例 21 では、ネット選挙解禁という事象の観察から、安倍が陰謀組織の問題を「平和的」に解決するだろうという認識がブロガーA に示されていることがわかる。ここでは、陰謀組織と対抗しながらも穏当な対処を行おうとする意図が安倍にあるとブロガーA にアブダクションされていたと言えよう。

しかし、数々の集团的運動を経た 2016 年には、穏当な対処を行おうとするのではない、異なる安倍の意図についての認識が常連投稿者から示されるようになる。その認識について、2016 年 1 月の常連投稿者 AF とブロガーA のコメントからの抜粋である事例 65 に加え、先に示した 2016 年 2 月にブロガーA が投稿した記事の抜粋である事例 48 から確認したい。

〔事例 65〕 国民蜂起 2016/01/15

AF：私の投稿への返信だと思いますが（略）安倍さんがソフトランディングを目指している⁽⁷⁴⁾ことと矛盾するのですが、安倍さんは国民蜂起を望んでいるのではないのでしょうか⁽⁷⁵⁾。陰謀組織が暴発した場合、ブロガーA さんも記してましたが、自衛隊への批判をかわすために、メディアを破壊し、予備自衛官補部隊を導入し、さらに多数の国民が蜂起することにより一時的に無秩序状態にして、最終的に誰が実行したのか責任の所在を曖昧にするためには、国民蜂起が有効でしょう。

A：当然、あらゆる想定で各省庁が動いているのですが、「安倍総理は国民蜂起を望んでいる」のはその通りだと思います⁽⁷⁶⁾。コントロールできない状況に陥る可能性への危惧があるだけでしょう。もう何があってもおかしくはないのです。

[事例 48] 命をかける覚悟 2016/02/23

R：安倍さんは、既にハードランディングに向けてと命をかける覚悟ができている様に見えます⁽⁷⁷⁾。私は最近覚醒したので、最初から安倍さんに覚悟があったのかは分かりません。しかし、集団メールなどの応援や期待が安倍首相の覚悟を強めたと思います。当然、安倍さんは、このブログの存在を最初から知っているはずで、「命を投げ出すとしても、覚えておいてほしい」というのは、当然の気持ちでしょう。安倍さんも「日本を取り戻す」事で、日本人の記憶に残るでしょう。今後も集団メールを始め安倍さんへの応援や期待が届く事が安倍さんの決心と力を強める事になると思います。(略) 安倍さんが「日本を取り戻す」ために応援が必要です。

事例 65・48 では、事例 21 に示される安倍の意図とは異なる意図の認識が示されている。まず、事例 65 の下線(74)では、常連投稿者 AF は「ソフトランディング」という表現で、陰謀組織に対して穏健な対処を目指す安倍の意図を示唆している。このような安倍の意図の認識は、事例 21 におけるブロガーA の認識と矛盾しない。しかしながら同時に、事例 65 の下線(75)では、「ソフトランディング」とは矛盾する、無秩序状態を志向して国民蜂起を望んでいるという、安倍の意図についての認識が記されている。さらに下線 (76) では、ブロガーA はこのような常連投稿者 AF の認識を否定せずに、安倍が「国民蜂起」を望んでいるという認識を肯定していることが確認できる。つまり、安倍が矛盾する意図を有するという認識については問題視していないことがわかる。

さらに、その一月後の常連投稿者 R のコメントからの抜粋である事例 48 の下線(77)では、「ハードランディング」に向けて命をかけるという安倍の意図についての認識が示されている。ここでも再び、2013 年にブロガーA に認識されていた意図とは矛盾する安倍の意図が認識されていたことがわかるだろう。そして、この投稿については常連投稿者たちやブロガーA からの応答はなかった。事例 48 に示した投稿もまた「A の日記」において、解決すべき重要な論点を含むのとして常連投稿者たちやブロガーA から話題にされていなかったと言えるだろう。つまり、安倍の意図についての矛盾するような個別の認識が、「A の日記」では重要な問題とされてこなかったのである。

このような安倍の意図についての矛盾する認識が問題化しないことについては、三つの理由が考えられる。第一に、ここで常連投稿者たちに示される安倍の意図の認識とは、陰謀組織と対抗する意図があるという根幹の認識を揺るがすような認識の矛盾ではないと考えられる。ここまでに確認できた矛盾する認識とは、安倍の陰謀組織へ対抗する意図と矛盾するものではなく、それに向けた具体的な対処を安倍がどう意図しているのかという点における認識の矛盾だと言える。依然として安倍に陰謀組織と対抗する意図があるならば、集団メール運動について効力的観測を揺るがすこともない。つまり、ここまでに「A の日記」で示される安倍の意図についての矛盾する認識とは、この世界を揺るがすまでに大きなものではなかったと言えるだろう。

第二に、ここで常連投稿者 AF と R は、何らかの事象の観察を根拠として提示して、安倍の意図についての認識を示しているわけではない。先に示した陰謀組織の意図についての矛盾する認識とは、「書籍の流通規制が生じた」「書籍の流通規制が生じなくなった」という相反する事象の観察に由来するものであった。そして、そのような相反するような事象の観察が示されたのならば、それらを一貫して説明するために、仮説としての意図を複雑化する必要性が生じる。例えば、現実の安倍が集団通報運動や集団メール運動に対して問題視する発言が観察されたとすれば、それらを説明しうるように、安倍には陰謀組織に対抗する意図があるという仮説をより複雑化する必要があるだろう。しかしながら、ここではそのような事象の観察を伴って、矛盾する安倍の意図が常連投稿者から示されているわけではない。故に、ここで示されるような矛盾する安倍の意図の認識とは、「A の日記」において特別に取り上げるべきものとされなかったと考えられるだろう。

第三に、個人としての安倍の意図とは、陰謀組織といった集団に決定される意図とは、そもそも性質が異なる点が考えられる。一個人はそもそも相反する思考や意図を持ち得る。両立しない意図を同時に抱くことは珍しくはない。個人の意図とは集団的なそれよりも、より柔軟で、より感情的な側面のあるものとして認識されえるだろう。そして、ただ安倍に葛藤が生じているだけであるならば問題化する必要がない。むしろ、そのような葛藤があるものとして、安倍の意図が詳細化されて認識されていると言えよう。以上のような理由から、ここまで確認された「A の日記」における典型的な安倍の意図の認識とは異なる、境界的な認識が「A の日記」に集う人々に問題化されずに受容されていたと考えられる。

ここでは、「A の日記」における典型的なアブダクションやプロトタイプ認識とは異なるものが示されていた境界的事例を取り上げた。そして、意図や志向というものが、様々な影響からそもそも刷新されうる柔軟性を有するために、推論される意図や志向を根幹となすこの世界では、不測の事態の観測や矛盾する認識も意図や志向の問題として、回収されることを論じた。その意味において、この「A の日記」世界は弾性としての強固さを有していると言えよう。この世界を外から眺めて不自然に思われるかもしれない認識とは、ここでの安倍の「無秩序状態」「国民蜂起」という過激な志向だろう。しかし、「A の日記」に集う人々は、このような安倍の意図についてのアブダクションから、さらに過激な集団運動へと方向づけられていた。最後に、「A の日記」に集う人々がさらなる運動へと方向づけられていたことが理解できる、2016 年 8 月のブロガー A の投稿からの抜粋である事例 66 を示そう³⁷。

³⁷ なお、同時期から常連投稿者たちによって、「A の日記」の概要に記した霊的な内容のコメントが投稿されるようになる。その一例を付録 15 に示す。

〔事例 66〕 安倍さんからの GO サイン 2016/08/31

2015 年 3 月から私は安倍政権と二人三脚の関係で進んできました。みなさんが継続して頑張っている集団メールを基本とする一方で、新たな書籍を出版することとなりました。予定ではもう少し後と思っていたのですが、安倍総理が稲田を防衛相に任命したという、安倍さんから GO サインが出たというわけです⁽⁷⁸⁾。ご承知のように稲田は中韓では安倍さんの後継としてだけではなく、極右の政治家と見られている。当然、陰謀勢力からの反発が予想されます。GO サインは望外の出来事でしたが、理想的な事態となっています。

事例 66 の下線(78)では、ブロガーA が「安倍総理が稲田を防衛相に任命した」という事象を「安倍さんからの GO サイン」と解釈して、新たな書籍を出版することにしたことがわかる。安倍や稲田をめぐる社会的事象から、再びプロトタイプ⁽⁷⁹⁾の存在を確かなものとしながら、「A の日記」において陰謀組織をめぐる営みが継続されていたことが理解できるだろう。本稿における事例の検討はここで終えたい。なお、事例 66 で示唆されている「A の日記」書籍では、これまで「A の日記」で陰謀組織に関係すると示唆されてきた人々が、外国政府と共謀して日本に武力行使を行う外患罪にあたるとする主張がなされていた。そしてこの新しい書籍を出版してからすぐに、特定の弁護士たちが外患罪に値するとして懲戒請求を求める運動が始まり、2017 年から彼らの運動の場は司法の場へ展開されていった。

5. 統合考察

5.1 結果の概要

4.1 では、「A の日記」における陰謀論の概要と展開の概略を説明した。ブログ「A の日記」は 2012 年にブロガー A によって開設されたもので、不法に日本に滞在する外国人たちで構成される陰謀組織が政治やマスメディアを統制し、不当な利益を得ているのだとする陰謀言説を展開してきたことを説明した。そしてそのような言説が、2000 年代には既にネット右翼言説として展開されていたもので、「A の日記」における陰謀論言説がネット右翼文化の影響下にあったことを示した。加えて「A の日記」が継続される中で、従来のネット右翼言説とは異なる「A の日記」独自の要素として、①予見的な言説、②安倍と意思疎通が成立しているという認識に基づく言説、③特定の外国人に限定されない排外的言説が加えられていったことを示した(4.1.1)。

続いて、2012 年から 2017 年末までの「A の日記」における展開の概要を示した。そこでは、陰謀論言説の変容や様々に展開されていた運動の特徴から、①「A の日記」が開設され、陰謀組織の存在が「A の日記」に現れるようになる 2012 年末までを「陰謀論世界の萌芽期」、②従来のネット右翼的言説から「A の日記」独自の主張が現れるようになる 2014 年末までを「陰謀論世界の確立期」、③「A の日記」で最初に集団的な運動が呼びかけられ、「A の日記」のコメント欄に常連投稿者たちによる投稿が生じるようになる 2015 年末までを「動員期」、④さらにそれ以降を「続動員期」として時系列上の区分を提示した(4.1.2)。

4.2 から、陰謀論世界の萌芽期において「A の日記」に陰謀組織の存在がどのように記されるようになったのか確認した上で、アートネクサス理論に基づいて「A の日記」でどのような作用から、いかに陰謀組織の存在が「A の日記」に現れていたかを分析した。その結果、ブロガー A が実際に体験したとする 2012 年末の政治に関係する出来事が報道されていないという状況が、陰謀組織の存在についてのアブダクションを促すインデックスとしてブロガー A に作用し、陰謀組織はアブダクションされるプロトタイプとして「A の日記」に現れていたことを明らかにした。

4.3 では、陰謀論世界の確立期における「A の日記」の 2 つの変化を確認しながら、そこでの作用をアートネクサス理論に基づいて分析した。まず、インターネット掲示板の状況とあったインターネット上の出来事がインデックスとして、ブロガー A に陰謀組織の害意についてのアブダクションを促すようになっていたことを確認した(4.3.1)。次に、安倍政権下の施策がインデックスとして、ブロガー A に「陰謀組織と対立する安倍の意図」についてのアブダクションを促していたことを明らかにし、この「A の日記」における陰謀論世界では、陰謀組織の害意とそれに対抗する安倍の意図がプロトタイプとして作用していたこと

を示した。また同時に、陰謀組織の害意についての認識とそれと対抗する安倍の意図についての認識の関係が、循環的に互いについての認識を再起させあう関係であることを指摘した。さらに、アブダクションされる意図や志向とは、何かを予測したり反証可能な科学的仮説とは異なり、意外な事象を理解可能とするために遡及的に指定される因果であるために、推論の循環が論理の蓋然性の低下を意味するのではなく、プロトタイプ認識の詳細化に通じるものであり、その意味において循環的関係の二つのプロトタイプとは、この陰謀論世界の根幹をなすローカルながらも絶対的な法則となり得ると論じた(4.3.2)。

4.4 では、動員期における「A の日記」を発端とする最初の集団的運動、集団通報運動を巡る作用を分析した。まず、集団通報運動へ至るまでの「A の日記」陰謀論世界における分析から、安倍をめぐる社会的事象がインデックスとして、ブロガーA に二つのプロトタイプの対立関係についての推論を再起させ、陰謀組織の害意によって安倍が危機にあるという認識が導かれていたことを明らかにした。そして、集団通報運動が危機にある安倍への支援としてだけでなく、安倍の支援を通じた陰謀組織への働きかけとして呼びかけられていたことを確認した。その上で、認識の循環から生じた危機の要素と、安倍が実社会に大きな作用をもたらす存在であったことが契機となって集団通報運動が生じたと論じた(4.4.1)。

さらに、集団通報運動に対する報道や批判が「A の日記」世界にいかなる作用を与えていたのかを分析した。まず、集団通報がプロトタイプに影響を与えるという仮説を通じて、批判などがインデックスとして、ブロガーA に陰謀組織についての認識を再起させていたことを明らかにし、プロトタイプへ向けた運動の効力についての展望的仮説を効力的観測(efficacy observation)として概念化した(4.4.2)。

そして、新たな運動が呼びかけられるようになるまでの分析から、再び効力的観測が媒介することで「A の日記」が一時的に遮断される状況がインデックスとなり、ブロガーA に直接的に働きかけを行ってくる存在として陰謀組織の脅威についての認識を再起させ、それがさらなる運動へと方向づけていたことを明らかにした。またここで改めて、4.3.2 で論じた、アブダクションの循環によるプロトタイプの意図についての詳細化と、及び4.4.1 で示唆した、集団的運動の契機としての危機の認識について確認した(4.4.3)。

4.5 から、「A の日記」常連投稿者の作用も含めて続動員期における二つの運動をめぐる作用の分析を行った。まず、官邸にメールを送る集団メール運動では、常連投稿者たちが安倍に向けてメールを制作していたことを確認した。その集団メール作成における作用の分析から、この集団的運動では常連投稿者たちが、安倍への作用を媒介するインデックスを制作するアーティストとしての主体性を発揮させながら、それぞれが制作するインデックスから、それぞれに陰謀組織についての認識を促されるレシピアントでもあったことを確認した(4.5.1)。

さらに、集団メール運動の中で、安倍が意思疎通可能な他者として現れるようになる過程を確認した上で、そこでの作用のあり方を分析した。その結果、①稲田の動向や報道される社会的事象がインデックスして安倍の意図についての認識と効力的観測についての認識を

常連投稿者たちに再起させ、集団メールを受け取る直接的意思疎通可能な存在として安倍が「A の日記」世界に現れるようになっていたことを明らかにした。またここでも、認識の循環が、仮説的存在の意図を詳細化することと、危機の要素が呼び込まれることで実践が動機づけられることを改めて確認した(4.5.2)。

続いて、「A の日記」書籍化をめぐる集団的運動における作用の連鎖を分析した。まず、「A の日記」書籍化が陰謀組織の関わる書店を特定するための運動として開始され、常連投稿者が Amazon.com に「A の日記」書籍のレビューを投稿したり、書店に赴いて「A の日記」の取り扱い状況や書店員の対応についての情報交換を「A の日記」で行っていたことを確認した。そして、アートネクサス理論に基づく分析の結果、効力的観測を通じて特定の書店での実体験がインデックスとなって、常連投稿者たちが陰謀組織についての認識を再び促されていたことを確認した。ここではまた、「A の日記」書籍という具体的なインデックスの制作がこの陰謀論世界と外の世界の接触となり、それが「A の日記」世界における陰謀組織の存在の実体化に通じていたと論じた。そして、そのような陰謀組織の存在についての認識の再起から再びあらたな運動が駆動されていたことを確認した。

最後に 4.6 では、ここまで確認してきた、「A の日記」における典型的なプロトタイプ
の認識とは矛盾する認識が示されていた事例について検討した。まずは、陰謀組織の意図
についての認識の矛盾については、より詳細な陰謀組織の意図の物語が生み出されること
で回収されていたことを確認した(4.6.1)。

次に、安倍の意図についての認識の矛盾については問題化されないことを確認した上で、
そもそも個人が相反する意図をもつことを指摘し、安倍の意図がより複雑なものとして認
識されていると論じた。さらにここまでの議論を踏まえ、この「A の日記」世界において推
論される意図が根幹をなす法則であり、その意図というものの柔軟性によって不測の事態
や矛盾が回収されるという意味において、この世界は弾性としての強固さを有していると
論じた(4.6.2)。

4 章の分析では全体を通して、①「A の日記」世界の根幹に陰謀組織の害意とそれに対抗
しようとする主体の意図についての認識があり、②それらの主体の意図についての認識が
循環的に再起することで集団的運動が生じ、③効力的観測によって集団的運動からそれら
の主体の意図についての認識が再起する循環を明らかにした(Figure. 28)。

5.2 結論：仮想的陰謀論実践に生きる

ここから、「A の日記」陰謀論世界に生きるとはいかなることなのかを検討する。本研究の分析から、「A の日記」ではブロガーA や常連投稿者たちがアブダクションによって陰謀組織からの害意を認識し、その陰謀組織に対抗するための運動を行い、運動についての効力的観測によって再び陰謀組織の害意についての認識が再起する循環から、陰謀論世界が強固かつ過激なものになっていたことが明らかになった。「A の日記」世界における人々の営みとは、陰謀組織の害意の認識に基づいて、陰謀組織に対抗する運動を行い、そこから再び陰謀組織の害意を認識することを繰り返す営みだったと言える。ここから陰謀組織に対抗する運動を陰謀論実践と呼び、改めて先行研究において取り上げた、貨幣をめぐる交換実践や贈与交換の実践における循環性に着目した比較を通して陰謀論実践の特徴を示した上で、この陰謀論実践とはいかなるものなのかを検討していきたい。

まず、我々の日常的な営みである貨幣をめぐる実践を参照して、陰謀論実践の特徴を照射しよう。貨幣を用いた交換実践とは、端的に言えば我々の貨幣価値の認識に基づいた営みである。我々は貨幣の価値を疑うことなく、それを用いた交換を日常的に繰り返している。ではそこで、その貨幣価値の認識がいかに生じるのかといえ、第一に、その認識は貨幣を用いた交換実践が行われるという体験的証拠から生じている。我々は貨幣の代わりに自身にとって何らかの価値を持つまた別の何かを得られる体験から、貨幣の価値を認識することができる。そして、貨幣の価値を信じて再び交換を行うという、貨幣価値の認識と交換実践を繰り返す循環に我々は生きている。

しかしながら、貨幣を用いた交換実践と貨幣価値の認識が循環する営みは陰謀論実践のそれとは異なり、個別の交換実践ごとに個別の効力的観測に基づく解釈は必要ない。売買に挑む前に、貨幣が交換を媒介してくれるだろうという期待をその都度意識することはないだろう。しかしながら、陰謀組織の害意についての認識とは、陰謀論実践を行うだけで生じたものでなく、効力的観測を媒介して生じたものであった。例えば、「A の日記」書籍を出版し、常連投稿者たちが特定の書店に赴き、そこで観測した書店の状況について、「A の日記」書籍の出版が陰謀組織に影響を与えるだろうという効力的観測に基づいたアブダクションをすることで、陰謀組織の害意についての認識が生じていた。そして、そのような効力的観測から生じる陰謀組織の害意についての認識によって、再び陰謀論実践が生じるという循環から、陰謀論世界が維持されていた。

では、効力的観測ではなく、何が貨幣をめぐる実践と認識の循環を保存しているのかと言え、それは超越的な第三者である(小坂井, 2015)。ある交換において、当事者である債権者と債務者の二者がそれぞれに求めるものを得られて互惠の関係に至ったとしても、また次の交換において再び互惠の関係に至るだろうという期待が保証されていなければ交換は生じ難い。集団的に貨幣を用いた交換が行われているという体験から個々に互惠の関係への期待が生じ、その期待が慣性のように実践をある程度維持しうるだろうが、その期待を保

証する超越的な第三者の存在が求められる。互恵的關係への期待が保証されなければ、交換の実践は保存されないだろう。それ故に、貨幣の価値を認める世界には、債権と債務を監視する国家といった、互恵的關係への期待を保証する存在が介在している(古川, 2020)。交換の世界は、その当事者だけでなく、債務を履行しないものを罰して二者間の不均衡を解消する超越的な第三者が内在することで、貨幣をめぐる実践と認識の循環が保存されているのである。陰謀論実践の循環と、貨幣をめぐる交換実践の循環は、前者には効力的観察を、後者には互恵關係の期待を保証する内在的-超越的な第三者の存在を要するという差異が認められる(Figure. 29)。

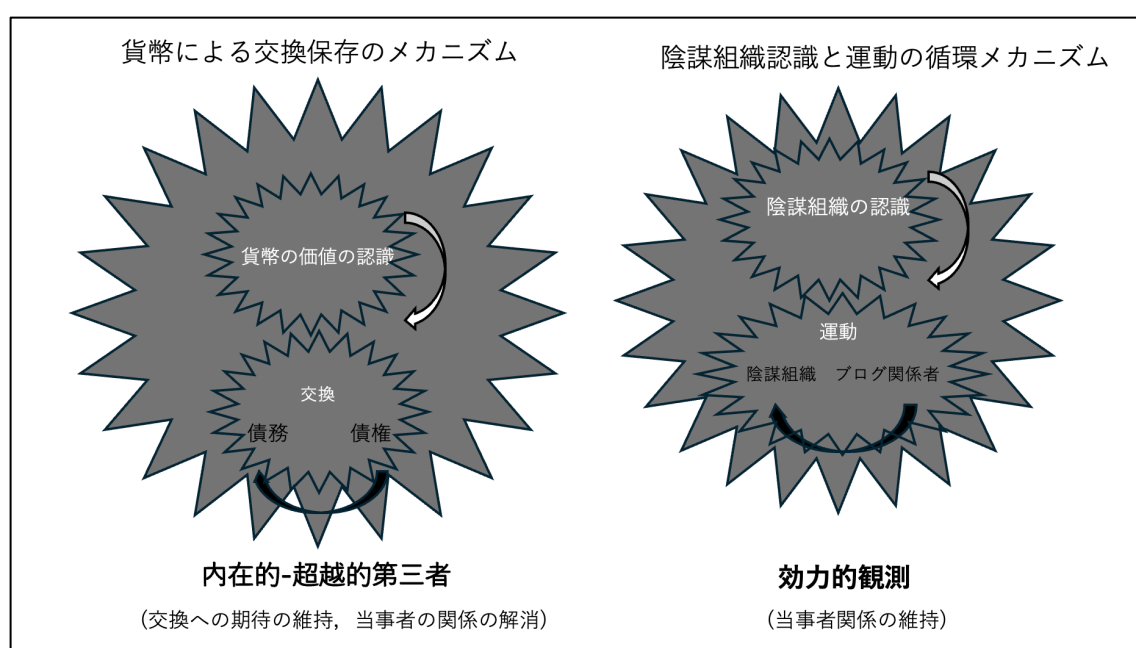


Figure.29 貨幣による交換と陰謀論運動

また、交換の実践が内在的-超越的な第三者の存在で保存されとしても、「A の日記」に集う人々と陰謀組織の対立関係のように、交換実践からその参加者の個別の關係が保存されるということはない。交換の実践では決済がなされると同時に、債権者と債務者の關係とは解消されるものである。そして、我々は以前に行った債権者と債務者の關係が維持されることで再びその關係から交換をするのではなく、内在的-超越的な第三者が保証する互恵的關係を期待して、これまでの債権と債務關係とは無關係にまた別の個々人で新たな交換にいたるのだ。しかし、陰謀論実践では陰謀組織に関わるとする対象の拡張こそ確認されたが、交換の実践のように「A の日記」に集う人々と「陰謀組織」の対立關係が解消されることはなかった。陰謀実践と交換実践では、前者ではその営みの対象者との關係が保存され、後者では営みの対象との關係が保存されないという差異が認められる。

次に、マオリ族におけるハウをめぐる贈与交換の実践を参照して、陰謀論実践の特徴を確

認したい。マオリ族の贈与交換の実践では、人々の贈与の営みをハウと呼ばれる精霊が監視しているという信仰を基礎とし、その精霊への信仰が贈与という集団的現象から生じるという循環が指摘されている(Anspach, 2012/2002)。「タオンガ(taonga)」とよばれる贈与物を受けた者が、返礼の義務を守らない時、その贈与物に宿るハウがその者に死をもたらすという認識から贈与を行うという循環である。返礼の義務を監視するハウという内在的-超越的第三者の存在によって贈与の実践が再起するという意味では、貨幣による交換の実践と同じである。

しかし、贈与の実践は貨幣による交換実践と異なり、贈与を行うその場で互惠的關係が達成されて、返礼の義務の關係が解消されるわけではない。なぜなら、貨幣による交換実践で内在的-超越的第三者が監視するのが個別の交換の当事者の債権と債務の關係であるのとは異なり、ハウが監視する返礼の義務の關係とは、個別の贈与の当事者には限定されないものである。例えば、a という人物が b という人物に贈与を行うとする。そこで b にはハウが監視する返礼の義務が生じる。しかしながら、b がそこでハウから課せられる義務としての返礼の対象とは a に限られていない。b から c という人物に贈与することも、返礼の義務を果たしたことになるのだ。そして、その b からの贈与の返礼として c がまた b に限定されない誰かに贈与を行う義務がハウから課されるのである。また、a からの贈与を受けて b が a に返礼したとしても、再び a には返礼の義務が生じるのである。つまり、贈与の実践では、ハウが集団的に信じられる限りにおいて、人々の生死に関わる返礼の義務の關係は解消されずに継続していく。このように人間關係が維持されるために、贈与の実践も維持されるのである。

とはいえ、このような贈与による關係性の継続と、陰謀論実践における人々と陰謀組織との対立關係の継続とは意味するものが異なると考えられるかもしれない。そもそも陰謀論実践とは、貨幣による交換の実践や贈与交換の実践のように、互惠的關係を期待するものではないという違いが認められる。「A の日記」の陰謀論実践とは、害意のある陰謀組織に不利をもたらそうとするものであった。

しかしながら、Anspach(2012/2002)は、どちらも循環して当事者の關係が維持される実践として贈与交換と同時に復讐の実践を論じている。そして、互惠的關係を目指す贈与交換と復讐の論理的な違いとは、相互性を予期してなされるかだと論じている。そもそもハウをめぐる贈与の実践とは、贈与された者に死をもたらすような力を内在したタオンガを贈与するもので、他者に死の恐れをもたらすという意味においては加害性があり、Mauss(2009/1925, p51)はマオリ族における返礼を意味する「ウツ (utu)」という語が「血の復讐」を実施することを意味するものであることを指摘している。では、この贈与と復讐の相互性の違いであるが、Anspach(2012/2002)によると、贈与交換とは個人が明日に他者から何かを受け取るために、今日何かを他者に与えることであり、そこには未来への期待が存在する。そして、それを監視するという超越的な存在、精霊ハウの認識によってその未来の期待が保証される。また、ハウが終わりのない義務を監視しているという認識によって贈

与の関係は終わらない。一方で、復讐とは過去に受けた不利を返すことであり、それへの期待しない報復を返されることで循環するのだという。過去に受けた何かの損失を前提に、その責を負うべき存在へ復讐し、期待しない報復が返されたと認識して、また復讐を行うという循環である(Figure. 30)。このような復讐の実践の循環は、貨幣による交換実践や贈与交換の実践のように、不均衡状態を解決し互恵的な期待を保証する内在的-超越的第三者を循環の保存に必要とするのではなく、不均衡の認識によって循環が保存される。つまり、復讐の実践によって振り子のように常にそれぞれの集団に不均衡が生じることで、集団間の動的均衡関係が保たれるのだ。そして、その復讐関係はどちらかの集団が減ぶまで維持されてしまう(Anspach, 2012/2002)。陰謀論実践、およびそこでの対立関係とは「日本を貶める」陰謀組織に不利をもたらそうとし、また陰謀組織から報復される復讐の実践とその関係であったと言えよう。この意味において、「A の日記」ブログを通して人々は陰謀組織への復讐に生きていたと言えよう。

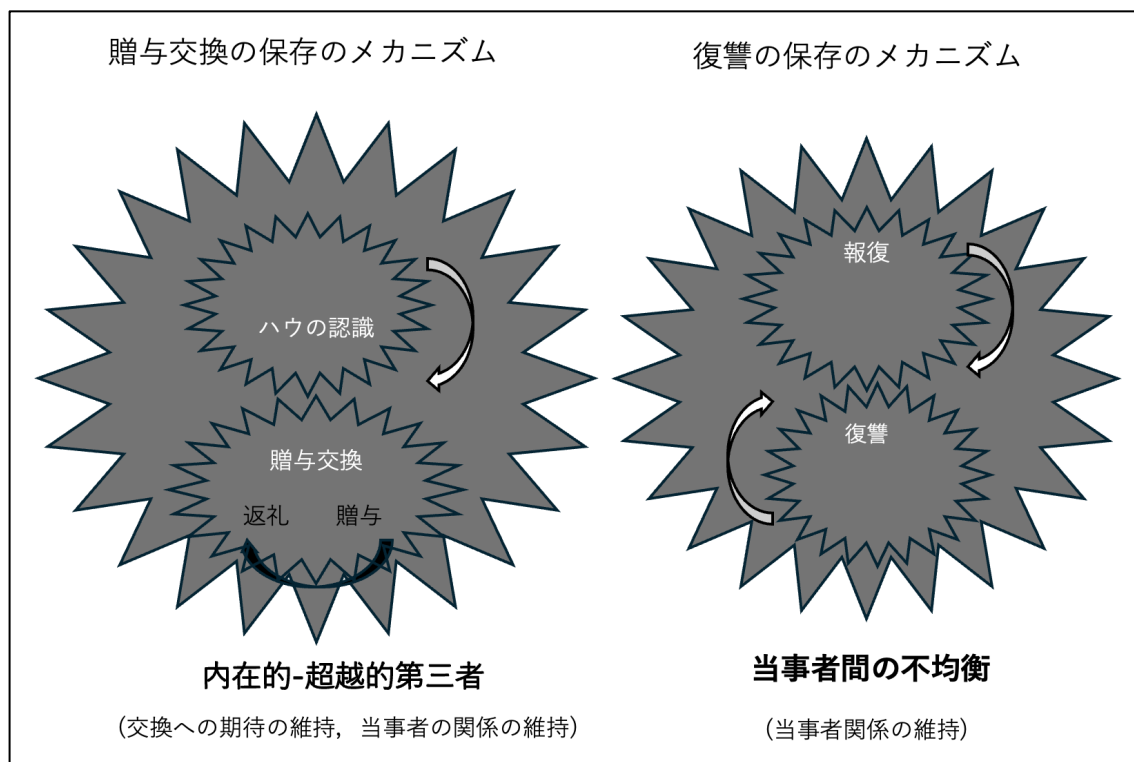


Figure.30 贈与交換の保存メカニズムと復讐の保存のメカニズム

しかし、陰謀論実践の不均衡とは現実が生じたものでもなかった。西ニューギニアのダニと呼ばれる人々による復讐の実践において、その復讐の義務を課す存在として死者の魂への認識が介在しながらも、その死者を現実生み出す暴力が Gardner の撮影した『Dead Birds』(1963)から確認することができる。そのような現実の暴力によってもたらされる、生命の損失という不均衡と陰謀論実践における不均衡とは同じものではない。陰謀論実践

において生じていたのは、過去の事象からのアブダクションと未来に向けた効力的観測によってもたらされる仮想の不均衡の認識であった。例えば、「A の日記」に集う人々は、集団通報運動に対する批判を陰謀組織の害意による攻撃としてアブダクションし、さらに「A の日記」書籍の出版が陰謀組織への不利となるだろうという効力的観測のアブダクションによって陰謀組織への攻撃を認識していた。そのような、あくまで認識上の事実としての仮想の不均衡が陰謀論実践を循環させていたと考えられる。実際に陰謀組織が「A の日記」に集う人々から復讐され、報復を行っていたのかはわからない。だが、「A の日記」に集う人々は、アブダクションによって陰謀組織からの復讐を認識し、効力的観測から実践が陰謀組織への報復になると認識していたのである。アブダクションという過去の事象への遡及的仮説生成と効力的観測という未来への展望的仮説生成が生み出す不均衡状態の認識による動的均衡が、この陰謀をめぐる実践を保存していると言えよう。つまり、陰謀論実践とは、現実には生じる不均衡ではなく、遡及的仮説推論と展望的仮説推論が生み出す仮想の不均衡の認識の振り子の中で循環するという意味で、単なる復讐の実践ではなく、仮想的復讐³⁸の実践（practice of virtual revenge）である³⁹（Figure. 31）。あくまで認識上の不均衡の振り子で循環する仮想的復讐の実践だとして、それが実際の復讐で生じる犠牲者の命のように、取り返しのつかない不均衡ではないとも考えられるかもしれない。しかしながら、分析で示したように、仮想的復讐の実践もまた、現実世界の事物を交えた貨幣の交換実践や贈与交換の実践のように、社会的事実を陰謀の証拠とみなし、また書籍の制作といった具体的事物を作る

³⁸ ここでの仮想における英語表記に、「想像上の、架空の」を意味する「imaginary」ではなく、「事実上の、実質上の」を意味する「virtual」を用いるのは、陰謀論世界の人々にとって不均衡の認識とは、その世界における事実の認識であることを強調するためだ。

³⁹ 過去についての仮説に基づき、また未来を操作するという意味においては、シャーマンの実践が思い起こされるかもしれない。例えば、佐藤(1980)はネパールにおいてジャクリと呼ばれる守護神を降霊させるシャーマンの社会的役割が、医療行為として悪霊を追い払うことと、将来の指針を助言することだと明らかにしている。そこでの悪霊とは過去に事故死した人物に由来すると認識されており、病はそれによる加害として考えられているのだという。ある種のシャーマンの実践とは過去に事故死した存在の意図という仮説と、それを払う力を授けて未来の指針を示す守護神という仮説に基づくものだと考えられるかもしれない。つまり、そのシャーマンの実践も、二つの仮説的存在と過去と未来の推論に基づくものと言える。しかし、シャーマンの実践で行われるのは霊による加害行為を取り除くという不均衡の排除であり、それに与する超越的な存在として守護神が位置づけられるという点で、陰謀論の実践とは異なるだろう。上述したようなシャーマンの実践とは、事故死や病といった神や悪霊のインデックスが自然発生するものであるために、それによるアブダクションが再起し、認識と実践が循環しているとも考えられるだろう。しかしながら、Gell はシャーマンのパフォーマンスを神のインデックスとして記述している（Gell, 1998, p.67）。ジャクリも守護神を降霊させて自身に憑依させる儀式を行う（佐藤, 1980）ように、シャーマンの行為が人々に神の存在を推論させるインデックスなのである。そして、事例 63 で見られた陰謀組織視点の語りとは、むしろ害をなす悪霊を降霊させて、自身に憑依して見せるパフォーマンスだと捉えることができるかもしれない。その意味において、事例 63 における常連投稿者 AD の主体性とは、インデックスとして悪霊を憑依させるシャーマンと言えるかもしれない。

といった営みから、その認識上の不均衡が現実世界に結びついていたことも指摘しておきたい。「A の日記」に集う人々は、貨幣の世界に生きる我々と同様に、現実世界と結びついた事実上の(virtual)復讐の世界に生きているのである。

しかし、人々が陰謀論をめぐってアブダクションの連鎖から仮想的復讐の実践に生きていることを明らかにした今、なぜ陰謀論からアブダクションの連鎖が生じていたのか、という疑問が残されている。最後に、なぜ陰謀論からアブダクションの連鎖が生じ得るのか、陰謀論とは如何なるものなのか、検討を試みたい。

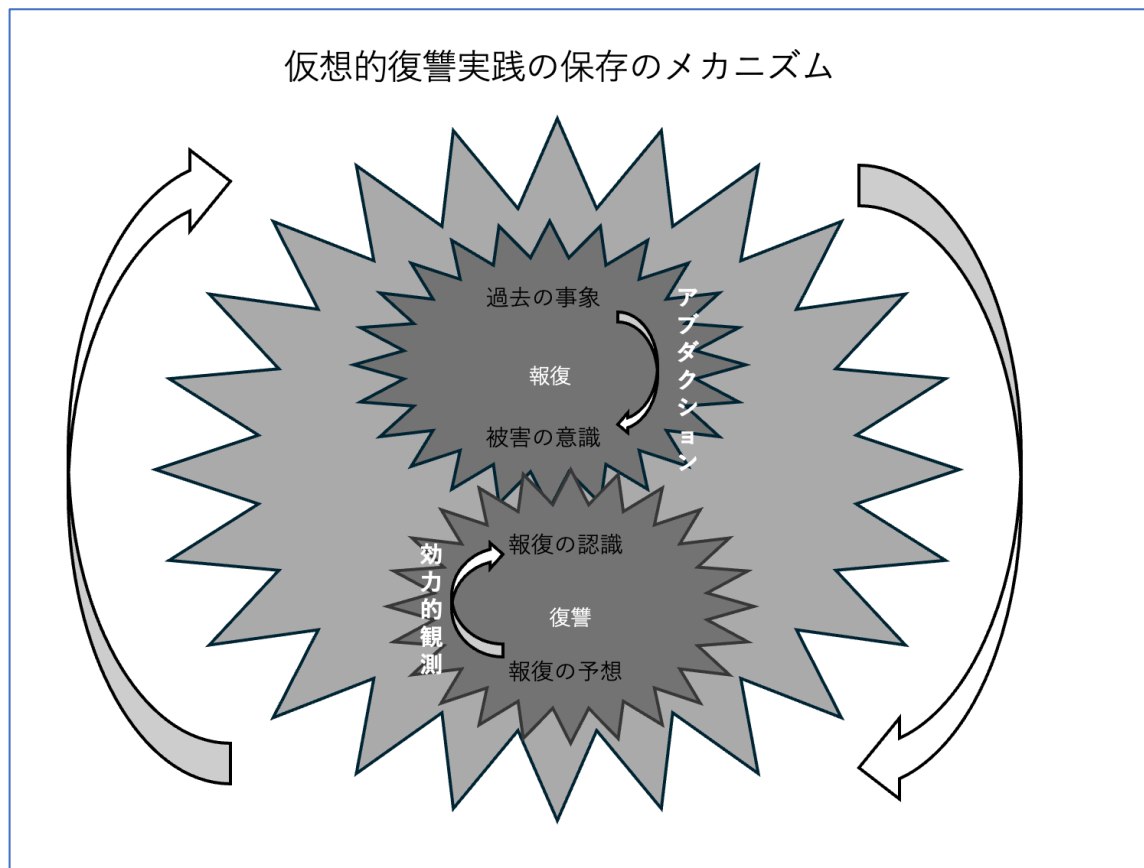


Figure. 31 仮想的復讐実践

5.3 陰謀論とは何か

ここでは本研究の結果を踏まえた上で陰謀論とは何かを検討したい。本研究では、社会的問題に至る陰謀言説こそが、陰謀論として問題視され、同定されなければならない言説であるという立場から、従来の心理学研究における陰謀論定義を批判してきた。その上で、陰謀言説の内容ではなく、陰謀言説を主張する立場性と陰謀言説の支持のあり方に注目し、①陰謀を主張する当事者がその陰謀が真実として一般的に受け入れられていないと認識して、一般社会から距離を置いた立場から主張し、②それを支持する人々によって実際に社会的問題が生じた言説を陰謀論として議論してきた。この定義とは「A の日記」言説をめぐる展開を結果的に捉えた、エスノグラフィックな定義であるが、それ故に一般性を持たない結果論ベースの定義だと言えよう。また、特定の陰謀言説の将来的問題性を検討するための標識にもなりえないという意味で、一般的な示唆性もない定義だと言えよう。

しかしながら、ここまで「A の日記」ではネット右翼言説というありふれた問題のない陰謀言説が、様々なプロセスを経て段階的に社会的問題に至る言説に発達する過程を確認できた。単なる陰謀言説と社会的問題に至る陰謀論には連続性があり、その発達の過程における段階的特徴の定式化は、特定の陰謀言説の将来的問題性を検討するための標識となるだろう。同時に、陰謀論に内在する言説的特徴の定式化の試みを通して、なぜ陰謀論からアブダクションが連鎖するのかという、本研究結果から浮上した問いに対する検討を試みたい。改めてここから、「A の日記」言説内容とその変容に注目して、結果論ベースのエスノグラフィックな定義を一步踏み出して、一般的標識としてのプロセスベースの段階的陰謀論定義を試みたい。そのために再び「A の日記」言説の変容過程を整理しておこう。

まず、本研究では対象とする「A の日記」の言説がネット右翼言説に由来するものであったことを指摘した。改めてネット右翼言説とは、マスメディアなどが外国人勢力に統制されているとする言説であり、何らかの事象を何らかの集団の有害な意図という仮説から解釈した言説(大山, 2024)としての陰謀言説である。このような陰謀言説はそもそも、何らかの現象を社会的な主体の意図から解釈したアブダクティブな言説だと言えよう。しかし、このようなネット右翼言説が人々に事実として認められたことで、社会問題へと至ったのではない。そもそも、ネット右翼言説それ自体を真実として認めることは問題ではない。また、「A の日記」から社会的問題とされる集団的運動が始まったのは 2015 年になってからであり、ここまでの本研究の定義に基づくならば、その頃に初めて「A の日記」言説が陰謀論となったことになる。

しかしながら、この頃突然に読者たちが「A の日記」への過激な支持を始めたわけではない。それまでにネット右翼言説と呼ばれる一般的な陰謀言説として支持されていた言説が、「A の日記」独自の要素から過激な言説へと変容していったのだ。その独自の要素とは、確立期から現れていた中国・韓国についての予見である。例えば、確立期の予見的な投稿とし

て、事例 17 の下線(5)では「どうも日中開戦が先のサブシナリオになる可能性のほうが高そうです」、事例 18 の下線(6)では「2016 年には必ず武力衝突がおきる」といったように、武装闘争の可能性が示されていた。それだけではなく、在日韓国人や在日中国人が「戦闘員」(事例 17)、「ゲリラ」(事例 18)となると主張されるようになっていた。つまり、陰謀論世界の確立期において、「A の日記」では日本社会に暮らす外国人たちを武装闘争の可能性のある存在として表象するようになったのだ。従来のネット右翼言説における、日本社会で特権を享受している(安田, 2012)、あるいはメディアを統制して不当な利益を得ている(倉橋, 2019)という他者としての外国人の表象から、武装闘争の可能性のある存在として外国人が表象されるようになっていたのである。また、Q anon 言説においては、「ディープステート」と呼ばれる陰謀組織との戦争状態が主張されており、このディープステートという表現もまた本来は、Q anon 言説登場以前から存在する軍産複合体陰謀言説において不当な利益を得ているとする軍部や軍事企業を指すものであった(Rohde, 2020)。さらに後藤(2023)は、関東大虐殺の背景には朝鮮人への差別意識と植民地支配に対する抵抗運動への恐怖があったと指摘している。加えて中央防災会議(2008)は、関東大虐殺が生じる直前、朝日新聞の朝刊に掲載された「怪鮮人 三名捕はる 陰謀団の一味か」と題した記事も、当時の民族差別や植民地支配への対立に根差したものであるだけでなく、人々を襲う主体として朝鮮人が表象されることに寄与した可能性を示唆している。関東大震災以前から人々に認識されていた朝鮮人陰謀言説では、植民地支配への対抗運動として蜂起することを目的にした不特定多数の「不逞鮮人」が日本に潜伏しているという主張がなされていたのだ。以上のように陰謀の主体が武装闘争の恐れのある存在として表象されることが、社会問題に至る陰謀論の重要な要素であると考えられよう。

政治哲学者 Schmitt(2022/1932)は「政治的なもの」という概念を独自に提案し、その本質が友と敵の区別であり、敵とは武装闘争が現実的可能性として存在する異質な他者であると論じている。Schmitt(2022/1932)によると、この友と敵の区別とは、政党的対立でも、個人的な私怨の対立や、利害による対立、または道徳的な対立でもない。しかしながら、友と敵の区別には、これらの対立が動員されたり、その対立が人間の生命を要求するような最高度に達して、組織的な武装闘争に現実的可能性が帯びることで現れ、人間の行動・思考を規定し、「政治的」な態度を生み出すのだという。Schmitt(2022/1932)に基づくならば、「A の日記」言説は、集团的運動から社会的問題が生じる以前の陰謀論の世界確立期に、従来のネット右翼的陰謀言説から、武装闘争の現実的可能性を秘めた敵を表象する、本質的に「政治的」な陰謀言説に変容したと言える。確立期における予見は成就していなかったことから「A の日記」の予見が読者獲得に寄与したのではないと議論してきたが、予見の成就是重要ではなく、陰謀言説を本質的な「政治的」陰謀論に変容させるデバイスとして予見が機能していたと考えられるだろう。

さらに、「A の日記」の確立期から随所に現れる軍事についての具体的な知識⁴⁰も、そのよ

⁴⁰ 付録 4 は、その一例としても理解できるだろう。

うな武装闘争の可能性を示唆するための説得的立場性の構築に寄与するものだと考えられる。「A の日記」の開設の5年後に登場した Q anon 言説においても、陰謀の告発者 Q は軍事機密を扱っているという立場から陰謀を告発している (Rothchild, 2024/2021)⁴¹。社会問題化する陰謀論には、説得的立場から武装闘争の可能性を示唆するという特徴が認められよう。関東大逆殺においても、人々が信頼を寄せる新聞だけではなく、内務省までもが朝鮮人陰謀言説の流布に寄与していたことが明らかにされている (中央防災会議, 2009)。

翻って、陰謀論世界の萌芽期において「A の日記」は、ネット右翼的陰謀言説を全面に出さずに、日清戦争や日露戦争といった過去の戦争をテーマにした言説が投稿されていた。しかし、そのような陰謀とは一見すると無関係な言説の展開こそが、「政治的」な陰謀論化の礎であったとも考えられよう。死期が近いと語る存在が、次世代に伝えるべき重要な人生経験として史実である過去の戦争を語ることは、将来の武装闘争の現実的可能性をアクチュアルなものとして呼び込むための文脈として機能するものだろう。また、将来の武装闘争の現実的可能性を呼び込む機能を果たした要素としては、過去の戦争の語りだけではなく、尖閣諸島と竹島を巡る中国・韓国との緊張関係といった当時の時事の解釈も挙げられよう。例えば、Q anon 言説においても、コロナ禍といった時事が闘争の一例として解釈されてきた (Rothchild, 2024/2021)。つまり、陰謀論世界の萌芽期とは、友・敵の区別を妥当化し、顕在化させるために、歴史的な対立や現在の対立などが動員される時期として機能したのだと考えられる。加えて、関東大逆殺の発端となった朝鮮人陰謀言説の背景に植民地支配をめぐる対立があったことを再度指摘しておこう。

このような陰謀言説における陰謀の主体が武装闘争の現実的可能性あるものとして表象されるようになる段階の陰謀論を、本質的政治化期と呼ぼう。この本質的政治化期はまた、陰謀の主体との武装闘争の可能性を導くために様々な対立が動員されたり、告発者の説得的立場としての専門性が構築される過程として特徴づけられるものだ。

また、本来的にアブダクティブな言説である陰謀言説から更にアブダクションの連鎖を生じさせたのが、この本質的政治化期への変容だと考えられるだろう。アートネクサス理論におけるアブダクションとは、人々がいかに生きるのかを問うために、その社会における主体についての認識をアブダクションとして焦点化するものであった。そして、何らかの社会的主体との武装闘争の可能性の主張とは、人々の生存に関わる極めて存在論的な言説である。何らかの事象にたいする科学的な真実性についての問いならば、演繹や帰納的な推論が重要となるが、生存を脅す主体性への問いに対しては、アートネクサス理論が焦点化する存在論的アブダクションが重要になるだろう。なぜなら、本質的政治化期の陰謀論の世界において生存するには、敵の意図を読んだ上で対応することこそが課題となるからだ。また、地球が本来は球体ではなく平面であることを科学者が隠蔽していると主張する地球平面仮説陰

⁴¹ なお、Hoback (2021)によると、Q anon 言説の流布に主要な役割を果たしたとされる R, Watkins は、2009 年代から「A の日記」記事でも取り上げられるネット掲示板 2 チャンネルの運営に携わっており、2015 年から日本に居住していた。

謀を支持する人々を撮影した、『Behind the Curve』(Clark, 2018)では、人々が科学的検証を繰り返し、地球平面仮説を支持しない結果を得ながら、地球平面仮説の修正を繰り返す様子が描かれている。科学的認識という認識論的な問題を中心的に問いかける言説ではなく、人々の生存に関わる主体のあり方についての存在論的な問題を中心的に問いかける、本質的に「政治」化した陰謀論だからこそ、アブダクションの連鎖が生じたのだと考えられるだろう。

そして、常連投稿者が現れると「A の日記」言説は、さらに質的な変容を遂げていった。例えば、2015 年には集団通報運動の結果として生じた報道や「A の日記」サイトの閉鎖が陰謀組織からの攻撃として解釈され、常連投稿者たちはブロガーA の生命を危ぶむようになる。そして事例 46 に示されるような「命をかける覚悟」を要するハードランディングへの志向性を示すようになっていた。外国人は武装闘争の現実的可能性のある存在から、生命に関わる現実的な武装闘争の対象として表象されるようになったのだ。Schmitt(2022/1932)は、最高度に達した対立、友・敵の区別の決め手となる標識が武装対決だと論じている。そして、このような言説への変容の契機となったのが、仮想的復讐論実践と効力的観測の始まりである。そしてこの効力的観測から、ブロガーA と常連投稿者たちが、自らの発揮するエージェンシーに作用される循環が生み出されていた。久保(2011)は、実践からアブダクションされるプロトタイプが具体化するとき、他に想定されうる関係性が後景に退くのだと指摘している。この指摘を引き継ぐならば、実践における効力的観測によって生じる、「A の日記」の人々の自らに向けた作用の循環が他に想定される可能性(例えば、「A の日記」サイトが閉鎖されたのは入管から相談を受けた警察による働きかけの結果であるという解釈)を排除し、外国人たちとの闘争が仮想的現実のものとなったのだと言えよう⁴²。また、このような実践における効力的観測を通じてアブダクションが連鎖したことも、陰謀言説が存在論的により喫緊の事態を示す言説になっていたからだと考えられるだろう。武装闘争が現実となった喫緊の事態においては、生存の手立てを探索する必要性が生まれる。そしてそれが仮想的復讐実践であり、危機に対する希望的観測としての効力的観測が生じる契機となるだろう。

上述のように、陰謀の主体との闘争が現実のものとして表象され、告発者の命の危機についての言及が呼び込まれる陰謀論を、仮想現実的政治期と呼ぼう。また、この仮想現実的政治期とは、仮想的復讐実践とその効力についての言及から特徴づけられるだろう。

続けて続動員期になると、ジェネリック医薬品や特定の書店の店員など、人々の日常生活圏に存在するものが、陰謀組織に関連するものとして表象されるようになっていた。さらには、事例 58・59 に示されたように、常連投稿者たちは竹刀を購入したり、身体を鍛えるな

⁴² Gell(1998)は、なぜプロトタイプの存在について検証する営みが生じないのかについては議論しておらず、ここでの久保の指摘を久保(2011)は、「一歩踏み出し」たものとして言及している。Gell(1998)は、文化的認識論ではなく存在論として人々の営みにアプローチするものとしてアートネクサス理論を構築したが、クラの財宝をめぐる営みなど、所与の文化的な営みを土台にしてきたために、プロトタイプの存在以外の関係性を後景化させるダイナミクスとしての効力的観測の役割を看過したのではないだろうか。

ど、日常生活における武装について言及するようになっていった。陰謀組織との武装闘争が日常空間に及ぶものとして表象されるようになったと言えるだろう。軍人や陰謀の告発者に限らず、多くの人々の日常が脅かされることを主張する言説になっていたのだ。この意味において、「A の日記」は人々の日常を決定的に「政治」化した言説へと変容したと言える。なお Q anon 言説においても、Q anon 言説に触れたことをきっかけに武装化した個人によって、正義の実現として行われた公共施設・空間の襲撃や、殺人事件の例が数多く報告されている (Rothchild, 2024/2021)。加えて関東大虐殺では、関東大震災による河川の汚染を人々が目撃したことから朝鮮人陰謀言説は、井戸に毒物が混入されているという、日常空間に関わる陰謀論へと展開し (中央防災会議, 2008)、自警団によって当時の中学校に保管されていた訓練用の銃器の掠奪が生じていた (加藤, 2023)。

このような陰謀の主体との武装闘争の領域が日常空間に及ぶものとして表象されるようになった陰謀論を日常の政治化期と呼ぼう。なお、日常の政治化期への変容とは、その陰謀を告発する中心的な人物によるものに限られていないことにも注意が必要だろう。ここで扱った言説の変容とは、ブロガー A による言説というよりも、常連投稿者たちによる言説が織り成したものである。つまり、陰謀論言説の質的変容とは、その中心的告発者による言説のみから理解されるものではないと言える。

また、上述のような言説の変容を可能にしたのが、「A の日記」の曖昧な表現であったと考えられる。曖昧な表現を用いることについては Q anon 言説の特徴としても指摘されている (Rothchild, 2024/2021)。Boudry & Brackman (2011) は、陰謀言説における不明瞭な記述とは、具体的な解釈と大まかな解釈の間を行き来可能にする防御的レトリックだと指摘しているが、政治的陰謀論としての変容において重要なのは、陰謀の主体がどこの誰であるかという具体性を明示しない点にあるだろう。統動員期における運動から、特定の個人や団体が陰謀組織に関係する者として表象されていたが、陰謀を指導する主体についての具体的な特定は「A の日記」の言説や活動においてもなかった。それ故に陰謀の主体についての表象のあり方が変容可能であったと言える。社会問題に至る陰謀論となりうる、陰謀言説の重要な曖昧性とは、陰謀の主体についての匿名性と言える。

以上のように、本研究では陰謀言説から社会問題に至る陰謀論へと発達する過程の標識として、①陰謀の主体を武装闘争の可能性のあるものとして表象する本質的政治化期、②陰謀の主体との闘争を現実として表象する仮想現実的政治期、③陰謀の主体との武装闘争を日常空間に及ぶものとして表象する日常の政治化期、という三つの段階的定義を提示したい。とはいえ、この三つの段階的特徴が同時に現れることもありうるだろう。例えば、Q anon 言説も従来の陰謀言説に基づきながらも、登場当初から陰謀組織との武装闘争が行われていることを主張していた (Rothchild, 2024/2021)。加えて、朝鮮人陰謀言説においては、関東大震災によって仮想現実的政治化と日常の政治化は同時的に生じていたと考えられる。また、本研究はあくまで「A の日記」上の言説の変容から 3 つの段階を導いたが、陰謀論がさらに過激化する段階とそれを促す言説外の要因も想定するべきだろう。例えば、Q anon

言説においては、その言説を現職の大統領が引用して一体化した結果、米国国議会議事堂占拠事件に至ったことが示されている（Rothchild, 2024/2021）。しかしながら、Schmitt(2022/1932)の友・敵概念に基づいて、特定の陰謀言説において表象される陰謀組織、及びそれとの闘争の表象のされ方という観点から、ある陰謀言説を過激な陰謀論として議論することは不当ではないだろう。たとえある言説が陰謀言説ではないとしても、友・敵の区別を導く「政治的」な言説とは、武装闘争へ動員するものに他ならない。ある陰謀言説の真偽を問うことができないとしても、それがいかに過激な「政治的」な言説となっているのかは問うことは可能であり、それは看過してはならない標識だと言えるだろう。

5.4 理論的貢献

ここでは、改めて陰謀論の心理学研究に対する本研究の理論的貢献を明示し、その上で、本研究の試みが心理学研究の中でも、認知科学研究へ資するものであることを論じたい。

5.4.1 陰謀論研究への貢献

陰謀論の心理学研究における本研究の貢献は第一に、陰謀論を信じるという現象がいかなる現象なのかを問うために、ヴァーチャル・エスノグラフィーとして観察を通して、陰謀論に生きる人々の営みを記述したことにある。これまでの心理学研究では、現象における因果を問う前に観察を通じた現象の特定が必要であるにも関わらず、陰謀言説を信じるということがいかなる現象なのかを不問にしたまま、人々がなぜ陰謀言説を信じるのかという問いから研究がなされてきた。本研究の試みは、これまでの陰謀論の心理学研究に欠けていた、観察の一例として位置づけられる。このような観察と記述を通して陰謀論を信じるという現象を特定することが、なぜなのかという問いの再起につながるだろう。

そしてまた本研究は、陰謀論的信念研究における有力な仮説の一つを支持するものであると同時に、その理論的な意義を示すものでもある。陰謀論的信念の研究では、出来事や状況に過敏にエージェンシーを検知し、その意図を説明として用いる認知的な傾向(Brotherton & French, 2015)が有力な仮説となってきた。この仮説を一言で言うならば「ある出来事の裏で誰かが糸を引いている」と考える傾向だと言えよう。しかしながら、そもそもこのような個人の認知を焦点化した研究は、共謀者の意図や主体性を暗示する言説(Douglas et al, 2016)、事象がどのように因果的に結びついているかの仮説を有する言説 (Shermer, 2011)を陰謀論として定義して研究を行っている。一言で言うなら、「ある出来事の裏で誰かが糸を引いている」言説を陰謀論と定義しているのである。つまり、陰謀論的信念についての有力な仮説とは「ある出来事の裏で誰かが糸を引いている」言説を信じる人々は、「ある出来事の裏で誰かが糸を引いている」と認識する傾向があるというもので、定義上のトートロジーとして導かれる仮説でしかなく、トートロジーに矛盾はないので有力なのだと評価することもできる。

しかし本研究は、「ある出来事の裏で誰かが糸を引いている」という認知が、陰謀論を信じる上でどのような意義を持つのかを示した。アートネクサス理論の解説において、その認知とはアブダクションに他ならないと論じた。そして、本研究ではこのアブダクションが陰謀論世界において果たす役割を示した。第一に、陰謀の主体の意図をアブダクションすることで運動の契機が生じ、また集団的運動において効力的観測を通じたアブダクションが再起することで陰謀についての証拠(インデックス)が増加し、現実世界と陰謀論世界との接点が増加していく過程を示した。また、この効力的観測とは、アートネクサス理論において看

過されてきたものだと言えるだろう。第二に、アブダクションされる仮説が意図であるために、不測の事態や矛盾が回収され、強固な世界が形成されていくことを論じた。つまり本研究は、陰謀論的信念における有力な仮説として、状況に過敏にエージェンシーを検知し、その意図を説明として用いる認知的な傾向(Brotherton & French, 2015)を支持するだけではなく、この認知が陰謀論世界の強化にいかに関与するのかを理論的に説明するものである。

また、本研究は陰謀言説の定義へのアプローチにも貢献するものであった。本研究では、陰謀言説の定義についての研究が、陰謀言説を信じるという現象の内在的理解においては有効なアプローチではないとする立場に立つ。しかしながら、量的な研究において、研究対象を適切に切り分けるために定義の洗練が重要な意味をもつという立場(e.g.Nera & Schöpfer, 2023)を否定しない。その上で、本研究が扱った、一般的市民が欺瞞に欺かれているとする「A の日記」の陰謀論言説では、対立的な二つの主体の意図が仮説として含まれ、その関係から危機的事態が示唆されていた。従来の心理学における陰謀論の定義では、共謀者の目標に脅威の要素が含まれる(Hofstadter, 1966)言説が陰謀論であるとされてきたが、本研究が対象とした言説においては、人々への直接的な脅威となる前に、「陰謀組織に対抗する意図のある存在」とされる安倍が現在形で脅威に晒されているものとして示されていた。Gottschall (2022/2021) は、人々に嗜好されるものとしてストーリーという言葉を用いながら、陰謀物語の形態が伝統的な宗教に類似することを示唆し、その一例としてキリスト教を挙げ、①天国と地獄の物語を現在形で示している(邦訳 p.119)ことや、②悪と戦う大義ある聖戦の主人公として信者に協力を求めることを指摘している。本研究は、このGottschall (2022/2021) の示唆を支持する結果を示したと言えるだろう。

さらに、本研究は Schmitt(2022/1932)の友・敵概念に基づいて陰謀論の段階的定義を提示した。従来の心理学研究は陰謀論を、その真偽を精査することなく、それを真実だと認識することが問題でもないにも関わらず、異常な言説として定義してきた。このような定義が、近年になって問題視されるようになっていく中で、本研究は不可知主義の慣行を維持しながらも、陰謀論を異常性ではなく、その言説の過激さから捉える観点を新たに提案するものである。つまり本研究は、これからの陰謀論の心理学研究に求められている新たな議論の素地を提示したと言えよう。

そしてなによりも本研究は、陰謀論を過激に信じるという現象を、人々の営みから動的に理解することの重要性を示すものである。本研究はアートネクサス理論に基づく分析から、強固な陰謀論世界を生み出す仮想的復讐実践のダイナミクスを示し、その仮想的復讐実践に固有な認識として、効力的観測に基づく認識の存在と機能を明らかにした。陰謀言説を過激に信じるとは、効力的観測に基づいた認識から、生存をかけた復讐に生きていく営みなのである。また、現代において社会問題へと通じる陰謀論の舞台はブログや SNS などのインターネットメディアであり、そこでは本研究が扱った事例のように陰謀論をめぐる人々は独自の営みに生き、社会的事象などと絡み合いながら言説を変容させる契機がある。現代においては、陰謀言説も、それを信じるという現象も動的なプロセスとして理解することの重要

性を本研究は示した。

5.4.2 プロジェクションサイエンスへの示唆

陰謀論における陰謀組織という存在は、霊などと同様に現代社会においてはその存在が不確かな表象である。故に、本研究では従来の心理学研究では用いられて来なかった、人類学に由来するアートネクサス理論を採用した。そして本研究は、アートネクサス理論に基づく分析から、表象が社会的な現実と結びついていく過程を示すものでもあったと考えられる。

表象が現実と結びついていくという現象について、これまでの心理学や認知科学でも議論があまりなかったが、近年、内的処理の結果としての表象（ターゲット）が現実世界（ソース）に投射されるプロジェクションという心の働きが注目され、第三世代の認知科学として議論されるようになってきている（鈴木・小野・米田, 2019）。例えば、風景画像からそこに写されていない人の顔を見るパレイドリア現象や、偽物の手と本物の手に同様の刺激を与えた際に、偽物の手から刺激を感じるように錯覚するラバーハンド錯覚といった現象が、プロジェクションによるものだと改めて議論されている。

しかし、プロジェクション現象の中でも神といった現実には存在しないとされる想像上の表象を現実投射する異投射とよばれる現象についての蓄積はまだ少ない（鈴木, 2019）。特に異投射現象については、プロジェクションという視点の導入により、ようやく認知科学の俎上に挙げられるようになったために、フィールドワーク等を通した基本的な観察による質的な検討もまだ少ない。

このような中で、想像上の表象と現実を結びつける認知的機能としてアブダクションが役割を果たしていることが指摘されている（久保, 2019）。久保(2019)は、ボーイズラブを題材にした作品を愛好する人々が行う二次創作について考察している。久保(2019)によると、①物語中で実際に描かれる設定に不自然な点や余白を見出し、②その疑問に対する答えの前提として想像による恋愛関係を当てはめ、③その前提に基づいたアブダクションによって二次創作が行われるのだという。しかし同時に久保(2019)は、アブダクションが情報の正しさ、真実性を保証するものではないことを指摘し、仮説としての想像がエージェントとして、コミュニティで広く共有され、支持を得ることでその現実性を得ることを示唆している。

しかしながら、アブダクションされる表象が、コミュニティにおいていかにエージェントとして現実性を得るのかについてのデータに基づいた実証レベルの議論はなされていない。何らかの想像的な存在の生成は、個人内のメカニズムであるアブダクションで説明できるかもしれない。だが、単なる個人の想像ではなく、そのエージェントが人々に現実として捉えられるメカニズムについては、コミュニティの営みにおけるダイナミクスをより詳細に追う必要があるだろう。

そして本研究は、アートネクサス理論に基づいて陰謀組織をエージェントとして捉え、アブダクションという観点から実践の分析を試み、結果として陰謀組織という表象が社会的な

現実と結びついていく過程を示すものでもあった。つまり本研究は、文化人類学に由来するアートネクサス理論が、プロジェクションサイエンスにおいて課題となっている異投射現象のメカニズムを検討するための有力なアプローチとなる可能性を示したと言えよう (Figure. 32).

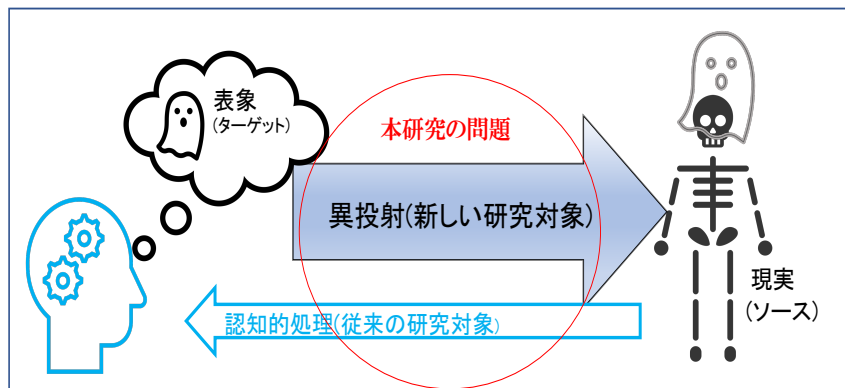


Figure. 32 本研究の問題とプロジェクションサイエンス

6 課題と展望

ここで、本研究の限界を3点指摘すると同時に、今後の研究課題を提示したい。

6.1 ディスコース研究

本研究では、トランプを陰謀組織と対抗するものとして言及する Q anon 言説と同様に、「A の日記」言説においても安倍という特定の政治家が特殊な位置づけを得て、集团的運動の対象となっていたことが明らかとなった。トランプ、安倍の両名は国家や行政の代表を務める政府中枢の立場にあった人物である。本研究が扱った陰謀論世界におけるダイナミクスにおいて、さらにその背景にある社会状況や政治状況も重要な役割を果たしていたと考えるべきだろう。

例えば、陰謀論世界の発展過程を、政治状況や陰謀論において言及される人物が実際に発信していた言説との関係から検討し、そもそもなぜ彼らについての陰謀論が生じたのかを問うことが可能かもしれない。例えば、鹿ら (2019) は安倍のディスコースの分析から、安倍が主語や目的語を明確にしないといったストラテジーを用いて、個人的な立場と態度を曖昧にしていたことを指摘している。本研究で焦点化したアブダクションという観点からすると、人々がその意図を断片的な情報から推論せざるをえないような言説が重要な意味を持ったとも考えられる。陰謀論言説だけではなく、そこで言及される人物などの言説も含めた分析がさらに必要だろう。

特に、本研究で扱った陰謀論言説に安倍が登場した時期とは、彼と自由民主党が「日本を、取り戻す。」という非常に大きな主部による曖昧なスローガンを掲げて政権に復帰した時期であった。その「取り戻す」という述部は、過去の何かの損失を前提する表現である。また、トランプが選挙に用いたスローガンの「Make America Great Again」も偉大さを喪失した前提をとるものである。スローガンとは、理念などを簡潔かつ印象的に伝えるためのものであるが故に、曖昧さを呼び込むのは当然かもしれない。しかし鹿ら (2019) の、安倍がそもそも曖昧な語りをしていたという指摘を踏まえると、この時期の安倍がどのように何を語っていたのかという観点から分析し、またそれらと陰謀論の展開との関係を検討する必要があるだろう。

6.2 実験的研究

今回検討した仮想的復讐実践については、グループダイナミクス研究における集団間代理報復 (intergroup vicarious retribution) 行動として捉えることも可能だろう。集団間代理報

復とは、被害を受けたものが加害者に向けて報復する行為ではなく、当事者ではないものがそれを代理する行動である。そして、この集団間代理報復についてはグループダイナミクス研究として、ゲームなどを題材にした実験による定量的な検証から、集団的アイデンティティとの関係が明らかにされている（縄田・山口, 2011）。また、縄田(2022)によると、この集団間代理報復行動において、集団レベルの被害者意識、集合的被害感(collective victimhood)が内集団の凝集性を高め、外集団への攻撃を正当化させることで集団間紛争を持続させる効果をもつ。そして、この集合的被害者感とは、実際の被害とは異なる、認識上の被害意識である。本研究では、仮想的復讐実践を保存する要因として認識上の被害による不均衡を指摘した。また本研究が扱った仮想的復讐実践も、その始まりは「安倍バッシング」という安倍の被害を代理する攻撃として正当化されたものとして捉えることができるだろう。存在が不確かな陰謀組織を前提として、それをめぐるグループダイナミクスを定量的に研究することには困難が考えられる。しかし、本研究が示した不均衡の認識の契機となる、アブダクションおよび効力的観測を喚起する課題をデザインすることで、陰謀論世界の仮想的復讐実践における不均衡の認識とアブダクションの重要性を実験的に検証することが可能かもしれない。

6.3 アイデンティティ研究

先にあげたグループダイナミクス研究は、陰謀論をめぐる事象におけるアイデンティティの重要性を示すものである。これまでの心理学では、陰謀論の心理として、主に病理、動機、人格、認知へアプローチしてきた(Hornsey et al, 2022)が、アイデンティティの関係についての蓄積は少ない。そして、本研究でも陰謀論世界におけるアイデンティティの作用については分析視座の限界から検討することができなかった⁴³。

本研究が扱った営みも安倍の被害を代理する攻撃であったが、ブロガーAは「親安倍ではない」という趣旨の記述を「Aの日記」で行っていた。また、本項では扱ってこなかったが常連投稿者たちによる安倍政権への批判と解釈できる投稿もあった。⁴⁴この点を踏まえると、彼らは安倍の意図の理解者でありながらも、崇拜するなど自身たちが同一化を図ろうとする存在に位置づけていなかったようにも思われる。しかしながら同時に、安倍を同じ実践に参加する集団の一員だと捉えていたことがデータから伺える。

従来より、徒弟制的観点から実践の参加者としてのアイデンティティ (Lave & Wenger,

⁴³ Gell(1998)は、アート作品とは孤立したものではなく、集団によって協働的に制作されるものとして、アート作品のスタイルを集団的アイデンティティとして議論し (pp.163), アート作品におけるスタイルの記述を試みている。例えば Gell (1998) は、マルケサントゥーのモチーフのパターンやその発達のあり方を詳細に分析している (p.167-p.180)が、本研究で扱ったような言語的なインデックスについてのスタイルの記述を試みてはいない。また、時に人格性(personhood)についても言及しているが、Gell(1998)では、その人格性の記述については目的とされていない (p.223)。

1991/1993)が記述されてきた。さらに Gee(2005)は、この参加の領域をオンラインスペースへと拡張する affinity space という概念から、オンラインゲームへの様々な方法による様々なレベルの参加者アイデンティティを記述している。この Gee(2005)のオンライン空間の参加のあり方を記述する試みに加え、さらに意味的世界における実践の参加者として安倍や陰謀組織を含める試みから、ブログ実践のアイデンティティを記述する試みも可能かもしれない。そもそも我々が日常的に参加している様々な社会的実践も、実際に今そこに実在するエージェントのみが参加しているわけではない。例えば、これから参加してくるであろう新参者を想定したり、かつて参加していた人物の逸話など、様々な形式で今そこに存在しないものがエージェンシーを発揮し、そして実践やその秩序を方向づけうる。同時に意味的世界における実践の参加者を含めた参加者アイデンティティを記述する試みとは、状況論への理論的な貢献も期待できるだろう。また、インタビュー調査とアクターネット理論的な観点に基づいて、人工物を交えたインタラクションと外部のコミュニティとの関係から形成される欲求としての主体性(松浦・岡部, 2014)が例証されている。このような観点からインタビュー調査を行い、陰謀論世界における陰謀組織という外部のコミュニティとの関係にアプローチすることで、陰謀論世界における人々のアイデンティティに迫る必要もあるかもしれない⁴⁵。

6.4 インプリケーション

ここから本研究結果を踏まえた上で、陰謀言説による社会的問題に対しての示唆を試みたい。とは言え、陰謀は実際に我々の社会に存在するもので、特定の陰謀言説の真偽を問うことは難しく、また、陰謀言説を信じること自体も問題ではないことを再び指摘しておきたい。しかしながら、陰謀言説は時に歴史上稀にみる悲惨な事態に通じるもので、我々は過激な言説や運動となる契機を理解しなければならない。そして本研究では、陰謀言説から社会運動が生じ、過激な陰謀論となる過程を示した。その結果から、特定の陰謀言説が過激な社会運動に至る蓋然性を検討するための三つの指標を示唆できる。

第1に、一般的市民が欺瞞に欺かれているとする陰謀言説がいかなる仮説構造を持つのかである。陰謀を企む勢力の意図という仮説だけではなく、それに対抗する人物の意図についての仮説を有することが、実践の契機となることを示した。また、それらの意図の推論から危機の要素が呼び込まれることも重要な指標と言えるだろう。しかしながら先に指摘したように、陰謀へ対抗する人物の性質も大きく関わる可能性がある。この点については、陰謀言説において言及される人物の言説、社会的立ち位置や政治状況を含めた分析から、さらに精度の高い指標を示せるかもしれない。

第2に、言説がアブダクションによって展開していくかである。陰謀言説に危機的要素を

⁴⁵ 「A の日記」コミュニティで共有された規範性が伺える場面も観察できた。その一例を付録 16 に示したい。

呼び込み、過激なものとしていったのは、アブダクションによる認識であった。しかしながら、どの程度のアブダクションが重ねられることで、過激な言説に至るのかについては不明であり、他の陰謀論事案の記述と比較を通して、検討していく必要があるだろう。

第3に、効力的観測を通じて陰謀言説が政治的な言説になっているか、である。本研究では、効力的観測を通じたアブダクションから過激な政治的な言説へと変容することを示した。効力的観測を通じて、陰謀言説が過激な政治的な言説となっているかが重要な指標となるだろう。先に指摘したように、効力的観測がもたらす具体的な効果については、実験的に検証する余地があるだろう。

しかし本研究は、あくまで本研究が扱った「Aの日記」陰謀論世界が強固で過激なものとなっていく過程を示したに過ぎない。そのため、過激な運動へと発展しうる陰謀言説を特定し、それへの対処が必要となったとしても、具体的にどの時期にどのような介入を行うべきなのかについて、本研究の結果から示唆することはできない。しかしながら、Schmitt(2022/1932)は、敵との衝突とは「不偏不党である」第三者によって決着するものではなく、干渉する資格は存在的に関与し参加することでしか得られないと指摘している。このSchmitt(2022/1932)の指摘を受け入れるなら、我々は特定の陰謀論世界に対して外在的な介入を試みるのではなく、その陰謀論世界の内側から関与する回路を模索しなければならないだろう。

7 文献

- Aaronovitch, D. (2009). *Voodoo Histories: The Role of the Conspiracy Theory in Shaping Modern History*. London: Jonathan Cape.
- 阿部 廣二・大山 星馬 (2024) 虫屋の採集技法——「野生のナビゲーション」としての昆虫採集. 認知科学, 269-288.
- 雨宮 純 (2021) あなたを陰謀論者にする言葉——「目覚めた人」に堕ちるまでの近現代史裏クロニクル. フォレスト出版.
- Anspach, M. R. (2002) *A Charge de Revanche : Figures élémentaires de la réciprocité*. Seuil. (アンスパック, M. R. 杉山 光信 (訳) (2012). 悪循環と好循環：互酬性の形/相手も同じことをするという条件で. 新評論).
- 青山 俊之 (2021) 自己責任ディスコースの詩的連鎖：ISIS 日本人質事件におけるブログ記事に着目して. 社会言語科学, 23(2), 19–34.
- Baccus, M. (1986). *Sociological Indication and the Visibility Criterion of Real World Social Theorizing*. In H. Garfinkel (Ed.), *Ethnomethodological Studies of Work*. (pp. 1–19). London: Routledge.
- Benedict, R. (1934) *Patterns of Culture*. London.
- Blanuša N., Hristov T. (2020). *Psychoanalysis, Critical Theory and Conspiracy Theory*. In *Routledge handbook of conspiracy theories* (pp. 67–80). Routledge.
- Boudry, M., Braeckman, J. Immunizing (2011). Strategies and Epistemic Defense Mechanisms. *Philosophia*, 39, 145–161.
- Brotherton, R., French, C. C., & Pickering, A. D. (2013). Measuring Belief in Conspiracy Theories: The Generic Conspiracist Beliefs Scale. *Frontiers in Psychology*, 4.
- Brotherton R. (2015). *Menti Sospettose. Perché siamo tutti complottisti* (ed. 2021). Bollati Boringhieri.
- Brotherton R, French CC (2015) Intention Seekers: Conspiracist Ideation and Biased Attributions of Intentionality. *PLoS ONE*. 10(5).
- Butter M. (2014). *Plots, Designs, and Schemes: American Conspiracy Theories from the Puritans to the Present* (pp.33). Walter de Gruyter.
- Butter M., Knight P. (2020). *Conspiracy Theory in Historical, Cultural and Literary Studies*. In *Routledge handbook of conspiracy theories* (pp. 28–42). Routledge.
- Cabral, S. (2021, February 14) *Capitol Riots: Did Trump's Words at Rally Incite Violence?* BBC. <https://www.bbc.com/news/world-us-canada-55640437> (情報取得 2021/12/03)
- 中央防災会議 (2006) 第一編 発災とメカニズム. 災害訓練の検証に関する専門調査報告書. 内務省.
- 中央防災会議 (2008) 第二編, 第 4 章混乱による被害の拡大. 災害訓練の検証に関する専門調査報告書 (pp.179-205). 内務省.
- Clark, J. D. (2018) *Behind the Curve*. Delta-v Productions.
- Darwin, H., Neave, N., & Holmes, J. (2011) Belief in conspiracy theories. The role of paranormal belief, paranoid ideation and schizotypy. *Personality and Individual Differences*, 50(8), 1289–1293.
- De Fortuna, A. M., & De Luca Picione, R. (2024). Searching for meaning through conspiracy theories. Considerations on the state of the art of psychological literature and definition of a research agenda from a semiotic dynamic cultural perspective. *Culture & Psychology*, 0(0).
- Douglas, K. M., Sutton, R. M., Callan, M. J., Dawtry, R. J., & Harvey, A. J. (2016) Someone is pulling the strings: Hypersensitive agency detection and belief in conspiracy theories. *Thinking Reason*, 22(1), 57-77.
- Douglas K. M., Sutton R. M., Cichocka A. (2017). The psychology of conspiracy theories. *Current Directions in Psychological Science*, 26(6), 538–542.
- Douglas K. M., Sutton R. M. (2023). What are conspiracy theories? A definitional approach to their correlates, consequences, and communication. *Annual Review of Psychology*, 74(1), 271–298.
- Douglas K. M., Uscinski J. E., Sutton R. M., Cichocka A., Nefes T., Ang C. S., Deravi F. (2019). *Understanding conspiracy theories*. *Political Psychology*, 40(S1), 3–35.
- Douglas K. M., van Prooijen J.-W., Sutton R. S. (2021). Is the label “conspiracy theory” a cause or a consequence of disbelief in alternative narratives? *British Journal of Psychology*, 113(3), 575–590.
- Flora, D. B. and Toplak, M. E. (2021) An examination of the underlying dimensional structure of three domains of contaminated mindware: paranormal beliefs, conspiracy beliefs, and anti-science attitudes. *Thinking and*

- Reasoning, 27(2), 187-211.
- Festinger, L. (1957). *A Theory of Cognitive Dissonance*. Row, Peterson. (フェスティンガー, L. 末永 俊朗 (訳) (1965) 認知的不協和の理論——社会心理学序説. 誠信書房)
- Garner, R. (1964) *Dead Birds*. Documentary_Educational Resource. <https://vimeo.com/ondemand/deadbirds>
- Garfinkel, H. (1974) *The Origin of the Term "Ethnomethodology"*, pp.15-18. Penguin.
- Gell, A. (1998) *Art and Agency: An Anthropological Theory*. Clarendon Press.
- Gee, J. (2005). *Semiotic social spaces and affinity spaces: From The Age of Mythology to today's schools*. In D. Barton & K. Tusting (Eds.), *Beyond Communities of Practice: Language Power and Social Context. Learning in Doing: Social, Cognitive and Computational Perspectives* (pp. 214-232). Cambridge: Cambridge University Press.
- Grzesiak-Feldman, M. (2007). Conspiracy thinking and state-trait anxiety in young Polish adults. *Psychology. Rep.* 100, 199-202.
- 後藤 周 (2023) 「朝鮮人殺害さしつかえなし」. それは丘の上から始まった——1923 年横浜の朝鮮人・中国人虐殺 (pp.100-111). ころから.
- Gottschall, J. (2021) *The Story Paradox: How Our Love of Storytelling Builds Societies and Tears them Down*. Basic Books. (ゴットシャル, J. 月谷 真紀(訳)(2022) ストーリーランド大戦. ストーリーが世界を滅ぼす——物語があなたの脳を操作する (pp.113-130). 東洋経済新報社.)
- Hoback, C. J. (2021). *Q: Into the Storm*. HBO.
- 秦 正樹 (2022) 陰謀論——民主主義を揺るがすメカニズム. 中公新書.
- 波田野 結花, 吉田 弘道, 岡田 謙介 (2015) 『教育心理学研究』における p 値と効果量による解釈の違い, 教育心理学研究, 2015, 63 (2) . 151-161.
- 広瀬 隆・アルバカーキ トリビューン (編) (1994) プルトニウム人体実験——マンハッタン計画. 小学館.
- 廣田 龍平 (2022) 対象の転写は連鎖する, 妖怪の誕生——超自然と怪奇的自然の存在論的歴史人類学. (pp.201-208). 青弓社.
- Hornsey, M. J., Bierwiazzonek, K., Sassenberg, K., & Douglas, K. M. (2022) Individual, intergroup and nation-level influences on belief in conspiracy theories. *Nature Reviews Psychology*, 2, 85-97.
- Hofstadter R. (1964). *Lo stile paranoide nella politica Americana*. Adelphi Edizioni.
- Hofstadter, R. (1966). *The paranoid style in American politics*. Knopf.
- 古川 顕 (2020) 貨幣論の革新者たち——貨幣と信用の理論と歴史. ナカニシヤ出版.
- Imhoff, R., & Lamberty, P. (2018) How paranoid are conspiracy believers? Toward a more fine-grained understanding of the connect and disconnect between paranoia and belief in conspiracy theories. *European Journal of Social Psychology*, 48(7), 909-926.
- 伊藤 昌亮 (2019) 2ちゃんねる文化と反マスメディアアジェンダ. ネット右派の歴史社会学——アンダーグラウンド平成史 1990-2000 年代 (pp.301-369) . 青弓社.
- J-CAST ニュース (2015, 7 月 10 日) 在日韓国人が 7 月 9 日に在留資格を失い, 強制送還——デマの拡散で入管に不法滞在通報相次ぐ. <https://www.j-cast.com/2015/07/10239981.html?p=all> (情報取得 2023/04/01)
- Jensen, T. (2013). *Democrats and Republicans Differ on Conspiracy Theory Beliefs*. <http://www.publicpolicypolling.com/polls/democrats-and-republicans-differ-on-conspiracy-theory-beliefs> (情報取得 2023/04/01).
- 木村 忠正 (2018) ハイブリッド・エスノグラフィー——NC 研究の質的方法と実践 (pp.86-87, pp.131-135). 新曜社.
- Klein O., Nera K. (2020). *Social Psychology of Conspiracy Theories*. In *Routledge handbook of conspiracy theories* (pp. 121-134). Routledge.
- 国際高麗学会日本支部 (2010) 在日コリアン辞典 (p.226) . 明石書店.
- 小坂井 敏晶 (2013) 社会心理学講義——〈閉ざされた社会〉と〈開かれた社会〉. 筑摩選書.
- Krasmann, S. (2019) Secrecy and the force of truth: Countering post-truth regimes. *Cultural Studies*, 33(4), 690-710.
- 久保 明教 (2011) 世界を制作する=認識する. 久保 明教・春日 直樹 (編) (2011) 現実批判の人類学——新世代のエスノグラフィーへ (pp.47-48). 世界思想社.
- 久保 明教 (2018) 機械カニバリズム——人間なきあとの人類学へ. (pp.36-37). 講談社選書メチエ.
- 久保 明教 (2019) ブルーノ・ラトゥールの取説——アクターネットワーク論から存在様態探求へ. 月曜社.
- 久保(川合) 南海子 (2019). 異投射・虚投射の発生と共有: 腐女子の妄想と二次創作を通じて, 認知科学, 26 (1), 40-51.
- 倉橋 耕平 (2019) ネット右翼と参加型文化——情報に対する態度とメディア・リテラシーの右旋回. 樋口

- 直人・永吉 希久子・松谷 満・倉橋 耕平・シェーファー, F.・山口 智美, ネット右翼とは何か (pp.104-120). 青弓社.
- Latane, B., & Darley, J. M. 1970 *The Unresponsive Bystander: Why Doesn't He Help?*. New York: Appleton-Century-Crofts. (ラタネ, ダーリー, 村 研一, 杉崎 和子 (訳) (1997)) 冷淡な傍観者——思いやりの社会心理学. プレーン出版.)
- Lave, J. & Wenger, E. (1991). *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*. Cambridge, Cambridge University Press. (レイブ, J. & ウェンガー, E. 佐伯 胖・福島 真人(訳) (1993) 状況に埋め込まれた学習——正統的周辺参加. 産業図書.)
- Latour, B. (2005). *Reassembling the Social: an Introduction to Actor-Network-Theory*. Oxford University Press. (ラトール, B. 伊藤 嘉高 (訳) (2019). 社会的なものを組み直す——アクターネットワーク入門 法政大学出版局)
- Latour, B. (2009) *Sur le Culte Moderne Des Dieu Faitiches suivi de Iconoclash* (Edi) Decouverte, L. Paris. (ラトール, B. 荒金 直人 (訳) (2017). 近代の<物神事実>崇拜について——ならびに「聖像衝突」. (pp.19-20). 以文社.)
- Legewie, N., & Nassauer, A. (2018) YouTube, Google, Facebook: 21st century online video research and research ethics. *Forum Qualitative Sozialforschung Forum: Qualitative Social Research*, 19(3).
- March, E., & Springer, J. (2019) Belief in conspiracy theories: The predictive role of schizotypy, Machiavellianism, and primary psychopathy. *PLoS ONE*, 14(12), e0225964.
- Martin. F. (2013) *Money-The Unauthorized Biography From Coinage to Cryptocurrencies*. VINTAGE Books, New York. (マーティン, L. 遠藤 真美 (訳) (2014) 21 世紀の貨幣論, 東洋経済新報社.)
- McIntyre, L. (2018) *Post-Truth*. MIT Press. (マッキンタイア, L. 大橋 完太郎(監訳) (2020) ポストトゥルースとは何か. ポストトゥルース (pp.15-33). 人文書院.)
- Mercier, H. & Sperber, D. (2018). *The Enigma of Reason: A New Theory of Human Understanding*. Penguin Books.
- Mauss, M (1925) *Essai sur le don: forme et raison de l'échange dans les sociétés archaïques*. (モース, M. 吉田 禎吾・江川 純一 (訳) (2009). 贈与論, ちくま学芸文庫.)
- 中釜 英里佳・小野 美喜 (2018) ブログによる闘病記を研究対象にする際の倫理的配慮. 日本看護倫理学会誌, 10(1), 67-72.
- 永吉 希久子 (2019) ネット右翼とはだれか——ネット右翼の規定要因. 樋口 直人・永吉 希久子・松谷 満・倉橋 耕平・シェーファー, F.・山口 智美, ネット右翼とは何か (pp.13-31). 青弓社.
- 中村 和生 (2015). ポスト分析的エスのメソドロジーの展望と展開: 科学実践の理解可能性の探究 明治学院大学博士論文.
- 縄田 健吾・山口 裕幸 (2011) 集团的代理報復における内集団観衆効果. 社会心理学研究, 26(3), 267-177.
- 縄田 健吾 (2022) 報復が引き起こす紛争の激化. 暴力と紛争の“集団心理学”——いがみ合う世界への社会心理学からのアプローチ (pp.240-270). ちとせプレス.
- Nera, K., & Schöpfer, C. (2023) What is so special about conspiracy theories? Conceptually distinguishing beliefs in conspiracy theories from conspiracy beliefs in psychological research. *Theory & Psychology*, 33(3), 287-305.
- 西井 涼子・箭内 匡 (2020) ファエクトゥス——生の外側に触れる. 京都大学学術出版会.
- 小田 博志 (2010) エスノグラフィー入門: (現場) を質的研究する (pp.6-8). 春秋社.
- 大橋 靖史 (2015) ディスコース心理学とディスコースの心理学. 鈴木 聡志・大橋 靖史・能智 正博(編著). ディスコースの心理学: 質的研究の新たな可能性のために (pp.25-40). ミネルヴァ書房.
- 松浦 李恵・岡部 大介 (2014). モノをつくることを通した主体の可視化. 認知科学, 21 (1), 141-154.
- 大山 星馬 (2020) アートネクサスの方法論的吟味: リアリティへのアプローチ. 青山社会情報研究, 12, 1-9.
- 大山 星馬 (2024) 過激な集团的運動へ至る陰謀論とその相互行為的特徴. 質的心理学研究, 23, 228-242.
- Papasavva, A., Aliapoulos, M., Ballard, C., Cristofaro, E. D., Stringhini, G., Zannettou, S., & Blackburn, J. (2022) The gospel according to Q: Understanding the Q Anon conspiracy from the perspective of canonical information. *Proceedings of the International AAAI Conference on Web and Social Media*, 16(1), 735-746.
- Pritikin, T.T. (2020) *The Hanford Plaintiffs: Voices from the Fight for Atomic Justice*. University Press of Kansas. (トリリヤ, T. プリティキン. 宮本 ゆき (訳) (2023). 黙殺された被爆者の声——アメリカ・ハンフォード正義を求めて闘った原告たち. 明石書店.)
- Rohde, D. (2020). *In Deep: the FBI, the CIA, and the Truth about America's "Deep State"*. W. W. Norton & Company.
- Rosset E. (2008). It's no accident: Our bias for intentional explanations. *Cognition*, 108(3), 771-780.
- Rothchild, M.(2021) *The Storm Is Upon Us: How QAnon Became a Movement, Cult, and Conspiracy Theory of Everything*. Melville House Publishing. (ロスチャイルド, M. 烏谷 昌幸. 昇 亜美子 (訳) (2024) 陰謀論

- はなぜ生まれるのか——Q アノンとソーシャルメディア. 慶應義塾大学出版会.
- 倫理委員会 (編) (2011) 日本心理学会倫理規定 (第3版). 日本心理学会.
- Rizeq, J., Flora, D. B., & Toplak, M. E. (2021) An examination of the underlying dimensional structure of three domains of contaminated mindware: paranormal beliefs, conspiracy beliefs, and anti-science attitudes. *Thinking and Reasoning*, 27(2), 187-211.
- 鹿 雪瑩・劉 守軍・趙 榕 (2019) CDA の視点から見る「村山談話」と「安倍談話」. 社会システム研究, 22, 257-273.
- 佐藤 郁哉(2013) フィールドワークの技法——問いを育てる, 仮説をきたえる. 新曜社
- 佐藤 久光 (1980) ネパールにおけるシャーマンの社会的役割, ソシオロジ, 25 (2) , 119-134, 148.
- Schutz, A. (1975) .*Luickmann Struktutren Der Lebenswelt*. Schutz, A. & Luckmann, T. (1975). *Luickmann Struktutren Der Lebenswelt*. UVK Verlagssellschaft mbH. (シュッツ, A.・ルックマン, T. (編) 須賀 寿 (訳) (2003). 生活世界の構造. ちくま学芸文庫.)
- Shermer, M. (2011) *The believing brain: From ghosts and gods to politics and conspiracies: How we construct beliefs and reinforce them as truths*. Henry Holt.
- Schmitt, C. (1932). *Begriff des Politischen*. Munchen. (シュミット, C. 権左 武志 (訳) (2022) . 岩波文庫.)
- 衆議院本会議録情報(1988) 第112回国会衆議院本会議第4号昭和63年1月28日. 衆議院.
- Silverman, D. (2013) *A Very Short, Fairly Interesting, Reasonably Cheap Book about Qualitative Research*. SAGE. (シルバーマン, D. 渡辺 忠温 (訳) (2020) 質的データを見出, 制作することについて, 良質な質的研究のための, かなり挑発的でとても実践的な本——有益な問い, 効果的なデータ収集と分析, 研究で重要なこと (pp.59-71). 新曜社.)
- 総務省 (2019) 令和元年版情報通信白書.
- Stainton, H., & Iordanova, E. (2017) An ethical perspective for researchers using travel blog analysis as a method of data collection. *Methodological Innovations*, 10(3).
- Stähl, T., & van Prooijen, J.-W. (2018) Epistemic rationality: Skepticism toward unfounded beliefs requires sufficient cognitive ability and motivation to be rational. *Personality and Individual Differences*, 122, 155-163.
- 鈴木 宏昭 (2019) プロジェクション科学の目指すもの, 認知科学, 26(1), 52-71.
- 鈴木 宏昭, 小野 哲雄, 米田 英嗣(2019), 特集「プロジェクション科学」編集にあたって, 26(1), 6-13.
- 田中 正敬 (2018) 関東大震災朝鮮人虐殺の否定・隠蔽について, 日本の科学者, 53(9), 31-37.
- 田中 雅一 (2018) 誘惑する文化人類学——コンタクト・ゾーンの世界へ. 世界思想社.
- 竹中 一平 (2008) 人から人へ伝わる情報——うわさの対人心理学. 対人心理学研究の最前線 (第5回), 繊維製品消費科学, 49(7), 467-476.
- 丁 偉偉 (2016) 尖閣 (釣魚) 諸島問題に関する日本の新聞報道について——1972 年~ 2012 年の朝日と読売の関連社説の分析を例に. 評論・社会科学, 116, 41-71. 同志社大学社会学会.
- 寺田 喜朗 (2003) 内在的理解的方法的地平とは何か: 島園進の中山みき研究再考. 年報社会科学基礎論研究, No.2, 150-166.
- 辻 隆太朗 (2023) コンスピリチュリティとは何か. 横山 茂雄・竹下 節子・清 義明・堀江 宗正・栗田 英彦・辻 隆太朗・雨 宮純, コンスピリチュアリティ入門——スピリチュアルな人は陰謀論を信じやすいか (pp.19-77). 創元社.
- Uscinski, E. J. (2020) *Conspiracy Theories: A Primer*. Rowman & Littlefield. (ユージンスキ, E. J. 北村 京子 (訳) (2022) . 陰謀論の心理学と社会学. 陰謀論入門——誰が, なぜ信じるのか? (pp.108-110). 作品社.)
- van Prooijen J. W. (2018). *The Psychology of Conspiracy Theories*. Routledge.
- van Prooijen, J.-W., & Acker, M. (2015) The Influence of Control on Belief in Conspiracy Theories: Conceptual and Applied Extensions. *Applied Cognitive Psychology*, 29, 753-761.
- van Prooijen, J.-W., & van Lange, P. A. M. (2014) *Examining the Monological Nature of Conspiracy Theories. Power, Politics, and Paranoia: Why People Are Suspicious of Their Leaders* (pp.254-272). Cambridge University Press.
- Welsome, E. (1999) *The Plutonium Files*. New York. (ウェルサム, E. 渡辺 正 (訳) (2000) プルトニウムファイル. 翔泳社.)
- Wooffitt, R. (1992) *Telling Tales of the Unexpected: The Organization of Factual Discourse*. Harvester Wheatsheaf. (ウーフィット, R. 大橋 靖志・山田 詩津夫 (訳) (1998). 人は不思議な体験をどう語るか——体験記憶のサイエンス. (pp.215-229). 大修館書店.)
- 箭内 匡 (2018) イメージの人類学. せりか書房.
- 安田 浩一 (2012) ネットと愛国. 講談社.
- 米盛 裕二 (2007) アブダクション——仮説と発見の論理. 勁草書房.

8. 付録

ⁱ 付録1：2012年参議院選 2012/09/11

衆議院選挙が近づいてきました。今回の選挙は日本の国内外の状況を考えれば重要な選挙です。いい加減な議員は選べません。政党や個人の議員としての評価等を客観的に判断できる基準があればと思います。一番わかりやすいのは点数化です。そこで前回試案をつくってみようとしたのですが、どうも設定が細かすぎたようでいまいちになりました。現在日本がおかれている内外情勢にしっかりと対応できる国会議員を選別するというのが目的ですが、また公開されている活動情報で誰が採点しても同じ結果が出るものでなければならいでしょう。国内問題で言えば消費税増税については、これは議員の賛否がはっきり採決で示されているからいい項目となるでしょう。しかし原発や憲法改正などの問題は採点ができないところです。政治献金等の問題も難しいですね。とはいえ、今回の衆議院選挙では尖閣諸島、竹島問題を考えるべきでしょう。これまでになるく事態はエスカレートしてきています。一発触発の状況でしょう。

付録2：紛争 2013/05/14

1年半が過ぎました。死因はどうも脳関係か心臓の問題になりそうです。少し痛むくらいですが、病院に行ってきたところ、軽い症状でした。とは言え先は短いので、急ぎたいと思います。このブログは遺言的日記の感覚で始めましたので史実と経験をありのままに記しています。なので、その事実が気に入らない人たちや組織からの妨害が予測されるため一方的発信にとどまるように設定してあります。そのため拡散もありえないでしょうし、アクセス数も期待していませんでした。ですが、アメリカ、中国、韓国関連の経済、戦争の記事については、予想を遙かに超えたアクセス数で驚きました。これまでに、アメリカと韓国の経済、紛争関係について投稿しましたが、今後は①中国②韓国③安倍の思想④日中間戦争の記事を投稿したいです。中国については、尖閣諸島でいつ武力衝突が起きてもおかしくない状況ですが、国内の治安、経済などを考慮すると小競り合いはあっても開戦はしないでしょう。日本と戦争しても利益はないと思います。むしろ、日本が軍備拡張、核武装に至る可能性の方があります。可能性としてあるのは、中国人民の蜂起で共産党が危機に陥ったときにスケープゴートとしての開戦でしょう。明治時代から私の一族は中国と深く関わってきました。父母はネイティブと言っても差し支えないでしょう。生活、習慣、言語はまさに中国のそれでした。なので真実の情報を知れるのです。観光程度で全てをわかったような自称専門家とは違います。中国や韓国のような隠蔽と捏造の国家の情報収集は信頼できる人脈を駆使してでなければ不可能なのです。中国では田舎の村にも共産党と公安がいて、常に監視をしているわけです。個々のテーマについての詳細は先送りとして、これからの中国崩壊の原因と道筋に関する全投稿の簡略を述べておくと、2015。つまり2015年中には中国崩壊の可能性が高いということを考察していこうとおもいます。

付録 3：アメリカの思う壺 2013/06/30

ずいぶん横道にそれてしまいました。本題に戻ります。中米の離反，中韓の協力，日本との開戦。このようなことは実際に起こり得るのでしょうか？実は，米国も中国も韓国も，口には出さないが，裏で何が起きているかを強く認識しています。韓国は，米中戦争も北との戦争も韓国への侵略もないことを意味すると見て，米中同盟から離れたと考えられています。これは，日本ではほとんど知られていないですし，報道もされていない深刻な問題です。アメリカには IEEPA という法律があります。アメリカがやりたい放題できる法律です。IEEPA は，「米国またはその国民の安全保障，外交政策または経済に対する異常かつ重大な脅威が発生した場合」，「その所有物に関して」，所有，取引，権利の行使などを「調査，規制または禁止」する。この法律は，「調査，規制，禁止」または「破棄，無効化，防止」するものです。詳細はググれば簡単に出てくるので，ここでは割愛しますが要はアメリカと戦争になれば敵国条項の権限を使って，アメリカも含めてすべてを地獄に落とすということです。2013 年現在，中国は米国債を約 1 兆 2000 億ドル保有しています。日本は約 9000 億ドルを保有しています。休戦協定が破棄された後，朝鮮半島で戦争が再開され，中国が前回のように北朝鮮側に加われば，まさにアメリカの思う壺です。敵国条項が発動され，中国の 1 兆 2000 億米ドルの債務は即座に帳消しになるだろう。そんなことができるはずがない。これが韓国の安全保障の基本であり，中国への依存を加速させている。危なくなったら，またアメリカに泣きつくか，最悪日本に泣きつく。これが救国の属国根性です。

付録 4：安倍首相がそう言ったかも 2013/07/28

昨年初め，メディアに関する資料を目にしました。リストの最初にあったのは，メディア VIP の名前でした。新聞社，テレビ局，ジャーナリスト，政治家など，総勢 8000 人以上です。新聞，テレビからの参加者だけでも 2000 人を超えていました。見たことも聞いたこともない名前が並んでいました。恥ずかしながら，それが何を意味するのかさっぱりわからなかったのですが，理解できるようになったのは，自民党総裁選が終わってからです。安倍総理バッシング，安倍内閣発足，安倍総理バッシング，参議院選挙，安倍総理バッシング。安倍首相は，日中戦争が勃発した場合，まず 60 万人の在日中国軍と，中国軍に報復する可能性のある 40 万人の在日韓国・朝鮮人を取り込まなければならないことに気づいたようです。自衛隊は現在，戒厳令への移行を急速に進めています。文民から軍への準備統制への移行はすでに最高幹部で完了しているでしょう。対中・対韓戦では当初，海上自衛隊と航空自衛隊が中心となっていましたが，陸上自衛隊も活躍しています。これは国内対策でしょう。未確認ですが，公安当局と緊密に連絡を取り合って情報を共有しているとも言われています。中国の軍事的準備に合わせて，安倍首相は武器輸出三原則を廃止しようとしています。これは法律ではないので，内閣は廃止したと主張することしかできないでしょう。三原則は祖父・岸信介の実弟である佐藤栄作が提唱したもののなので，何かの縁を感じます。武器輸出三原則が撤廃されれば，国内の軍需産業は活性化し，東アジアを除く近隣諸国にも恩恵が及ぶでしょう。現実に実現可能かどうかは別ですが，インドへの飛行艇の輸出はすでに確定しており，90 式戦車の要請も来ているようです。オーストラリアは以前から潜水艦の売却を求めている

ます。小型艦艇や哨戒艦のレベルは過去最高です。一方、法規制も進化しています。まず、特定機密保護法です。公務員による国家機密の漏洩は現実のものとなっています。傀儡政権時代にどれだけの国家機密が漏れたかわかりません。これは同盟国である米国が何とかするよう求めている問題でもあります。国益に反する行為にはある程度の制限があるべきです。先日の朝日新聞と共同通信の記者5人が遠隔操作された事件では、メディア側は「取材目的だから許された」と弁明してましたが、これは一般市民の感情とはまったく矛盾しています。いったい何様のつもりなのでしょう。すでに各機関は、このようなネット上の犯罪を含めたルール強化の具体策を検討し始めているようです。陰謀テレビは日本に何百もの損害を与えています。すべての免許を取り消さなければ、安倍首相がそう言ったかもしれないし、言っていないかもしれないという話がありますが、真実味がありますね。

付録5：安倍首相の思想とは何か 2013/08/11

このブログの解説サイトの書き込みで「あいまい」「途中で切れている」「核心が示されていない」と指摘されて久しいですね。それらは既存の確立された事実に基づいているのですが、それがいかに真実であり、信憑性があり事実であったとしても、実際に事象の全体像が解明されるケースは意外に少ない。特にこのブログの場合、日本のメディアでは取り上げられない？話題が多いので、以前に記事になったことがあっても、話題にならなければなかったことになってしまう。今回は、これまでにぼやかしていた記事を何回かに分けて見ていきたいと思います。まず、安倍首相から、この時点で現実となったことがいくつもあります。中国、韓国、北朝鮮、そして新聞メディア、各局、ネット上のありとあらゆるプラットフォームが、安倍批判に狂奔している理由を分析することも含めて、議論してみたいと思います。中国、韓国、北朝鮮がこれほどまでに安倍首相を嫌い、警戒する理由の本質は、彼のイデオロギーにあります。では、安倍首相のイデオロギーとは何か？一言で言えば、日本主義です。皮肉なことに、日本の政治家にとっては当たり前のことが、彼らにとっては脅威なのです。現在の日本の政党を考えてみよう。自民党でさえ、日本という国を少しも考えていない利権政党です。これは政治家個人にも同じことが言えます。どの政治家も私利私欲に染まっています。しかし、安倍首相はそのような人ではないのです。彼は保守政治家であり、あらゆる意味で日本という国のことだけを考えている勤勉な政治家です。このような無私の政治家は敵にとって非常に厄介なのです。しかし、第一次内閣では、安倍首相の唯一の弱点である育ちの良さが、政権を追われる要因のひとつとなりました。では、第一次内閣での安倍首相の努力を振り返りましょう。安倍首相が嫌われるヒントはここにあります。対北朝鮮制裁の強化、防衛省の昇格、パチンコ店への税務調査、貸金業規制法を改正し、グレーゾーンを完全になくし、悪徳業者を取り締まる。共謀罪の法制化、暴力犯罪の取り締まりなど、あらゆる手を尽くしていました。中国、韓国、北朝鮮の3カ国にとって、国防省の地位向上は最悪の事態です。中国人、韓国人、北朝鮮人の天敵と言っていいでしょう。安倍首相が辞任したとき、彼らが喜んだのも無理はないです。しかしこの5年間で、安倍首相はより強くたくましくなって帰ってきました。国民の理解と支持を両手に得て、稀に見る幸運とともに戻ってきたのです。彼らにとっては、まさに悪夢の再来です。すべてのメディアは陰謀組織潰けとなり、日本は消滅することが確実視されていました。しかし、彼の作戦だったのです。この作戦をわかりやすく説明しましょう。利権にまみれた自民党が壊滅し、民主党が政権を握る。政権経験のない素人集団

である民主党は自滅。やがて利権と権力の争奪戦が起こり、民主党の正体が見えてくる。日本の政治における最大の問題は、隠された陰謀組織の存在です。そこで彼はインターネットを使って、メディアを手玉にする陰謀組織を逆手に取り、日本国民の本当の敵が誰なのかを明らかにしようとしてしました。真実が国民に知られる環境が整いました。正しい情報に目覚めれば、それは日本の再生に直結します。そこがポイントで見事に成功しました。このような作戦を実際に考案し、実行した人がいるのでしょうか。シナリオ自体にリアリティがなく、実現は不可能に思えるので、何らかの力が働いたと思えます。衆院選の前後に自民党の安倍首相に抵抗する勢力が確認されたことも重要です。そして国民は今、陰謀組織に気づいています。敵が見えれば怖いものはないです。この流れで、反安倍の勢力は弱まるばかりです。ネット上では、当初狂ったように安倍首相を攻撃していた陰謀組織の動きも最近は弱まっています。半年前から状況は変わったのです。

付録6：安倍首相の頭や腹の中は 2015/03/22

先日、安倍さんの私邸周辺のが嚴重になったと聞きました。驚きましたね。すごい警備状況です。おそらくはテロ対策が陰謀勢力対策の念押しでしょうか、起こったか、起こりそうなのか、いずれにしてもかなりきな臭くなってきましたね。以前お話ししたことがありますが、現在数百人あまりの趣味の会という何の変哲もない旅行、ゴルフ、カラオケなどのクラブ？があります。このクラブは竹島その他の日韓関係悪化から陰謀勢力が大量脱会して以来、入会に際しては戸籍謄本の提示が義務づけられました。そして、戸籍謄本の提示を条件にいったところ、立ち上げからのメンバーのうち3名も脱落したと聞いて驚いています。また安倍首相が政権奪還後3年目となって、いろいろと結果が出てきましたね。自衛隊軍事機密漏洩問題もかなり進んだようですね。こういう関係は陰謀勢力案件ですが、反対サイドから考察しておく必要もあるでしょう。安倍首相の頭や腹の中は陰謀勢力へのリベンジの思いがたまりにたまっています。滅私奉公という政権ですから、これが国益ということであれば大きな決断をする可能性はあると思います。陰謀勢力との衝突はまず避けられないでしょうし、その際かなりの犠牲が出るはずです。ちなみに趣味のクラブの海外旅行はこの2年韓国は除外しています。またテロ人質事件があったので中東やアフリカの旅行も除外です。

付録7：非採用例 2015/11/13

AE：いつもありがとうございます。新たなメール案について投稿いたします。私は外国人による水源地、基地近辺の土地売買を規制するべきだと考えています。さらに言えば、外国人による日本国内の土地売買を禁止すべきだとも思います。そもそも外国人が日本の土地を取得すること自体がおかしいのです。治安維持のためにも、一考頂ければ幸いです。

A：調べてみたところ、これはかなり複雑な問題のようです。なので、とりあえずは陰謀組織の壊滅しかないでしょう。

付録 8：採用に至るやりとり 2015/10/21

AF：官邸メールをお願いします。生活費，授業料，渡航旅費，医療費補助が留学生に支給されています。以前は，特定の職務についた者に，奨学金の返還が免除されていたそうですが今はその制度ありません。日本の優秀な学生に対しては奨学金のような貸与制ではなく，給付制による奨学金制度や特定の職務についた者への奨学金の返還免除が必要です。外国人留学生奨学金の廃止と同時に日本の将来を担う優秀な学生に対しての支援制度作りを強く要望します。

AG：少子化にも関わらず，大学を乱立させたために，留学生の受け入れで経営を維持する大学があります。中国韓国から招いた留学生が全体の約 7 割を占めるまでに至っているそうです。年々，この留学生たちが日本に多数残り始めており，留学生受け入れ計画=移民受け入れ政策になっています。これらの国は日本に敵意を持つ者が多く，領土問題で分かるように敵性も高いと考えられます。その弊害は甚大で，国民にもその実態が知られつつあります。近年，難民・移民からの国家侵略侵食が欧米において顕著であり，日本の経済界もこれらを助長する動きと連動しています。よって留学生を受け入れないと成り立たない大学の廃校を強く要望します。

A：この投稿も話題になっていますね。

AH：現在日本学生支援機構が主に奨学金事業を行っており，無利子の第一種奨学金と利子のある第二種奨学金制度があります。しかし，これは名ばかりで実際に世界的に認知されている奨学金とは別ものです。外国の方から見れば学生ローンに過ぎず，奨学金とは呼べません。外国の奨学金とは返還義務なし，利子なしで，経済的困難者救済のことを言います。問題のある自国民への商学制度が整っていないにもかかわらず，外国人留学生に対してばかり優遇政策ばかりを行っているというのが事実です。経済的な理由で進学が無理な自国民を救わずに，自己責任という言葉で，自国の若者を軽視する国には未来などありません。

付録 9：集団メールの効果としての事件 2015/11/8

AC：NHK でもついに接骨院の不正請求で逮捕者が出た事が報道されました。集団メールの効果が現れてきたのではないのでしょうか？

健康保険の療養費を水増し請求し，不正に受給したとして警視庁組織犯罪対策 4 課は 6 日，詐欺容疑で指定暴力団住吉会系組長を含む接骨院関係者ら男女 14 人を逮捕した。同課によると，（略）容疑者が不正請求の行われた接骨院を実質的に経営し，虚偽の申請書類を作成していた。警視庁は千葉県の歯科医院などとも共謀し，同様の手口で診療報酬もだまし取っていたとみている。詐取金は総額 1 億円に上る可能性があり，住吉会の資金源になっていたとみられる。

A：以上の件は，まともに集団メールの要望が事件として摘発された事案です。以前，柔道整復師の不正についての官邸メールがあったことを思い出して欲しいです。また，この事件はいろいろと教えてくれるものです。偽患者の詐欺は住吉会組員であるといわれていますが，今後，日本全国の全暴力団組織と陰謀組織が摘発対象となるでしょう。

付録 10：集団メールの効果としての摘発 2015/11/22

予定では集団メールを 25 まで出して、遮断がなければこのブログは 8 月で終了していたのです。現在、売られたけんかは買おうということで、私をネットから追い出した陰謀組織を日本から追い出してやるという図式になっています。数多保守ブログが存在しながらも、それぞれが問題点を指摘しあうだけで、具体的な行動や方法を示すブログはなかったわけですから、その意味で、唯一平和的な集団通報運動、あるいは集団メール運動を駆呼びかけるブログは脅威なのでしょう。現在、入管通報が進んでいないことを危惧されている方も多いですが、入管は受けている情報を担当省庁へ振り分ける仕事もしています。メールも官邸メールを議員に周知させるのが目的ですから、目的は達成しているといえます。10 月から安倍政権の動きが活発化していることから、メールの項目の一つ一つをとってみればどれだけ影響しているかが一目瞭然でしょう。7 月 9 日以降、暴力団の摘発人数だけ見ても 200 人はこえているのですから。

付録 11：集団メールの効果としての報道 2015/10/20

AT：10 月 19 日の読売新聞朝刊に、興味深い記事がありました。
「死刑求刑が予想される事件の弁護活動について、日本弁護士連合会がまとめた手引が波紋を呼んでいる。目標は死刑回避」日弁連の負の側面をマスコミが報道するとは、もしや官邸メールが効いていると思うとやりがいがありますね。

付録 12：「A の日記」書籍書評 2015/12/20

書評投稿者 5：読めば誰もがそう思うだろうが、心ある日本人なら誰もが読むべき本である。事実の叙述であり、誰もが当然に期待すべきことの指針に過ぎない本である。事実であるがゆえに読んでいて胸が悪くなることもあります。最後まで読んだら覚醒必至です。よくもまあ、ここまで彼らの不都合を事細かに書けたものだと思う。

書評投稿者 6：この本の主な点は、事実であり、そこからある真実が浮かび上がってくるということです。非常に客観的で知的であり、感情的なわめき声ではない。とても素晴らしい文章で、過激さはまったくなく、なぜこの国ではこの種のもので出版されにくいのだろうと思った。

書評投稿者 7：この本に書かれていることは、人によっては不都合な真実なのだろう。明るみに出てほしくない勢力に怯えることなく、一人でも多くの日本人がこの本を読み、知るべきことを知り、語るべきことを語ってほしい

書評投稿者 8：報道に疑問を持ち、ネットでの情報収集で「A の日記」ブログを知りました。ブログの内容や実現性」そして何よりも日本に対する人々の考え方に頭が下がる思いだった。外国語版の発売を希望する。

書評投稿者 9：この本を読んで立ち上がらない日本人はいないだろう。今、日本は転換期を迎えており、もはや他人任せではいられないところまで来ている。行動を起こすしかない。

書評投稿者 10：amazon 以外の通販サイトで手に入らないのが不思議（笑）。（略）では絶版になっています。内容はすでに他の方が詳しく紹介されているので省略します。書店では手に入らないので「A の日記」で検索してざっと目を通すといいかもしれません。事実の考察と推論なので憶測ではなく、非常に当たっています。そして、ブログよりも読みやすいと思います。興味のある方はぜひ読んでみてください。日本の本当の姿を知ることができました。途中、様々な妨害に会いましたが、「日本を取り戻す」という精神がここに凝縮されています。ここに書かれていることはすべて事実でしかなく、妄想日記と表現していますが、すべて現実です。本当の日本を知りたいければ読むべきです。

書評投稿者 11：妄想が次々と現実になる！ブログはさらに面白い。ブログに書かれたことが次々と現実化していく過程は、ブログ読者にしかわからない興奮があり、2015 年 7 月から、ブログへの露骨な干渉が始まってクライマックスを迎えました。過激な表現や不確かな情報は、書籍では割愛していますね。

書評投稿者 12：近所では手に入らなかった。明日入荷するかもしれないとだけ言われた。仕方なくここで注文した。内容は知っているのですが、友人に渡すために購入した。お近くの書店に立ち寄って、この本があるかどうか確かめてください。置いていない書店は、本の内容を知られたくない勢力に属しているか、某勢力の書店かもしれないので、それを見極めて今後は利用しないようにしましょう。

書評投稿者 13：夫と娘がいつでも見られるように、さりげなくテーブルの上に置いておきます。夫がこの週末をどう過ごすか想像がつく。彼はコンピューターの前に張り付くだろう。これからはやっと近くで話ができるようになると思う。コンピューターではなく、他の人と実際に意見を交わすことができるようになるでしょう。

書評投稿者 14：本を予約しました。本の内容については多くの方が書いているので、それ以外の点を少し。このレビューを書いている時点で、☆5 が 60、☆4 が 2。星 5 と星 1 が極端に分かれるのは予想していたが、まったく予想外だった。この本を無視しようという組織的な運動でもあるのだろうか。

書評投稿者 15：何軒もの書店を渡り歩き、ようやく手に入れた本書。内容は当然素晴らしい。長い間眠っていたお人好しの日本人が目覚めようという本である。日本を本当の日本に変えよう。歴史的価値のある本だと思う。

書評投稿者 16：日本全国から注目を集め、やつらが知られたくないことを暴露したブログの書籍化です。オリジナルのブログは陰謀勢力によって一度はネットから遮断されたが、すぐに復活し、書籍化となりました。

書評投稿者 17：私自身、つい最近まで安倍首相は戦争屋だと思っていた。戦後の自衛隊の義務教育やテレビ・新聞などの大マスコミに騙された愚かな私。自分の頭で考えなかった。安倍首相は極右であり、その支持者はネトウヨと呼ばれる。日本を敗戦国から外すことが極右なのか？あなたはどこの国の人ですか？私が騙されていたことに気づいたのは、「A の日記」に出会ったときだった。それから過去ログを読みあさり、事実を知るにつ

れ、日本に巣食うスパイに見えてきた。日本はまさに歴史上最大の国難にある。しかし、多くの日本人は自分たちがどれほど危険な状態にあるのかまだ気づいていない。テレビも新聞も完全に乗っ取られている。いまでも怒りに震えているような気がする。組織の力がいかに巨大で、日本の心の隅々にまで浸透しているか。彼らは長い間、日本人が気づかないうちに、自分たちが支配者の地位に居続けるために、政界、財界、政府、司法、大手メディアなどに巨大な組織を作り、日本を組織的に破壊してきた。私たち普通の日本人は、どうすればこの明確な侵略に対抗できるのか、どうすればこれを阻止できるのか、どうすれば強く美しい祖国を取り戻すことができるのか。本書を読めばわかるように、それはとても簡単なことだ。毎日パソコンやスマートフォンでワンクリックするだけでいいのだ。すべての日本人にこの本を読んでもらいたい。家族や友人、知り合いにクリスマスプレゼントとして贈ってみてはいかがだろうか。

付録 13：様々な個人的活動の一例 2016/03/20

AK：ブロガー様、いつもありがとうございます。国民の一割覚醒に向けた「沖縄はがき」運動、使い物になりませんか？お邪魔にならないように何とか自分で出来るところまでやってからお知らせしました。育ての親と思っている「A の日記」ブログを飛び出てがんばってみました。手前味噌ですが、葉書という媒体は非ネット層向けに良い手だと考えています。集団通報、集団メールで攻勢をかける準備段階ですから、余計かもしれませんが、ただ、ブロガー様と一部読者の方々が身を粉にしてくださっている時に、大多数の読者は、自分にも何か出来る事はないかと、持て余してじりじりしているのです。もし余計なことにならないのであれば、後方支援をしている気にさせてください。多くの読者はすでに腹をくくっていると思います。お忙しい時に、困らせてしまうようなコメントを送ってしまつてごめんなさい。どうかお身体をお大事になさってください。

付録 14：気をつけて 2016/03/25

AJ：ブロガー様はじめ日本を想う皆様こんばんは。お役に立てればと思いコメントします。やはり誰も楽しくない事実を受け入れるのは難しいようです。普段からテレビを見ている人にいきなりテレビの捏造を話しても、逆に悪感情を持たれがちです。今まで政治の話など一度もした事のない相手に突然に政治への侵略を話しても、何か怪しい集団の活動ではないかと疑われます。私の親兄弟は昔から私を信用してくれているので、ある程度真実を受け入れてくれました（半信半疑でしょうが）。配偶者や友人からは、かなりの拒否反応がありました。最初に拒否反応を持たれてしまうと、どうしても色眼鏡で見られます。彼らの価値観を破壊し、面白くもない嫌な真実を受け入れろと迫ることになるのですから無理もないかもしれません。そこで私は「気をつけて」程度の話から広めて行く事にしました。

付録 15：名物常連投稿者 AS 2016/07/4

AS：神ブロガー様、臣民の皆様。弥栄ましまして、彌栄ましまして。クリスマスの夜中、うなされながら夢に「えいえいっ」の声に、「お..おう！」と反応してしまいましたが、関の声が上がってしまったやうな。神・皇・光の三巴紋が渦巻き呼吸しているやうな。ぼうっとした頭で運転中、前車のナンバーが（り）の 5 6 7。縁起のいい番号！と赤信号。左隣の車線に前と同じ車種、同色…！県違いの（と）の 5 6 7！！並んで止まるこの偶然。西は 5 6 7（弥勒）超絶なる暗示かな。神示にある事先繰り出てきてキリキリ舞せなならん

ぞ。神示にある「國土が出来て初めに生えたのが松の木であったぞ」まつ＝待つ、纏ろう、服らふ。神世初代天皇國常立之尊の御代は今の三種の神器、劍の位置はトのヲシテでありました。ホツマツタエに代表する神代文字ヲシデ、Yは宇宙からの気を集める形で収穫を集積して分け与へる精神を一文字で表しております。懸税をかけちからと読みますが、神宮へ懸け穂を取めるかけほもこれとは無関係でないと思います。時代が下り八神子の國叉槌の御代には権利を主張する声が出始めます。なし崩しに邪気が凝り固まって人の心に微魔がかかり、治安の悪化に人々は祈り待ちわびます。断罪の象徴としてトの教へから槌へ変わります。現幽繋ぐのが言葉、祝詞です。日本を思う皆様の音声が霊界、神界に言霊音霊とこだまして初代様方英霊の霊位が上がり靈威となって帰ってくるわけです。御霊の殖ゆ神國守護諸神の神威も追い風に。

AK：以前の、AS様の投稿についてのブロガー様のコメントに、笑ってしまいました。私も、伝えようとされることは何となくわかる気がします（AS様には申し訳ありません！）。イメージとしては、「Aの日記」ファンサイトブログのスピリチュアルな内容に近いものでしょう。「Aの日記」ファンサイトブログは、「Aの日記」のサポート的な、事象を読み解く心得ブログ、とでも言えるでしょうか。「Aの日記」ファンサイトブログのブロガーbさんは体調を崩されているのか、不定期更新となっていますが、常連読者の方々のコメントで途切れなく続いているみたいです。

AI：AS氏の浅解を書かせていただきます。今、天の采配としての安倍総理、ブロガー様の呼びかけに、しっかりと覚醒しそれぞれの範囲で呼応することが大切だと、神道に従って言うておられると解釈させていただいています。食も穀類から肉類主体に変わった事で、この声が聞こえ聞こえにくくなっているのだと。勝手な解釈ですので、曲解しているようであれば申し訳ございません。

AJ:ASさまの投稿は背景を理解しないと少々、敷居が高うございます。しかし、我々日本人には宿る言霊を瞬時に感じ取るDNAが受け継がれております。ここで、AS様をキワモノ扱いせずにご投稿を黙認いただけたブロガーA様のご慧眼に感服致します。日本語が不自由な彼の国のものどもには分からない呪文の羅列に見えることでしょう。私は武術を嗜みます。武術とは先人たちから受け継いだ教えに回帰してゆくことで、心の有り様に近づくための手段だと思っています。私にはまだまだ道は険しいですが、争わなくても良い調和を目指すものです。古神道ではその調和した、争いのない世界を実現していた時代が日本にあったとされています。神代の日本です。そこから、秩序が崩れ、人々が諍うようになり、現在の世に至るとされています。この日本がどうしようもない時に、神が復権されるのです。歴史的な相関について興味のある方は調べてみてください。おもしろいですよ。この昨今の日本の変化は予言された通りに動いているように感じます。安倍首相の幸運の連続は日本の神々の後押しがあるように思われてなりません。そして「Aの日記」ブログもこの神の復権のひとつでしょう。ASさまのご投稿に感じ入りましたので、自説を開陳させていただきました。ブログの主旨に合わないようでしたら遠慮なく削除してください。今は、理解できずともAS様のご投稿には、かたじけなさ、を感じます。これを感じさせていただけた感謝の意を表します。長文、お目汚し失礼いたしました。A様、スタッフの皆様、御身大切に。

AS：難解な文となり、すみませんでした。私自身焦って進展を急いでおります故、結果そうなるのですが、皆さまの霊的側面に訴えております事なので、今解らずとも良いのであります。

AL：AS 氏のコメントは日月神示から来てるのだと思います。全部ではないですが折にふれ愛読しています。確かに初めてだと難解かもしれません。お時間があればブロガーさんも読んで欲しいです。

AM：日月神示を読みかじった者です。SA 様のご投稿は臍げに理解できます。メッセージは、日本を取り戻すという事かと。

付録 16：規範性としての危機の推論 2015/12/05

AN：ブロガー様さまチャンネル桜にでも出演し、「顔出し」して頂けませんか。

AO：世間に顔を出すことによって直接的、物理的な標的となる危険が生じる。ブロガーさんの言説は希望の灯を掲げてくれるものではあります。決して扇動や指図ではなかったはずです。ブロガーさんにそのような役割を期待するのは、ブロガーさんの果たしている役割を大きく変化させてしまいます。ブロガーさんは、国を愛する日本人の象徴のような存在となっており、どこかで確かに存在していてくれると信じられるだけで十分ではないでしょうか。

AP：あまりに頭にきたので初投稿します。私のような意見が一つくらいあっても許されますよね。既に指摘されている方もいらっしゃると思いますが、「顔出し」云々の投稿については、「来たか」と思いました。完全なお花畑が。こういう状況において厄介なのは、強力な敵ではなく、無能な味方です。

AR：文字通りの意味でいつ命を狙われても不思議がないと思います。

AN：確かにその通りです。差し出た考えでした。

AT：我々日本を愛するネチズンにとって、絶対に唯一無二の司令塔を失ってはならないと思います。そういう意味では「顔出し」はデメリットでしかないと思います。このブログという日本の宝を護り続け、書籍化という素敵なオマケを出して頂けるだけで十分に思います。

AU：今まさに日本は陰謀組織に占領されている状態です。今このような状態の中では、ブロガー様には命の危険性があること、社会的に抹殺されないように常時注意を払っていただく必要があるのです。

付録 17：その他の常連投稿者とブロガーA のやりとり 2016/03/13

AV：いつもお疲れ様です。組織の処理はハードランディングになると思います。そのきっかけは朝鮮戦争か日韓有事という話がありますが、もう一つの可能性に気付いてしまいました。阪神大震災や東日本大震災のような大災害が起きた時に陰謀組織が一斉蜂起する可能性があるでしょう。実際に関東大震災のときに朝鮮人が暴虐の限りを尽くしたと言われています。ここまで陰謀組織が追いつめられていると次はどうなるかわかりません。警察や自衛隊は大災害発生時でも蜂起の鎮圧を滞りなく行えるのでしょうか。その時私たちはどうすれば良いのか、不安になってきました。

A：過去に実例がありますからね。現状の治安態勢にプラスして自衛隊の予備自衛官および予備自衛官補で対応すると思います。先日自衛隊がヘルメット4万個の入札をしていたはずで。警察機動隊も銃器対策部隊で武装を強化して対応しています。心配はいらないでしょう。